小阿地

こあぢ

下堤遺跡
坂ノ上遺跡 発掘調査報告書

1976

秋田市教育委員会

序

秋田市の遺跡三大密集地帯の一つ，四ツ小屋小阿地において，文化財保護の立場から開発に対処してすでに８年を経過した。

前半の６年間は下堤遺跡の調査，そして後半の２年間はその南に隣接する坂ノ上遺跡の調査であった。下堤における調査は，当時の状勢から全面発掘を目ざして始まったが，遺跡の状態から５年次以降は，遺跡の分布とその範囲確認方式に切替え，この調査方法を坂ノ上にも採用して調査を行なった。

したがって，遺跡の完全把握には至っていないが，保護を前提として考えた場合，まことに意義深い調査であったことは申すまでもない。

調査の実施にあたっては，国，県，関係機関の指導援助をはじめ，各大学，高校，地元関係者，土地所有者等多くのかたがたの積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげるしだいである。

長期間にわたった調査の指導，また，本報告書をまとめるにあたって執筆くださった調査員のかたがたに対し，深甚の意を表するものである。

毎年概報をもって調査報告してきたところであるが，この調査の最終年次にあたって，これまでの調査結果を集大成したのが本報告書である。これが文化財保護のため，さらには研究資料として，広く活用されることを念願するものである。

昭和５１年３月

秋田市教育長　佐　藤　博　之

例　　言

1　本書は秋田市四ツ小屋小阿地に所在する下堤・坂ノ上遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　出土遺物の整理は社会教育課菅原俊行が行ない，県立金足農業高校社会部員の協力を得た。

3　掲載写真の撮影・実測図等の作成は菅原俊行が主に行ない，次の諸氏の協力を得た。富樫泰時，五十嵐芳郎，鍋倉勝夫，佐々木栄孝，秋田大学歴史研究室，秋田城跡発掘調査事務所。

4　本書の作成にあたり県立博物館富樫泰時氏から指導助言を得た。

5　下堤遺跡第Ⅲ章，第4節については，日本作物学会で発表された岡山大学笠原安夫教授の要旨を利用させていただいた。

6　下堤遺跡第Ⅲ章，第5節については京都薬科大学梅本光郎教授より原稿をいただいた。

7　石質については県立博物館渡辺晟氏から助言を得た。

8　本書の編集は秋田城跡発掘調査事務所の協力を得て菅原俊行があたった。

9　原稿執筆者（五十音順）

五十嵐芳郎，石郷岡誠一，大友俊和，庄内昭男，庄内公子，菅原俊行，富樫泰時，中屋一生，鍋倉勝夫，日野　久，

文責　秋田市教育委員会。

10　発掘調査による出土遺物，実測図，写真，その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序
例　　言
下 堤 遺 跡
第Ⅰ章　調 査 の 概 況……1
　第1節　遺跡の発見から第2次調査まで……1
　第2節　第3次調査～第4次調査……1
　第3節　第5次調査～第6次調査……1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……5
　第1節　遺 跡 の 位 置……6
　第2節　自 然 的 環 境……6
　第3節　周 辺 の 遺 跡……10
　第4節　考 古 学 的 環 境……12
　第5節　結　　び……15
第Ⅲ章　下堤遺跡A地区……17
　第1節　A 地 区 の 概 観……17
　第2節　住居跡と出土遺物……17
　第3節　土壙と出土遺物……46
　第4節　下堤遺跡より出土した発芽タデ種子の走査電顕による形態的研究……57
　第5節　ハルタデ，イヌタデの葉に含まれるシュウ酸カルシウム結晶パターン……60
　第6節　結　　び……70
第Ⅳ章　下堤遺跡B地区……71
　第1節　B 地 区 の 概 観……71
　第2節　住居跡と出土遺物……71
　第3節　結　　び……77
第Ⅴ章　下堤遺跡C地区……79
　第1節　C 地 区 の 概 観……79
　第2節　住居跡と出土遺物……79
　第3節　その他の出土遺物……84
　第4節　結　　び……86

坂ノ上遺跡

第Ⅰ章　調査の概況……89
第1節　調査に至るまでの経過……89
第2節　第1次調査～第2次調査……89
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……91
第1節　遺跡の位置……91
第2節　自然的環境……91
第3節　周辺遺跡……91
第Ⅲ章　坂ノ上遺跡A地区……92
第1節　A地区の概観……92
第2節　住居跡と出土遺物……92
第3節　結び……109
第Ⅳ章　坂ノ上遺跡B地区……110
第1節　B地区の概観……110
第2節　遺構と出土遺物……110
第3節　石棒について……116
第4節　結び……117
結語……120
発掘調査の組織……123

下堤遺跡
坂ノ上遺跡
航空写真

小阿地

下堤遺跡

下堤遺跡発掘調査報告

第Ⅰ章　調　査　の　概　況

節１節　遺跡の発見から第２次調査まで

下堤遺跡は，秋田市四ツ小屋小阿地字下堤に所在し，地元の人達に土器，石器片等の散布する所として知られていたが遺跡としては，昭和42年，国鉄職員で秋田考古学協会員，五十嵐芳郎氏によって発見された。同年８月，秋田大学，立正大学学生等が同地を踏査した際，庭造り等の土等りの行なわれた場所から土器片，石器とともに石囲いの炉が発見されたのである。その後，土地所有者である秋田土地開発株式会社と連絡をとり，遺跡が破壊されないように協会員が時々，現地を視察し，昭和43年９月，土地所有者の承諾を得て第１次の発掘調査を実施し，第１，第２号住居跡を検出したのである。10月には，下堤遺跡の台地の他に，この周辺の台地も宅地化されるおそれがあるということから，周辺一帯を踏査し，その結果，昭和37年の時点で２遺跡しか確認されてないこの地域で約10カ所の遺跡が確認され，うち数カ所の遺跡は破壊の進んでいる所もあった。そこでわれわれは，これらの遺跡を将来，総合調査する必要があると判断し，最初に下堤遺跡を完掘することを第一の目標としたのである。そして昭和44年８月14日～20日まで第２次調査を実施した。この調査には，市内高校生，大学生等の援助があり第５号住居跡まで確認している。

第２節　第３次調査～第４次調査

第３次調査　　昭和45年７月25日～31日

第４次調査　　昭和46年８月14日～23日

第３次調査から，秋田市教育委員会が事業主体となり，秋田考古学協会と共同で，調査を実施した。この調査では第10号住居跡まで確認し，吹上パターン的様相を示す廃棄のある住居跡，県内では初めての三角形土製品等が出土し，諸々の問題点を提示した。

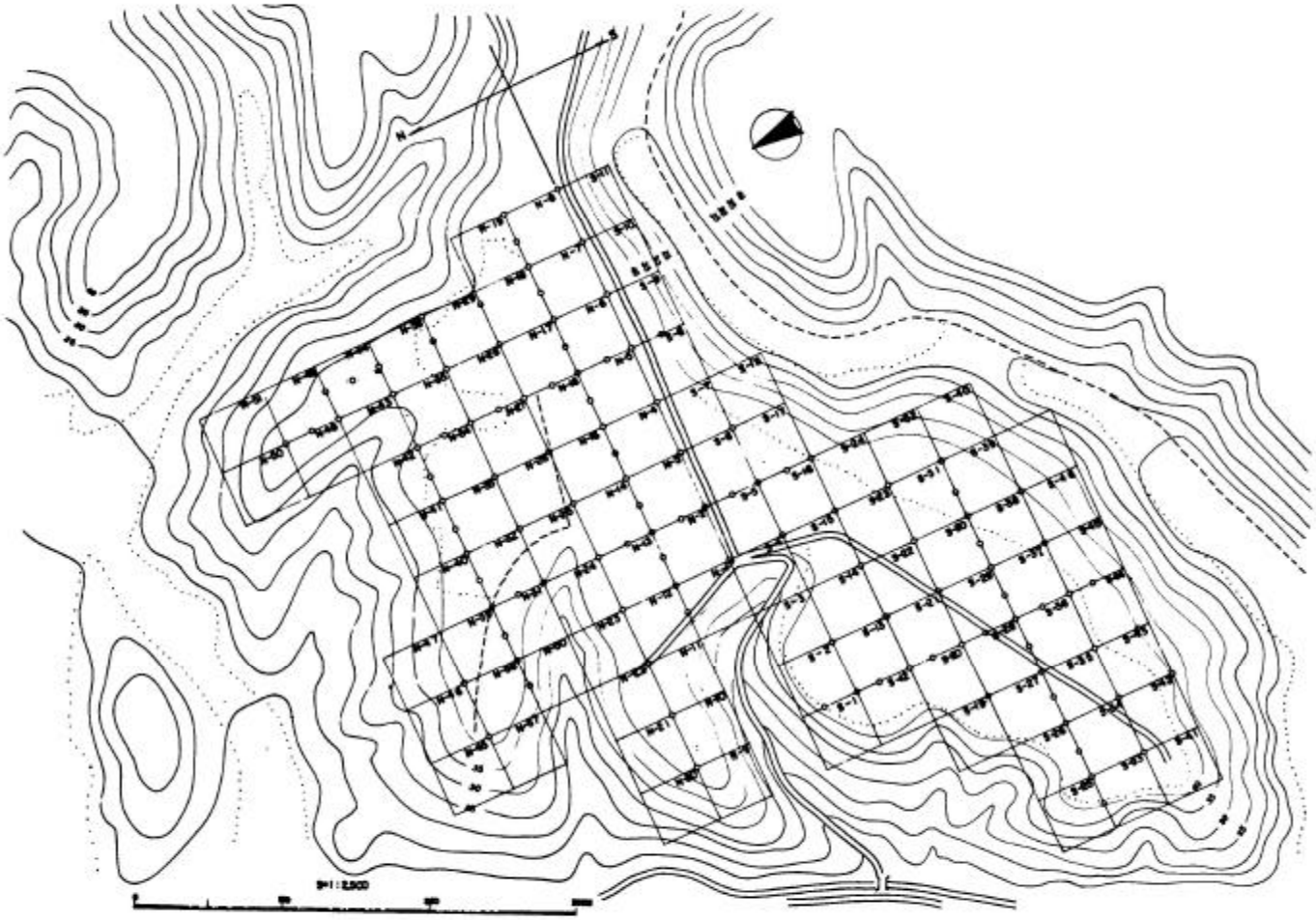
第４次調査は，連日の雨で悩まされた調査で，住居跡は第17号住居跡まで確認し，フラスコ状ピットも４カ所に増え，特に第13号住居跡内のフラスコ状ピットの約30cmの所からは，種子が約50粒ほど検出された。このピットは調査期間の関係で第５次調査で完掘することにした。

第３節　第５次調査～第６次調査

第５次調査　　昭和47年７月23日～８月５日

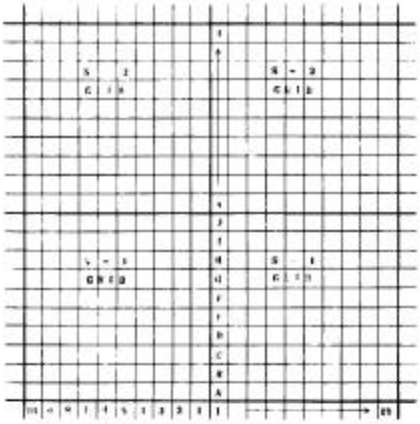
第６次調査　　昭和48年７月１日～31日

この調査から遺跡の土地所有者は東京の塚本総業株式会社に変わり，台地の開発計画が進められているとの事であった。われわれは，今まで下堤遺跡，完全発掘の方向を変え，これまで４年次に



Ⅰ－1図　グリッド設定図

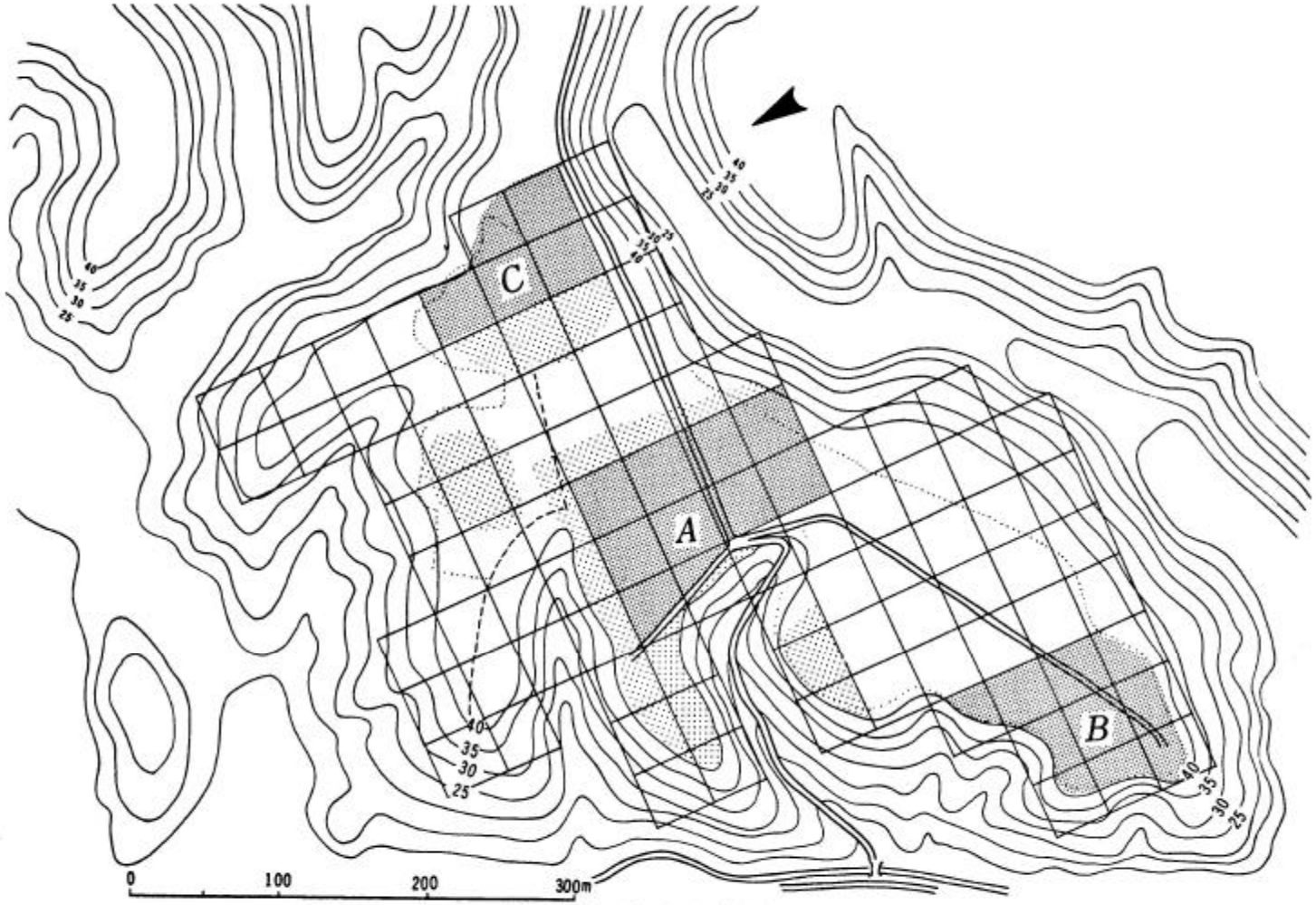
わたる調査をもとに，今年から，この約12haに及ぶ台地に存在する遺跡の範囲を確認する調査を実施することにした。台地全体に40m×40m（大グリッド）を設定し，今まで調査したグリッド，4m×4m（小グリッド）が，この調査のため設定した大グリッドに 100個入るようにしたのである。基準は過去の調査の基点（国道から遺跡に向う東西に走る道路が，遺跡中心地でT字になる。その北隅）とし，それを東西線の基準線として大きくS地区（南側），N地区（北側）と分けて呼び，それぞれの地区で独立させて名称をつけた。



Ⅰ－2図　グリッドの名称

すなわち，S地区では大グリッドS1～46まで，N地区ではN1～51までである。（Ⅰ－1図）これらの大グリッドの中に設けた小グリッドの呼び方は南北を1～10，東西をA～Jに分け，その組み合せで呼ぶこととした。例えばS1A1と呼んだ場合，S1は大グリッドで，A1は小グリッドをあらわす。これらの小グリッドを全部発掘することは，この調査目的とかならずしも一致しないので，この発掘調査は小グリッドの東南隅2m×2mとし，それを完全に掘りあげ，遺構遺物の有無を確認し，その地層断面の実測と，遺構のあった場合その実測を行なうこととして調査をした。ただS地区，N地区，3カ所ずつ拡張区を設け住居跡，土壙等を確認した。それと，第4次調査で検出した，第13号住居跡内のフラスコ状ピットの精査をし，7月25日に掘り始め，26日にピット内に温湿度計を入れて観察，29日に全国的に話題となったタデ科植物の種子が出土し，31日には，この種子は発芽したのである。この調査で，下堤遺跡最初の土師住居跡，縄文時代中期末葉の住居跡が確認された。その結果，今まで下堤遺跡と呼んできた地区をA，中期末葉の住居跡が見つかった地区をB，古代の住居跡のある地区をCとし，これらを総称して下堤遺跡と呼ぶことにした。（Ⅰ－3図）

第6次調査では，第1次～第4次調査と第5次調査の遺跡範囲確認を主体とした調査によって把握された，A・B・Cの各ブロックの台地における遺跡のあり方と保護対策をより明確化し，遺跡の範囲を具体化するため，各ブロックの予想される遺跡の外郭部端に，巾50cmのトレンチを東西に合計8本，南北10本を入れ，遺構の確認を行なった。遺構の確認は，各トレンチの中で発見された遺構を$\frac{1}{100}$の図に詳細に記録していくもので，Aブロックについては巾50cmのトレンチで確認している遺構を目安に，各トレンチ間を50cm四方の間隔で1300m²の面積にわたりボーリング調査をし，その深浅で探索していくという仕方であるが，特に遺構の存在が予想される深い部分について，その方向がわかる所は，その方向をも示す記号↓↑を用いる方法をとった。その他，トレンチとボーリング調査で探索した地区の中でAブロック3カ所，Bブロック1カ所を発掘し，住居跡，フラスコ



I－3図　遺跡分布図

状ピットを調査した。Cブロックについては，調査期間等の都合で調査できなかった。

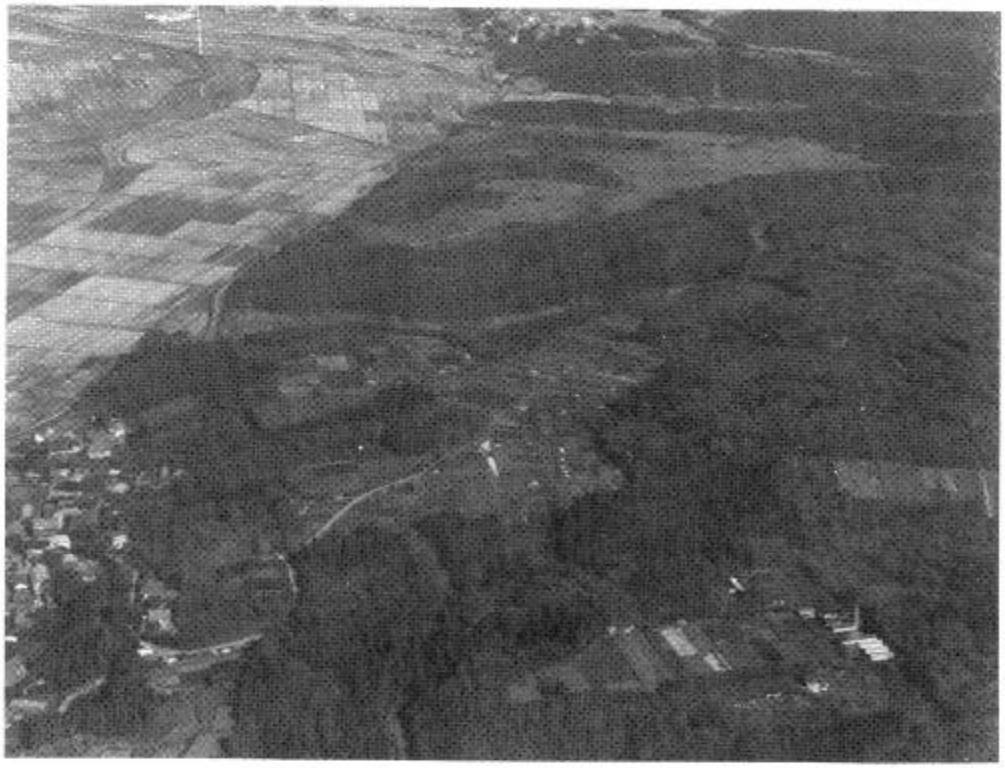
第II章　遺跡の立地と環境

II—1図　遺跡の位置

第1節　遺跡の位置

下堤遺跡は秋田市四ツ小屋小阿地字下堤にある。すなわち，秋田市から国道13号線を南下し，横山部落を過ぎると三叉路がある。そこから右の旧道に入り西へ 1.2kmほど入ると，秋田市街地を一望できる舌状台地（末戸台）の先端に出る。本遺跡はこの台地の先端部にあり，奥羽本線四ツ小屋駅より北東約1km，秋田市中心部より東南約7kmに位置し（II－1図），本遺跡の南約 1.5kmには太平山に源を発する岩見川と奥羽山系に源を発する雄物川との合流点がある。合流点付近の仁井田，四ツ小屋等の集落から末戸台をながめると，かなり平坦な台地である。

この末戸台一帯は畑地として利用されているが，遺跡の位置する付近（下堤台地）は数年前から荒場と化し，不動産会社による開発計画が進められている。



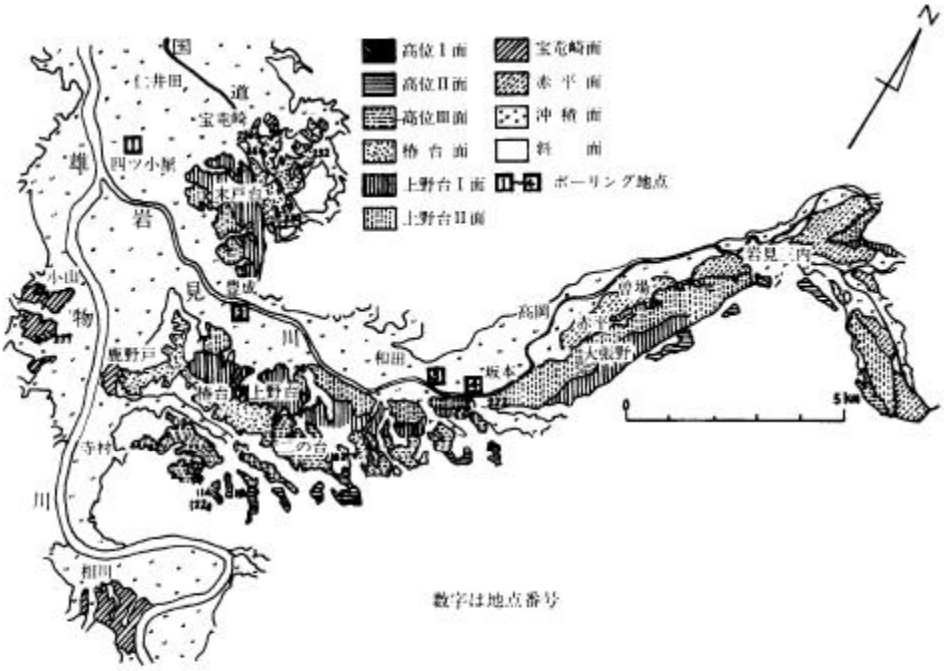
第2節　自然的環境

(1)　岩見川流域の地形・地質概要

秋田平野南東部には標高60～ 150mの丘陵地が発達しており，これを挟んで北には太平山を中心とする 1,000m前後の山地，南には河辺・由利両郡の境をなす300～400mの低い山地があり，段丘がこれらの丘陵を切って流れる雄物川とその支流岩見川沿いに分布している。雄物川沿いでは曲流

の内側に段丘がとびとびに分布しているが，一方，その支流岩見川沿いでは雄物川との合流点近くから内陸部の岩見三内にかけて，特に左岸に階段状に段丘がかなり連続的に分布している（II－2図）。秋田平野周辺では雄物川，岩見川沿い以外には，秋田市街地北東の手形付近から旭川上流沿いに若干の段丘がみられるのみで（II－3図）秋田平野の大部分は沖積低地で占められている。

岩見川流域は第3系の比較的緩い褶曲構造の地域に大部分が含まれ，末戸台周辺を除けば，和田北東の高岡付近を通る北北西――南南東方向の軸をもつ，いわゆる和田向斜盆地の中に入る。（II－4図）。向斜の中心部には，上部鮮新統鵜川層に対比される地層が分布し，西側に次第に古い地層が出て，岩相も砂岩から頁岩に移行する。一方，末戸台付近はほぼ南北方向の背斜部に当り，中部中新統女川層まで露出している。和田盆地から北東へ，太平山地に向って女川層などを経て下部中新統門前層まで出ており，太平山地の先第3系花崗岩に断層で接している。太平山地から南西流して来た岩見川はこれらの構造を横切って流れている。



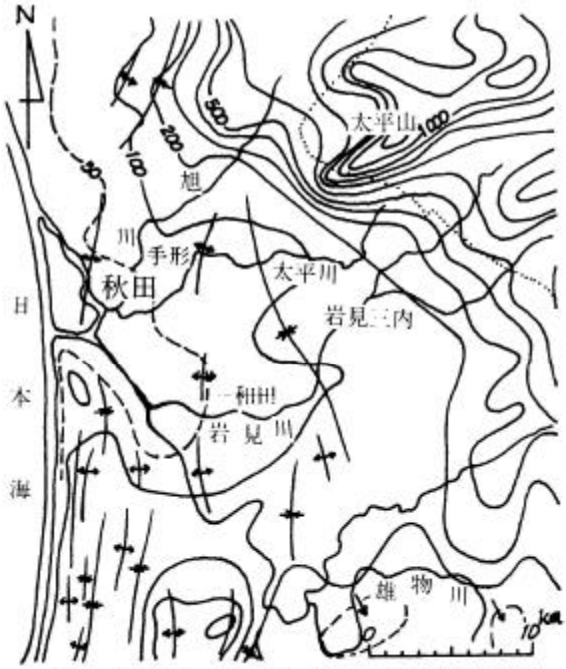
II－2図　雄物川下流部および岩見川沿岸の段丘面分布　（内藤博夫原図）

(2) 末戸台周辺の地形・地質

末戸台付近の地形を大別すると，和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし，定高性を持った標高60～ 150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し，地

II－3図　手形山周辺の段丘面分布図

（内藤博夫原図）



II－4図　段丘分類　（内藤博夫原図）

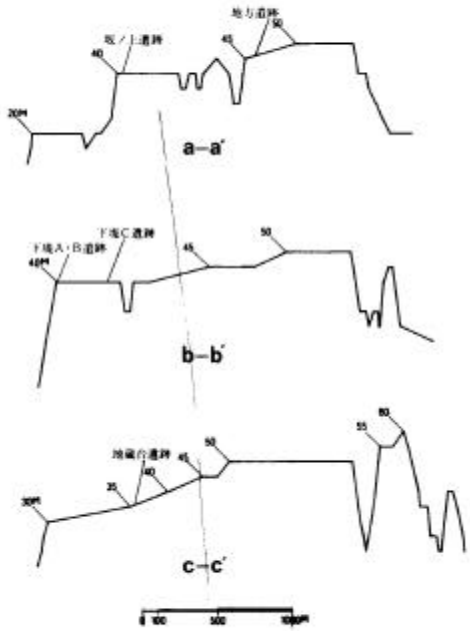
接峯面と褶曲構造　点線は太平山周辺の花崗岩分布地域界。秋田県鉱務課（1957）による。

質は第3系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（笹岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層），それに中新統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。また，この丘陵の1km²内の谷密度をみると，60～80／km²が広くみられるし，起伏量も50～ 100／km²と小さい。[1]

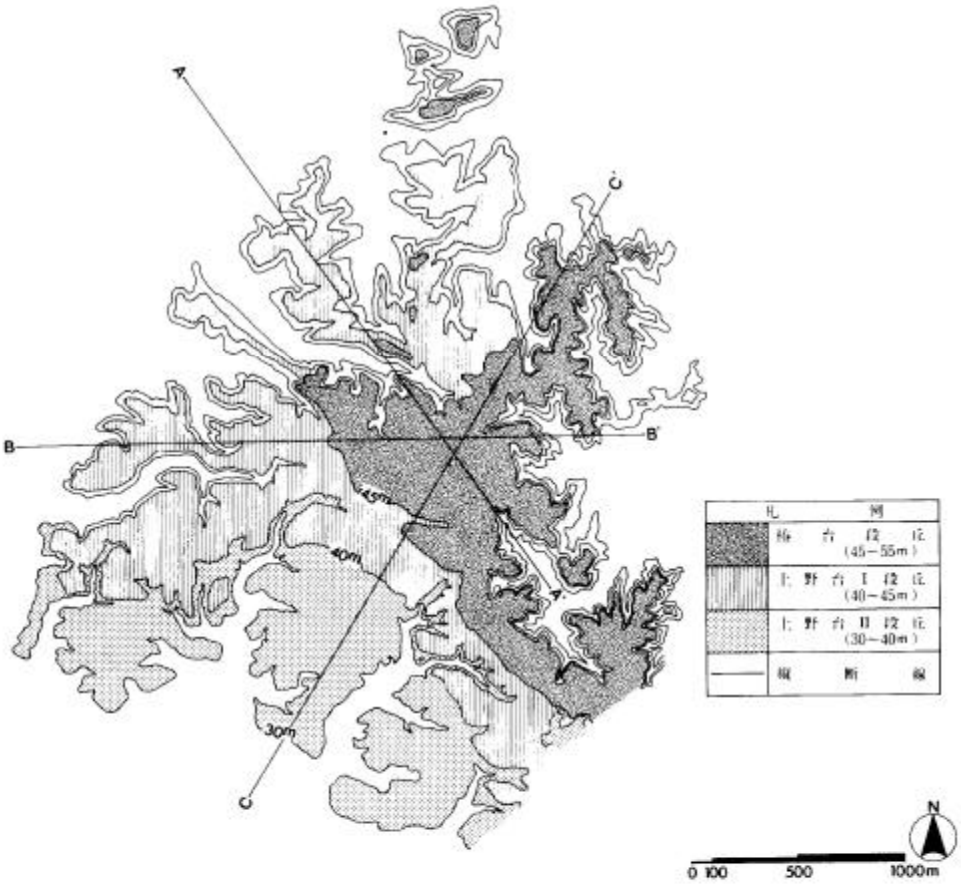
末戸台台地は標高25～50m強で，その表面は大変平坦である。この台地には和田丘陵と接して，数段の段丘を識別できる。これらは内藤[2]の区分からすると，上位から標高45～50m強の椿台段丘（GtII⁺面）[3]，標高40m強の上野台段丘I（GtII面），標高35m強の上野台段丘II，標高25m強の宝竜崎段丘（GtIII面）の4段に分けられよう（II－5，6図）。以下，各段丘面毎にみていく。

① 椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m強の標高をもつ，いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が，厚い礫（最



II－5図　地形断面



II−6図　段　　丘

大径10cm前後）・砂・粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に1～2mの褐色の粘土質火山灰層があり，次に礫・砂・粘土の互層で，砂礫の部分ではしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ，砂土あるいはシルトは水平な細い層理をなすことが多い。層厚をみると，礫層はうすく，砂・粘土層が厚い。その下部は第3系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）となっている。

② 上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強でついている段丘が，上野台段丘Ⅰと呼ばれている。[4] 表層の1～2mの粘土質火山灰層を除くと，段丘堆積物は最大径20～30cmの礫を含む礫層であり，厚さは5m程度でその下部は第3系となっている。下堤遺跡は，この上野台段丘Ⅰに位置する。

③ 上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が5m強である。段丘堆積物の岩相は上野台段丘Ⅰとほぼ

同様で，層厚は５ｍ前後である。内藤によれば，厚い礫層の下部は椿台層に当たるとしている。[5]

④ 宝竜崎段丘

末戸台台地の北縁の宝竜崎付近に分布し，他の段丘との関係を判然とさせる。標高20ｍ前後である。段丘堆積物の厚さは約８ｍで上部１ｍ前後は砂混りシルト，以下は砂礫層で砂の多い部分と礫の多い部分とが層理をなす。礫は最大径15cm弱で上野台Ⅰ・Ⅱ段丘の段丘礫層に比べて小さい。基底には50cm以下の泥岩の塊が点在する。内藤によれば，[6] 基盤は椿台層の砂層であり，不整合面はほぼ水平であるとしている。これに対比されうる段丘およびそれより若干低い段丘が雄物川沿いで発達がよい。

第３節 周辺の遺跡

(1) 小阿地古墳群

秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ下22

古墳発見の正確な日時は不明である。遺物の出土は，鉄道施設工事及び四ツ小屋駅敷地埋立工事の際，土取り作業中で，奥羽線，和田駅～秋田駅間の開通が明治36年，四ツ小屋駅の開業が大正６年８月であるから二度にわたっている。後者については，後藤守一氏の「東北地方に於ける奈良時代の一墳墓」(人類学雑誌 第13巻４号大正11年)に破壊後の状態が述べられている。「先年四ツ小屋停車場修築の為め，之を崩して土を運び去りしを以って，今は原形の大半を失へり，而して遺物は，その工事中に発見せられしものとす。取崩されし断崖についてその断面を見るに表面３，４尺ばかりの腐蝕土一帯に心土をなす粘土層を覆へり，取崩工事は，土工の手によって行なわれしを以って遺跡の殆んどすべては無意義に破壊し去られしも，武藤氏は当時実見せられことあり，幸い余の実査の際，その断崖の一部に遺跡の片影を示すものを看取すること得しを以て之を記さんに図に示す如く，上述せる表土が径１尺５寸及至３尺，深さ３尺余の粘土層に穿てる竪穴を塡むを見る，而してその竪穴中の黒土を見るに木炭塊の所々に散在せるあり，縄文式土器残片亦夾雑せり（Ⅱ－７図）……武藤氏は遺物の殆んどすべてが，この竪穴式遺跡より発見せらしものなることを教えられたり」

出土遺物

八花鏡…径２寸３分　白銅製　…武藤一郎蔵内区双蝶双草　外区魚子地雲形唐草文

明治７年10月，奈良興福寺金堂須弥壇下発見の八花鏡と全く同じもので，小阿地発見のものが稍佳品，又正倉院御物にこの種，鏡あり。

刀装具…柄頭，鞘尻，金具，鍔，…京都大学蔵

刀身…現在長１尺　茎長４寸４分，…武藤一郎蔵

刀身…残片４個　　…三浦久吉蔵

蕨手刀…全長２尺１寸６分，柄長４寸４分，…古四王神社蔵

鉄斧…2個，長径5寸，巾2寸5分，…武藤一郎蔵

馬具…鉄製，轡残片　　…武藤一郎蔵

曲玉…白色石英製，長1寸1分　　…武藤一郎蔵

曲玉…白色石英製，長1寸2分　　…武藤一郎蔵

管玉…緑色蛇紋石製，長7分余，径3分，…武藤一郎蔵

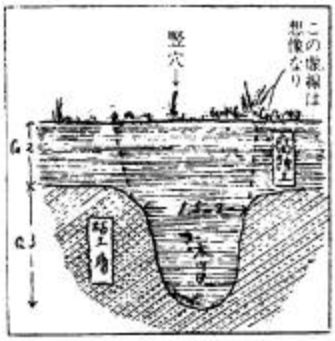
管玉…緑色蛇紋石製，長6分余，径2分6厘，…武藤一郎蔵

管玉…黒色蛇紋石製，長8分，径4分，…武藤一郎蔵

丸玉…瑠璃色波璃製，径3分，　　…武藤一郎蔵

土器…コップ形，高3寸2分，径2寸5分，…武藤一郎蔵

土器…糸底，高6寸，径3寸8分5厘，…三浦久吉蔵

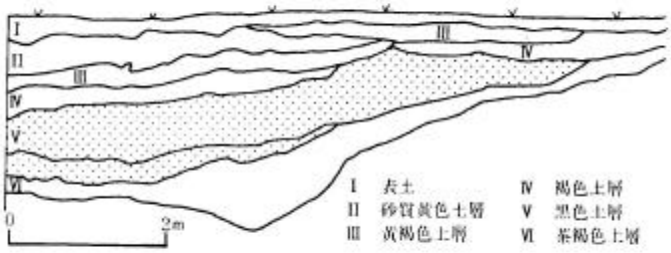


II－7図

(2) 小阿地23遺跡

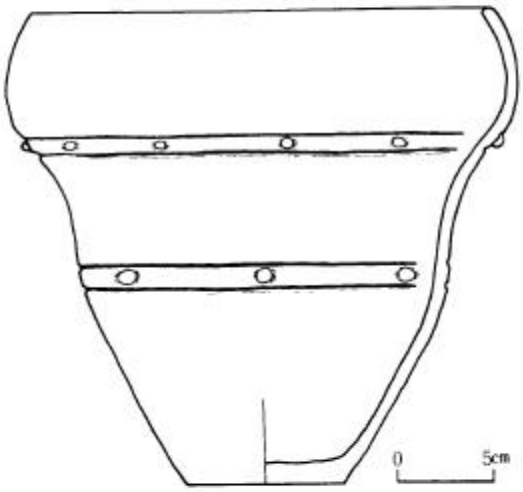
秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ下23

この遺跡は，もともと小阿地古墳群のあった台地上に所在したと考えられるが，鉄道建設のための土取り，戦後の宅地化で段丘の一部が削り取られ長い間に序々に破壊されていた。現在，数軒の家が建っており，家の建築の際にも厚い黒土層を削り，多量の遺物が出土したということである。



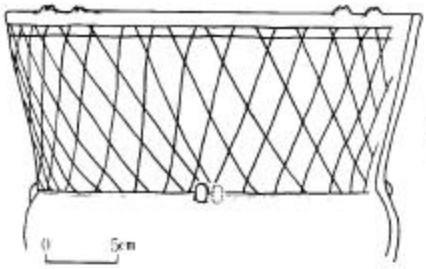
II－8図

昭和43年9月，僅かに残っていた遺物包含地付近で，ショベルローダが動き回っているのを発見し，遺跡の破壊を確認した。新築するための土取りで，作業員に遺跡であることを話し，土地所有者に承諾を得て，9月27日～30日，10月5日～6日に調査を実施した。僅か30㎡の調査に過ぎなかったが，第5層黒色土（II－8図）の中間，現地表面から1m50cmの部分から，かなりまとまった遺物が出土した。出土遺物は復元可能な土器3個体，石器8点，その他土器片等で，時期は縄文時代後期の貼コブのある土器の時期

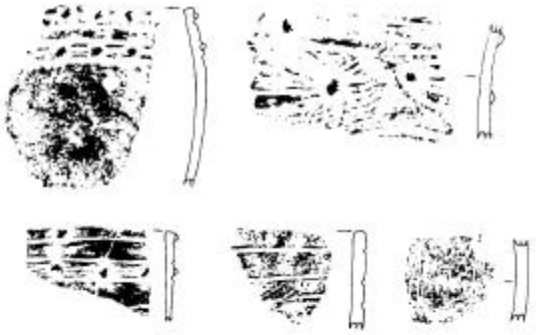


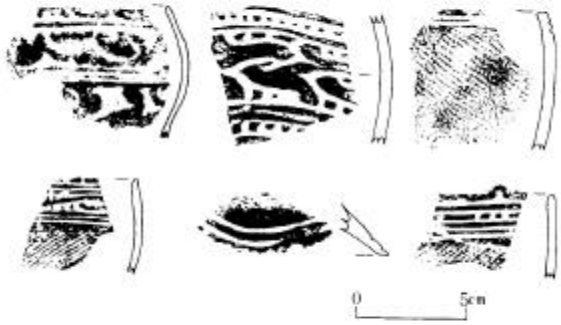
II－9図　図版2－1

から晩期大洞C_1式の時期の土器を出土する。器種は深鉢，浅鉢，台付，注口，皿状土器である。石器は石鏃，石錐，石匙，石棒（破片）砥石等が出土している。（II－9，10，11図）



II－10図





II－11図　小阿地23遺跡出土土器

(3) 地蔵台遺跡

秋田市四ツ小屋末戸松本字地蔵台

昭和44年，周辺遺跡踏査の際，発見された遺跡で，末戸松本部落の東側の堤の左手に位置する台地に所在し，この台地に登る山道の斜面に土器が発見された。ほぼ完形で発見されたこの土器（図版２－２）は，口縁部は欠損しているが現在高約40cmで，胴部は単節斜縄文が施され，口縁部は三段に沈線で区切り，その中に沈線で鋸歯状文を描き，下部を磨消している。口縁は外反する甕である。土器内面下部に条痕が見られ，県内では志藤沢式に近いが，全体的に田舎館式に比定できる。他に石匙が一点出土し，台地上からはアメリカ型石鏃が発見されている。

(4) 地方遺跡

秋田市上北手字地方

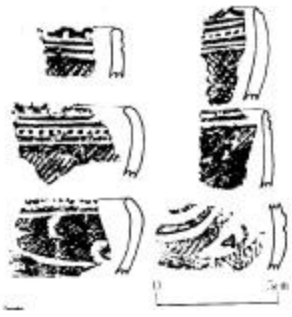
この遺跡は，御所野台を通る国道13号線の東側で，沢にのぞんだ舌状台地の先端に位置する。もともと畑地であったが，現在は荒地と化している。畑地であった頃は数多くの遺物を採集している。土器は縄文時代晩期大洞C_1，C_2を主体とし，石鏃，石匙，石錐，磨製石斧，石製品（勾玉状石製品，子玉等）等が出した。（II－12図）

第4節　考古学的環境

秋田市南東部を流れる岩見川沿いの末戸台に形成された４つの段丘の発達過程を地史学的に明らかにし，さらにこれらの段丘上に立地した下堤遺跡等の立地環境の若干の考察を試論的に行なう。

(1) 段丘堆積物の特徴

前述の4つの段丘のうち，上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とするほぼ一様な礫層をもつ。また，椿台面，宝竜崎面では礫・砂・粘土の互層で比較的細粒であり，垂直・水平方向に変化が大きい。ゆえに，上野台Ⅰ・Ⅱ面は明らかに河川堆積物で，厚さも加味すると，岩見川などによる河成の浸食段丘面と考えられる。これに対し，椿台面と宝竜崎面は上野台Ⅰ・Ⅱ面よりも運搬力の弱い環境下で堆積したことは明らかで，岩相を加味すると，浅海性ないし河口性堆積物と考えられる。(Ⅱ—13，14図)

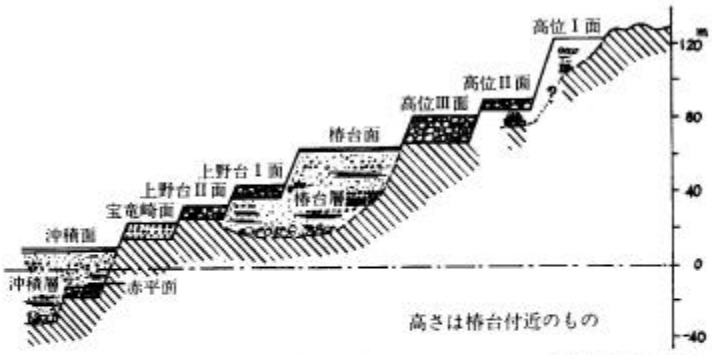


Ⅱ—12図　地方遺跡出土土器

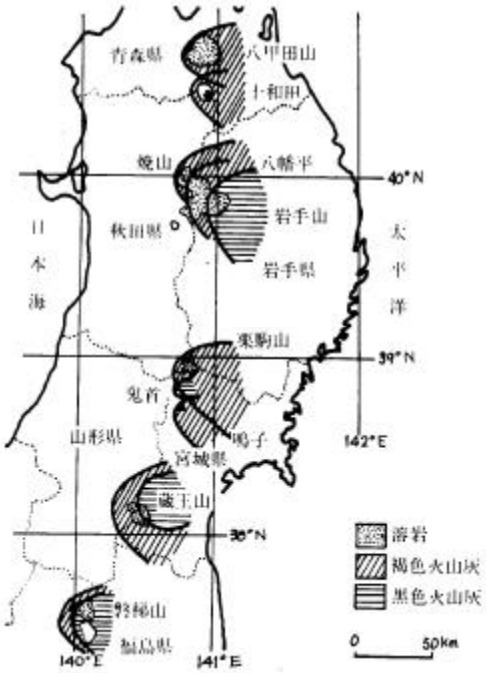
また，宝竜崎面を除く椿台，上野台Ⅰ，Ⅱの各面をおおっている層厚1～2mのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は，経済企画庁の土地分類基本調査[7]，秋田県教育委員会の『八郎潟の研究』[8]及び村山林[9][10]などの研究調査をもとにすると，男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。(Ⅱ—15，16図)

この粘土質火山灰層の表層細粒物質の風化状態をみていくと，椿台面，上野台Ⅰ・Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち，上部50～100cmが明褐色を呈し，下部は灰白色で，境は漸移する。また，土壌断面をみると，椿台，上野台Ⅰ・Ⅱ面をおおう土壌は，いわゆる高岡2統に属していると考えられ[11]，比較的大きい円礫を混入していて，黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山がラスを混入しており，火山灰が関係しているものと推定される。椿台，上野台Ⅰ，Ⅱ段丘上で現在栽培されている特徴的な農作物をみると，大根，キャベツ，じゃがいも，豆類等であり，比較的酸性が強く塩基が少ない土壌に育つ農作物であり，火山灰の関係をうかがわせる。

Ⅱ—13図　岩見川沿いの段丘面縦断面図　　(内藤博夫原図)



Ⅱ—14図　段丘模式断面図　　(内藤博夫原図)



II—15図　脊梁山脈上における火山灰の分布

（村山原図）

II—16図　東北地方の火山

（半沢正四郎「日本地方地質誌」による）

一方，宝竜崎面での表層細粒物質の風化状態をみると，灰白色に若干褐色を帯びることが多く，ところにより明褐色を呈する。土壌断面をみると，宝竜崎段丘は高岡1統系[12]に近く，火山ガラスはほとんどみられず，雲母が比較的多い。しかし，有色鉱物は一般に少なく，石英・長石が主体をなし，火山灰の影響は認められない。（II—17図）

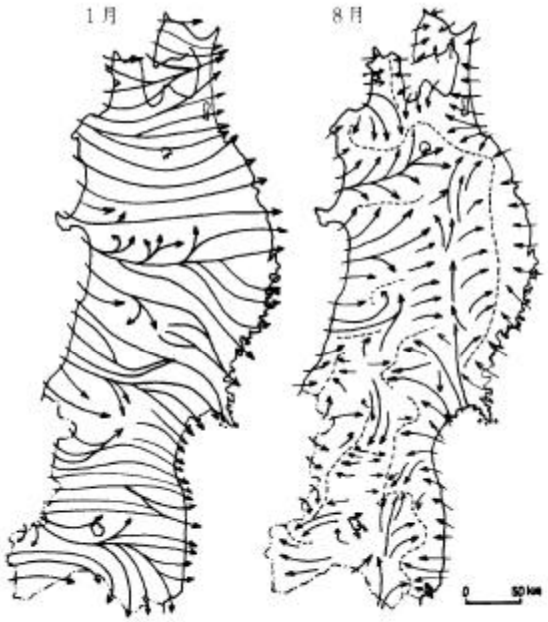
(2)　末戸台周辺の地形発達史

以上のような段丘面形成過程を，内藤[13]は相対的な海進海退と結びつけ，次のような地形発達史を考えている。

①　標高80m以下の谷が切られる。

②　海進があり，この谷を埋めて礫・砂・粘土互層が堆積し，おそらく堆積面として岩見川左岸に高位Ⅰ面（高位段丘Ⅰの段丘面）（120m）が形成される。

③　海退があり，岩見川が延び出し，下刻を行い，その間の若干の河床安定期に，岩見川左岸に



II—17図　東北地方における最多風向による流線図(10時)
（区内観測所資料により設楽寛原図）

高位II面(90m)，高位III面（80m）が形成される。さらに下刻が進み，椿台層基底の谷地形ができる。

④　海進にうつり，溺れ谷を埋めて椿台層が堆積し，堆積面として椿台面が（岩見川左岸で60m，右岸の末戸台で45～50m）が形成される。

⑤　再び海退が始り，岩見川の下刻がすすみ，その間の河床安定期に上野台I面（岩見川左岸で45m，右岸の末戸台で40m），上野台II面(35m)が形成される。若干の海進（ないし海退の停止）があり，宝竜崎面（20～25m）が形成される。さらに，海退がつづき，赤平面(－10m？)，沖積層基底の谷底（－30m，秋田市街地では－70m）ができる。

⑥　海進にうつり，溺れ谷を埋めて沖積層が堆積し，堆積面として沖積面が形成される。

さらに，内藤は太平洋沿岸各地に発達する段丘について，その性質から，各地に共通にI～V面の5段に分けられるとした中川の段丘類型[14]を岩見川沿いの段丘にあてはめた。すなわち，赤平面，[15]上野台II面，上野台I面が中川の氷期に形成されたより勾配の大きい河成面であるII面とし，椿台面がリス・ヴュルム間氷期に形成されたIII面とし，高位III面，高位II面がIV面に（氷期に形成された河成面）あたるとし，やや疑問があるが高位I面[16]がV面（ミンデル・リス間氷期に形成された面）に該当させている。ただし，宝竜崎面だけははみ出るとしている。

下堤遺跡の立地環境を考える上で，特記すべきことは，内藤が椿台面を関東の下末吉面に対比させていることである。

第5節　結　　び

下堤遺跡は，舌状台地である末戸台台地の先端部に立地しており，縄文中期の集落が通例立地している場所である。この場所は河岸段丘上の広い平坦面であり，段丘崖下には必ず日照りにも枯れることのない清冷豊富な湧泉があり，当時の人々は砂礫層から湧き出す泉を利用していたと考えられる。

末戸台台地上には有史から縄文までの遺跡が立地しており，この台地上が古くから重要な生活空

間として利用されてきたことは“土地に刻まれた歴史”として今に残されていることで容易に理解できる。

参　考　文　献

1)　経済企画庁土地分類企画調査「秋田」　1966

2)　内藤博夫　「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」　第4紀研究第4巻第1号 1965

3)　1)に同じ

4)　2)に同じ

5)　2)に同じ

6)　2)に同じ

7)　1)に同じ

8)　秋田県教育委員会　『八郎潟の研究』　1965

寒風山噴火史の推定

須　恵・土師時代	……小噴火(?)
統縄文・弥生時代	……大噴火降灰・溶岩流出
縄文晩期　後期 中期	……1～2回噴火
前期 早期	……噴火降灰
潟西層	……噴火(?)
潟西層　以前	……(?)

八郎潟の研究　S40　（秋田県教育委員会）

9)　村山　馨　『火山活動と地形』　大明堂

10)　林　宏　「秋田県男鹿半島一の目潟周辺の火山噴出物について」地質学雑誌第61巻第717号 1955

11)　1)に同じ

12)　1)に同じ

13)　2)に同じ

14)　中川久夫　「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年」東北大地古生邦報 54　1961

15)　2)に同じ

16)　2)に同じ

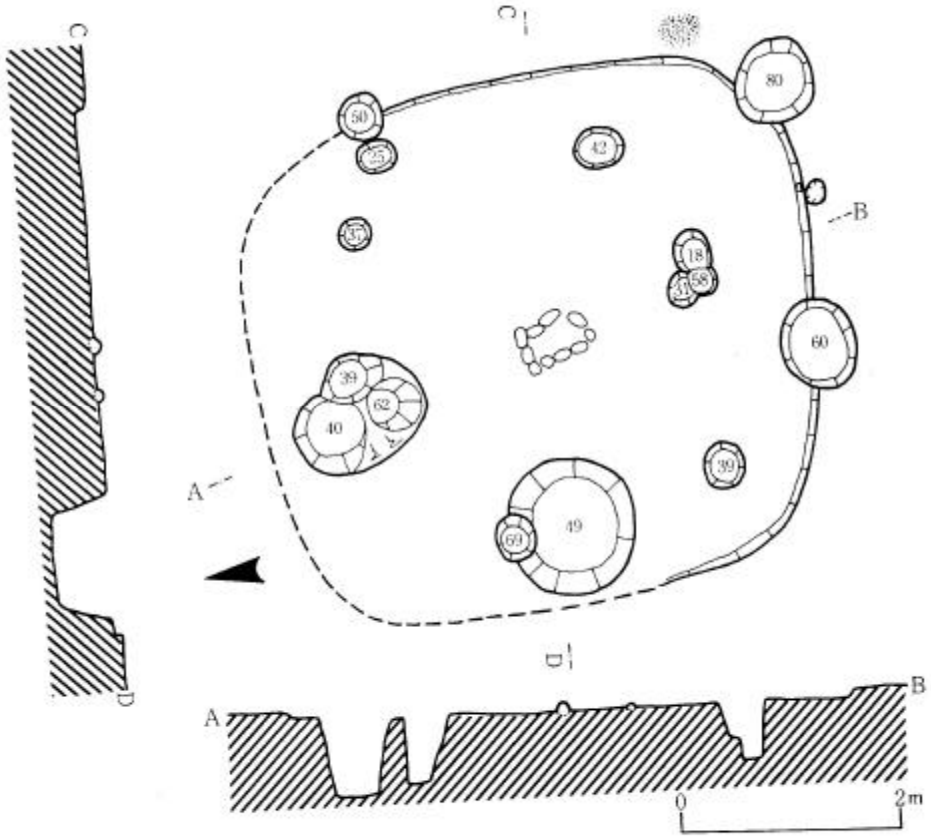
第Ⅲ章　下堤遺跡A地区

第1節　A地区の概観

この地区は，縄文時代中期中葉の遺跡で，出土土器の型式は大木7b式～8b式および円筒上層b式～c式に比定される地区である。その範囲は，N1，2，3，12，13，14，23，24，25，S5，6，16，17の13大グリッドに及ぶ，南北約200m，東西約120mほどの範囲で，B，C地区に比べ広範囲に分布する。西および北側にかけ四つの突出する舌状部をもつ台地が東から西にのびている。ほぼ，その中央部の見晴らしの良い地区である。住居跡22軒，土壙(フラスコ状ピット等)七つ確認し，住居跡プランの多様性，東西南北線に沿った住居の動き(新旧関係)，住居廃棄のあり方等，フラスコ状ピットの機能など数多くの問題点をかかえた地区でもある。

第2節　住居跡と出土遺物

第1号住居跡（Ⅲ－1図）



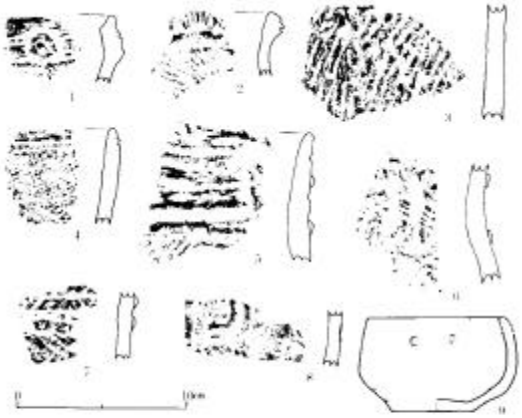
Ⅲ－1図　第1号住居跡

第１号住居跡は前述したように，秋大生等が踏査した際，発見したもので，調査区で言うと１Ｂ，１Ｃ，２Ｂ，２Ｃにわたるものである。プランは隅丸方形か台形のものと推定される。というのは１Ｃ，１Ｂグリッドの住居跡の南，東の壁はわかるが，北側半分の壁がはっきりしないためである。大きさは南北約5.08m，東西 4.7m と推定される。床面は炉の付近は，かなりしっかりしているが，壁に近づくにしたがってはっきりしない。また柱穴は炉を中心にほぼ等間隔にあり，６本の柱があったと考えられる。その他，住居跡内の北西壁に近い所にある大きな穴からは遺物が多量出土した，この穴は柱穴以外の働きをもつものであろう。また東南隅と南壁にある穴はこの住居跡より新しいもので，他のどの遺構と結びつくか，はっきりしない。炉は石囲いのもので，この中に焼土は殆んどない。

出　土　遺　物

土器（Ⅲ－２図）

９はほぼ完形の椀形土器で，胴上部に外面から穴が二つ穿たれ，反対側にも対称的に２穴がある。器面は磨かれて無文で，胎土，焼成は良好で黄灰色である。１，４は口縁部に撚糸圧痕が施されている。２は口縁部に波状に粘土紐をつけ刻目を施してある。３，５は深鉢形土器の口縁部，胴部で縄文はＲＬ。６，７は円筒上層ｂ式土器の頸部で，７は粘土紐の間に「Ｃ」字状の撚糸圧痕がある。８はいわゆる北陸系土器である。



Ⅲ－２図　第１号住居跡出土遺物

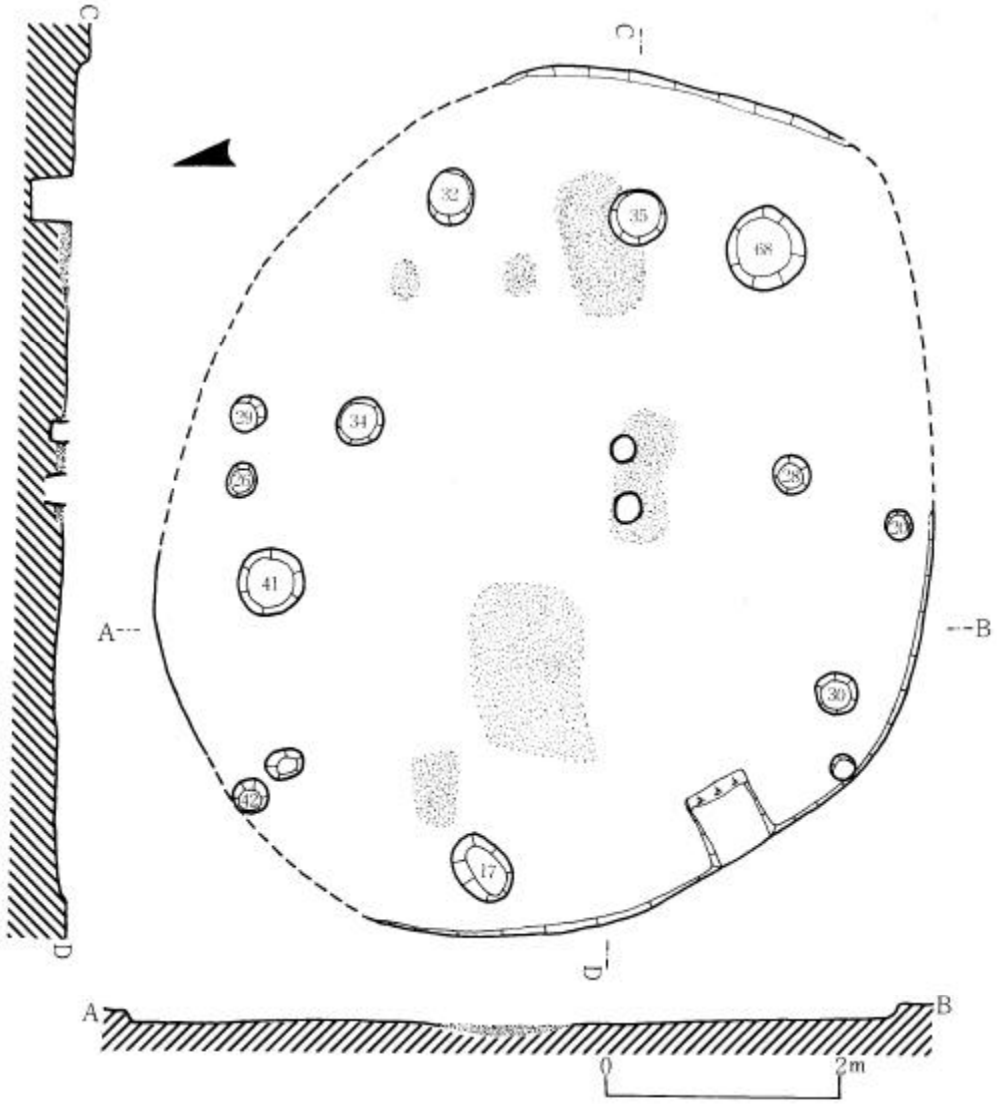
第２号住居跡（Ⅲ－３図）

第２号住居跡は第１号住居跡の北側に発見されたもので，調査区で言うと３Ｂを中心に２Ｂ，３Ｃ，４Ｂグリッドにあたる。この住居跡のプランは壁がはっきりせず不明であるが，不整円形と思われる。西南方向に入口施設と思われる遺構が認められた。それは壁で段がつかず，スロープ状になって床面に連続している。炉は３Ｂグリッドの南側にあるものと思われる。土器が２個埋められていて，焼土が非常に厚いものである。その他２カ所に焼土があるが，これは住居跡が複合していて，その炉とも考えられるがはっきりしない。また，２Ｂグリッドの穴のすぐ東に土器が立てて埋められていた。

出　土　遺　物

土器（Ⅲ－４図）

１は２条の撚糸圧痕が口縁部に施された深鉢形土器である。２は３条の撚糸圧痕が口縁部にめぐ



Ⅲ－3図　第2号住居跡

り，下位の撚糸圧痕は「丫」状をなしている。3は小形浅鉢形土器口縁部で撚糸圧痕による渦巻文がみられる。4は深鉢形土器胴部で結束のあるRLの縄文である。

第3号住居跡（Ⅲ－7図）

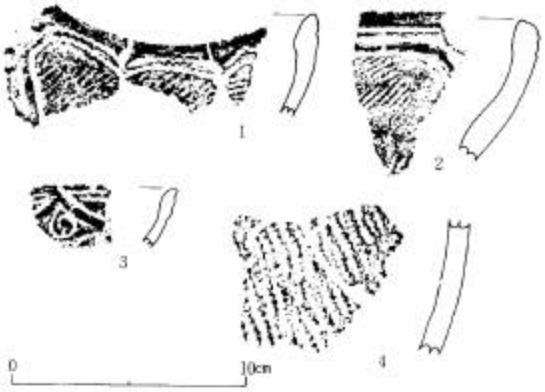
第3号住居跡の発見された場所は調査グリッドで言うと6B，6C，7Cグリッドで，東側は第4号住居跡で，また，西側は第5号住居跡によって切られていて，その全体を明らかにすることはできない。床面は発見されたどの住居跡よりもしっかりしており，7Cグリッドで発見された穴はこの住居跡の柱穴と思われる。また，この柱穴に接して土器が発見された。この柱穴の近くに焼土

があるが，これはこの住居跡の炉とは考えられない。

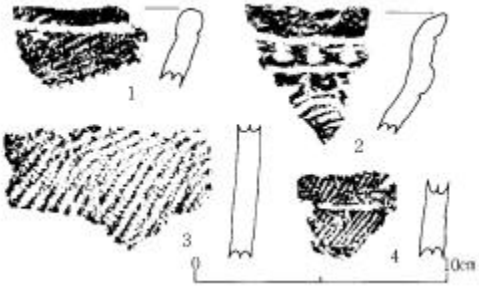
出　土　遺　物

土器（Ⅲ－5，6図）

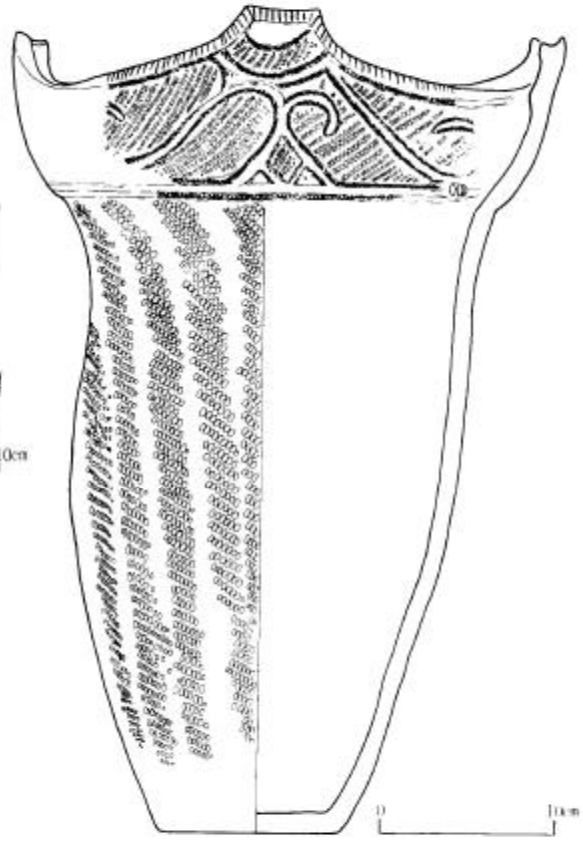
器高47cmで口縁は外反し，四つの弁状把手をもつキャリバー形の深鉢形土器で口唇部に粘土紐を貼りつけ刻みを入れてある。口縁部の隆帯文は粘土紐を貼りつけ，隆帯に沿って撚糸圧痕が施文され，頸部までの地文はＬＲの単節斜縄文で，胴部もＬＲの単節斜縄文である。１は口縁部で一条の撚糸圧痕文がめぐっている。２は口縁部に二条の平行沈線を施し，その間に多截竹管状の工具で右方向へ刺突している。３，４は深鉢形土器胴部である。



Ⅲ－4図　第2号住居跡出土遺物



Ⅲ－6図　第3号住居跡出土遺物

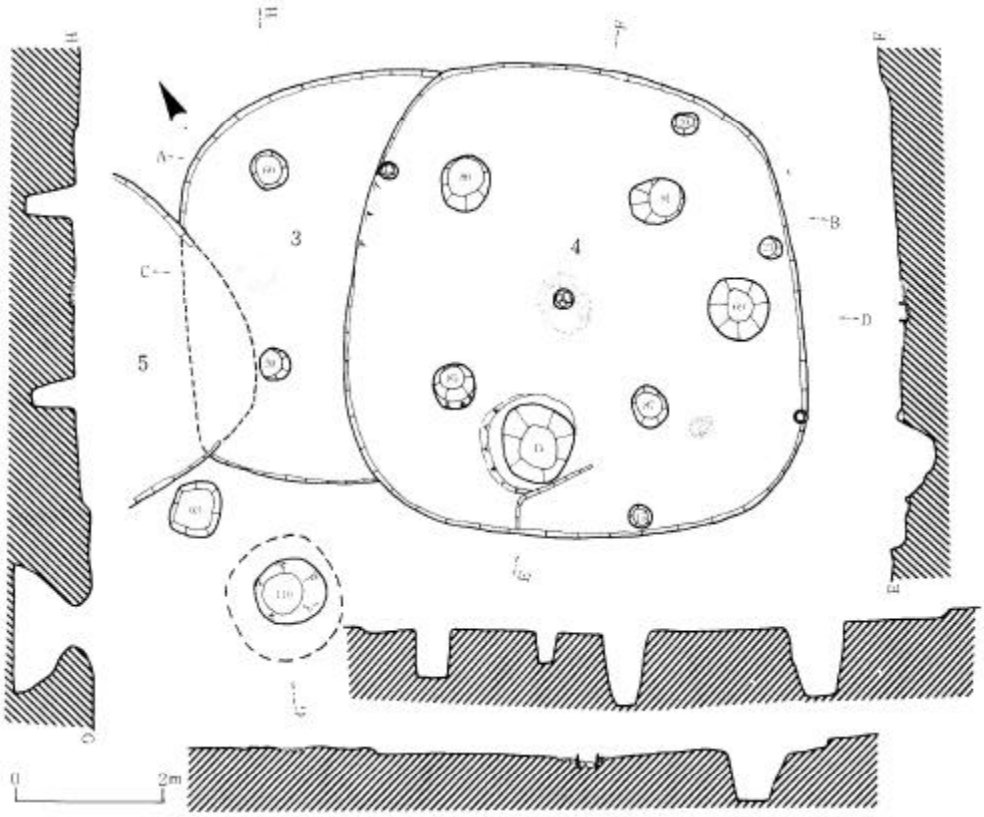


Ⅲ－5図　第3号住居跡出土遺物

第4号住居跡（Ⅲ－7図）

第4号住居跡は，第3号住居跡の東に発見されたもので，調査グリッドで言うと5Ｃ，5Ｄ，6Ｃ，6Ｄ，7Ｃ，7Ｄグリッドにわたるかなり大きな住居跡である。また，もっとも完全な形で残っていた住居跡である。中心には炉があり，中に土器が埋められていた。床面は住居跡内の西側がかなりしっかりしているのに反し東側はやわらかいものであった。柱穴は4本で，柱穴の他に住居跡内にいくつかの穴があり，その

一つには壁に沿って３個の小さい穴がある。これは浅いもので，少し内側に傾斜のついたもので支柱穴ではないかと思われる。また，他の一つは東壁と南壁に近い所に柱穴と思われない大きな穴があるが，中から特別注目するような遺物は出土しなかった。柱穴とは異なった用途のものである。特に南側の穴の周囲が少し盛り上っていたことは注目してよいであろう。

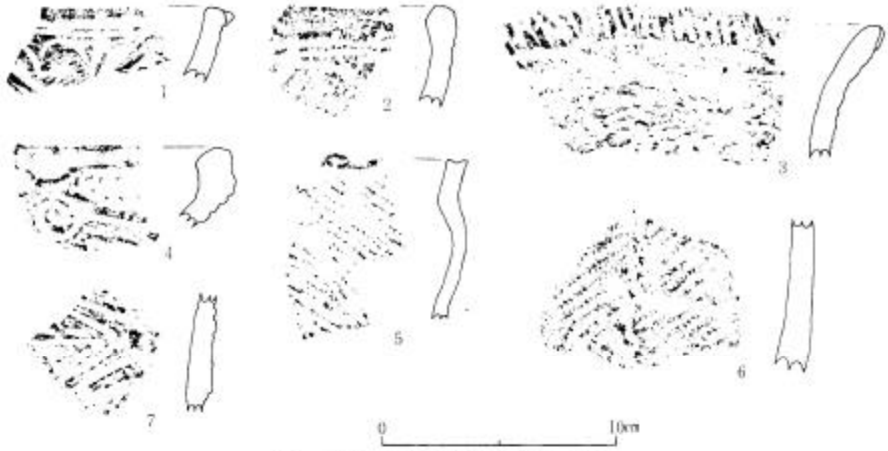


Ⅲ－７図　第３・４・５号住居跡

出　土　遺　物

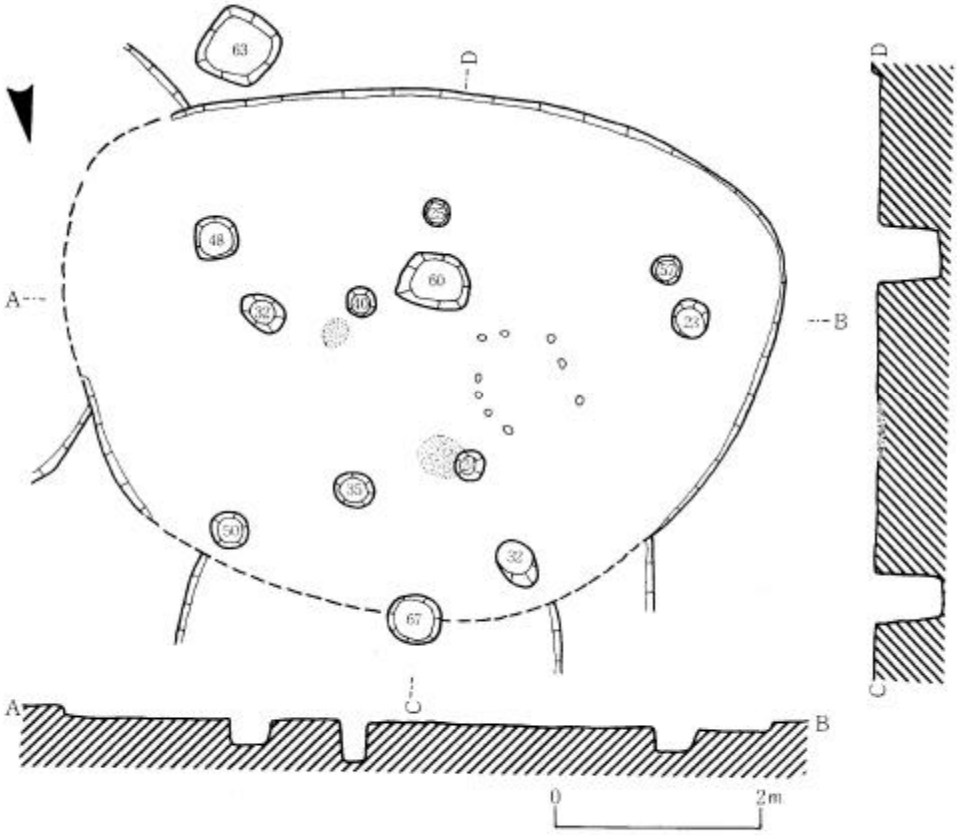
土器（Ⅲ－８図１～８）

１，２は口縁部で粘土紐の貼りつけと二条の撚糸圧痕をめぐらし，その下の撚糸圧痕は「♈」状に施文されている。３は口縁が外反する深鉢形土器の口縁部で口唇部に太い粘土紐による隆帯をめぐらし，撚糸圧痕による刻みがある。４は浅鉢形土器の口縁部で楕円形に区画された中に半截竹管による連続刺突文があり，下に渦巻文をもつ沈線がある。５はＬＲの単節斜縄文が施文された深鉢形土器の口縁部である。７は頸部で沈線で区画され，その集結部に隆部をつくっている。６はＲＬの単節斜縄文を地文とし綾格文が施されている深鉢形土器の胴部である。



Ⅲ－8図　第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡（Ⅲ－9図）



Ⅲ－9図　第5号住居跡

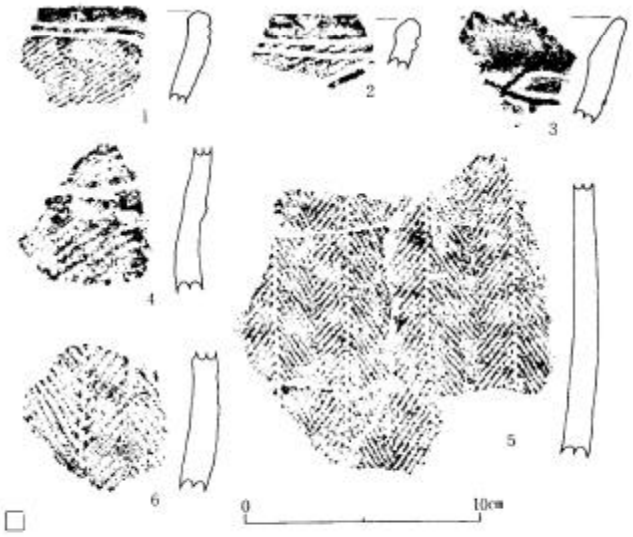
第５号住居跡は第３号住居跡の西に発見されたもので，調査グリッドで言うと６Ｂ，６Ａ，７Ａ，７Ｂグリッドである。

若干，西南部が張り出している不定形な，南北 5.7m，東西 6.3m を測る台形状のプランを呈し，その炉跡はほぼ円形の厚い焼土が見られた。柱穴はこの住居跡の北部に近接して構築されている第８，第９号住居跡との関連から不明瞭である。ただ，この住居跡も後述する第７号住居跡，第２号住居跡と同様に２本の主柱と，それを支える支柱とで構築されていたものと推定するのが妥当であろう。

出　土　遺　物

土器（Ⅲ―10図１～６）

１，２，３は口縁部に撚糸圧痕文，粘土紐による隆帯があるもので，５，６は深鉢形土器の胴部で地文は縦位の羽状縄文である。



Ⅲ―10図　第５号住居跡出土遺物

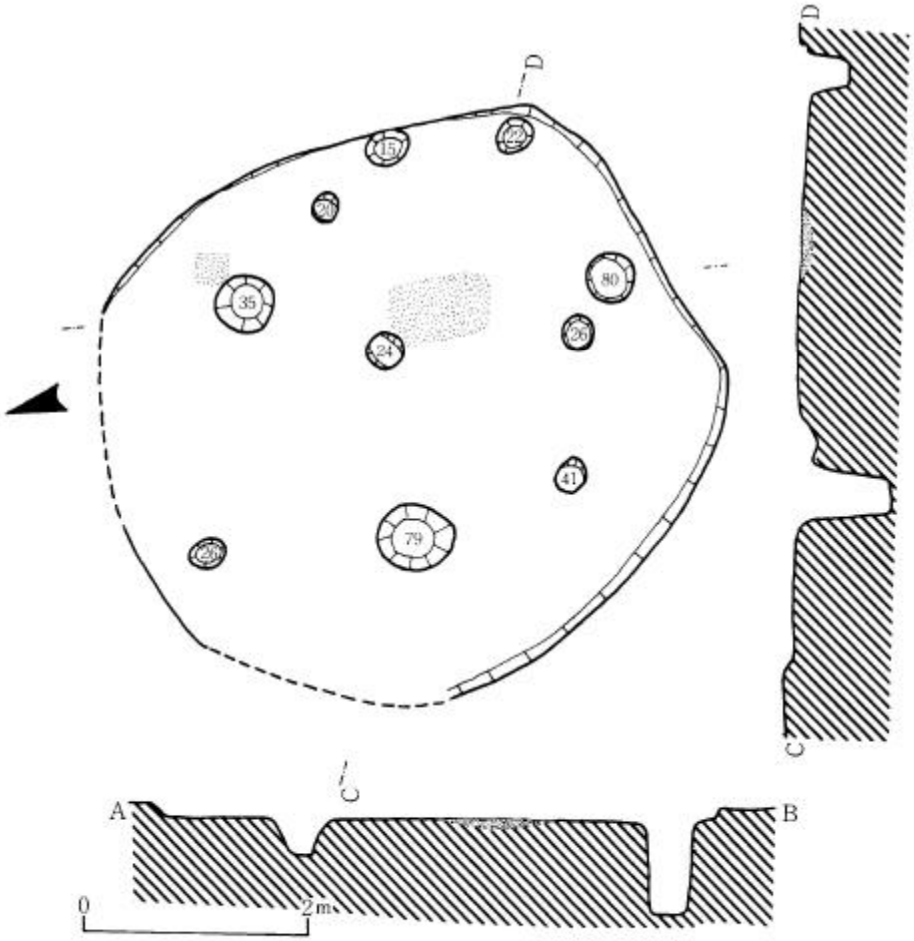
第６号住居跡（Ⅲ―11図）

第６号住居跡は第１号の北西，第２号の西南部に位置し，調査グリッドは２Ａを中心に１Ａ，３Ａ，１Ｆ，２Ｆの５グリッドにまたがる住居跡で，北部の周壁が約４ｍにわたって不明瞭であるが，これは長年に渡るこの台地の客土作業のため極端に深掘りされ，土を持ち去られた人為的被害のためである。しかし，残り三つのコーナーは幸いにも残存しているため推定ではあるが，南北 5.8m，東西 4.9m の若干，小規模でやや方形に近いプランを呈するものである。炉跡は２Ａのほぼ中間に55×10cmの長方形から成る焼土のみによって構成されているが，住居跡全体から考察すればやや東よりの中心部となっている。床面は良好で比較的硬く，柱穴は深さが異なる主柱穴が三つ検出されたにとどまり，その他，小柱穴が東部に密集した形で存在している。したがって，４本柱の住居跡とは考えれない。しかし，これとて前述した被害の点を考慮に入れれば断定することは困難である。

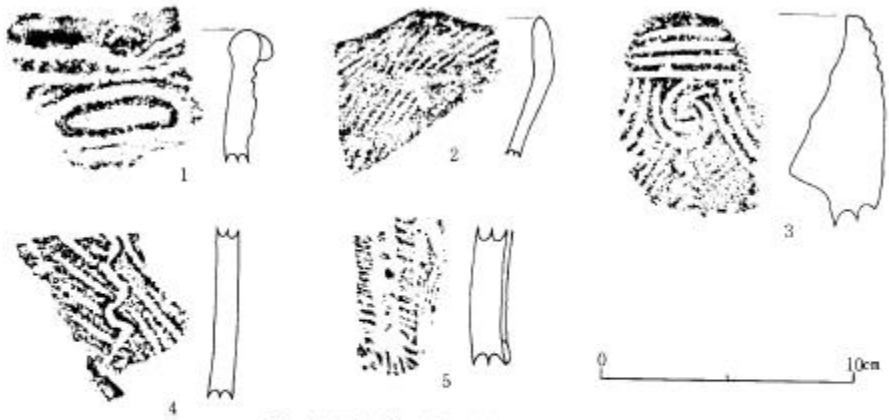
出　土　遺　物

土器（Ⅲ―12図１～５）

１は口唇部に隆帯をつくり下に二条の撚糸圧痕を施文し，口縁部は楕円形に区画された隆帯の周に撚糸圧痕を施している。２は山形の突起をもつ，やや内反する口縁部でＲＬの単節斜縄文を施文している。３は深鉢形土器の弁状把手で四条の平行沈線が横位に，三条の沈線が「八」字状に走り中



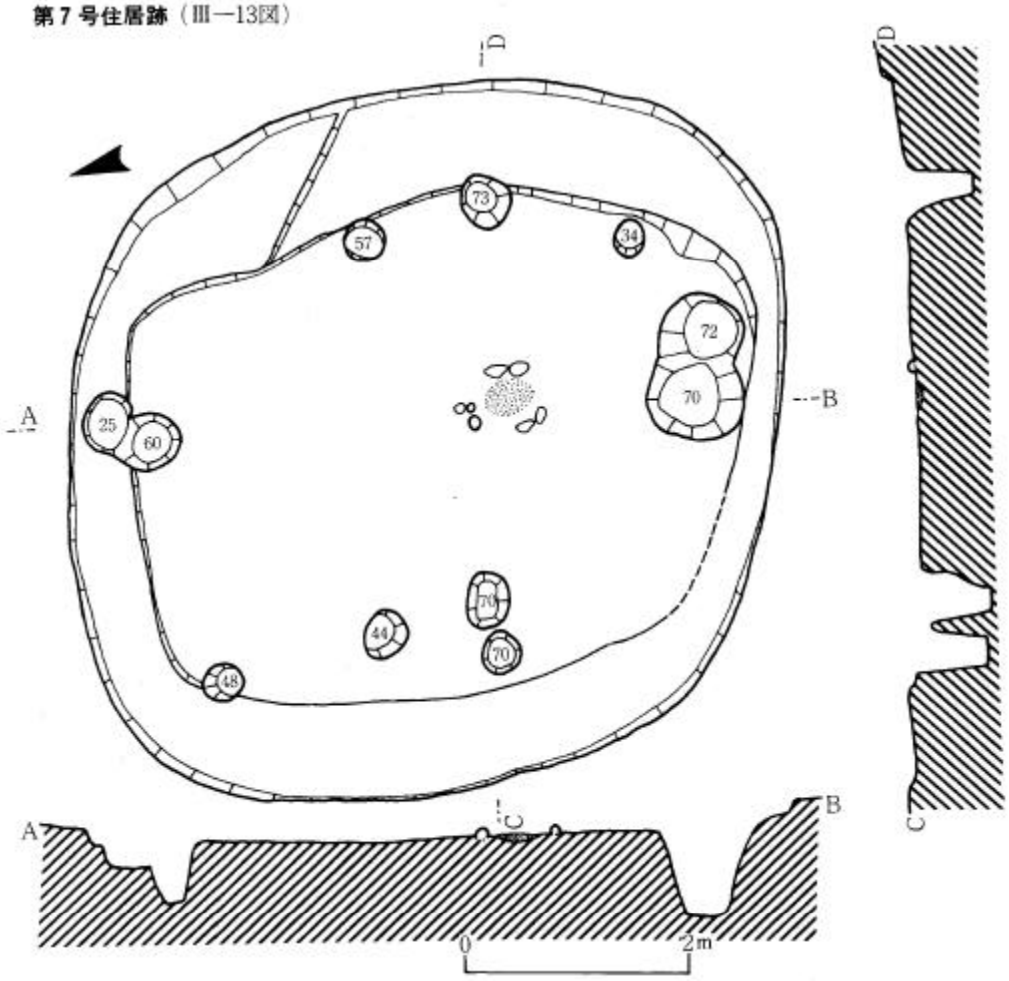
Ⅲ—11図　第６号住居跡



Ⅲ—12図　第６号住居跡出土遺物

に二重の沈線による渦巻文があり，渦巻文から垂下する波状の沈線がある。4はＬＲの単節斜縄文を地文とする胴部で，波状の沈線文が垂下している。5は円筒上層ｂ式土器の頸部と思われる。

第７号住居跡（Ⅲ―13図）



Ⅲ―13図　第７号住居跡

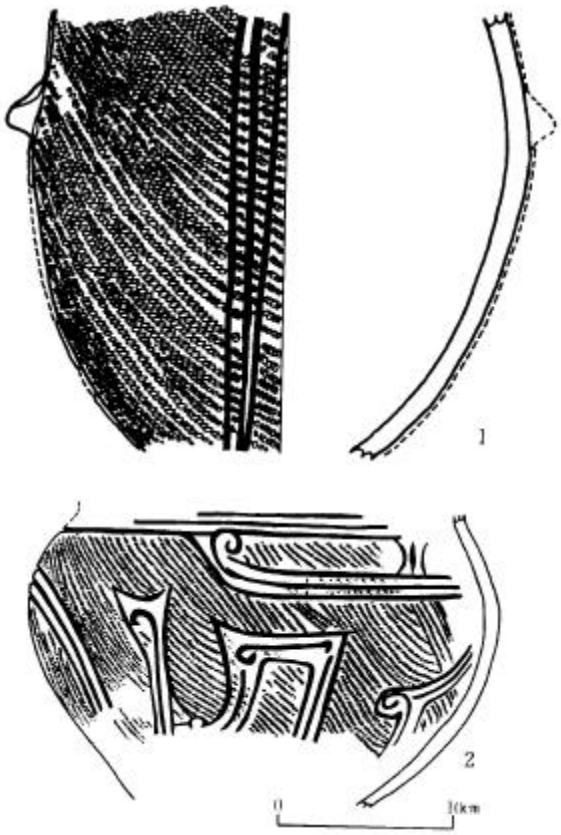
この住居跡は，第２号住居跡と第５号住居跡との間に構築されたもので５Ａグリッドを中心に４Ａ，６Ａ，４Ｆ，５Ｆ，６Ｆと５Ｂグリッドの西側一部の広範囲に渡る住居跡で，これまで確認した本遺跡で最も深い地点に存在し（地表下65～70cm），その断面は鍋底状を呈して，柱穴の有り方等にも明らかに特色を持っている。つまり，南北，東西とも 6.2m の隅丸方形のプランの中に，その壁面より60～90cmを測る地点に南北5.2m，東西 4.4m の不整形なるプランを示す輪郭部がある点が第２の特質である。すなわち，拡張もしくは縮少作業の過程を経たところの二段住居跡としての意味あいが強い住居である。次に石囲炉であり，その中心には小形壺，浅鉢状の土器が２個埋設されており，同住居跡が最初で（５個の川原石によって構成，80×60cmの範囲，焼土の厚さ６cm），この

ことは第１号住居跡の石囲炉(焼土，土器埋設なし)とは，根本的に異なる性格を持っている。第４の特質は，柱穴の位置する場所で，すなわち，南北に比較的大きな柱穴を有し東西には略々等間隔に３～４本の支柱的穴を設けて屋根の架設をしたと判断できることで，つまり現在の民家における切妻系統の架設方法が考えられる。

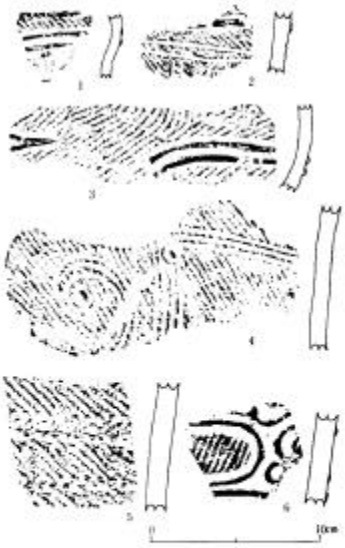
出　土　遺　物

土器（Ⅲ―14図１～２，Ⅲ―15図１～６）

Ⅲ―14図１，２とも第７号住居跡の炉跡に並んで出土した土器で１はＬＲの縄文に４単位，三条の沈線が垂下し，沈線間に二条の粘土紐を貼りつけている。向いあう二つの隆帯文は途中で粘土紐が渦巻文をつくり突出する。２は口縁部はないが，やはり口の開く小形の壺に近い土器で，沈線による文様表出が行なわれ，いわゆる剣先状渦巻文が施文されている。器厚は４㎜程度である。Ⅲ―15図１，２は沈線と粘土紐の貼りつけで施文され，１はキャリパー形の土器で磨消しがみられる。３は粘土紐貼りつけによる。４は沈線による渦巻文，剣先状渦巻文が施文されている。５は深鉢形土器の胴部で６は粘土紐貼文の間を磨消している。大木８ｂ期に比定される。



Ⅲ―14図　第７号住居跡出土遺物

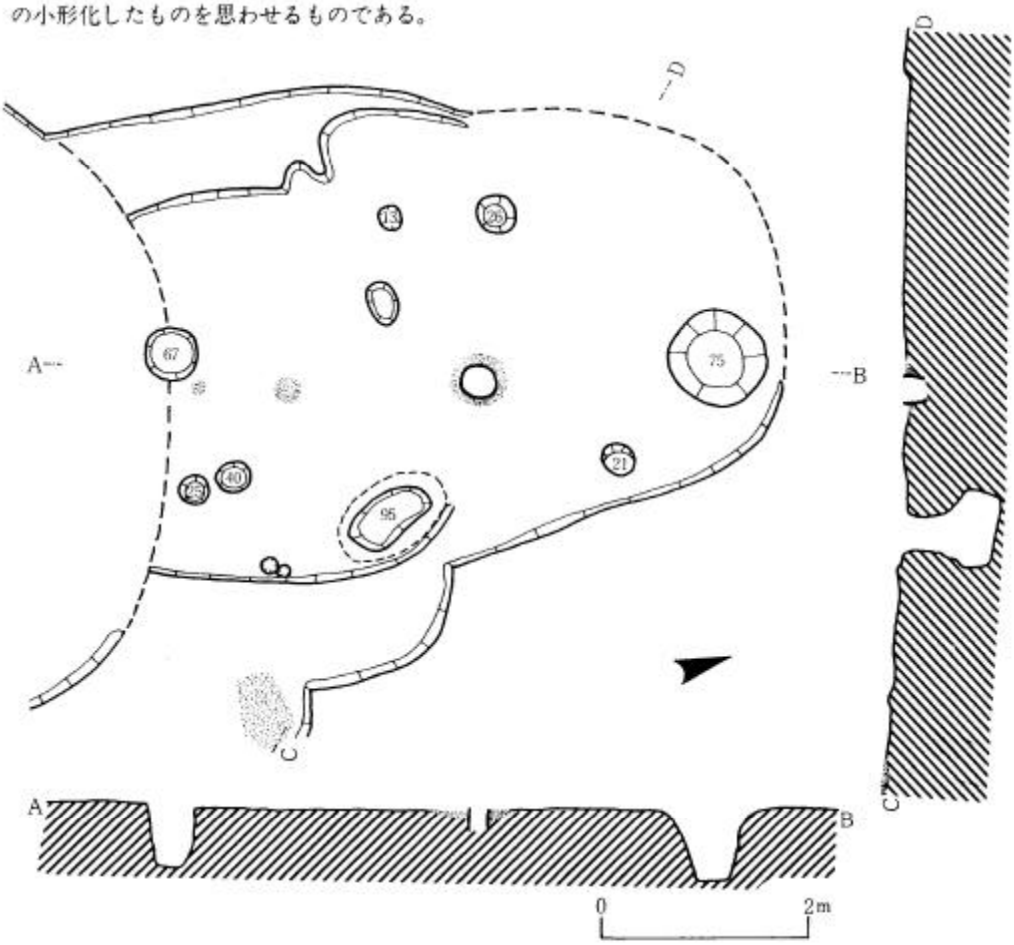


Ⅲ―15図　第７号住居跡出土遺物

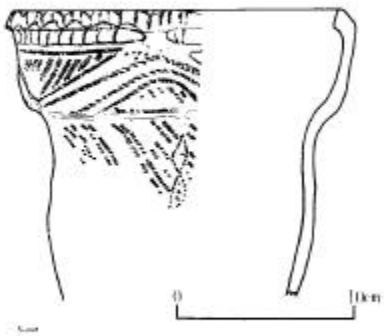
第８号住居跡（Ⅲ―16図）

第５号住居跡の北側に位置するこの住居跡は，７Ａ，７Ｂ，８Ａ，８Ｂグリッドに渡っての南北 4.9m，東西 4.4m の隅丸方形を呈する。第５号との新旧関係は第８号住居跡が前者を切っている点が明瞭であるため，第５

号が古いことになる。炉は７Ｂグリッドの西側と７Ａグリッドの東側とに，いずれも20～30cm程度の円状を呈するものが３カ所ある。北東隅には70×35cmの長方形のピットがあり，粘土と小礫がぎっしり埋設されていたことは特別の理由があったためだろうか。(第７号住居跡南端のピットと同様)しかも，その断面はフラスコ状の様相を示し，５Ｂグリッド東隅に設置していたフラスコ状ピットの小形化したものを思わせるものである。



Ⅲ—16図　第８・９号住居跡



Ⅲ—17図　第８号住居跡出土遺物

出　土　遺　物

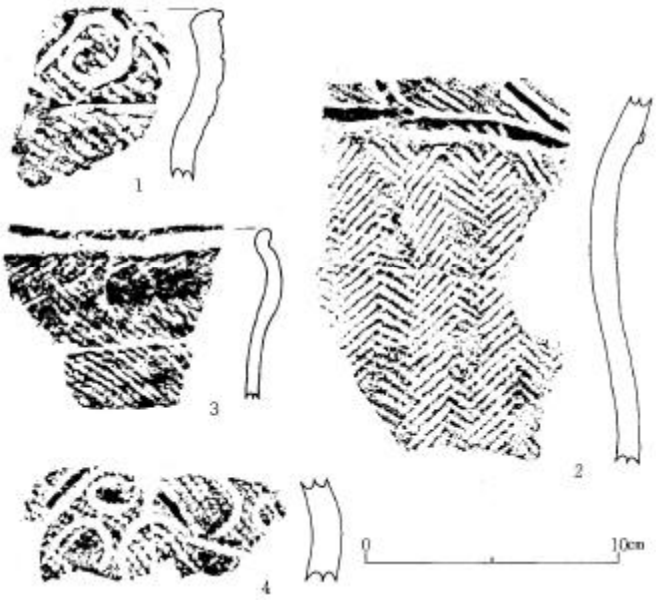
土器（Ⅲ—17図，Ⅲ—18図１）

底部は欠損しているが，キャリパー形の深鉢形土器で口唇部に粘土紐を波状に貼り，撚糸圧痕で刻みを入れ，その下に二条の撚糸圧痕を施文し，間に「Ｃ」字状の撚糸圧痕があり，四条の撚糸圧痕と一条の隆帯で四単位の波状文がある。口縁部はＲＬ，胴部はＬＲの単節斜縄文で鎖状の撚糸圧痕文がみ

られる。Ⅲ—18図1はキャリパー形の深鉢形土器口縁部で，沈線による四単位の渦巻文が配されている。

第9号住居跡（Ⅲ—16図）

この住居跡の調査グリッドは7A，7B，8A，8Bに渡り，いわば第8号住居跡の外側に存在する住居跡である。第8号住居跡との新旧関係は同住居跡の北部周壁の付近にこの第9号住居跡の炉跡（50cmのほぼ円形の焼土中に直径25cmを測る大形土器が埋設されている。）が位置している点から第8号住居跡の方が古いと考えられる。したがって第5，8，9号住居跡の新旧は第5号→8→9号住居跡へと変遷したものである。また，



Ⅲ—18図　第8・9・10号住居跡出土遺物

この付近に連続してある第3号を始めとする5軒の住居跡は9→8→5→4→3号住居跡の順で次第に古くなるわけであるが，特に第8号と第9号との柱穴の問題はひとつの柱穴を両者が使用していたと考えられ一概に決定的な所属柱穴は判断しかねるものである。このことは別の観点から言えば前述した5軒の住居における移動変遷が，かなり短期間に行なわれたことが考えられる。なお，この調査グリッドの第2層（黒色土層）～第3層（黄褐色土層）にかけて小礫が多く含まれている点から，ある意図のうえで家屋遺棄が行なわれたものと解釈することが可能である。

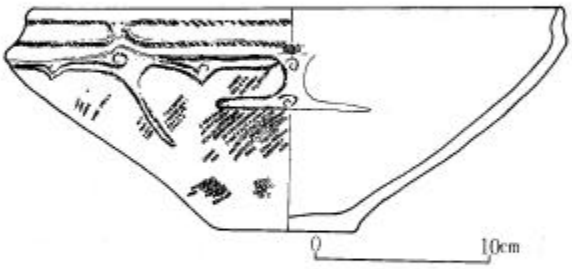
出　土　遺　物

土器（Ⅲ—18図2，Ⅲ—19図）

2は深鉢形土器で胴部は結束のない縦位の羽状縄文である。Ⅲ—19図は浅鉢形土器で，口縁部は長楕円形の区画で撚糸圧痕を施文し，胴部には垂下と横にひらく撚糸圧痕が交互に施されている。

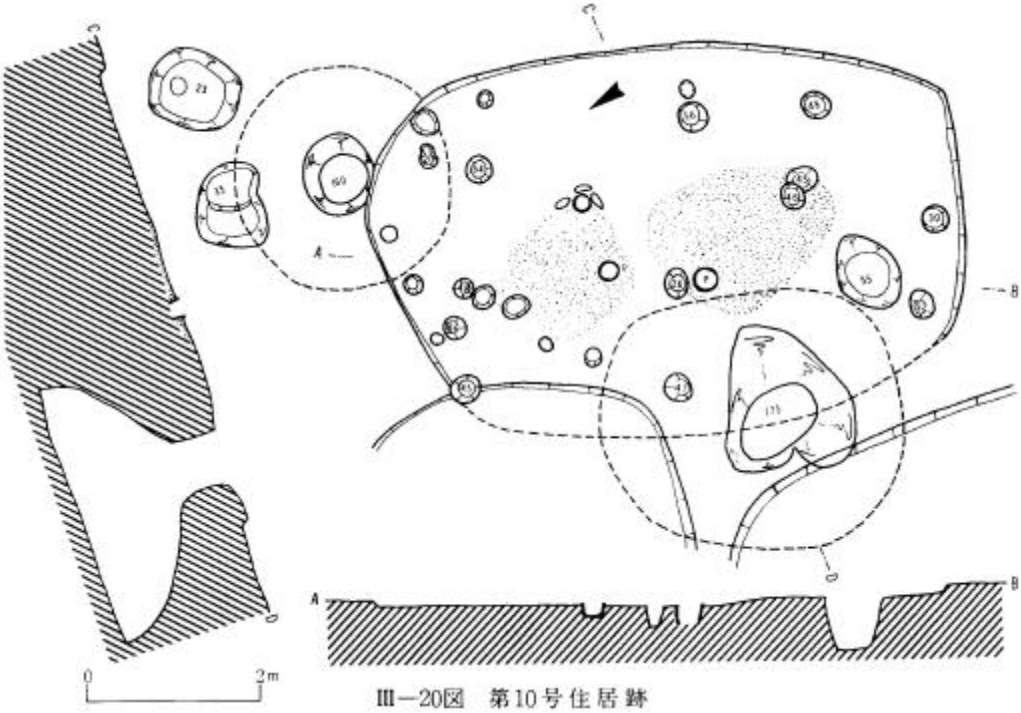
第10号住居跡（Ⅲ—20図）

この住居跡の調査グリッドは，7A，7F，8A，8F，9A，9Fグリッドで南北 6.6m，東西 4.5mの隋円形プランを呈する住居跡である。炉は埋甕炉2，石囲炉1の計3カ所あり，住居跡中央部に焼土が分布しており，約



Ⅲ—19図　第9号住居跡出土遺物

半分の面積にわたって焼土が床面に縦横している点から，かなりの長期にわたる家屋存続を成した住居跡でなかったろうか。柱穴は周壁に沿って８本であり，南西に深さ55cmの大ピットがありまた，北部と南西周壁付近に入口をもつフラスコ状ピットと二つの大ピットは第10号を始め第11，第15号とかなり有機的性格をもつ遺構であろう。前者遺構の口縁周囲に若干の盛り上りと，第10号西側床面の凸凹の激しさと軟弱さとから考えれば，第10，第11号住居跡構築後に設置されたものと考えていいであろう。本住居跡は第13号住居跡によって切られているため，両者間ではこの第10号住居跡の方が古いことは言うまでもない。



Ⅲ—20図　第10号住居跡

出　土　遺　物

土器（Ⅲ—18図３～４）

３は小形のキャリパー形土器の口縁部である。４は深鉢形土器の胴部で粘土紐と撚糸圧痕文である。大木8a期に比定される。

第11号住居跡（Ⅲ—23図）

第11，14，17号住居跡の一群中，最も新しい住居であることは第14号を切って（第14号より約４～５cm深い）いることから明らかである。７Ｆ，７Ｇ，８Ｆ，８Ｇグリッド内にあるこの隅丸方形のプランを呈する住居跡は南北 6.9m，東西 5.3mの規模で，第14号住居跡と南西隅で接触している部分を除けば周壁はローム層を10～15cm切り込んで良好な状態である。炉は９個の小礫で構成されている石囲炉で，柱穴は第14号と併用しており８本で，床面は硬く良好であった。

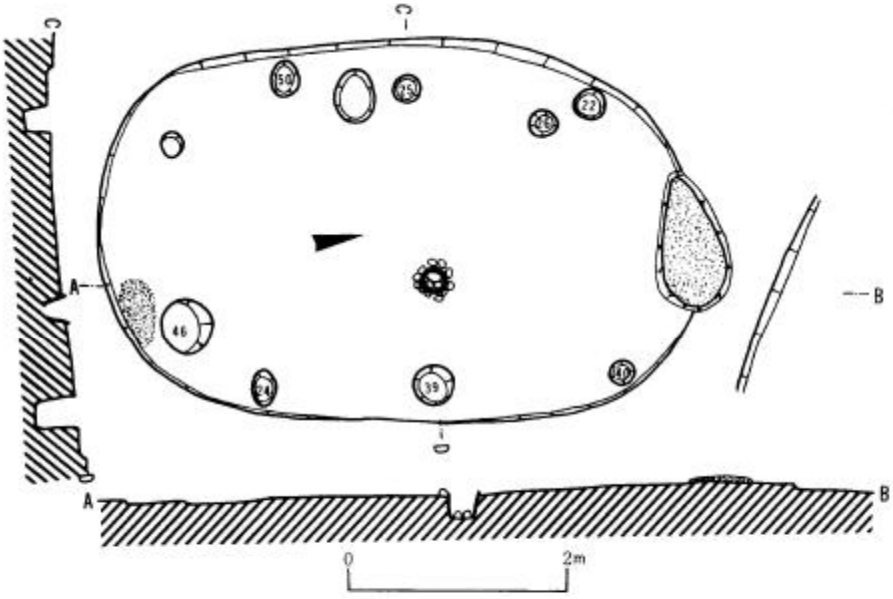
出　土　遺　物

土器（Ⅲ—24図，Ⅲ—25図１～８）

１は口縁部に四条の撚糸圧痕文のある深鉢形土器で，地文はＲＬの単節斜縄文。２はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部で粘土紐貼りつけによる剣先状の文様を施している。３は外反する口縁をもつ深鉢形土器で一条の粘土紐をめぐらし，頸部は無文である。４はキャリパー形土器で沈線による区画がされている。５は口縁部に二条の平行沈線間に連続する刺突文があり，下の隆帯に刻みを入れている。６は口縁が内反する深鉢形土器で，口唇部に「Ｕ」字状の粘土紐を貼りつけている。地文はＲＬの縄文である。７は深鉢形土器の胴部で８は円筒上層Ｃ式の土器で多截竹管状の工具による刺突が施文されている。

第12号住居跡（Ⅲ—21図）

地表下約15～20cm前後のローム層上にある黒色土層より発見された住居跡であるにもかかわらず比較的周壁の明確な楕円形(小判形)のプランを呈している。中央に11個の小礫を円状に配した石囲炉をもち，南北 5.6m，東西 3.5m の規模の住居跡である。柱穴は東西に25～40cmの深さをもつ6本と判断され，北周壁部にある焼土(130×70cm）は床面より高い状態であった。



Ⅲ—21図　第12号住居跡

出　土　遺　物

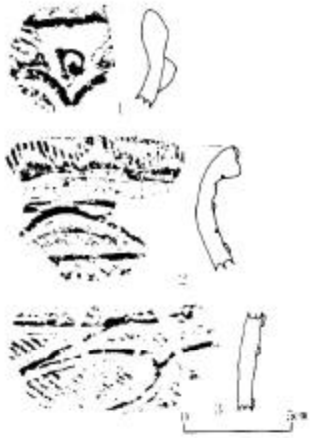
土器（Ⅲ—22図１～３）

１は浅鉢形土器口縁部で粘土貼りつけによる突出がある。２は「く」字状に外反する深鉢形土器の口縁部で口唇部に粘土紐を波状に貼り，撚糸圧痕の刻みを入れ，くびれの部分と隆帯文の間に竹管

の刺突文がめぐっている。

第13号住居跡（Ⅲ—26図）

第10号住居跡北西部を切って第11号住居跡北部に位置しているこの住居跡は，８Ｆ，８Ｇ，９Ｆ，９Ｇグリッド内にあり南北４ｍ，東西 4.9ｍのやや不整形な隅丸方形のプランを呈する。川原石10個を使用したコの字型石囲炉は北を焚口とし，家屋廃棄時に炉中に埋設していた土器を抜き取った形跡がみられた。また，炉の西側に約10～20cm前後の小ピットが南北方向に配列している状態から，この住居を２分する間切り的施設の存在を考えてさしつかえないであろう。さらに北部にフラスコ状ピットが確認されている。



Ⅲ—22図　第12号住居跡出土遺物

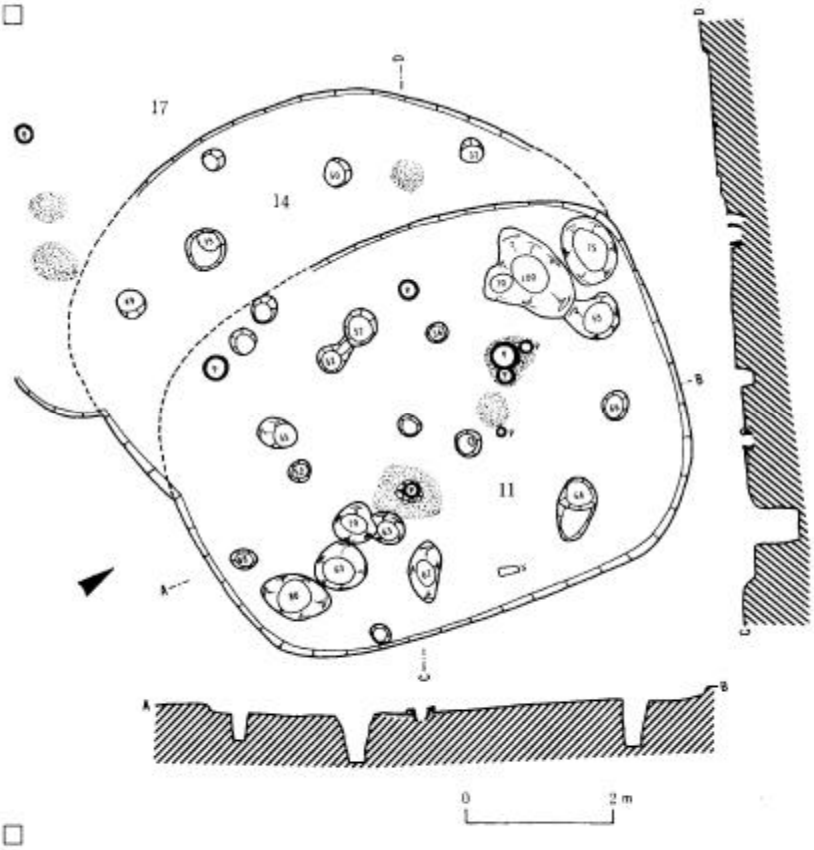
出　土　遺　物

土器（Ⅲ—27図，Ⅲ—28図１～４）

１は深鉢形土器の胴部で二条の粘土紐の貼りつけによる文様構成である。２，３，４は二，三条の沈線で幾何学的に区画されている。

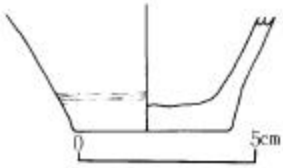
第14号住居跡（Ⅲ—23図）

７Ｈ，７Ｇ，８Ｈ，８Ｇグリッド内にあり，第17号住居跡を切り，構築された隅丸方形のプランを呈する。



Ⅲ—23図　第11，14，17号住居跡

その規模は南北 6.9m，東西 6.0m で，炉は北西部の焼土と第11号住居跡内の北寄りにある埋甕炉との併用であり，付近にある大きいピットもこの住居の貯蔵用施設として利用したものであろう。柱穴は50cm前後の深さを測る６本と考えられる。

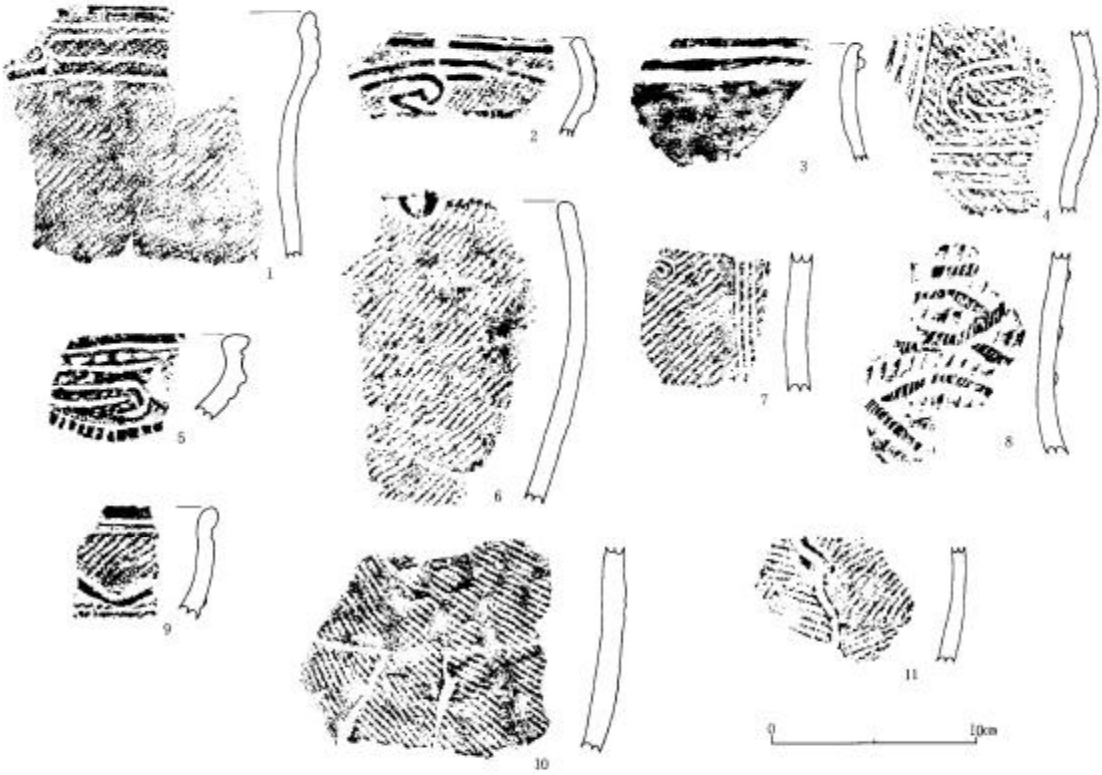


Ⅲ—24図　第11号住居跡出土遺物

出　土　遺　物

土器（Ⅲ—25図９～11）

９はキャリパー形土器の口縁部である。10は深鉢形土器の胴部でＬＲの単節斜縄文である。11は沈線による懸垂文が胴部に施文されている深鉢形土器である。



Ⅲ—25図　第11・14号住居跡出土遺物

第15号住居跡（Ⅲ—29図）

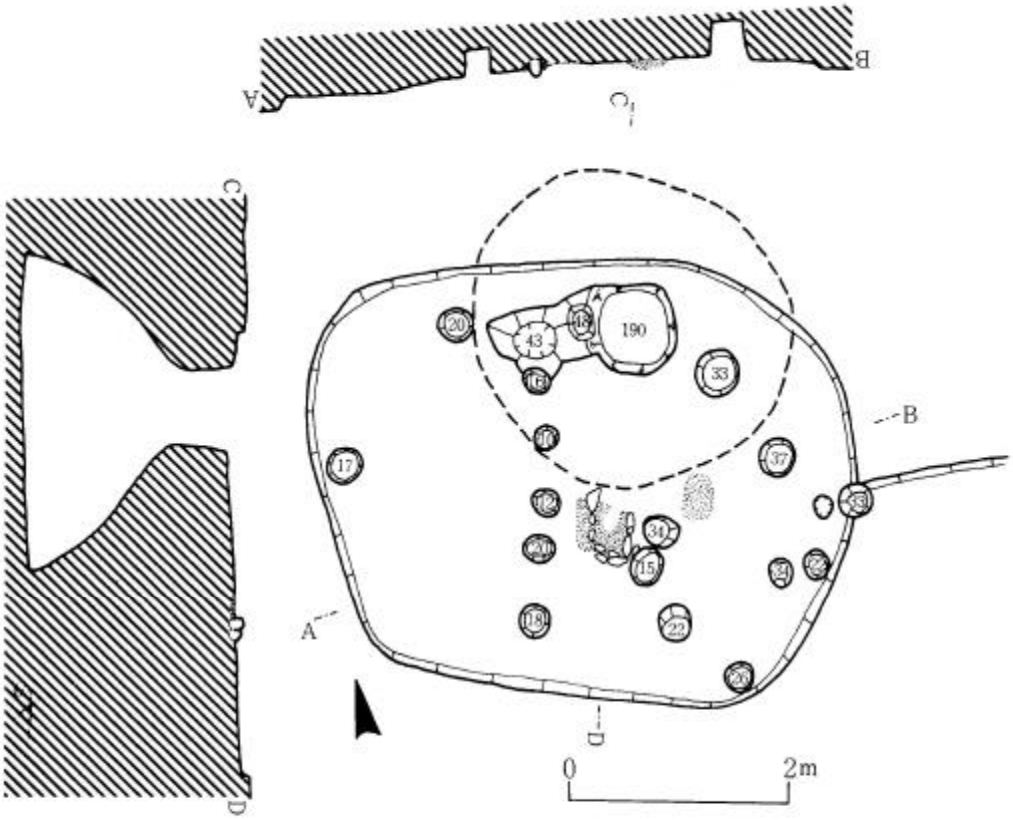
10Ａ，10Ｆグリッド内にあり，北側は第16号住居跡同様に完掘されていないが，推定，南北 8.8m，東西 5.5m の不整楕円形のプランを呈する住居跡で，炉は第16号住居跡内の埋甕炉と考えられる。柱穴については，はっきりしない。東側周壁はローム層を10cm程掘り込んだ明確な壁を成して

いるが，床面は全般的に軟弱である。

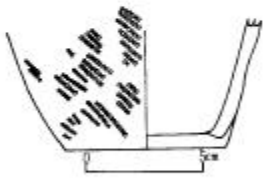
出　土　遺　物

土器（Ⅲ—30図，Ⅲ—32図１～６）

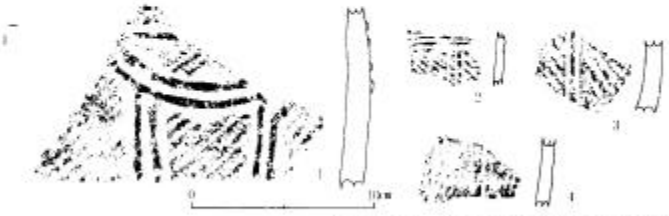
Ⅲ—30図は小形の土器で，底部中央と胴部に穴があけられている。１は深鉢形土器の口縁部で，太い粘土紐を波状に貼りつけて地文と同原体で刻みをつけている。胴部はＬＲの縄文である。２はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部で粘土紐貼りつけと撚糸圧痕による文様構成で口縁部の縄文はＬＲである。３は二条の沈線で文様を区画し，その上に四単位と思われる粘土紐を貼りつけ，指で押圧している。４は半截竹管状の工具で沈線を施し沈線間は波状に同じ工具で施文している。５は沈線と粘土紐を貼りつけ垂下させている。



Ⅲ—26図　第13号住居跡



Ⅲ—27図　第13号住居跡出土遺物

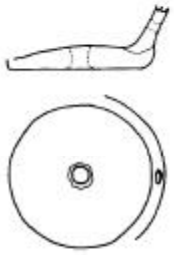


Ⅲ—28図　第13号住居跡出土遺物

Ⅲ—29図　第15・16号住居跡

第16号住居跡（Ⅲ—29図）

第15号住居跡を切り込んでいるためこの住居跡が新しい。推定，南北6.8m，東西 4.6mの楕円形のプランを呈する住居跡であろう。中央および北寄りにそれぞれ埋甕炉があり，その他，西，南にも焼土がある。柱穴は北側完掘を待たねばならないが，おそらく南北に各々，比較的深みのあるピットを相対させ，東西側に添木柱を多く配置させる方法を採っていると思われる。



Ⅲ—30図
第15号住居跡出土遺物

出　土　遺　物

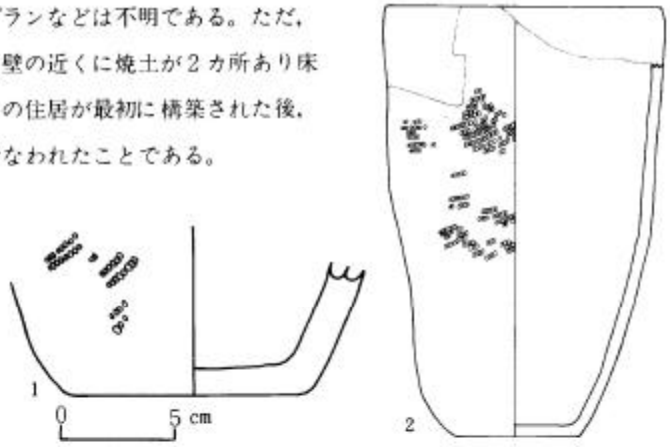
土器（Ⅲ—31図1～2，Ⅲ—32図8～10）

2は深鉢形土器で口縁部から胴部中程までＬＲの単節斜縄文が施文されているが，はっきりしない。8は口がやや外反する深鉢形土器の口縁部で三，四条の撚糸圧痕をめぐらし，下方に「∩」状の撚糸圧痕を二条配している。9は深鉢形土器の弁状把手である。10は大形のキャリパー形深鉢土器で，沈線と粘土紐の貼りつけで文様を構成し，四単位の沈線による渦巻文がある。大木8a期に比定される。

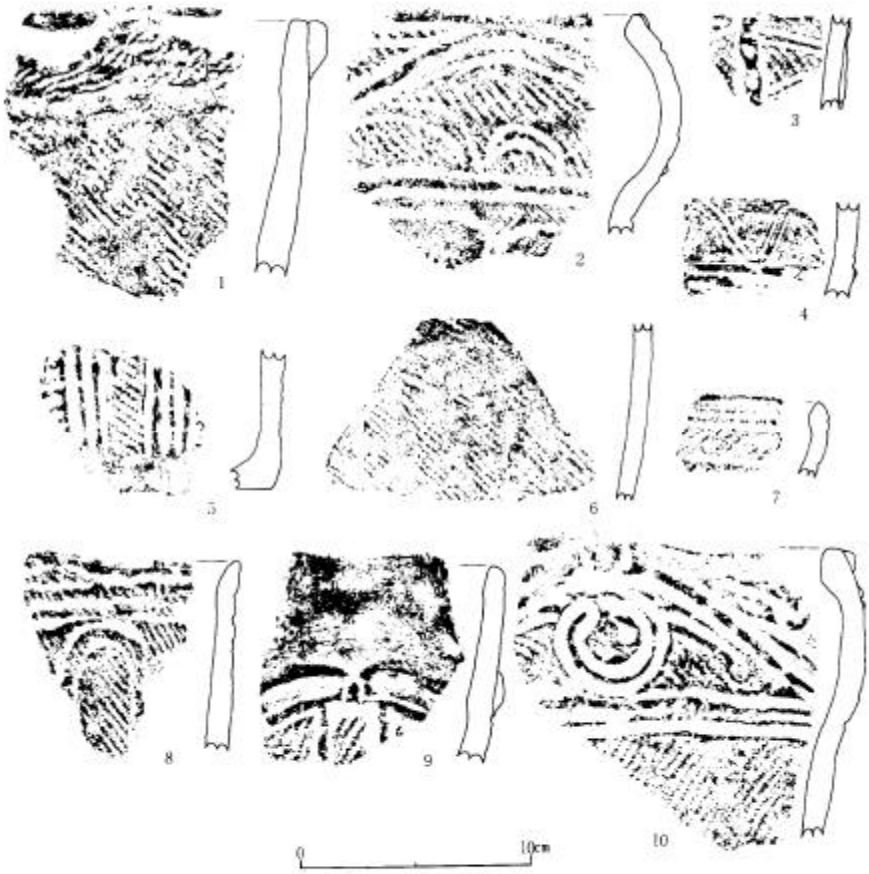
第17号住居跡（Ⅲ—23図）

本遺跡中，最も西寄りに位置している住居跡で，第12号住居跡と略々同レベルにある。長期間に

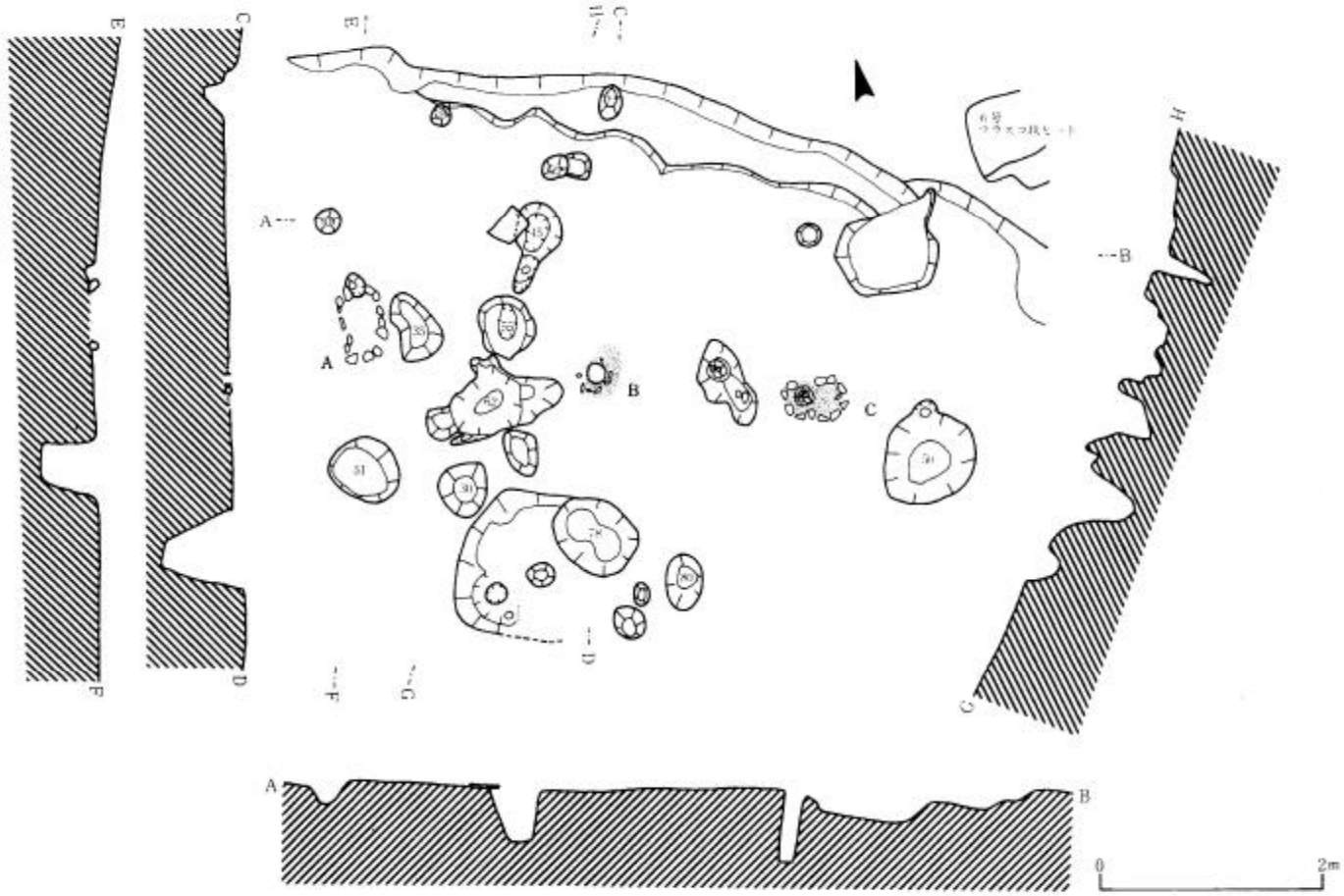
おける客土作業に加え，北西に走る農道により小礫等が多く，南東部を除いた周壁及び全体プランなどは不明である。ただ，明らかなことは第14号住居跡周壁の近くに焼土が2カ所あり床面に接して土器が発見され，この住居が最初に構築された後，第14号→第11号の家屋変遷が行なわれたことである。



Ⅲ—31図　第16号住居跡出土遺物



Ⅲ—32図　第15・16号住居跡出土遺物



Ⅲ—33図　N23E10住居跡

A地区の最北端の拡張区で，N23Ｊ１土壙，袋状ピットの隣接地である。

包含層は床面近くまで，畑の耕作により攪乱を受け，ほぼ東西に二段のレベルの異なる住居跡の壁と考えられる遺構は残っているが，複合している住居跡のそれぞれのプランは不明である。

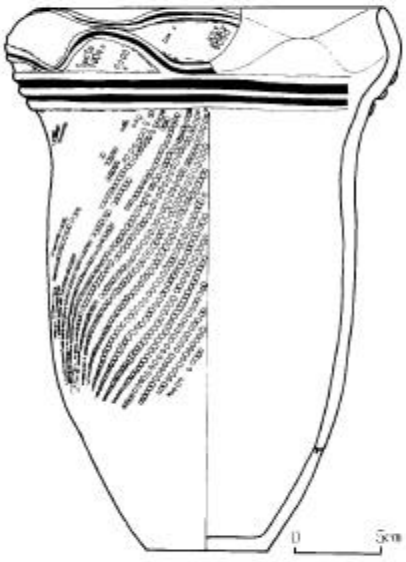
この複合住居跡を西から順にA，B，C住居跡と仮りに呼ぶことにする。床面のレベルはA，B，Cの順に低くなっている。A住居跡は南北に長軸の石囲い炉(70cm×40cm)をもち，炉の南側に埋甕(大木８ｂ式土器)が配され，内部に焼土が入っていた。

B住居跡は，やはり石囲い炉をもち，炉を中心に焼土が広がり埋甕(大木８ｂ式土器)がある住居跡で，この石囲い埋甕炉の西側に不規則な形のピットが連らなっている。

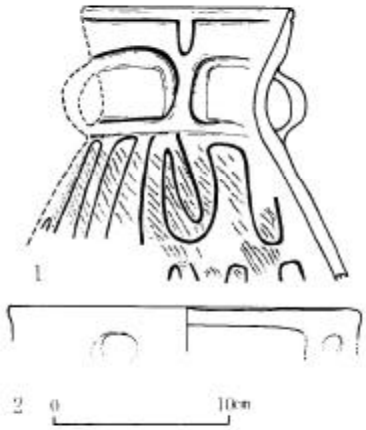
C住居跡はB住居跡の数cm下に床面があり，(C住居跡の上にロームを貼ってB住居跡の床がつくられている) 石囲い炉(50×45cm)が配され，炉の内部に小穴が掘られ中に河原石が詰められていた。この炉の西にピットがあり，このピットにも河原石が数個詰まっていた。焼土は炉の内部とピットに検出された。他に焼土が２カ所みられ，拡張グリッドの北東隅にフラスコ状ピットがあり，フラスコ状ピットの北側半分を調査した。フラスコ状ピットの入口に多量の焼土が捨てられた状態であり，内部からもブロック状の焼土，炭化物，土器片(大木，円筒系土器)，石等が検出された。住居跡内から，北陸系の土器片が出土している。A，B，C住居跡の新旧関係，フラスコ状ピットがどの住居跡に付設するかは，はっきりしないがB住居跡はC住居跡より新しいようである。

出　土　遺　物

土器（Ⅲ—34図，Ⅲ—35図１～２，Ⅲ—36図１～13）

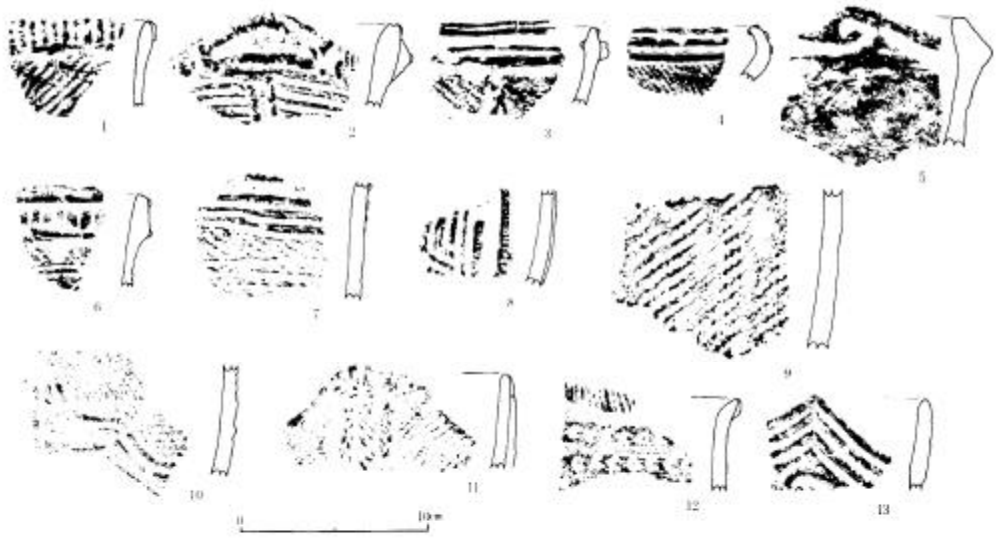


Ⅲ—34図　N23E10住居跡
B住居跡出土遺物



Ⅲ—35図　N23E10住居跡出土遺物

Ⅲ—34図の土器はB住居跡の炉に使用されていたキャリパー形の深鉢形土器で，口縁部に波状の接する粘土紐を貼りつけ下位に三条の粘土紐をめぐらしている。地文はRLの単節斜縄文である。図版14—４はA住居跡の炉に使用されていた深鉢形土器の胴部で地文はＲＬの縄文で，粘土紐を貼りつけた先が丸い鈎状文を配している。Ⅲ—35図１は頸部に橋状の把手をもち，胴部は細い撚糸



Ⅲ—36図　N23E10住居跡出土遺物

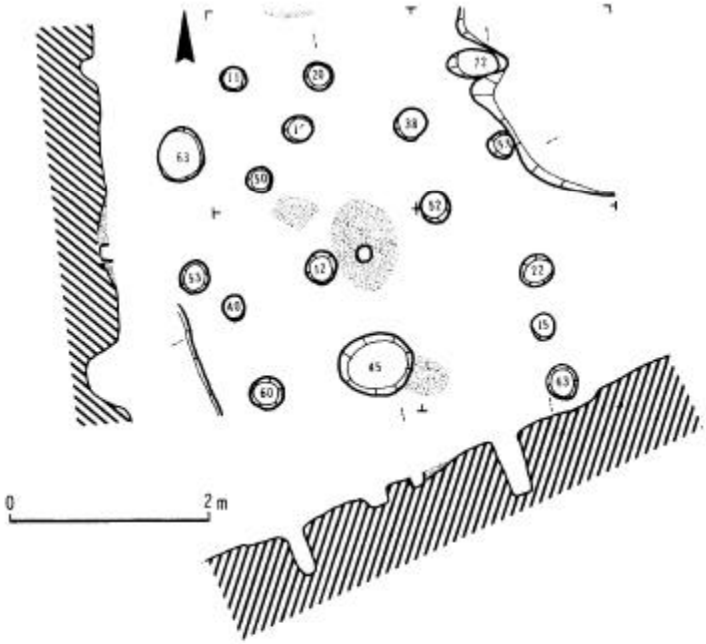
文とし沈線で区画する，いわゆる十腰内式の壺形土器で，胎土に小礫を含み焼成は良い。2は器台で中央部がわずかにくぼみ，器面は良く磨いてある。台部は欠損しているが丸い窓が四つ配されていたものと思われる。胎土は小礫を多く含み荒い。Ⅲ—36図1は「く」字状に外反し胴が膨る深鉢形土器の口縁部で口唇部に粘土紐を貼り，撚糸圧痕の刻みを施している。2は山形の口縁部で，上にのびる楕円形で区画し中は無文で，頸部は数条の沈線がめぐり，二条の縦位の粘土紐で断続する。3は口縁部に二条の粘土紐による隆帯をつくり，下位の隆帯は中央がくぼむ太いもので，内側にも一条の粘土紐を貼りつけている。5は山形の突起をもつ口縁部で，沈線による渦巻文を施文し，頸部は無文帯である。6は口縁部に二条の粘土紐による隆帯をつくり，間に縦位の沈線を施している。8，10は半截竹管による隆帯文と沈線と多截竹管状の工具で格子状に施文する，いわゆる北陸系土器で胎土は大木，円筒系土器のものと明らかに異なる。13も北陸系の深鉢形土器口縁部で内側に有機物が付着している。11は深鉢形土器の把手部で粘土紐を波状に貼りつけ，下方に直線と波状の粘土紐を貼り，上に地文と同原体の縄文を施している。12は口縁が外反する円筒上層式の深鉢形土器口縁部で横位の撚糸圧痕文の間を「C」字状の撚糸圧痕文が連続する。

N13E 1住居跡（Ⅲ—37図）

第2層目の茶褐色土層からローム面まで，多量の土器片，石斧，石鏃，石匙，石錐の他，かなりの小礫（5～8cm）が一塊となって発見されたこのグリッド内から，複雑に絡みあった住居跡が確認され，この一帯の住居群の範囲は，更に東へ拡大されていることが明らかとなった。即ち，グリッド内の北東と南西隅とに2カ所，住居の壁と考えられる切り込みが見られ，その中間には埋甕炉が南北94cm，東西64cmの楕円状の焼土中に設置されている住居跡の三軒とである。後者住居跡の柱穴は，その形状から判断すれば，径30～50cm，深60～70cm前後の4本柱が主柱となっていたと考えら

れ，その位置は，炉を中心に約３ｍ間隔の正方形の配置を成し，床面はかなり硬く良好であった。

これらの複合住居跡は，地表下80cm地点で発見されているが，グリッド隅に検出した住居は，中央の床面より12～14cm程深い。なお，炉跡南部にあるピット（深さ45cm）の上部に約12cmのロームがはられている点や，若干の焼土分布，更に北の一部に，かなり厚みのある焼土範囲の確認がなされ，住居跡の存在とも考えられたが，周辺グリッドの拡張と精査をしなければ，これら複合住居跡の新旧関係は，不明である。

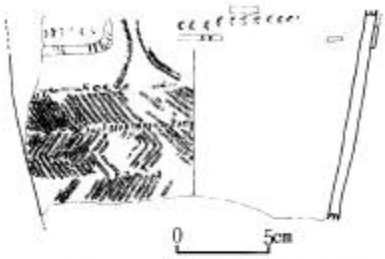


Ⅲ—37図　N13E１住居跡

出　土　遺　物

土器（Ⅲ—38図，Ⅲ—39図１～６）

住居跡，炉から出土した埋甕で，粘土紐を貼りつけ，間に「C」字状に撚糸圧痕文を施文し，胴部は結束のある横位の羽状縄文で，円筒上層式の土器である。１は七条の撚糸圧痕をめぐらし，五，六条の間に粘土紐を貼りつけた口縁がやや外反する深鉢形土器である。２は口縁がやや外反し，撚糸圧痕の刻みを入れている。地文はＲＬの単節斜縄文である。３は「M」字状の弁状把手をもつ円筒上層式の深鉢形土器である。４は口縁が外反する深鉢形の土器で口唇部と頸部に粘土紐を貼り，撚糸圧痕による刻みを施し，中に「C」字状の連続する撚糸圧痕を配している。６は半截竹管で隆帯文をつくり沈線による格子状文のある北陸系の土器である。５は口縁が外反し，撚糸圧痕文と粘土紐を貼りつけ，竹管状の工具で刺突し波状の文様をつくっている。補修孔のある土器で五領ヶ台式に比定されよう。胎土，焼成は良好である。



Ⅲ—38図　N13E１住居跡出土遺物

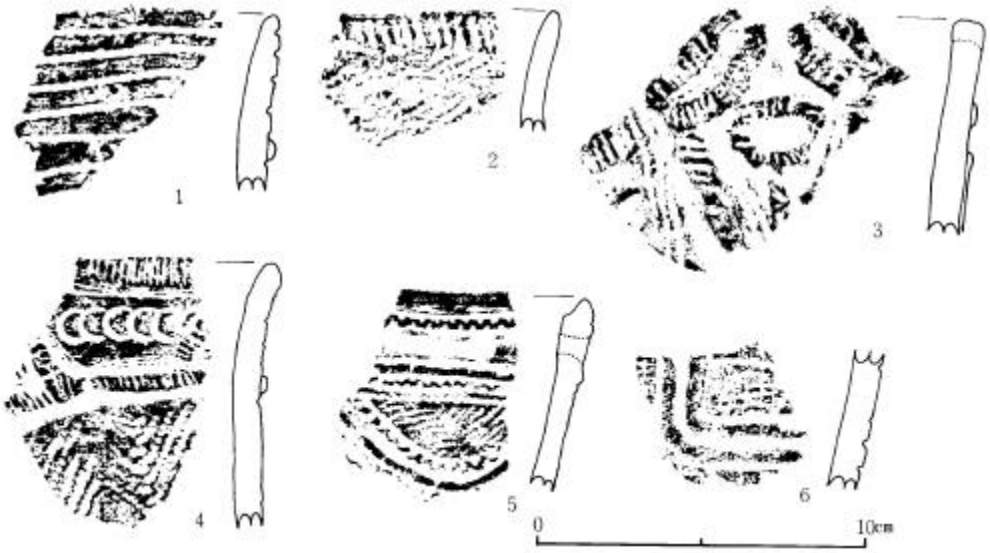
Ｓ６Ｅ10住居跡（Ⅲ—40図）

Ａ地区，南端の拡張区の住居跡で，円形プランを呈する直径約３ｍの小規模な住居跡である。

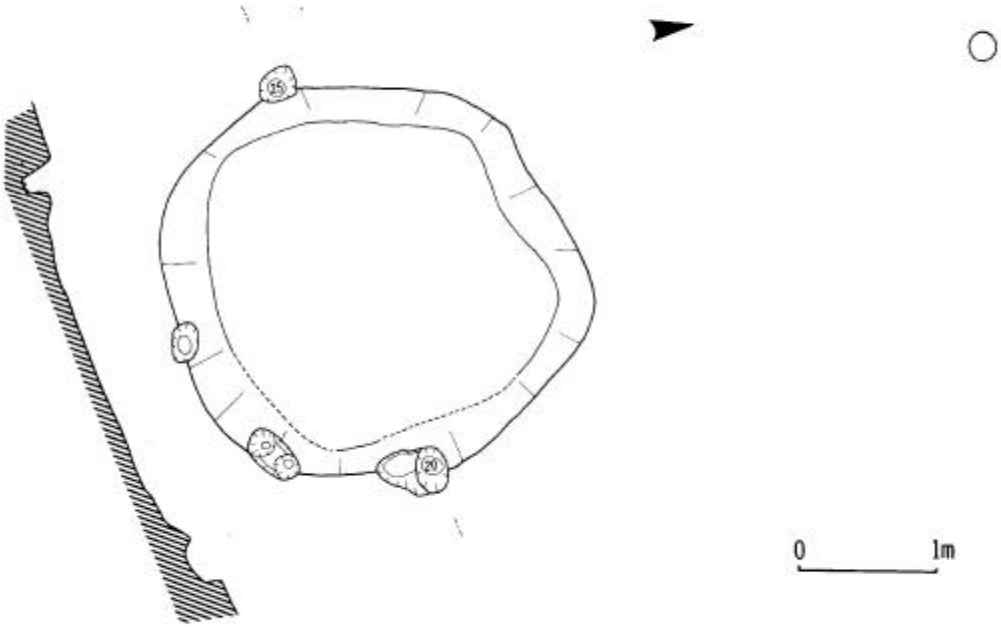
床面は，ゆるやかな鍋底状で，住居跡内には炉および焼土等は見られなかった。柱穴は，住居跡

周壁部に四つ確認できた。それぞれ20cm前後の深さのものである。

この住居跡の北方向 4.5m(住居跡中心から)に埋納土器が一個体発見された。しかし、この住居跡との関連については不明である。



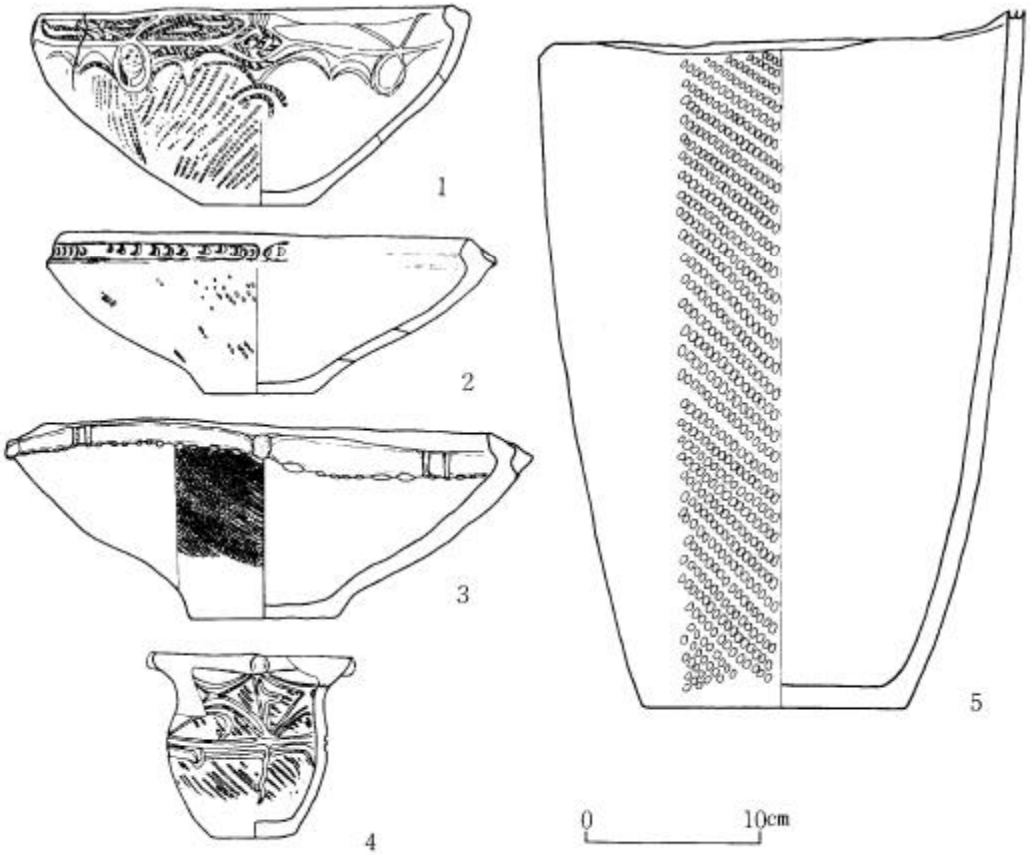
Ⅲ—39図　N13E 1 住居跡出土遺物



Ⅲ—40図　S 6 E10住居跡

下堤遺跡A地区出土遺物

土器（Ⅲ—41図—1～5，Ⅲ—42図1～24，Ⅲ—43図1～25）



Ⅲ—41図　下堤遺跡A地区出土遺物

Ⅲ—41図，1，2，3はほぼ完形の浅鉢形土器で文様の構成は4単位である。1は単節斜縄文の地文に粘土紐を貼りつけ，区画した部分に撚糸圧痕を施している。下方には山形の撚糸圧痕を施している。2，3は長楕円形に区画した間に四つの突起をもつ，2は区画した中に半截竹管状の工具で「C」字状の連続刺突文をめぐらしている。3は区画した部分に縦位に2本の粘土紐を貼りつけ，下方は押圧文がめぐっている。2を除いて胎土は良好である。4は胴部が膨る小形の深鉢形土器で4単位である。口縁部に四つの突起をもち，地文の単節斜縄文の上に沈線によって文様を表出している。5は円筒形を呈する土器でRLの単節斜縄文が全面に施文されている。

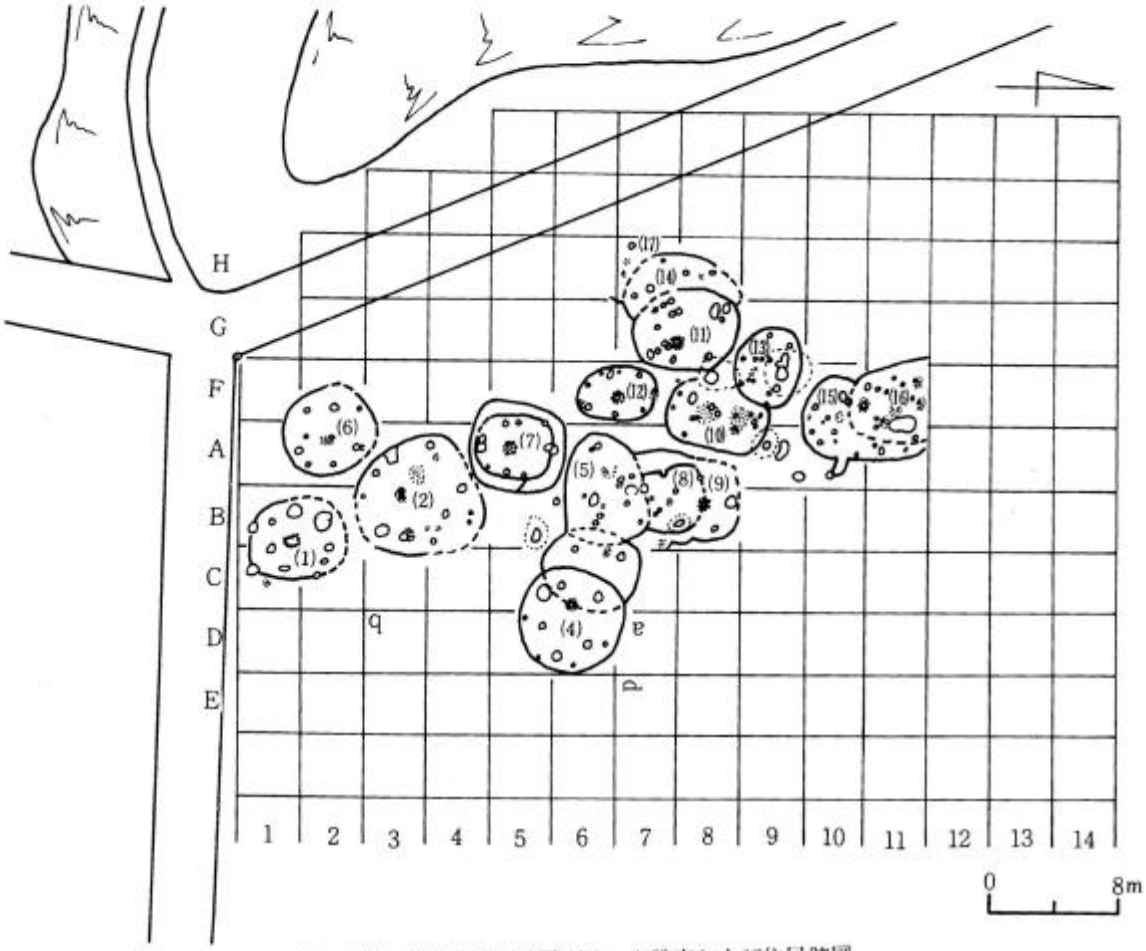
Ⅲ—42図，1～15，18，20，21は撚糸圧痕文を主体とした土器で，いずれも深鉢で単節斜縄文を地文としている。1，3，4は口縁部に二条，あるいは一条の撚糸圧痕を施している。下部には「U」字状の撚糸圧痕を施している。9，14は口縁に波状に粘土紐を貼りつけ，その上に撚糸圧痕を施す。14は下部にも縦横に撚糸圧痕がみられる。9は口縁部がやや外反し，胴部が膨る深鉢形土器と思わ

Ⅲ—43図　下堤遺跡A地区出土遺物

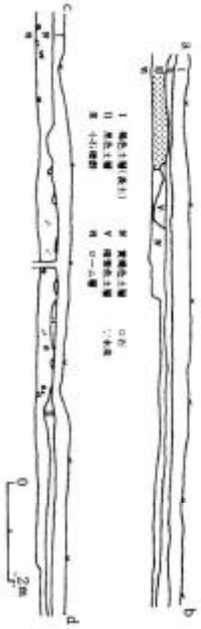
Ⅲ—42図　下堤遺跡A地区出土遺物

れる。10は弁状の口縁部で，口縁に沿って撚糸圧痕を施し，中心部に撚糸圧痕による渦巻文を施している。13は口縁に二条の撚糸圧痕，下部には粘土紐を貼りつけ，それに沿って撚糸圧痕を施している。15は粘土紐を貼りつけて区画し，その中に撚糸圧痕によって「ᴖ」状，渦巻文を配している。17は口縁をきれいに磨き，下部には粘土紐を円形に貼りつけ，その上に撚糸圧痕を施している。18は口縁部に「C」字状の撚糸圧痕を施している。19はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。縄文はＬＲである。22は弁状把手をもつ深鉢形土器の口縁部である。口縁に刺突を施し，無文帯の下方は沈線で楕円形に区画し，中に刺突文を施しうめている。23は口縁部が内反する深鉢形土器で粘土紐を貼りつけて区画した中に，二列の刺突文を施し，体部は粘土紐による渦巻文がみられる。24は口唇部に指によると思われる押圧文を施している。

Ⅲ—43図，１は波状口縁を有する深鉢形土器である。口唇部には刺突が施され，体部には沈線による渦巻文がみられる。２は深鉢形土器の頸部破片で単節斜縄文の地文に三条の平行沈線文を施している。３は深鉢形土器の破片で粘土紐を貼りつけ，その上下に三条，二条の沈線を施している。４は深鉢形土器の口縁部で，粘土紐を貼りつけて渦巻文を施している。５は波状口縁でキャリパー形の深鉢形土器である。口縁に沈線をめぐらし，口縁部と胴部をわかつ部分に粘土紐を貼りめぐらし，間に楕円形に粘土紐を貼りつけている。６は深鉢形土器の口縁部で単節斜縄文の地文に曲線的に沈線を施している。７は深鉢形土器の口縁部で２本の粘土紐を貼りつけ，その間をヘラ状工具によって整形している。８は深鉢形土器の胴部破片で，単節斜縄文の地文に，沈線と隆帯によって文様を表出し，縦位に頷状文を施文している。９は深鉢形土器の胴部破片で，三条単位の沈線を施している。10は深鉢形土器の胴部破片で粘土紐を貼りつけて，棘状，渦巻文を施している。11は深鉢形土器の胴上部破片で，粘土紐を貼りつけた隆帯を１本めぐらし，下方には平行沈線文，「フ」字状の棘状文を施している。12は壺形土器の胴上部破片で一条の沈線をめぐらし，下部には沈線による「フ」字状の棘状文がみられる。13は深鉢形土器の胴部破片で，縦位に綾絡文を施している。14は口縁部に二条の平行沈線を，体部は磨きが施され無文帯となる。15は胴上部で器厚は比較的薄い。単節斜縄文の地文に沈線によって渦巻文を施している。16は深鉢形の土器で，口縁に粘土紐による隆帯をめぐらし，下方には沈線文が施されている。17，18，22は円筒上層式の土器で，いずれも深鉢形の土器である。22は弁状把手を有する。17，22は粘土紐を貼りつけ，その上に撚糸圧痕を施し，間には「C」字状に，撚糸圧痕が施されている。18は粘土紐を貼りつけ，その上に刻みを入れ，間には半截竹管状の工具によって「C」字状の刺突を施している。19は弁状の把手をもつ深鉢形土器の口縁部で，口唇は楕円状に二つに分かれる。中央に孔を穿っている。粘土紐を貼りつけた間には竹管状の工具によって刺突文がみられる。20は口縁部に「C」字状の刺突を，下方は沈線によって区画し，間には竹管状の工具による刺突文がある。21は深鉢形土器の胴部で沈線と隆帯で文様を表出して，渦巻文がみられる。23，24は深鉢形土器の口縁部で口唇部に刻みを入れている。24は二条の平行沈線を施す。23，24は最花式に比定される土器を考えられる。25は波状口縁を有する深鉢形土器で，



Ⅲ—44図　下堤遺跡A地区グリッド設定および住居跡図



Ⅲ—45図　土層断面図

無文の上に口縁に沿って葉脈状に粘土紐を貼りつけている。

第3節　土坑と出土遺物

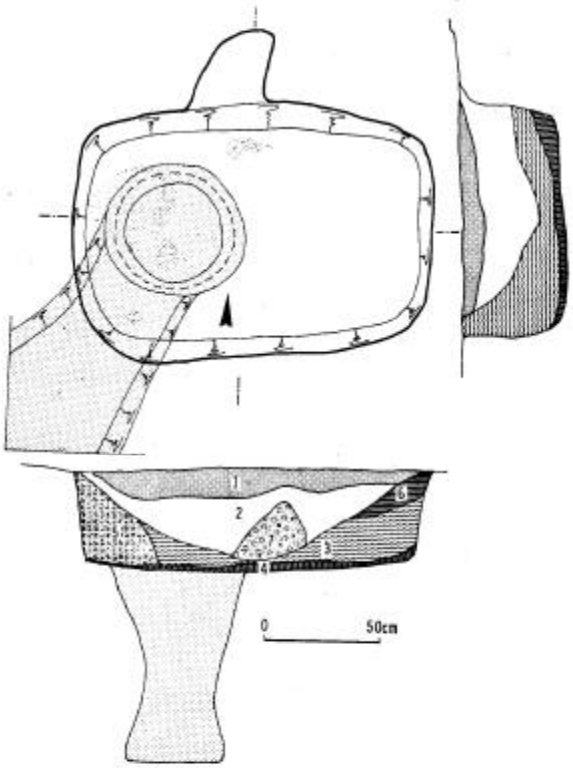
土壙は小竪穴状のもの，袋状のもの，そしてフラスコ状のものが発見されている。中でもフラスコ状のピットが多い。このピットについては袋状土壙，竪坑，竪穴，竪坑状遺構などと呼ばれているが，これらの土壙を総称して袋状ピットと呼んでおきたい。その中で時期，地域により差があって，形が少し異っているものと考えられる。ここではその縦断面が理科実験用具のフラスコにもっとも近い形をなすので，フラスコ状ピットと呼ぶことにしたのである。

フラスコ状ピットを説明する前にその名称について約束しておきたい。下堤遺跡で発見されたフラスコ状ピットはⅢ—59図のような形をなしている。これを遺物に例えてＡを口縁部，Ｂを頸部，Ｃを胴部，Ｄを底部(床面)と呼ぶこととし，以下この名称を使って説明する。

土坑・袋状ピット（N23Ｊ１)(Ⅲ—46図，図版８）

土坑

この土壙の確認面はソフトローム上面である。平面形はほぼ隅丸長方形を呈している。大きさは口部で長径 158 cm，短径 110cmを測る。深さは確認面より45cmで，壁はほぼ垂直に立ちあがっておりロームのしっかりした壁である。土壙覆土の土層は７層にわかれ，１層，黒褐色で若干ローム粒子を含む，よくしまった層である。２層，褐色土層で，やわらかく炭化物，および焼土を含む。３層，明褐色でローム粒子を多量に含み炭化物，焼土を部分的にではあるが帯状に含んでいる。４層，ロームブロック，ローム粒子を多量に含むやわらかい層である。５層，赤褐色で大きめの炭化材を含み，その周りに焼土が点在しているボソボソした層である。６層，ロームブロックを多量に含む黄色の層である。７層，大きな炭化材を帯状に含んだボソボソした茶褐色の土層である。この土壙は袋状ピットと重複関係にあるが袋状ピットが土壙壙底部に確認されていることから推察して



Ⅲ—46図　N23Ｊ１土壙・袋状ピット

本土壙の方が新しいものと推定される。

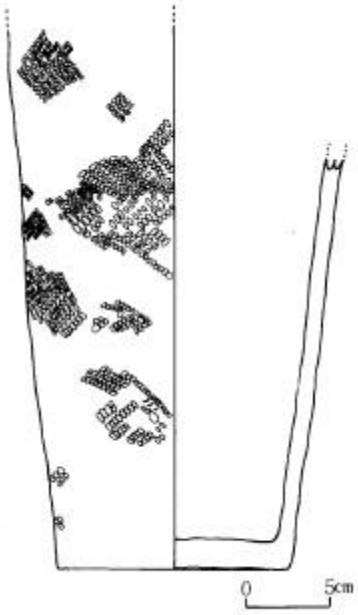
袋状ピット

このピットは土壙壙底部ローム面であり，ロームを掘り込んで作っている。平面形はほぼ円形を呈している。大きさは長径約60cm，短径約58cmを測り，確認面よりの深さは約83cmを測る。壁は垂直に落ち込みながらピット中程よりやや張り出し袋状を呈している。ピット南側において西南方向に溝がのびているが本ピットにともなうものかどうかは不明である。本ピットは前記土壙と重複関係にあり，新旧関係は本ピットの方が古いものと推定される。

フラスコ状ピット

(1)　1号フラスコ状ピット

5Bグリッドから発見されたもので，第3，4，5号住居跡のそばでどの住居跡にも付設したと思われる位置にある。規模は，口径65cm，頸径55cm，底径 160cmでほぼ円形，深さ 100cm，頸長22cmである。ピット内に充填された土壌は，上部が黒色土，下部は赤褐色土で，共に炭化物が混入していた。出土土器片の多くは殆んど壁近くにあり，また，中間に出土した土器胴部の内面に多量の炭化物と炭化した胡桃が付着していた。底部に焼土が僅かに残っていた。



Ⅲ—47図　1号フラスコ状ピット出土遺物

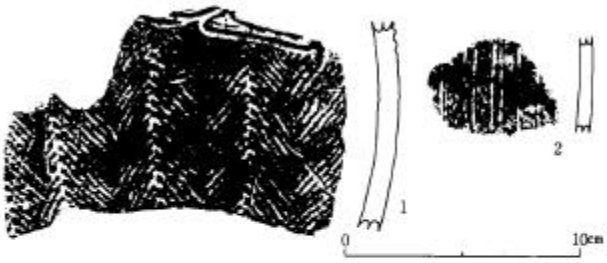
出　土　遺　物

土器（Ⅲ—47図，Ⅲ—48図1～2）

Ⅲ—47図の土器は，胴部破片がピット中間に，底部が，ピット底部より5cm程上の位置から発見されたもので，口縁部はないが，円筒型となるもので，横位の羽状縄文が見られる。1は，平行沈線が深く横位に施文され，胴部は結束した羽状縄文が縦に施文されている。

(2)　2号フラスコ状ピット

このピットは，口縁および底部が楕円形をなし，充填された土壌は特異であった。規模は，口径80×48cm，底部径 124×65cm，深さ95cm，頸長46cmで，第8号住居跡内にあり，その入口部は非常にかたかった。口縁より北半分は25cmの深さまで，南半分は10cmまで小石の混った黒色土で，その下に青白色の固い泥岩状の土壌が充填されていた。深さ45cmの胴部分に入る所に径2～3cmの小石が敷いたようにあり，

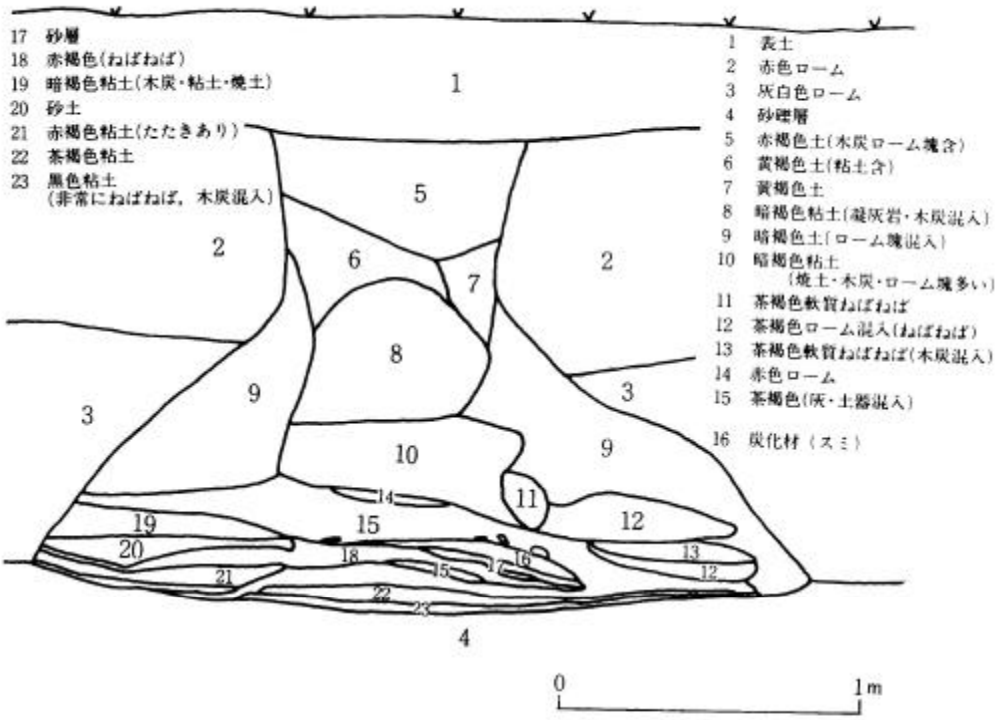


Ⅲ—48図　1号フラスコ状ピット出土遺物

下に厚さ3cmの帯状黒色土があり，以下底部まで再び青白色の土壌で，比較的軟かく，所々に径10cm程の川原石が見られた。出土遺物は土器片(小)一つのみである。

(3) 3号フラスコ状ピット

9Aグリッド，第10号住居跡の北側に発見されたもので，このピットは調査の始めの段階でフラスコ状ピットであることを確認したので，東西に切ったもので，(Ⅲ—49図) 規模は，口径68cm，底径 258cmのほぼ円形，深さ 157cm，頸長57cmで，ローム層を掘り込み砂礫層の所でとめ，鍋底状に約20cm中心が凹んでいる。底部が鍋底状になっているのは，このピットのみである。調査方法として，このピットを切断したのはピット内に充填された土壌を精査することが目的であり，下層はかなり細いブロックに分かれる。



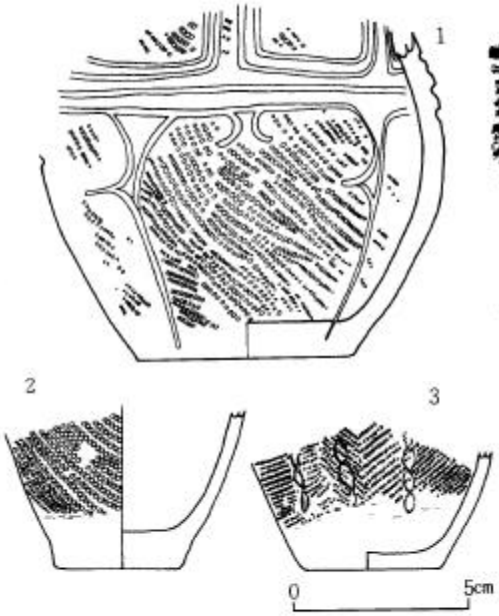
Ⅲ—49図　3号フラスコ状ピット断面図

出　土　遺　物

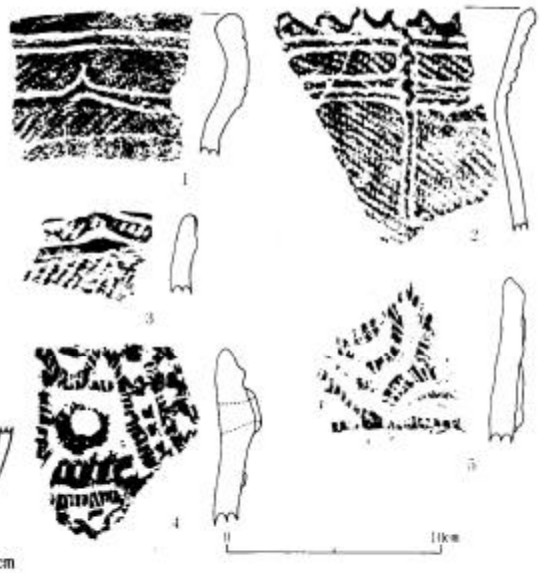
土器（Ⅲ—50図1～3，Ⅲ—51図1～5）

Ⅲ—50図1は，深鉢形の土器であろうが，口縁部が欠けている。地文に単節の斜縄文が施され頸部は太い沈線により四つに区画された四角形の文様となると思われ大木8b式の時期に比定されるものである。2は単節斜縄文のある底部で，3は撚糸圧痕による鎖状の文様が施されている。

Ⅲ—51図は，撚糸圧痕文土器(1，2)円筒系土器(3，4，5)に分れる。2は，口縁が波状となって外反するが，この種の土器に見られる様に口縁内側が厚くなることはない。3は口縁の厚い隆



Ⅲ—50図　3号フラスコ状ピット出土遺物



Ⅲ—51図　3号フラスコ状ピット出土遺物

帯に撚糸が押されているものである。4，5は円筒上層式土器の一般的な弁状把手部であるが，4，5の隆帯(粘土紐貼付)の文様は，ヘラ状工具により刻みで，5は撚糸文である。

(4)　4号フラスコ状ピット

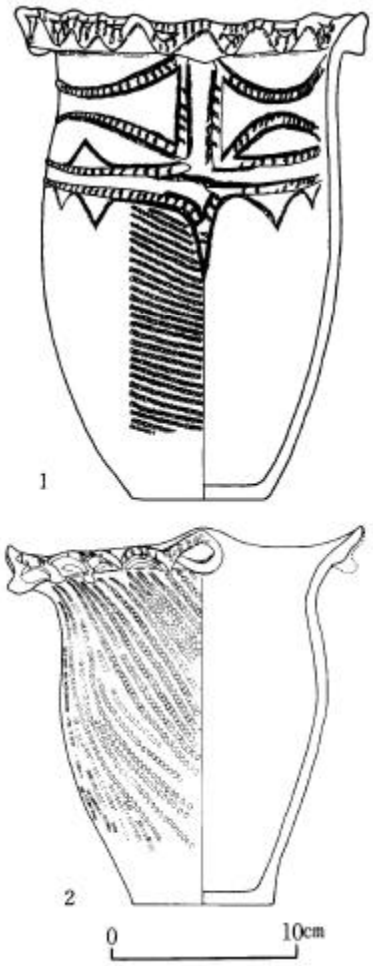
3号フラスコ状ピットの南，8Fグリッド第10号住居跡の西に発見された。上部に大きなピットがあったため，口縁部は，はっきりしないが，頸部径52cm，底径 257cm，深さ 168cm，頸長52cm，現在の胴部の形状は，やや，ふくらみを持っている。充塡された土壌は，上部は黒色土，底部中央部に焼土，炭化物，灰等の土壌，土器片が堆積していた。また底部南隅の底に網代痕のある土器($\frac{1}{2}$)が直立して出土した。

出　土　遺　物

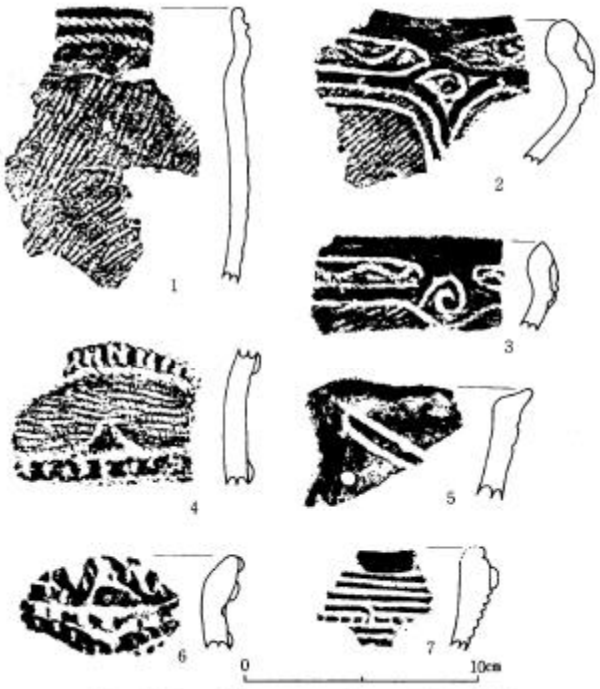
土器（Ⅲ—52図1～2，Ⅲ—53図1～7）

Ⅲ—52図1は，口縁部が外反し，胴部が少し張る深鉢形土器である。胴部から上に文様帯があり，文様は粘土紐を貼付け，その両側を撚糸圧痕を施して構成している。文様帯は同じ文様構成四区画されている。またその中で最も広く区画された部分1カ所(図左側)に撚糸圧痕で山形文を施している。2も同様な器形をなす。口縁部に四つの突起があり，その突起の間を粘土紐を弧状に貼付け，その上に撚糸圧痕文が施されている。他には斜縄文が施されている。円筒上層c式のものである。

Ⅲ—53図1は，口縁部が逆「く」の字に内反する深鉢形をなすものであろう。口縁に二段の原体が圧痕され胴部は斜縄文である。2，3は浅鉢である。4，6は円筒上層式土器である。5は弁状把手の部分で1と同種の原体の圧痕文が施されている。黄褐色をなし焼成の良好な土器である。7はいわゆる北陸系の土器の口縁部である。



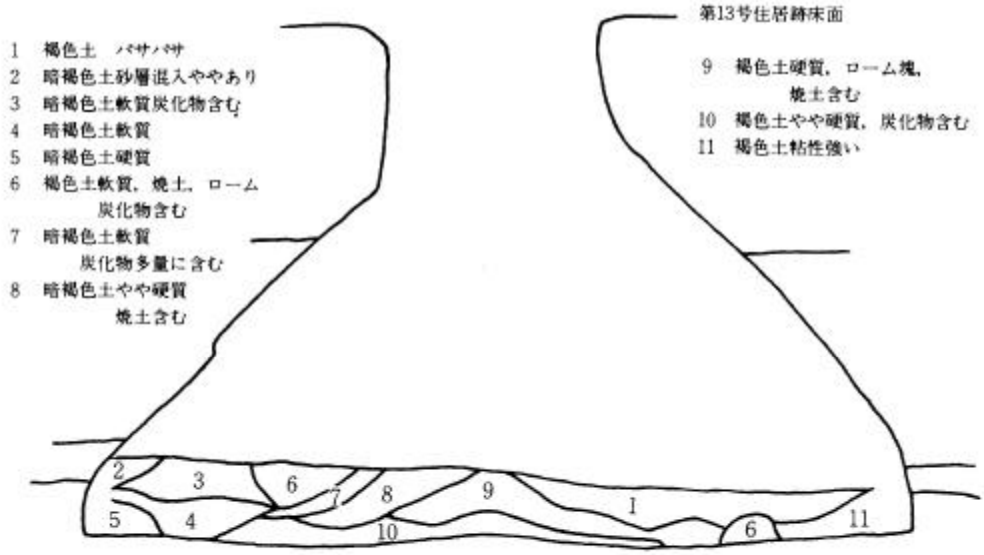
Ⅲ—52図　4号フラスコ状ピット出土遺物

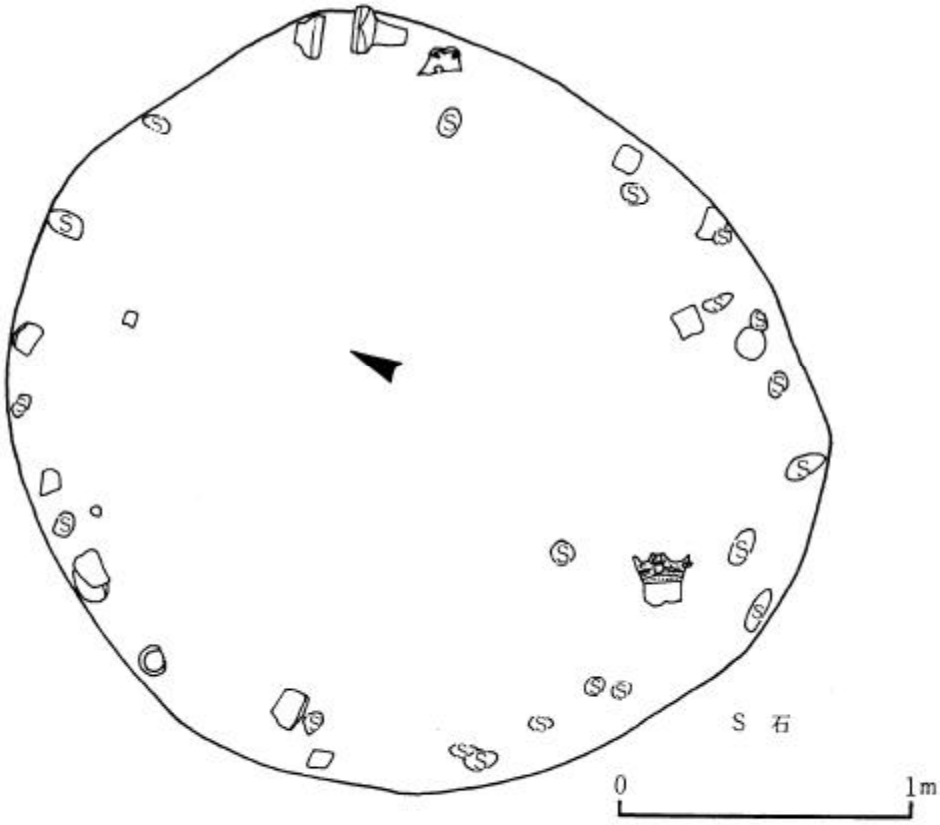


Ⅲ—53図　4号フラスコ状ピット出土遺物

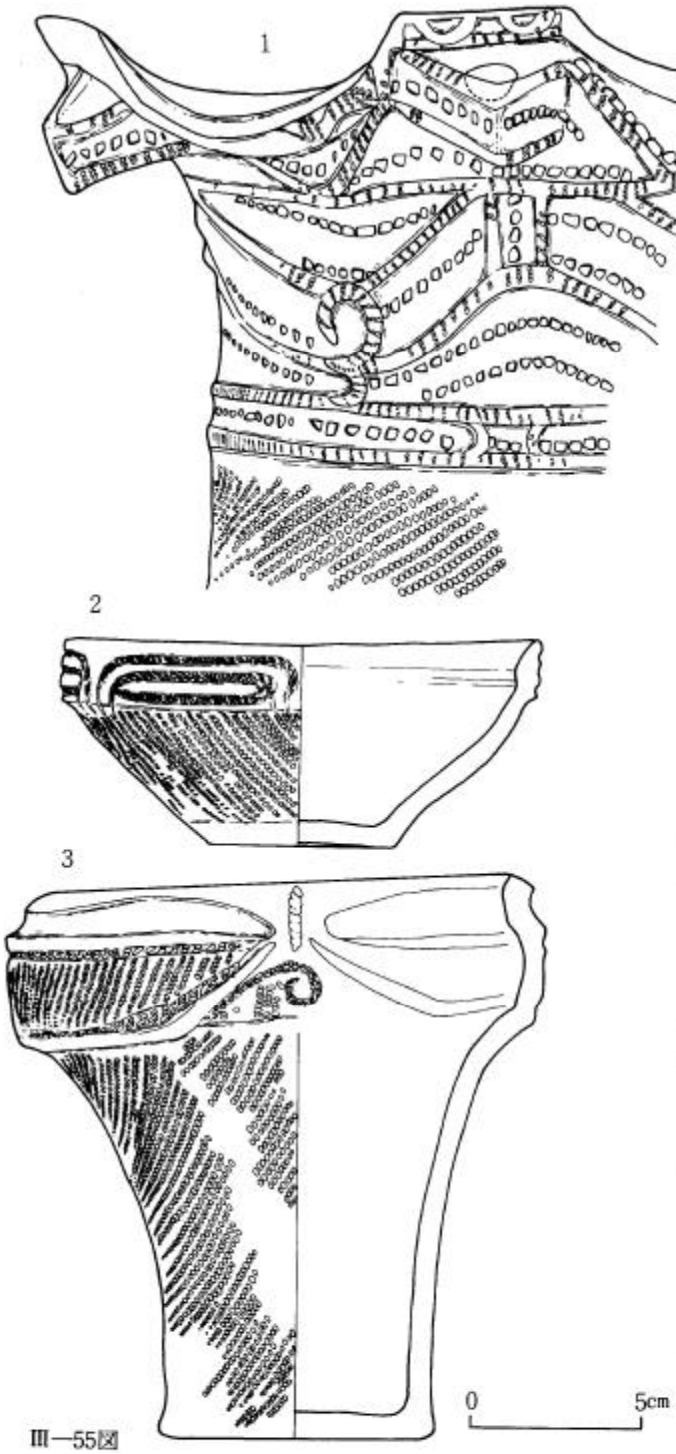
(5)　5号フラスコ状ピット

9Fグリッド第13号住居跡内にあるもので，この住居跡に付属した施設であることは明らかである。規模は，口径76cm，底径 286× 256cmの楕円形，頸長54cmで深さ 179cmである。住居跡床面より 120cm位まで黒褐色土で，炭化物，遺物が見られ，赤褐色ロームが薄くはさまれている。これは土壌が充塡される間に壁の剝離落盤によるものであろう。深さ 120cm以後，中央部に焼土，炭化物および灰等の暗紫色土の混入が漸次増し，深さ 125cmで炭化した胡桃，石ベラが出土している。深さ 150cm位から壁際に川原石，遺物が多く出土している。Ⅲ—54図でもわかるように，土はフラスコ状ピットの中心部に捨てられ，そこから周囲に広がっていく様子が地層の流れから判断できる。それは出土遺物の出土地点からも理解される。底部平面図に遺物の出土地点を記録（これは底面から上30cm位までの出土地点）してみると，記入できるような比較的大きい遺物は壁に近い所で検出されるのがわかる。これはこの部分に意図的に埋められたのではなく，ころがり込んだ結果と理解される。深さ 140cmの所から，赤色の種子を発見した。この種子の包含層は焼土，灰等を含む固い層で，種子はこの中から，穂のまま埋まり，種子のみが残ったような状態で順序よく並び，それぞれブロックをなして出土した。後世，アリ等，その他によ





Ⅲ—54図　5号フラスコ状ピット平面および断面図



Ⅲ—55図
5号フラスコ状ピット出土遺物

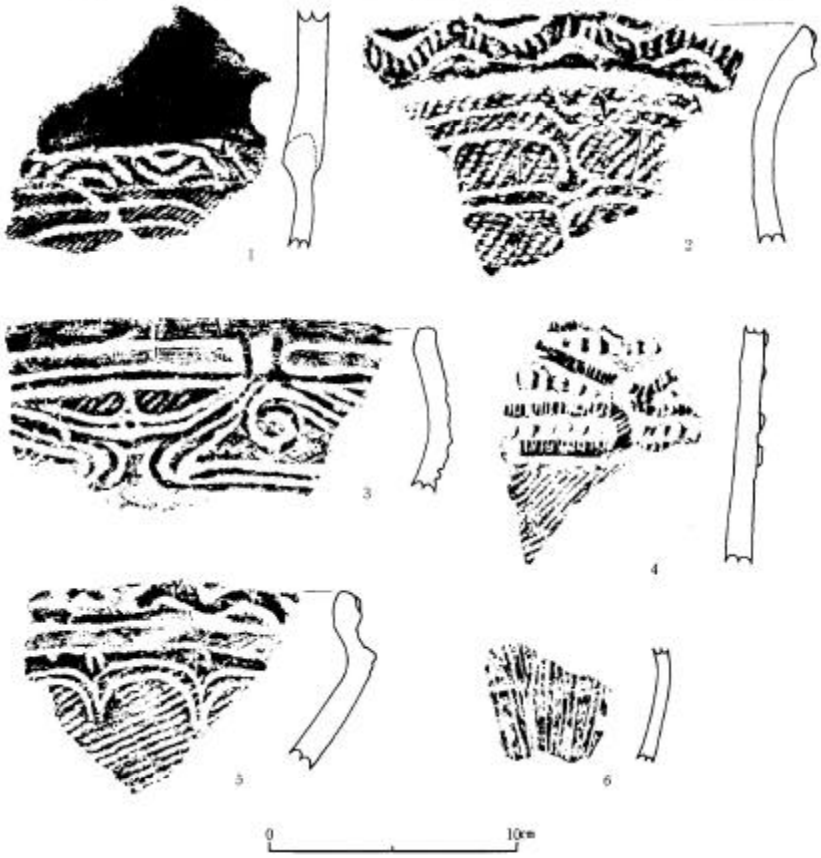
って運びこまれた形跡は土層，その他からみて全く考えられないものである。なお，発掘調査（ピット内）後，このピットの中に金属製自記温湿度計（7日巻，NAKAASA CO. LTD. No.9828，温度−20℃〜40℃，湿度0％〜100％）を入れて調べてみた結果，外気の変化に関係なく，温度15℃，湿度93％と一定であった。

出　土　遺　物

土器（Ⅲ—55図1〜3，Ⅲ—56図1〜6）

Ⅲ—55図1は，フラスコ状ピットの底部より31cm，2は2cm，3は4cm上部から出土したものである。1は，口縁部が大きく外反する深鉢形をなす円筒上層C式土器である。四つの弁状把手があり，

それに橋状突起が付けられている。文様帯は胴部の上半まであり，粘土紐の貼付に撚糸圧痕が施された隆帯と，その間，角形の刺突文によって構成されている。2は浅鉢で小形のもので大きさは，口径13.6cm，高さ 5.5cmを計る。口縁部の文様は撚糸圧痕で構成され，六区画されている。撚糸圧痕は口縁に平行して三条施文されているが，一カ所だけ下の一条が省略されている。3は，キャリパー形の深鉢で口縁の文様体は三区画されている。口縁に溝状の無文部がつくられその下に山形の隆帯が三カ所に集められ，隆帯が撚糸圧痕によって縁取りされている図にある撚糸圧痕の懸垂文と，その下の渦巻文はこの部分だけである。



Ⅲ—56図　5号フラスコ状ピット出土遺物

Ⅲ—56図1，2，3，5は撚糸圧痕文，4は，円筒，6は沈線文土器である。1は，大形の深鉢の弁状把手の一部で，中央に丸い穴がある。上部は厚く無文の部分は，よく磨かれている。撚糸を弧状に交互に圧痕したものである。2は，甕形の土器で，口縁に撚糸圧痕のある波形の隆帯，下は楕円形の圧痕文を中心として，文様を構成している。3は，キャリパー形の口縁部で口縁に細長い楕円形の圧痕があり，細い隆帯による三角形の区画を，同じ位の太さの撚糸で圧痕して文様体の中央に同じ手法で渦巻文を描いている。撚糸圧痕文としては，末期的なものでないかと推定される，土器内面に多量の炭化物が付着している。4は，円筒系の土器片であるが，隆帯は，刻線による刻みがつけられ，その中に，刺突文が施されている。5は，浅鉢で，口縁に波形の粘土紐が貼付けられその下に二条の撚糸圧痕は，端が楕円となると思われるが，下に二条の半円のブリッジが二重に圧痕され，ループ状の圧痕

文が，土器屈折部，上に施されている。

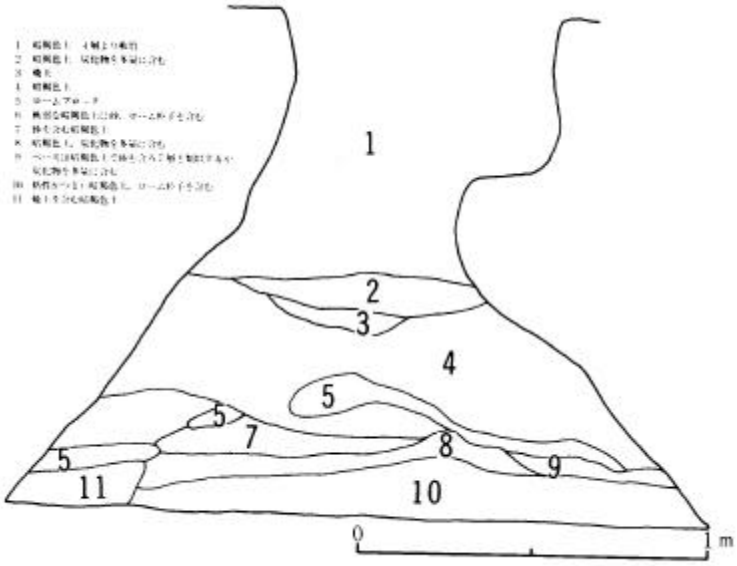
(6) 6号フラスコ状ピット

第6次調査のAブロックN地区，北端の拡張区に住居跡とともに発見された。ローム面に検出された多量の焼土を調査中，焼土の下に確認したもので，この焼土はピット入口（上部）に捨てられたものと考えられる。このピットは調査期間等の関係で西側半分より調査していないが，入口径81cmの円形で頸部高68cmと長く，二段になり，高さ 152cm，底径 202cmのほぼ円形であろう。底部付近の充塡土は焼土，炭化物，ロームを含むブロック状となるが，入口部より約 110cmの深さで敷きつめたかのように土器（片）が捨てられていた。

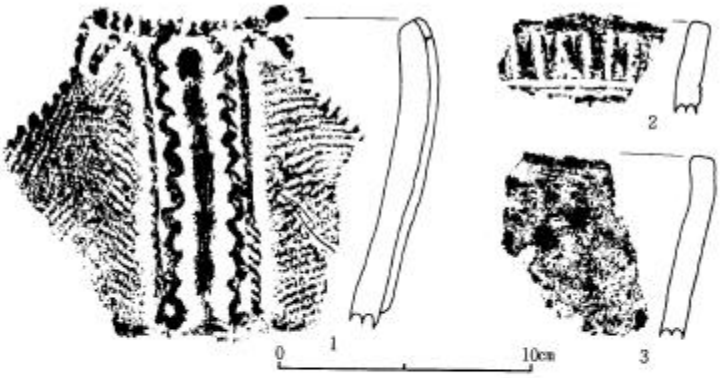
出 土 遺 物

土器（Ⅲ—58図1～3）

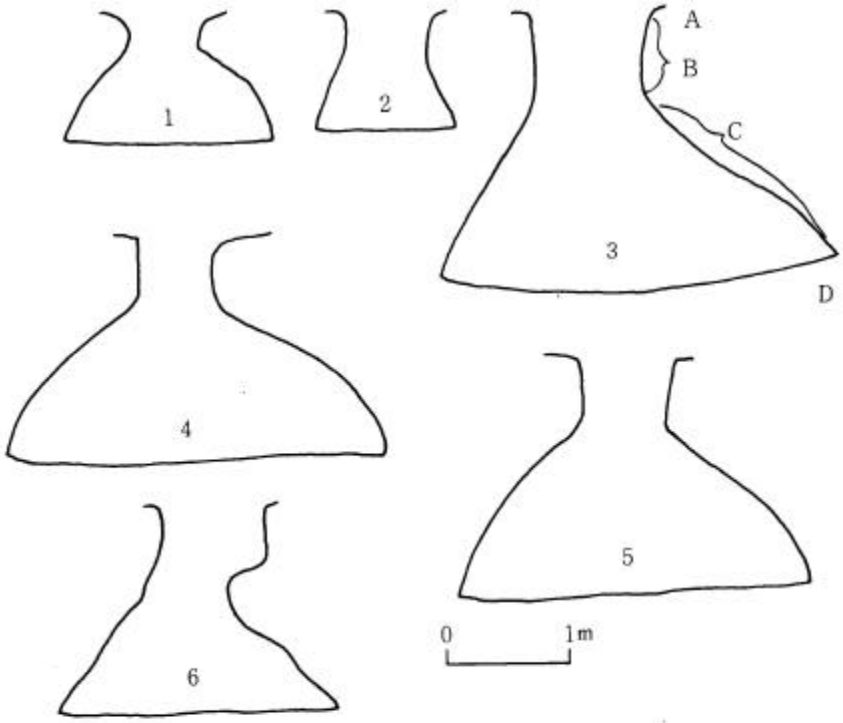
Ⅲ—58図1は，四つの弁状把手をもつ深鉢の把手の部分の土器片である。この把手と把手の中間に粘土を貼付け粘土紐を垂下しその内側の折返しは鋸歯状にして，頂部まで上げ，それを右側にも同様にくりかえして文様をつくっている。これを一本の粘土紐でおこなっている。この上には縄文が施されている。2も半截竹管で引掻いた様な沈線が口縁から縦に施されている口縁部の破片である。3は無文の口縁部破片で，頂部が平である。



Ⅲ—57図　6号フラスコ状ピット断面図



Ⅲ—58図　6号フラスコ状ピット出土遺物



Ⅲ—59図　1号～6号フラスコ状ピット断面形状図

フラスコ状ピット出土石器・土製品

石器

石鏃（Ⅲ—60図1）

5号フラスコ状ピットから出土したもので硬質頁岩である。

石ベラ（Ⅲ—60図4）

5号フラスコ状ピットから出土したもので硬質頁岩である。

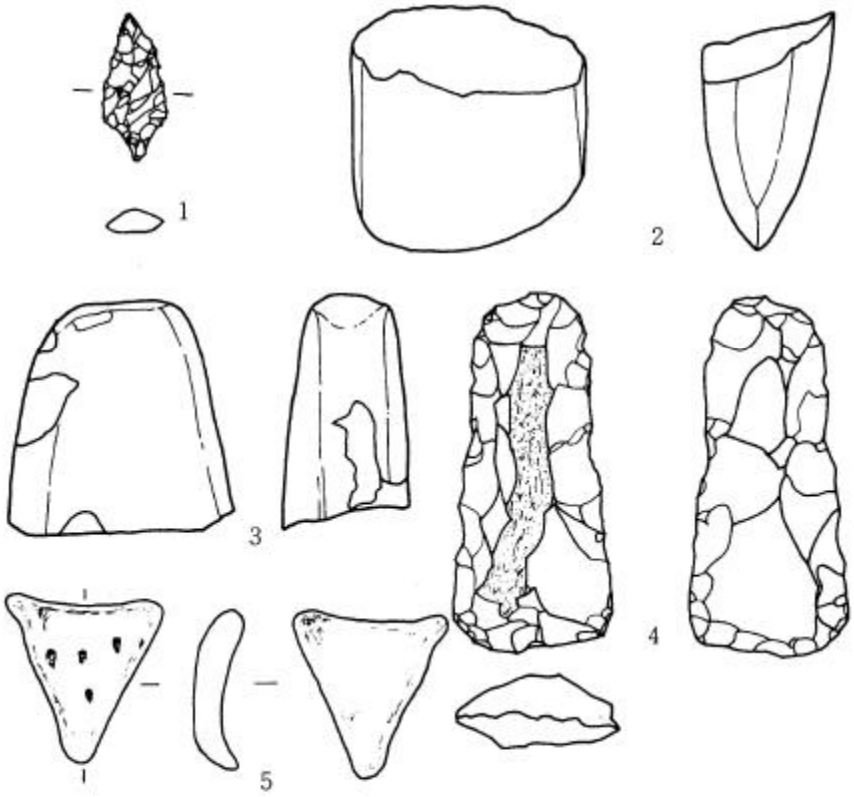
磨製石斧（Ⅲ—60図2～3）

2は3号フラスコ状ピットから出土し，砂岩である。3は4号フラスコ状ピットから出土したもので泥岩でつくられている。いずれも欠損している。

土製品

三角形土製品（Ⅲ—60図5）

5号フラスコ状ピットから出土したもので各辺が多少，内湾し，正面に不規則に四つの刺突が斜めから施され，背面はくぼんでいる。色調は明褐色である。



Ⅲ—60図　フラスコ状ピット出土遺物

ま　と　め

フラスコ状ピットは，一定長の頸部をもち，それにつながる胴部が末広がりになり，底部がもっとも広い部分をなすピットとして認識され，その縦断面にあらわれた形状がフラスコに以ていることから，フラスコ状ピットと呼ぶことは前述したとおりである。

下堤遺跡におけるフラスコ状ピットは，上記のような形状をなし，口縁から筒状の頸部を経て胴部につながり，底部は円形または楕円の平面形をなし，浅い鍋底状をなすものもある。壁(胴部)と底部のなす角度はほぼ45°～55°を示す。下堤の場合と非常に近い形をなす蛍刈沢貝塚の例は60°であり，頸部も70cm～100cmと長い。この違いはフラスコ状ピットを作る場所(遺跡)の地質的条件によるものと考えられる

このピットの作り方，掘り方およびその用具などの観察を試みたが不明である。ただ頸部から胴部にかけての付近で凹凸のはげしい状態が観察できた。

ピット内の土壌は，焼土，炭化物，灰等を含む土壌がブロック状に堆積している。このブロックを一行為と考えると，第6号フラスコの場合は少なくとも11回以上の行為があったことになる。(一行為とは同じ土壌を何回かにわたって短時間に埋めることと考える)。この一行為，一行為が連続し

てフラスコ状ピットを埋めたものか，その行為の間に相当の時間があったかは不明である。ただ第1号フラスコ状ピットの中間部から出土した土器片と，底部近くから出土した土器片が同一個体であった。

フラスコ状ピットのあり方は遺跡の中で群をなすもの，住居跡内にあるもの，その他がある。下堤遺跡の場合は屋内施設と考えられるものが13号住居跡の5号ピット，8号住居跡の2号ピット，10号住居跡の3，4号ピットである。1号，6号ピットははっきりしない。またこれらのピットを全て発掘調査していないので，明言できないがピット内の土壌のあり方は同じであろうと思われる。この埋設の仕方が共通していることは，用途を考える上に大切である。現在まで，フラスコ状ピットを含む，いわゆる袋状ピットの性格については土壙墓，貯蔵穴，住居跡などと考えられている。下堤遺跡の場合竪穴住居跡の中に作られ，屋内施設の一つと考えられるので住居とは考えられない。他の土壙墓か，貯蔵穴のいずれかであろう。県内で土壙墓の例は雲刈沢貝塚がある。ここではフラスコ状ピットの中から人骨，犬骨が出土している。貯蔵穴であるという例は県内にはない。しかし貯蔵穴でないという積極的な意見を裏付ける事実もない。そこで貯蔵穴として活用できるか否かを判断する一資料として(Ⅲ—54図)ピット内の温湿度を測定したのである。その結果，ピット内の温湿度は外気の変化にかかわりなく一定であることがわかった。この結果は貯蔵としての機能を考えた場合，高湿度であることは具合が悪い。食物貯蔵の原理は食物に細菌，カビ，害虫等の発育，侵入を防ぎ自己分解を止めることである。この観点から考えると90%以上の湿度は不適といえる。しかし，この地域では冬期間の貯蔵の方法として土に穴を掘って，野菜などを貯蔵する例があり，貯蔵穴として使用したとすれば冬期間であったであろう。冬期間の湿度は年間をとおしてもっとも低いこともその裏付けとなろう。

5号フラスコ状ピット内木炭のC_{14}年代

測定値　3990±105 B.P.　2040B.C.　　測定番号　G_ak－4706

第4節　下堤遺跡より出土した発芽タデ種子の走査電顕による形態的研究

笠　原　安　夫・藤　沢　　浅

（岡山大学農業生物研究所）

1972年7月26日に秋田市教育委員会によって発掘された3990±105年前(木越教授がC14年代測定法で同一層の木炭片の測定による）の縄文時代中期の住居跡のフラスコ状ピット内で140cm下より発掘された種子を土器と一緒にビニール袋に保存したところ4日後に発芽して世間を驚かした。幼植物は秋田県農試で栽培され，大部分がハルタデ，少数がイヌタデと確認され，その腊葉標本と発芽残余の種子約70粒(15℃保存)および次世代種子を笠原の元に送られ，その種子の形態，発芽，生育の状態について再調査を依頼された。

笠原は1973年10月岡山大学農学部における日本作物学会第156回講演会でその種子の検鏡（実態

顕微鏡）と15℃で保存した種子について，翌年４～６月における発芽状態とその幼植物の移植後における生育について報告した。

その発芽はきわめて迅速であった。すなわち置床２～３日後に大部分が発芽したが，新しく播種した新種子は休眠のため１カ月間で発芽しないか，また３～18%の発芽にすぎなかった。古い出土種子を47粒検鏡の結果，最外部のがく被はもとより厚いクチクラ層が消滅で薄くなった果皮がほぼ全面を覆うものが11%，残り89%はほとんどが内部の薄い種皮のみになっていた。そのうち，がくと果皮の部分的に残るもの30%，果皮の一部が残るもの34%，種皮のみになっているものが35%であった。クチクラ層を欠くので吸水が早く，そのため発芽が早くなったと考えられた。また胚の先端が痛んでいるようで幻根の伸長がきわめて不長の異常発芽となり，後に副根が出て生育をつづけて約半数が正常に開花結実した。

1974年５月再度出土の残余種子10粒を置床したところ３日後までに６粒が発芽し，前年同様異常発芽であり，移植後に３植物体が正常に開花結実している。

ここに出土種子の損傷状態を詳しくしらべるため新種子または圃場の埋土タデ種子などについて走査電子顕微鏡(TSM—50A型)でしらべた。

※　種子出土地点は暗褐色の焼土，炭化物を多く含む層でタデは親指大にばらついて落ちていた。このピット内の温度は15℃，湿度93%は外気が変化しても一定していた

〈ハルタデ走査電顕写真の説明〉

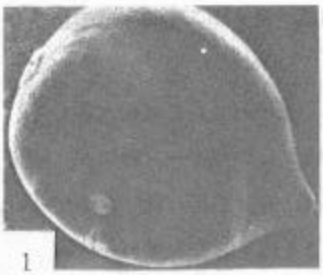
(1)～(10)新種子（出土種子の次世代）と(11)～(15)出土古種子の比較

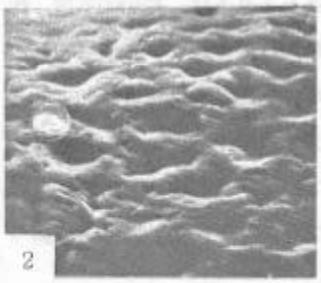
(1)果皮クチクラ光沢で滑らか　×20　(2)硫酸１分処理でクチクラを溶かした果皮表面　×500　(3)硫酸処理で二つに分れた果皮の縦断面と果皮の内面および果皮，種皮の表面　×400　(4)果皮断面のヒョウタン形細胞膜　×750　(5)果皮の裏面から見た内表皮細胞膜　×1000　(6)(7)種皮の表面　×300，×500　(8)(9)同拡大　×1750，×1000　(10)内胚乳　×1500　(11)出土古種子　×20　(12)損傷した果皮細胞のいろいろ　×500　(13)一部の拡大で薄い波状細胞膜が見られる内表皮に近いところ　×1500　(14)種皮のみのもの(大部分)の表面で一部果皮が付着する　×500　(15)種皮の細胞　×1250

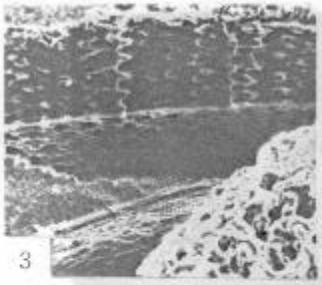
Lewis(1973)**はハルタデ種子がpeat sil(PH4.2，有機炭素36.2%）で地表より26cm下で20年後にも17%発芽し，種子の皮は外観上完全によい保存状態であった。しかしmineral soil(PH6.5，有機炭素4.6%)の埋土では果皮が二つに分れて胚が露出する結果死を招いたと言う。

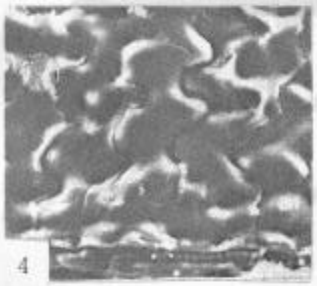
筆者らも１～数年前に落下したと思われる圃場の土１～５cm層のサナエタデ 184粒とイヌタデ10粒の果実を乾土 220ｇの土中より検出したが，がく皮は現存するものとかなり消滅するものがあり，果皮の光沢も消失したものが多いが，クチクラ層はまたよく保存されたものと幾分それがなくなった状態であった。そして果皮が消失して種皮のみになったものは１粒もなかった。またそれら一応外観で果皮の光沢のよいものと光沢がないものに分け各20粒を26℃に置床したが１粒も発芽しなかった。盛土１ｍ下では，タデ種子は数年後のものも発芽した粒もあった。

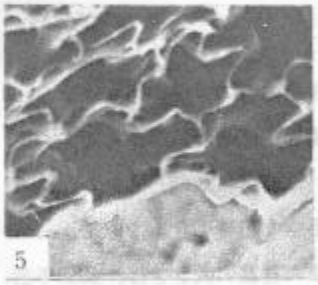
** J. Lewis (1973); Longevity of crop and weed seeds survival of the 20 years in soil. Weed Research vol. 13. No. 2　179～191.

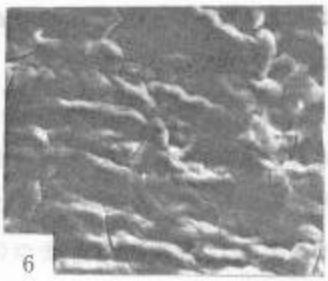

1

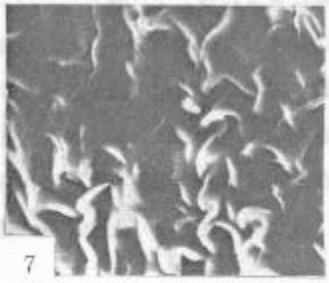

2

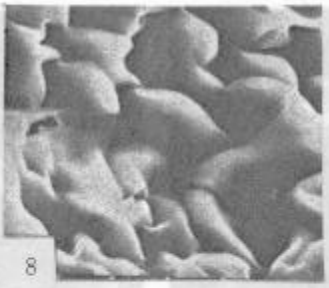

3

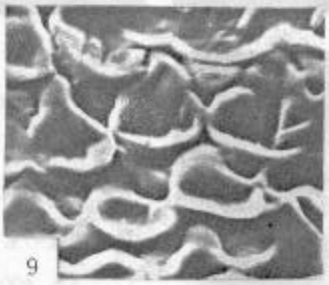

4

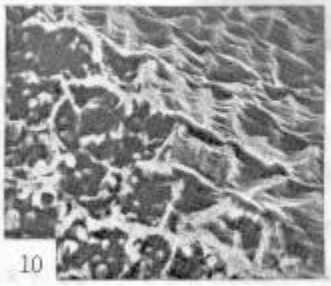

5

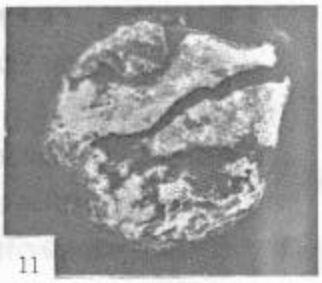

6

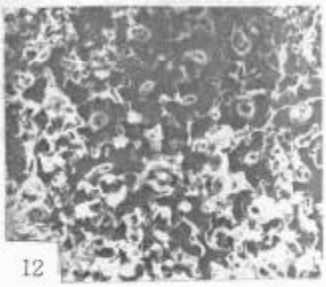

7

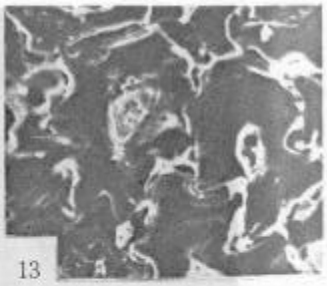

8

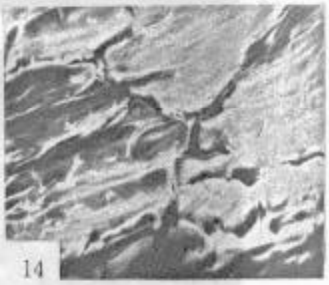

9

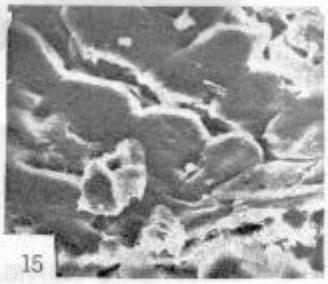

10


11


12


13


14

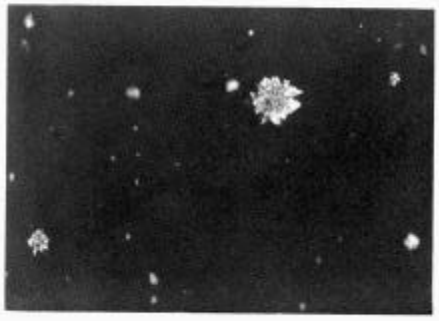

15

第5節　ハルタデ，イヌタデの葉に含まれるシュウ酸カルシウム結晶パターン：4000年前の種子から発芽したもの，及び現在の同種植物について

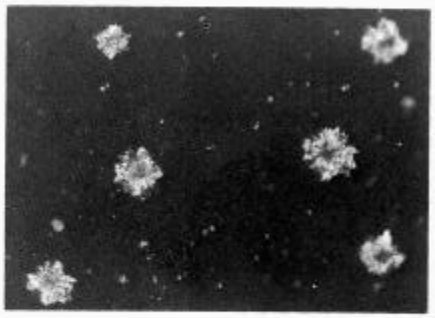
梅　本　光一郎（京都薬科大学）

私の過去における一連の研究から，植物体中に存在する結晶性無機成分のパターン解析が，植物の種（属，科）の類縁関係を究明するうえで重要な役割を果すことは，もはや何ら疑う余地がない。従って，結晶性無機成分の特性を反映した「植物系統樹」をつくることは，必要と思われる。

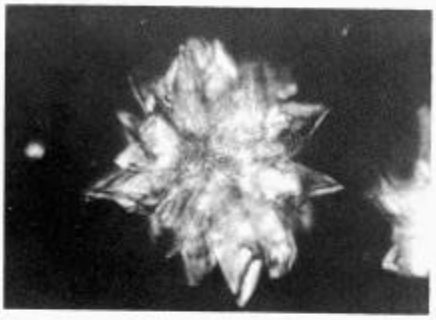
これに関連して，タデ植物の葉に含まれるシュウ酸カルシウム結晶をとりあげ，約4000年間，休眠していた種子から発芽した葉に含まれる結晶パターンと，現在同地域に生育している植物の葉に含まれる結晶パターンの相違を調べてみた。問題の種子は縄文中期の，秋田県「下堤遺跡」より，1972年8月に発掘されたものである。この種子は，ハルタデとイヌタデの種子で，これから生長した葉を収集し実験に用いた。現在，同遺跡の発掘現場付近に生育している同種の植物も比較実験のため収集した。結晶パターンは，著者が考案した「生物組織，低温プラズマ灰化法」によって調べた。



A



B



C

［図1］

イヌタデの葉中に含まれるシュウ酸カルシウム結晶。

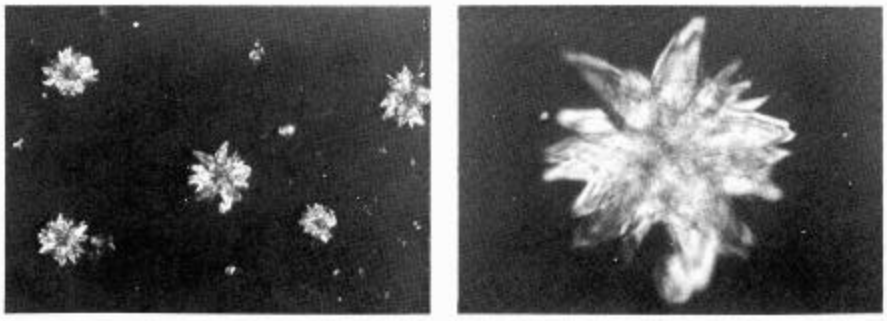
A．4000年前の種子から発芽したもの（×100）

B．現在のもの（× 100）

C．（× 400）

1：ハルタデ，イヌタデは，どちらも金平糖状の集晶を含み，4000年前のもの葉中の集晶の形も，現在のものの形も同じである。どちらも集晶を構成している各結晶塊の先端は，とがっており，その構造は「ユキノシタ科」の植物中の集晶の構造と同一，あるいは非常に類似している。調査対象となった葉は，またシュウ酸カルシウムの結晶体と思われる小さな結晶も含んでいた。

2：集晶は，主として葉肉部，及び主脈部に分布している。イヌタデの集晶の大きさは，4000年前

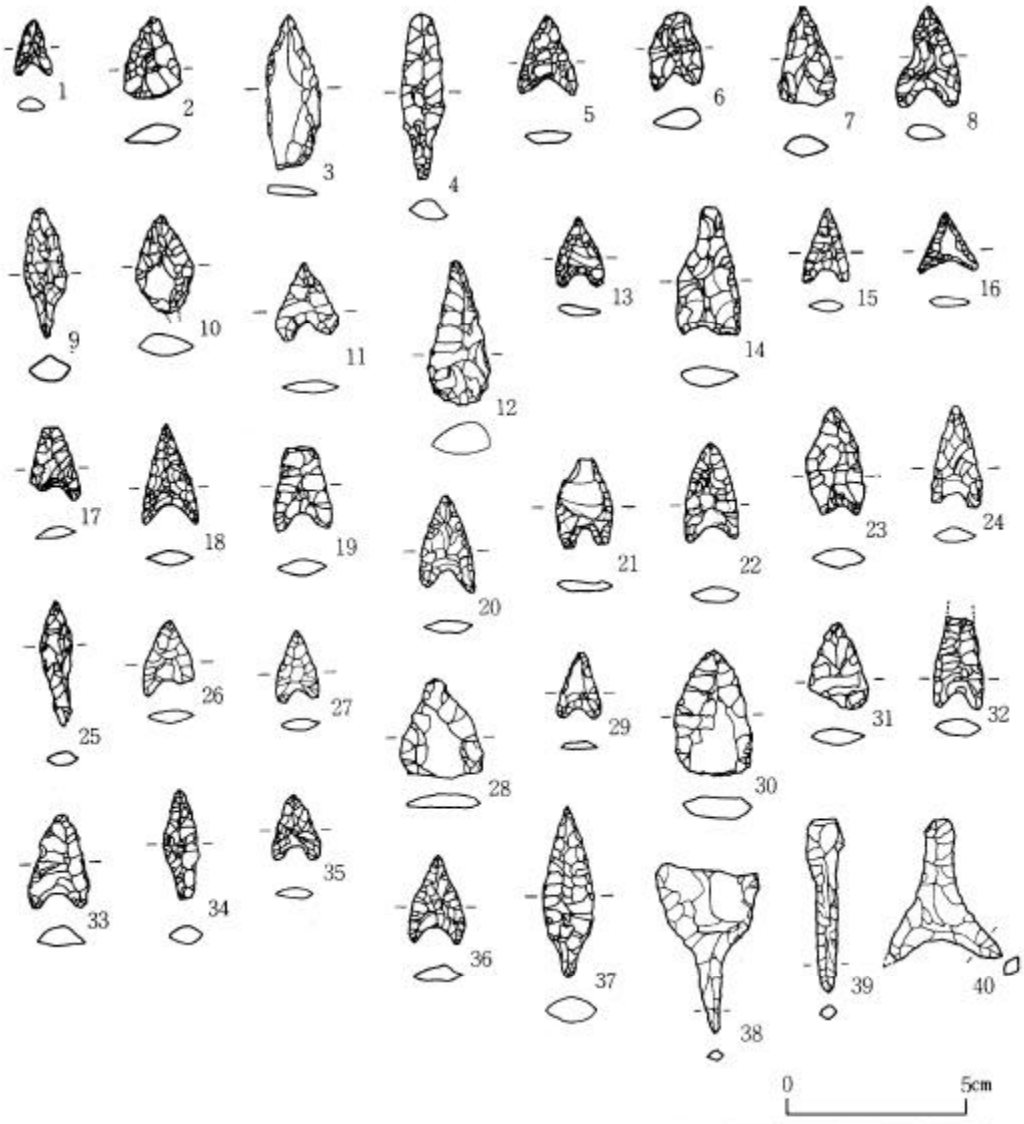


A　　B

［図２］　イヌタデの葉中に含まれるシュウ酸カルシウム結晶　A（×100）B（×400）

のものが15―50ミクロン，現在の植物のものが30―50ミクロンであった。

以上のように，4000年も休眠状態にあった種子から発芽したイヌタデ，及びハルタデの葉中にみられるシュウ酸カルシウム結晶も，現在の同種植物体中の結晶も本質的な違いはなかった。加うるに，イヌタデとハルタデに含まれる結晶が形・質ともに同じであるというこの事実は，結晶学的な観点からも，この二種類の植物は起源を同じくしているか，あるいは非常に近いところから発生したものである，ということを想起させる。



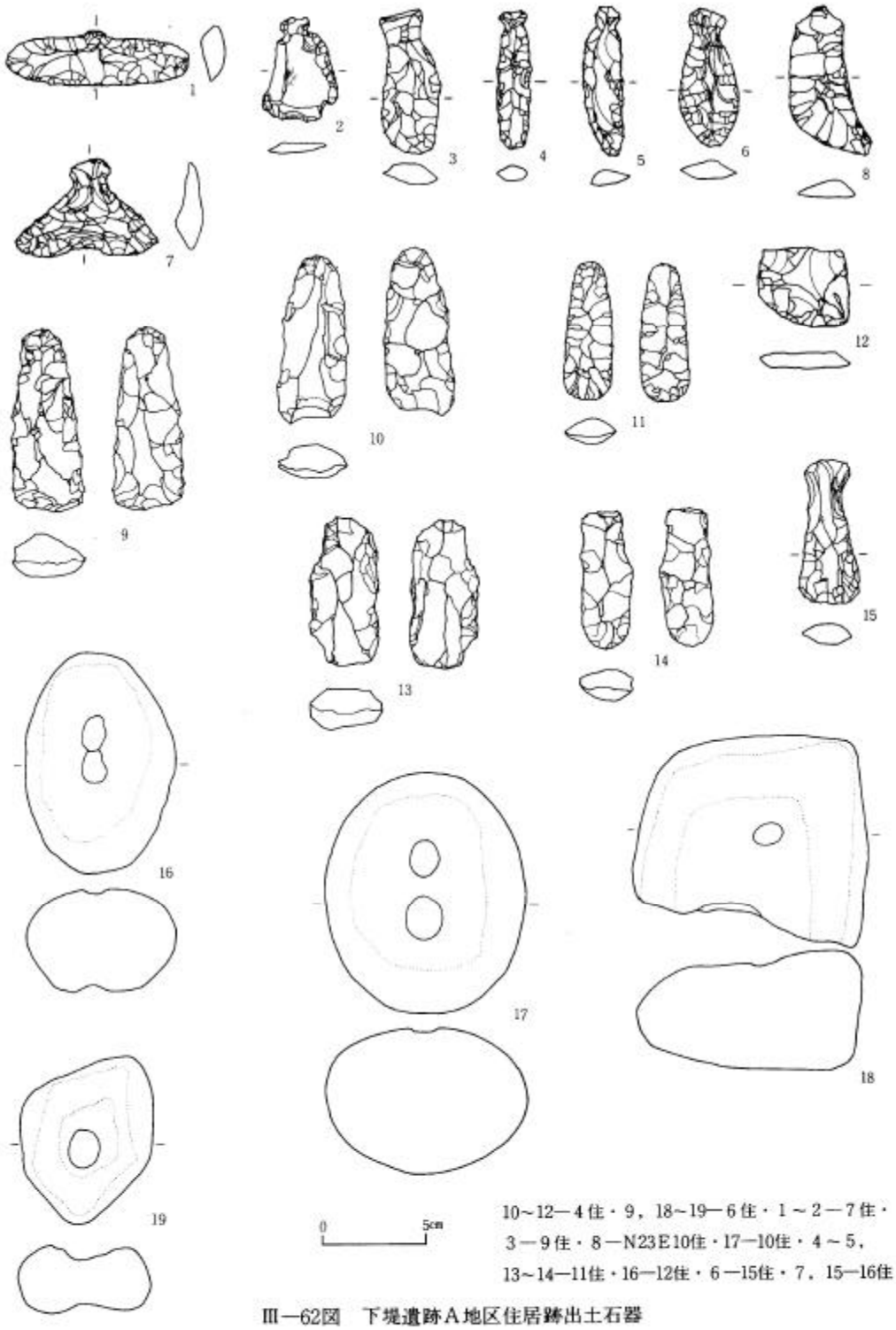
Ⅲ—61図　下堤遺跡A地区住居跡出土石器

1—1住・2～3—4住・4，38～39—5住・5～9—6住・10～13—7住・14～16—9住・17～18—10住・19～23，40—11住・24～25—13住・26～27—14住・28～32—15住・33～35—16住・36～37—N23E10住

※　石鏃・石錐・石匙・石ベラの実測図はリングを省いてある。

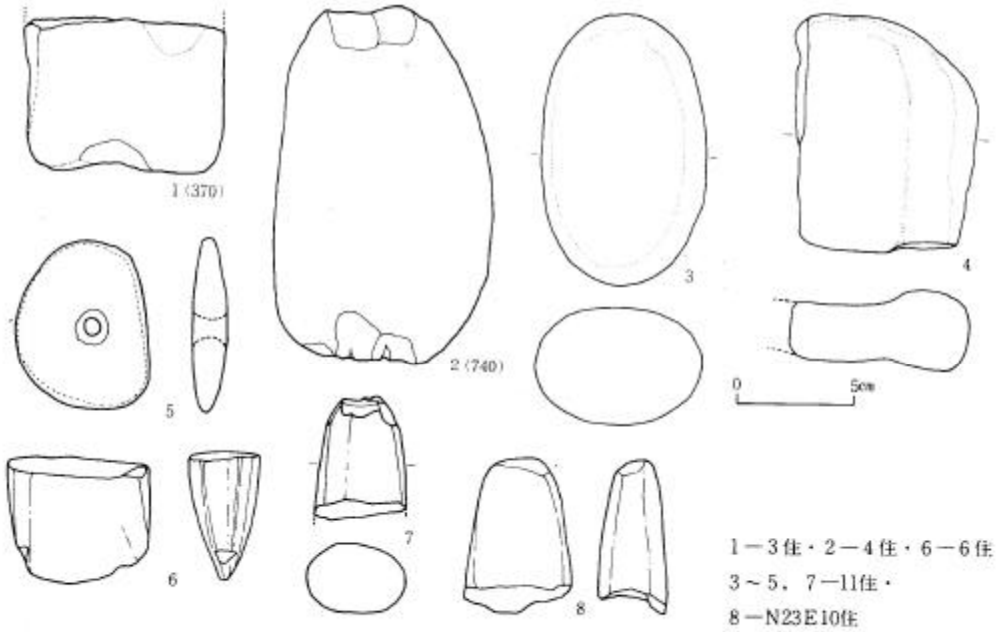
　　はアスファルト付着を示す。

　石錘の（　）内は重さを示す。単位はグラム。



10～12―4住・9，18～19―6住・1～2―7住・3―9住・8―N23E10住・17―10住・4～5，13～14―11住・16―12住・6―15住・7，15―16住

Ⅲ―62図　下堤遺跡A地区住居跡出土石器



Ⅲ－63図　下堤遺跡A地区住居跡出土石器

石器

石鏃（Ⅲ－61図1～37，Ⅲ－64図1～39）

A地区出土の石鏃で無茎のものが多い，石質はほとんど硬質頁岩で，黒曜石もわずかある。

石錐（Ⅲ－61図38～39，Ⅲ－64図40～41）

4点出土しているが，いずれも破損している。硬質頁岩である。

石匙（Ⅲ－62図1～8，Ⅲ－65図1～16）

縦形の石匙が多く硬質頁岩である。12はつまみがあるので一応，石匙の中に分類した。

石ベラ（Ⅲ－62図9～15，Ⅲ－65図17～27）

硬質頁岩で，両面加工をして刃部をつくっている。

石錘（Ⅲ－63図1～2，Ⅲ－67図1～9）

河原石を素材とし，両端を打ちかいてつくっている。重さは47g～740gまである。

凹石（Ⅲ－62図16～19，Ⅲ－66図27～30）

両面にくぼみのあるもの片面だけのものがある。

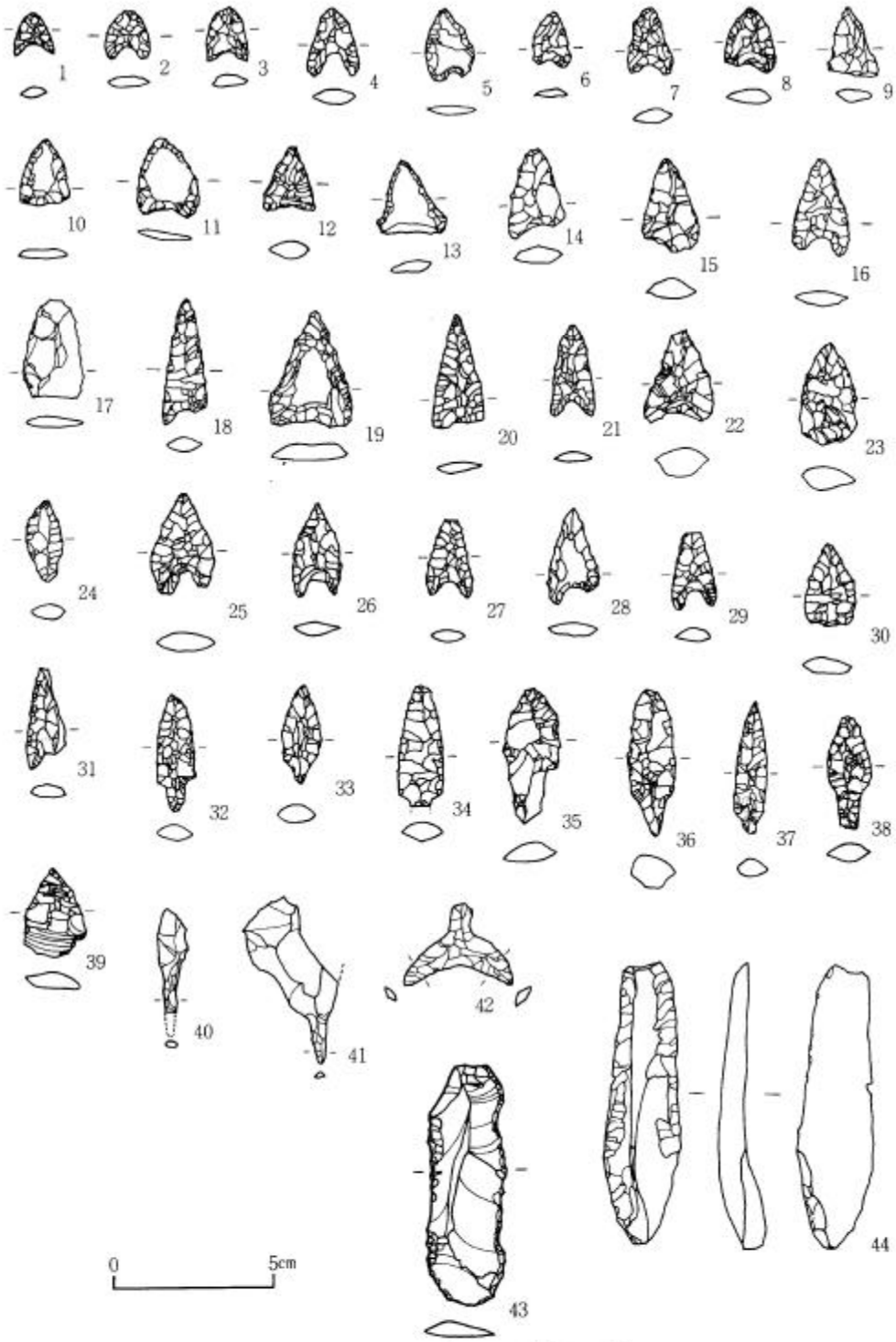
磨石（Ⅲ－63図3，Ⅲ－66図31）

形の整った楕円形の石器で両端および側周縁が磨り減っている。

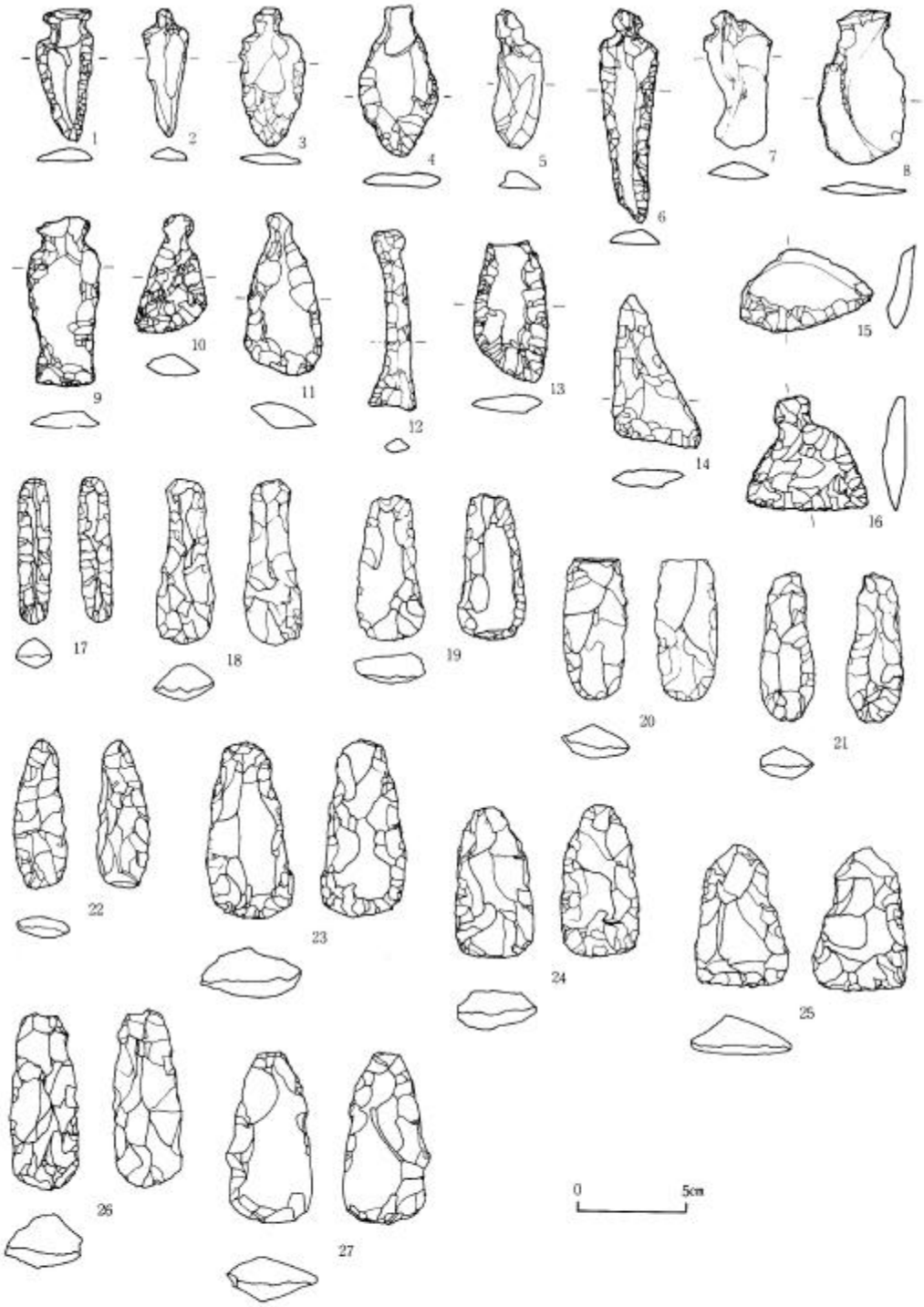
磨製石斧（Ⅲ－63図6～8，Ⅲ－66図1～26）

完形なものはない。石質は泥岩が最も多く安山岩，片岩，砂岩，斑岩などでつくられている。

石皿（Ⅲ－63図4）

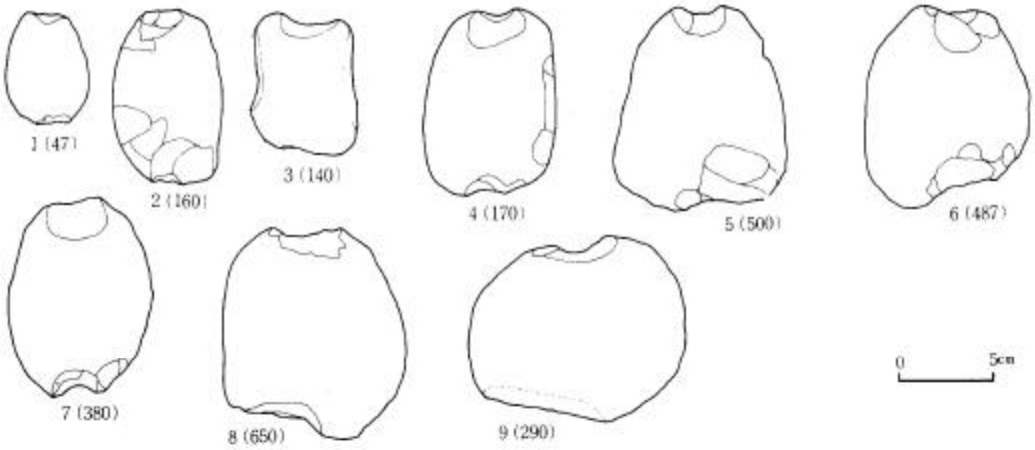


Ⅲ—64図　下堤遺跡A地区出土石器



Ⅲ—65図　下堤遺跡A地区出土石器

Ⅲ—66図　下堤遺跡A地区出土石器



Ⅲ—67図　下堤遺跡A地区出土石器

大部分が欠損している。石質は凝灰岩である。

その他の石器（Ⅲ—61図40，Ⅲ—64図42，43，44）

40，42はいずれも硬質頁岩で，つまみをもち，八状の脚部がある。43，44は先土器時代の石器で43はブレイドであろう。44は基部調整をしているナイフ形石器で，縄文時代において刃部を剥離し，再度使用されたものである。石質は硬質頁岩である。

石製品

有孔石製品（Ⅲ—63図5）

両面から穴を穿った石製品で，石質は凝灰岩である。

土製品

土偶（Ⅲ—68図1）

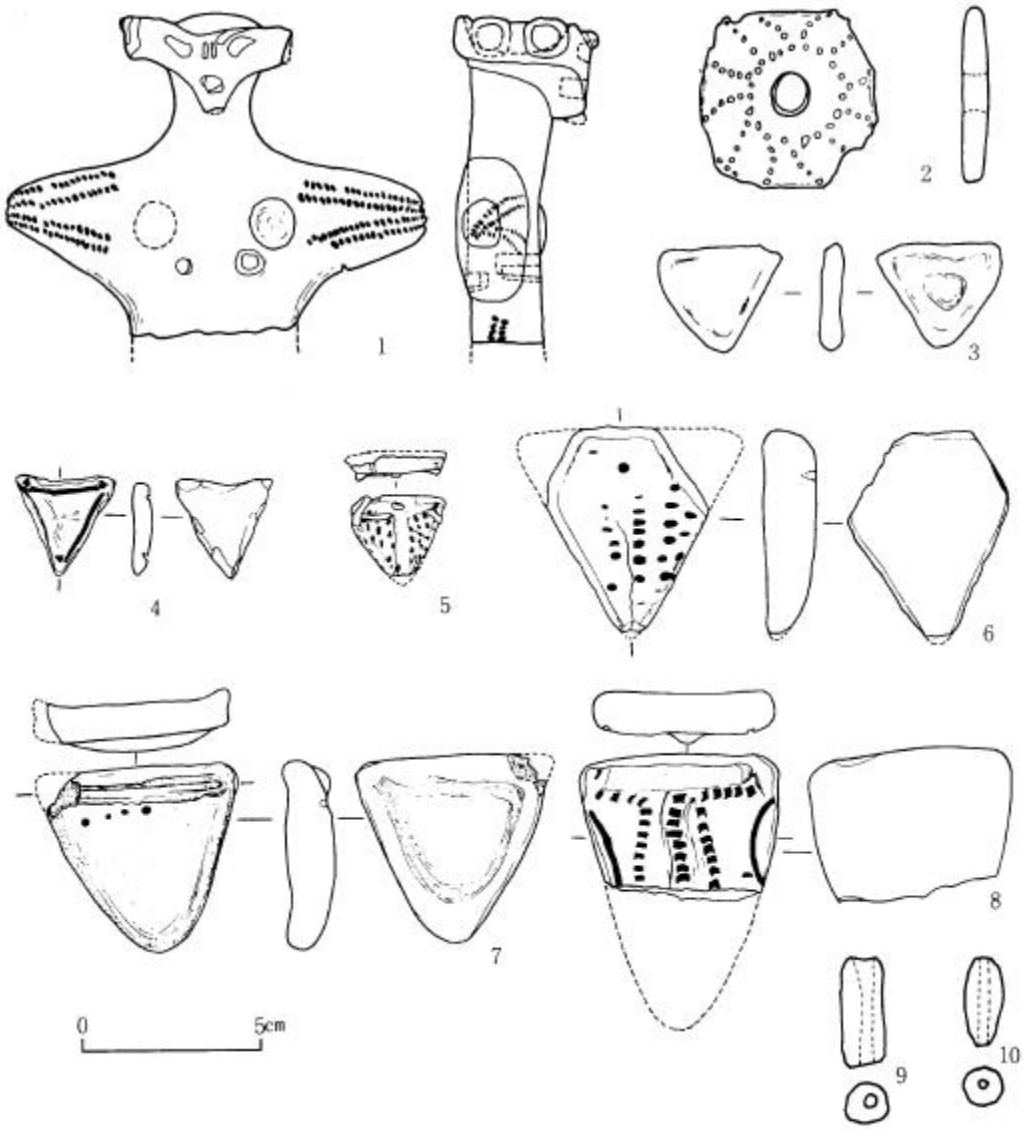
第6号住居跡から出土した土偶で下半分は欠損している。頭部は丸くくぼんで，耳は粘土を貼りつけ，目，鼻，口は沈線で表現されている。両腕部は4本の撚糸で押圧している。乳部は片方が欠損している。胸部と背部に各二つ穴が穿たれているが貫通はしてない。胎土，焼成は良好である。

有孔円板状土製品（Ⅲ—68図2）

表裏に刺突文で孔を中心に放射状に施文されている。復元すると4隅に突起部をもつ土製品である。

三角形土製品（Ⅲ—68図3～8）

下堤では三角形土製品が8点出土している。（うち1点はフラスコ状ピット出土）大きさによって2cm～3cm前後のもの（3～5）と5cm～7cm前後（6～8）とに分類できる。3は焼成が悪くもろいもので正面，背面とも無文であるが背面はくぼんでいる。色調は暗褐色。4は完形品で，大きさは一辺3cmの正三角形に近く，各辺が少しくぼんでいる。正面には単純な文様を施している。それは三角形の各角に三角状の穴が斜にあけられ，それらを結ぶように沈線が一本施されている。穴は貫



Ⅲ—68図　下堤遺跡A地区出土土偶・土製品

孔していない。背面に文様はない。表面には褐色に近い塗料が塗られている。5は背面が欠けていて正面だけしかわからないが大きさはこの程度のものであったと思われる。平らなもので，三辺とも 2.5cm前後の正三角形に近いものである。正面に粘土紐をT字形に貼りつけ，両肩には，その頂点をつつむように粘土紐を貼りつけている。その近くにまるい小さな穴があけられている。左側の穴は貫孔されているように見えるが右側のように貫孔されていなかったと思われる。また三角形の下の頂点に向って走る中心の粘土のはとれて，そのあとだけがれて，そのあとだけが残っている。粘土紐外の部分には，先端の尖った工具で，小さな三角形の刺突文を施文している。色調で黒色で，

表面にベニガラを塗っている。6は一辺6cm前後の正三角形に近いものであったと思われる。上部の二つの角が欠けており，また正面も風化して文様ははっきりしない。残っている文様等から考えて5に近い文様があったのではないかと思う。背面に文様はない。色調は黄褐色。7は左角が欠けているが一辺 5.5cm前後の正三角形に近いものである。上部に一本の粘土紐を貼っている。その下，中央に小さな穴があり，またこの穴の左側にも三個程の穴があるが，小さくまた浅いので人為的なものか否かはっきりしない。背面に文様はないが，図のように三角形に巾の広いゆるやかなくぼみがある。(指で引いたような感じの)。また各角の部分が背面の方に少し曲っている。色調は褐色。8は下の部分が欠けているが，5.5cm×7cm前後の二等辺三角形に近いものであったと思われる。正面には粘土紐を5のようにT字形に貼りつけ，その上に多截竹管状の工具で斜に刺突した文様をつけている。また図のように粘土紐以外の部分にも，それと平行するように同じ工具で同じように文様をつけている。また両側には弧状に沈線を施している。色調は茶褐色。

管状土製品（Ⅲ—68図9～10）

9は焼成が悪くもろい，長さは約3cmで，中がややくぼんでいる。色調は黄色。10は焼成がよく表面はつやがある。弾丸状で長さは約 2.5cmあり，色調は褐色である。

環状土製品（図版18，13～15）

第6節　結　　び

この遺跡では少なくとも22軒以上の住居跡を確認し，その大部分が複合していることがわかった。住居跡のプランは隅丸方形，楕円形，不整円形などで，ロームを深く掘り込んでつくった住居跡は少なく，比較的プランのしっかりした第4，第7，第11号住居跡からみると基本的な形は方形と思われる。それに機能，用途は，はっきりしていないが屋内施設としてのフラスコ状ピットが1号～6号まで確認され，確実に住居跡内にあり，その住居跡の施設として断定できるのは，第8号，第10号，第13号住居跡である。他のフラスコ状ピットについても屋内施設であった可能性がある。この遺跡は縄文時代中期前葉から中葉にかけての時期（大木7b，8a，8b式，円筒上層b，c式）であり，第7号住居跡を除いてほとんどの住居跡で各時期の遺物が出土している。複合している住居の動きは，東西に沿う，第5号住居跡—第3号住居跡—第4号住居跡，第17号住居跡—第14号住居跡—第11号住居跡，南北に沿う，第8号住居跡—第9号住居跡，第15号住居跡—第16号住居跡，のように認識できるが，前記のことを考え合わせると，同一時期に存在した住居跡の確認は慎重に検討しなければならない。総体的に住居跡群は台地の端に沿う南北への広がりを思わせる。遺跡の範囲は南北 200m，東西 150mほどであると考えられる。遺物の中に北陸方面の土器，新潟県馬高遺跡等から出土しているような三角形土製品がみられる。今後，この時期ならず，こうした交流関係をも検討していかねばならない。

第Ⅳ章　下堤遺跡Ｂ地区

第１節　Ｂ地区の概観

この地区は，本台地の南西端にのびる，舌状部にあり本遺跡では最も南に位置し，Ａ地区より直線距離にして約 300mほど離れている。Ａ，Ｃ地区に比べ最も見晴らしの良好な地区で，南にある小阿地（坂ノ上遺跡）台地とは，奥深く東側に入り込む沢(水田)を隔てて近接している。

遺跡の範囲は，南北 160m，東西 120mの範囲内にあると考えられる。出土遺物は大木10式期を主体とする縄文時代中期の末葉に位置づけられ，住居跡のプランはＡ地区の住居跡に比べ小型化し，炉は複式炉の形態を持ち，住居跡は５軒確認している。

第２節　住居跡と出土遺物

Ｓ34Ｊ10の住居跡（Ⅳ－１図）

このグリッドから発見された住居跡は径2.65mのほぼ円形に近い形をなす小形のものである。ローム面の掘り込みは15cm前後で，床面は硬く良好である。

炉は住居跡の西よりにあり，埋甕と，それに接してコの字形に川原石を配置した，いわゆる複式炉である。埋甕の周囲と石囲いの一部に焼土があり，また埋甕内部より多くの木炭が検出された。

柱穴は主なもの４個(不規則)と，周壁及びその近くに９個認められたが，全体として浅いものである。

また北西壁付近に２個の敲石が並べて置かれ，東側には１個の川原石があり近くに薄い焼土が見られた。他に床面に接して土器片が発見された。埋甕の土器は大木10式土器である。覆土から炭化物が多く検出された。

出　土　遺　物

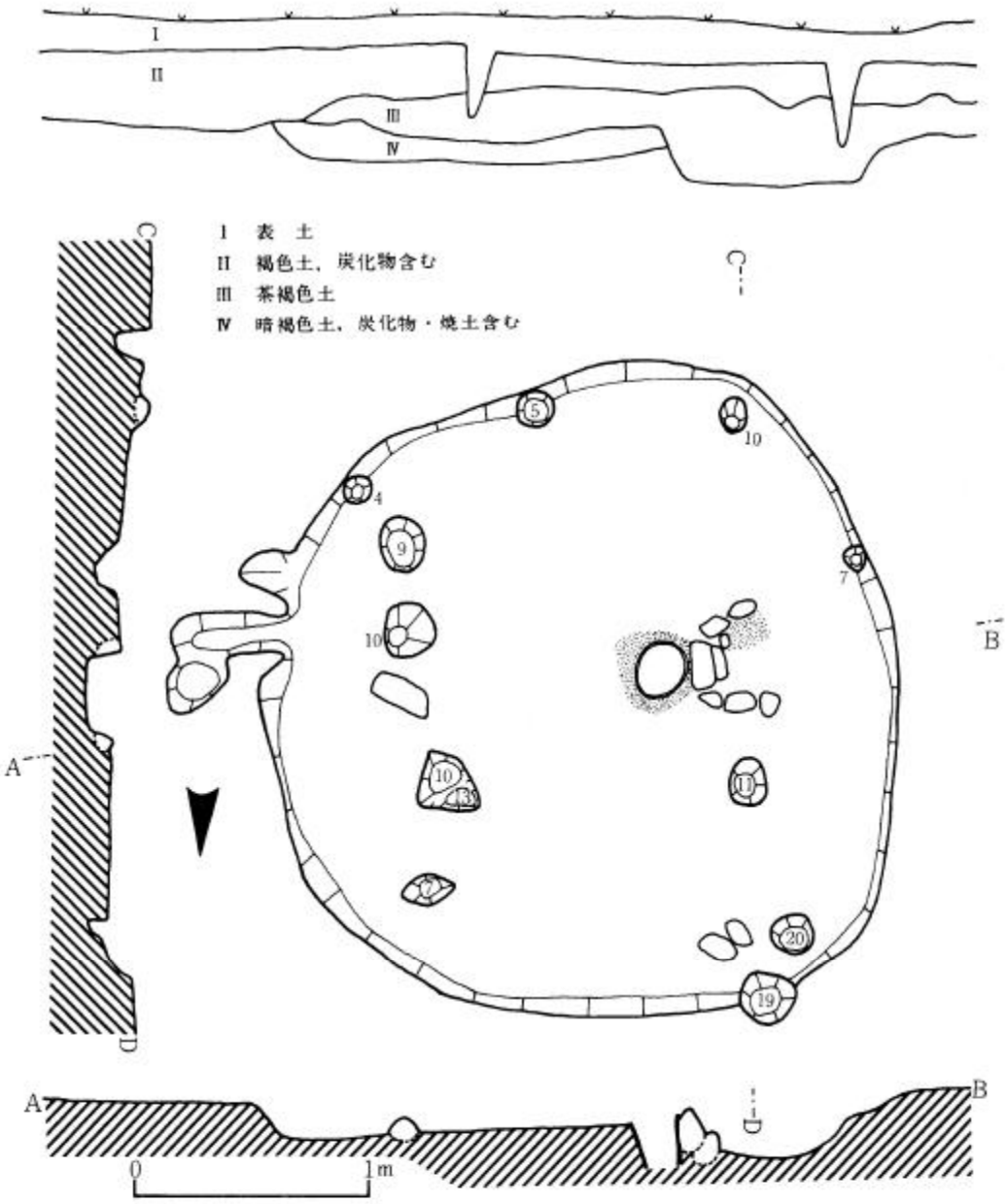
土器（Ⅳ－２図）

口径24cmを測る胴部がやや張る深鉢形の土器である。ＬＲの単節斜縄文の地文を磨消して,「Ｃ」字，逆「Ｃ」字状文を単位とした文様構成である。胴下半部には波状の凹線がめぐっている。器厚は比較的薄く，胎土・焼成は良好である。

Ｓ26Ｅ10住居跡

このグリッドを中心に発見された住居跡は確認された壁より推定すると，略々 3.5mの径をもつ円形のプランをなすものであろう。床面は比較的軟弱で，南壁は少し不明確な所がある。北西隅壁から内部床面に向って，漸次傾斜する箇所は，第２次調査で確認された第２号住居跡の施設と同様な性格をもつものと思われる。

炉は住居跡の南よりにあり，南北120cm，東西 100cm，深さ50cmほどのピットと埋甕からなっている。ピット内に川原石２個があり，いわゆる複式炉と呼んでよいものであろう。焼土は埋甕の南側

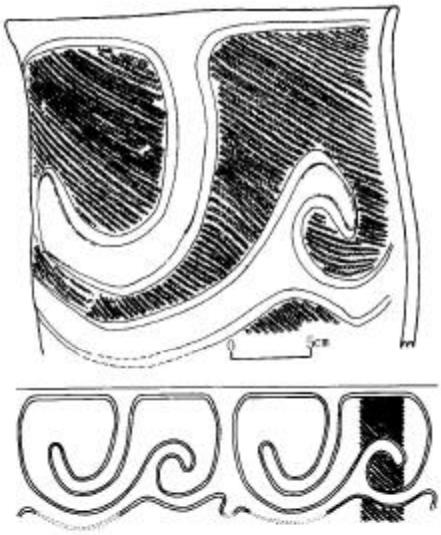


Ⅳ－1図　S34 J 10住居跡

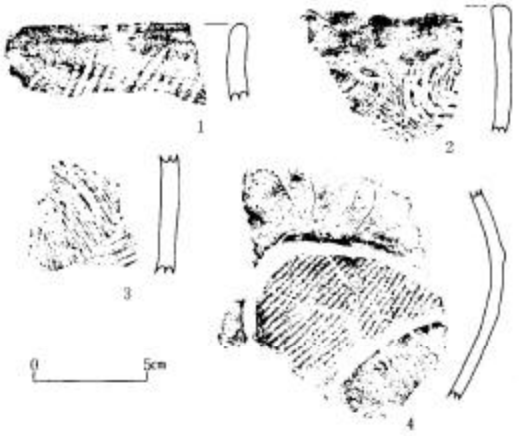
に少しあるのみである。

柱穴は南西隅に1個確認しただけである。覆土から磨製石斧1，石鏃2，それに大木10式土器の土器片が出土した。

出 土 遺 物



Ⅳ－2図　S34Ｊ10住居跡出土遺物



Ⅳ－3図　S34Ｊ10，S26Ｅ10住居跡出土遺物

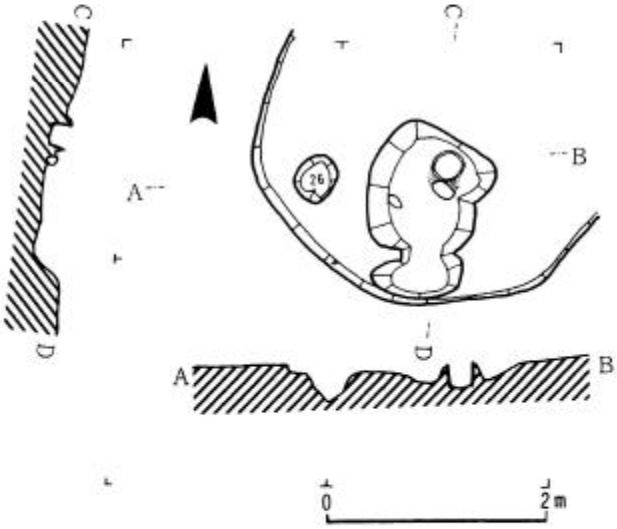
土器（Ⅳ－3図）

2，3は同一個体の土器で2は深鉢形土器の口縁部である。櫛状工具によって流水文が施されている。器厚は比較的薄く，胎土には小礫を多量に含む。4は磨消縄文を施した土器で，文様は「C」字状に展開すると思われる。

S42Ｊ5住居跡（Ⅳ－6図）

第五次で調査した，大木10式の埋甕をもつS34Ｊ10住居跡の南側で，円形プランを呈する直径約3.4mの，ローム面を15～20cm掘り込んで竪穴をつくっている小規模な住居跡である。

炉は住居跡の中心より多少，北側に位置し，埋甕に接してピット(径60×深さ30cm)と河原石（径30cm）が立てられた状態で配置されている，S34Ｊ10住居跡のようなコの字形に石を配した複式炉ではないが，複式炉の一形態と考えられる。柱穴は三つ確認し，深さ20cm前後の浅いものである。他に柱穴と考えられるピットは発見できなかった。床面は硬く良好であり，床に接して広範囲に焼土と炭化物が散布していた。埋甕内部に炭化物，焼土が詰っており大木10式の土器である。埋甕に接している河原石の他に石等のぬき取られた痕跡は認められなかった。

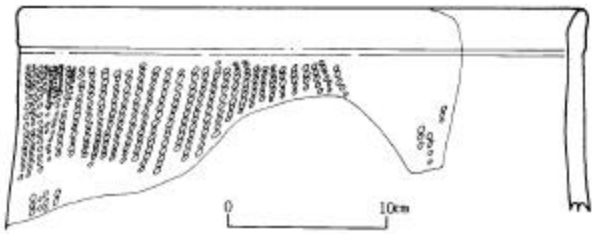


Ⅳ－4図　S26Ｅ10住居跡

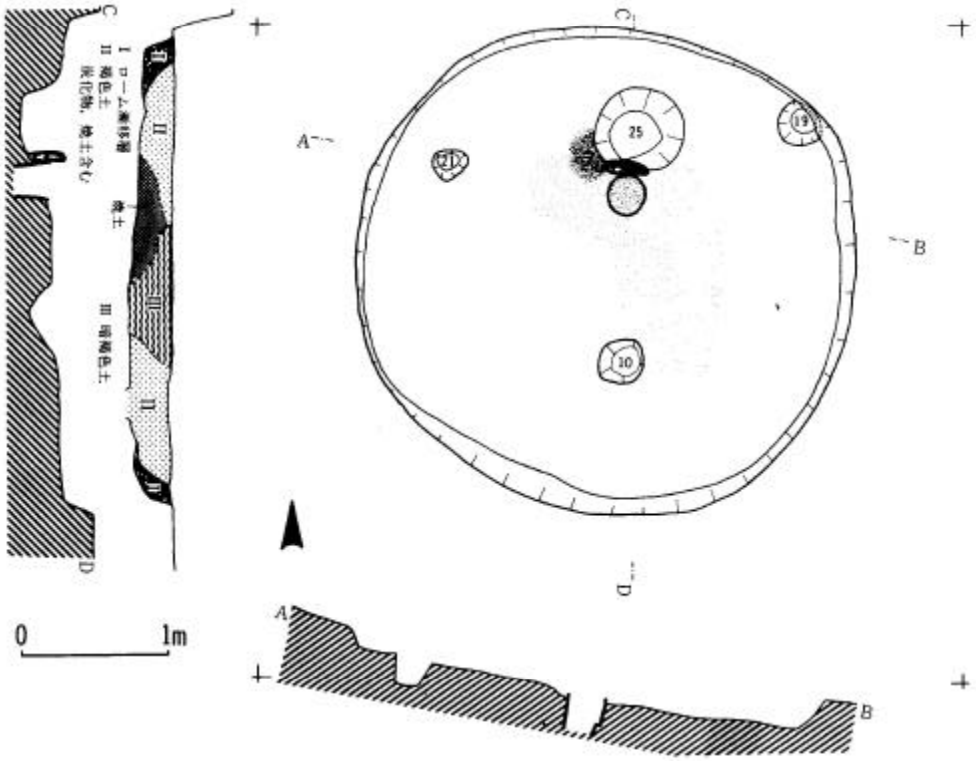
出　土　遺　物

土器（Ⅳ－7図）

住居跡埋甕炉の中に逆さに埋設されていた土器である。胴下半部は欠損している。口縁部が若干外反し，胴部がやや張る深鉢形の土器で，文様は4単位で構成され，地文のＬＲの単節斜縄文を大胆に磨



Ⅳ－５図　S26E10住居跡出土遺物



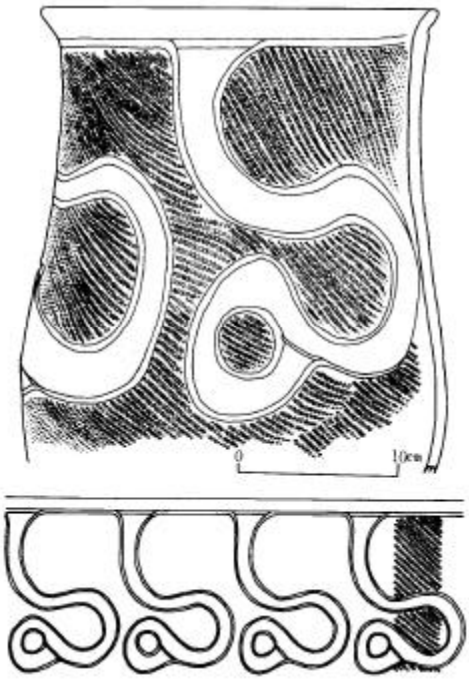
Ⅳ－６図　S42Ｊ５住居跡

消して「Ｓ」字状文を横方向に展開している。器厚は薄く，胎土は良好であるが部分的に黒色を帯びている。

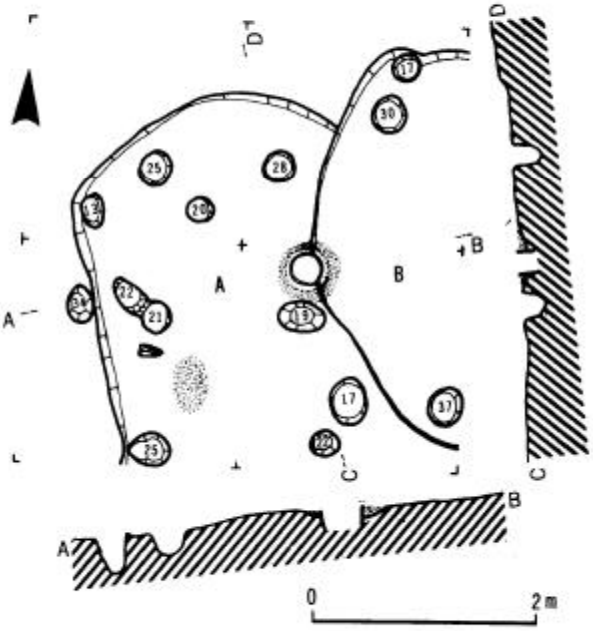
S33J10住居跡（Ⅳ－８図）

分布調査の際発見されたS33Ｊ10グリッドの礫と焼土が，住居内のものか否か確認すべく，上区西側S34A10グリッド及びS34Ａ９グリッド，北側S33Ｊ９グリッドを拡張し調査した。調査の結果，複合する２軒の住居と埋甕炉が見つかった。S33Ｊ９グリッドの住居をＡ住居，S34Ａ９グリッドの住居をＢ住居と仮称することにする。ＢはＡの床を掘りこんでつくられ，Ｂ住居のほうが，Ａ住居より新しいものである。床面のレベルは，Ｂ住居のほうが低い。埋甕炉付近とその北側の，

床は堅く，壁もしっかりしており，確実にプランを把握できたが，A住居の南西部分は，壁，床軟弱のため，プランがゆがんでしまった。またS34A10グリッド南側に壁が見つかったが，その走る方向から，Aの住居のものとは考えにくいものである。この部分も，はっきりしなかった所であるが，上述2軒の住居の他にも住居が切りあっている可能性がある。埋甕炉は，A住居に伴なうもので，大木10式期の深鉢形土器が使用されている。焼土の範囲は東西55cm，南北56cm，厚さ10cmでそのほぼ中央に底部のない土器が，口縁を下に埋めてあった。焼土中には，灰及び，黒褐色の粘性のある土，炭の混入が見られ，かたくしまっている。土器の周囲には1cm～1.5cm巾で，比較的パサパサした黒灰色の土が，廻っている。S34J10発見の小住居の埋甕でもみられる現象である。A住居の埋甕では，完全に一周せず，所々で焼土と接している点が，多少の相異であるが，S33J10グリッドの礫と焼土はA住居の床面より浮いた状態にあった。焼土は混入物が多く，軟らかく2次的な堆積と考えられる。この地域で台付土器が出土している。



Ⅳ－7図　S42J5住居跡出土遺物



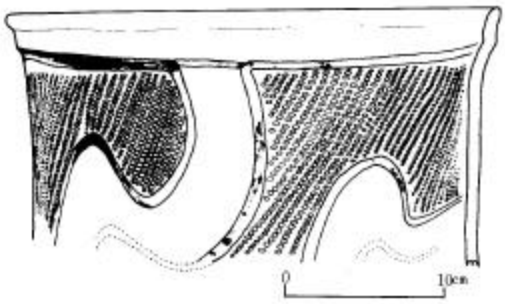
Ⅳ－8図　S33J10住居跡

出　土　遺　物

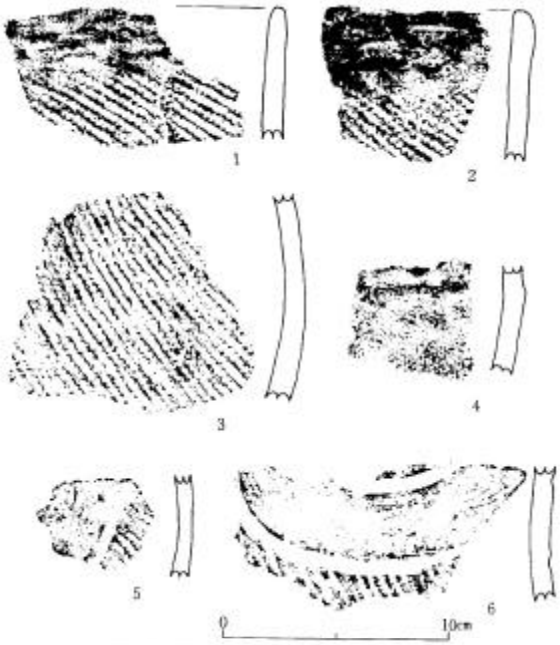
土器（Ⅳ－9，10図）

Ⅳ－9図は口径31cmを測る深鉢形土器である。RLの単節斜縄文を磨消して横方向に「S」字状文を展開する文様構成である。胎土は良好である。

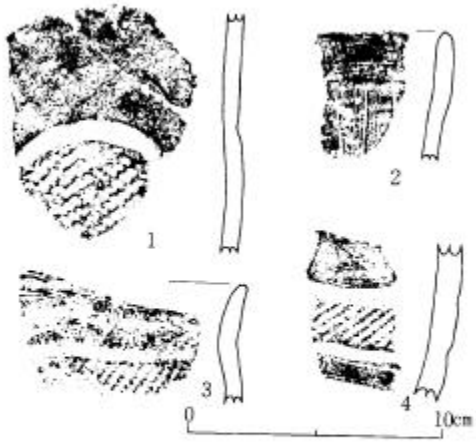
Ⅳ－10図1，2は深鉢形土器の口縁部で，口縁は無文帯になっている。縄文はRLである。4は深鉢形土器の頸部破片で，凸縁をめぐらし，下方には



Ⅳ－9図　S33Ｊ10住居跡出土遺物



Ⅳ－10図　S33Ｊ10住居跡出土遺物



Ⅳ－12図　下堤遺跡Ｂ地区出土遺物

撚糸文が施されている。５，６は深鉢形土器の胴部破片でＲＬの単節斜縄文の地文を磨消して文様を表出している。

下堤遺跡Ｂ地区出土遺物

土器（Ⅳ－11図，12図１～４）

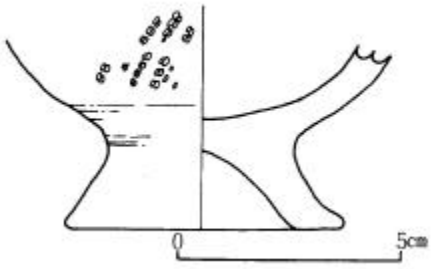
Ⅳ－11図は台付土器である。体部には複節斜縄文を施している。Ⅳ－12図１，４は深鉢形土器の胴部破片で，ＲＬの単節斜縄文を地文として磨消して施されている。２は深鉢形土器の口縁部で口縁は無文帯である。縄文はＬＲである。

下堤遺跡Ｂ地区出土石器・石製品

石器

磨製石斧（Ⅳ－13図１～２）

Ｂ地区出土の石器は非常に量が少なく，



Ⅳ－11図　下堤遺跡Ｂ地区出土遺物

Ⅳ－13図　下堤遺跡Ｂ地区出土石器・石製品

磨製石斧２点であり，いずれも欠損している。石質は１は泥岩，２は片岩である。

石製品〔Ⅳ—13図３〕

凝灰岩で黄灰色を呈し，両側端部に刻みを施してあるが用途ははっきりしない。

第３節　結　　び

遺跡は下堤台地で一番南側にあり，舌状に南西にのびた台地の先端部にある。この遺跡からは住居跡５軒確認された。その大きさは直径３ｍ前後を計り，平面形は円形あるいは楕円形をなし，炉の位置は壁よりにあって，その構造は簡単な石囲い炉の外に土器を埋めるいわゆる複式炉である。時期は大木10式期である。現在のところこの遺跡からは住居跡以外の遺構は確認されていない。丁度谷をへだてた南側にこれと同時期の坂ノ上遺跡Ａがありそこは土坑群を中心とした遺跡であり，それと関連ずけて考える必要があろう。

住居跡の覆土からは土器の量が少なく，完全な土器は炉の外に埋めた土器程度である。これと対象的に土坑群のある坂ノ上遺跡Ａからは多量の土器が発見されているのである。以上のことから，この時期になると土器の廃棄及び土地利用の仕方に変化のあったことが予想されるのである。

この遺跡の範囲は遺物の出土状態から見て東西約 100ｍ，南北80ｍ前後と推定される。

下堤遺跡A・B地区住居跡炉跡一覧表

住居No.	プラン	炉跡	位置	焼土状態
1号	隅丸方形	石囲炉	中央	炉内北側に若干
2号	不明	埋甕炉	南寄り	良好（厚さ10cm）
3号	隅丸方形？	地床炉	北西寄り	楕円状
4号	隅丸方形	埋甕炉	中央	円形に厚さ8～12cm
5号	不整隅丸方形	石囲炉	北西寄り	5cmほどの厚さで，まばらに分布
6号	隅丸方形？	地床炉	東南寄り	長方形に厚さ4～5cm
7号	隅丸方形	石囲炉	南寄り	中央と北寄りに分布厚さ5cm
8号	隅丸方形？	地床炉	中央	円形に少量分布している。
9号	隅丸方形？	埋甕炉	北寄り	円形に多量に分布厚さ6cm
10号	長楕円形	埋甕炉	中央	台状に分布，良好で硬質である
11号	隅丸方形	石囲炉	東寄り	焼土2重に分布している
12号	楕円形	石囲炉	東寄り	少量
13号	不整隅丸方形	石囲炉	南寄り	中央を除き，多量に分布する
14号	隅丸方形	埋甕炉	北東寄り	多量に分布する，厚さ5～8cm
15号	不整楕円形	埋甕炉	北寄り	円形に多量に分布
16号	楕円形	埋甕炉	中央	楕円形，中央寄りに多量に分布
17号	不明	地床炉	東寄り	円形に少量
N23E10住居跡	不明	石囲炉 石囲＋埋甕(A)		良好
N13E1	不明	埋甕炉		円形に多量に分布している
S6E10	円形			
下堤遺跡B地区				
S34J10住居跡	円形	石囲＋埋甕（複式炉）	西寄り	良好
S26E10	円形？	埋甕炉（複式炉）	南寄り	
S42J5	円形	埋甕炉（複式炉）	北寄り	
S33J10	A 楕円形？	埋甕炉	中央	円形に多量に分布する
	B 楕円形？	不明		

第Ⅴ章　下堤遺跡Ｃ地区

第１節　Ｃ地区の概観

前述したＡ地区より真東へ約 200m 地点を中心とした地域である。東から西に四つの舌状台地が伸びている地形上に本遺跡は分布しているが，Ｃ地区は南北に入り込む沢部であり，Ａ・Ｂ地区とは異なり，見はらしの悪い地峡部に占地している（第Ⅰ－３図）。

第５次調査によって，本地区が土師器を出土する遺跡であることが確認され，その範囲は東西80m，南北 120m であることが明らかになった。

調査地区の層序は表土（腐蝕土，第１層），茶褐色土（第２層），ローム層（地山）でＡ，Ｂ地区に比べ層厚は薄くなっている。最東端にあたるＮ－８およびＮ－19グリッドでは急激に沢部に傾斜する地形であり，第２層の下に，第３層（黒褐色土，厚さ48cm），第４層（粘質黒色土，厚さ21cm）がみとめられ，第３，４層からは縄文中期～後期にかけての土器片が僅かではあるが出土している。

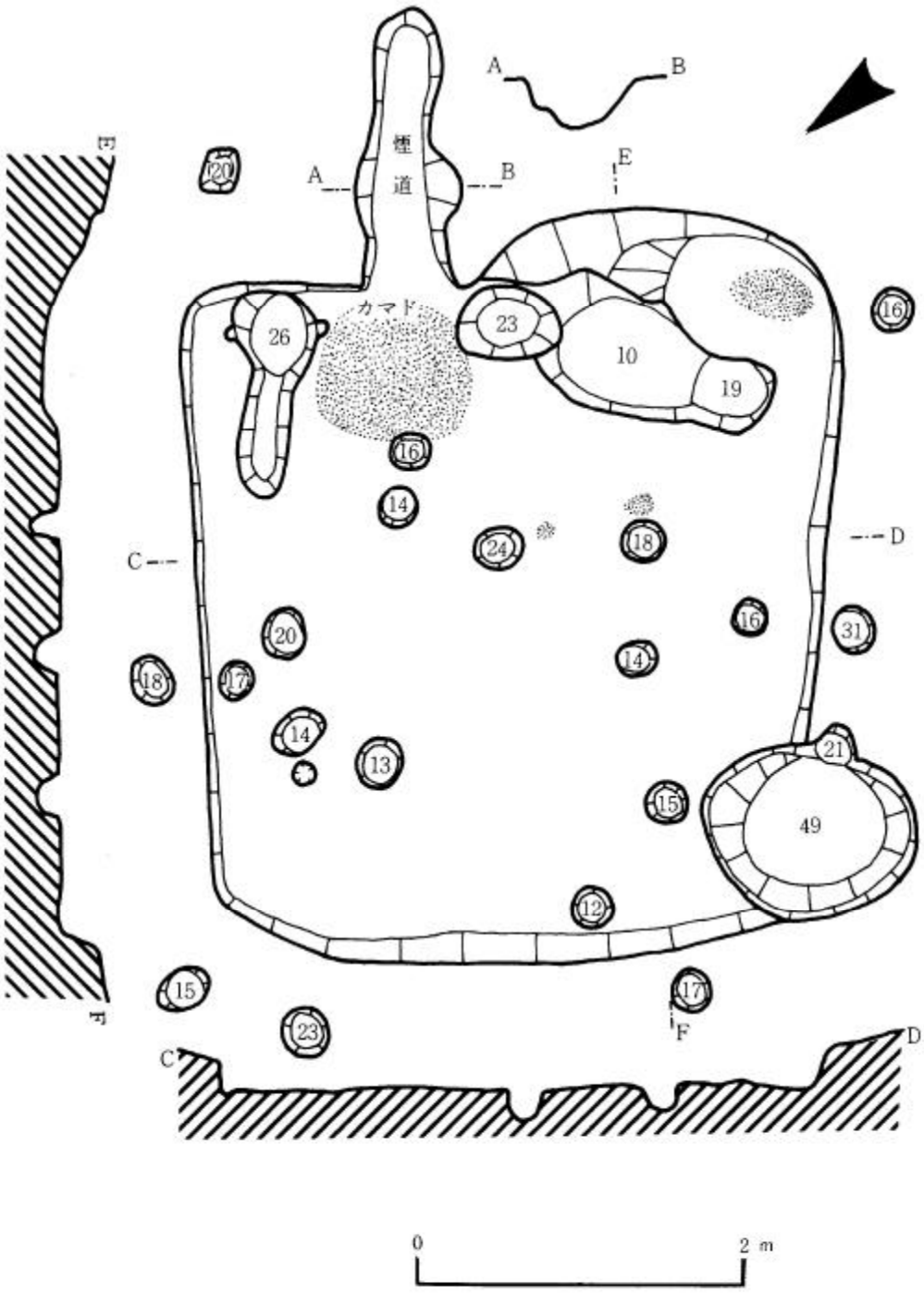
本地区もＡ，Ｂ地区と同様に，萱，小灌木が生い茂り，長年に渡って土取り場となっていたため土層にもかなりの攪乱がみとめられ，特に住居跡を検出した北西地区では，ローム層上面まで土取りが行なわれていた。

第２節　住居跡と出土遺物

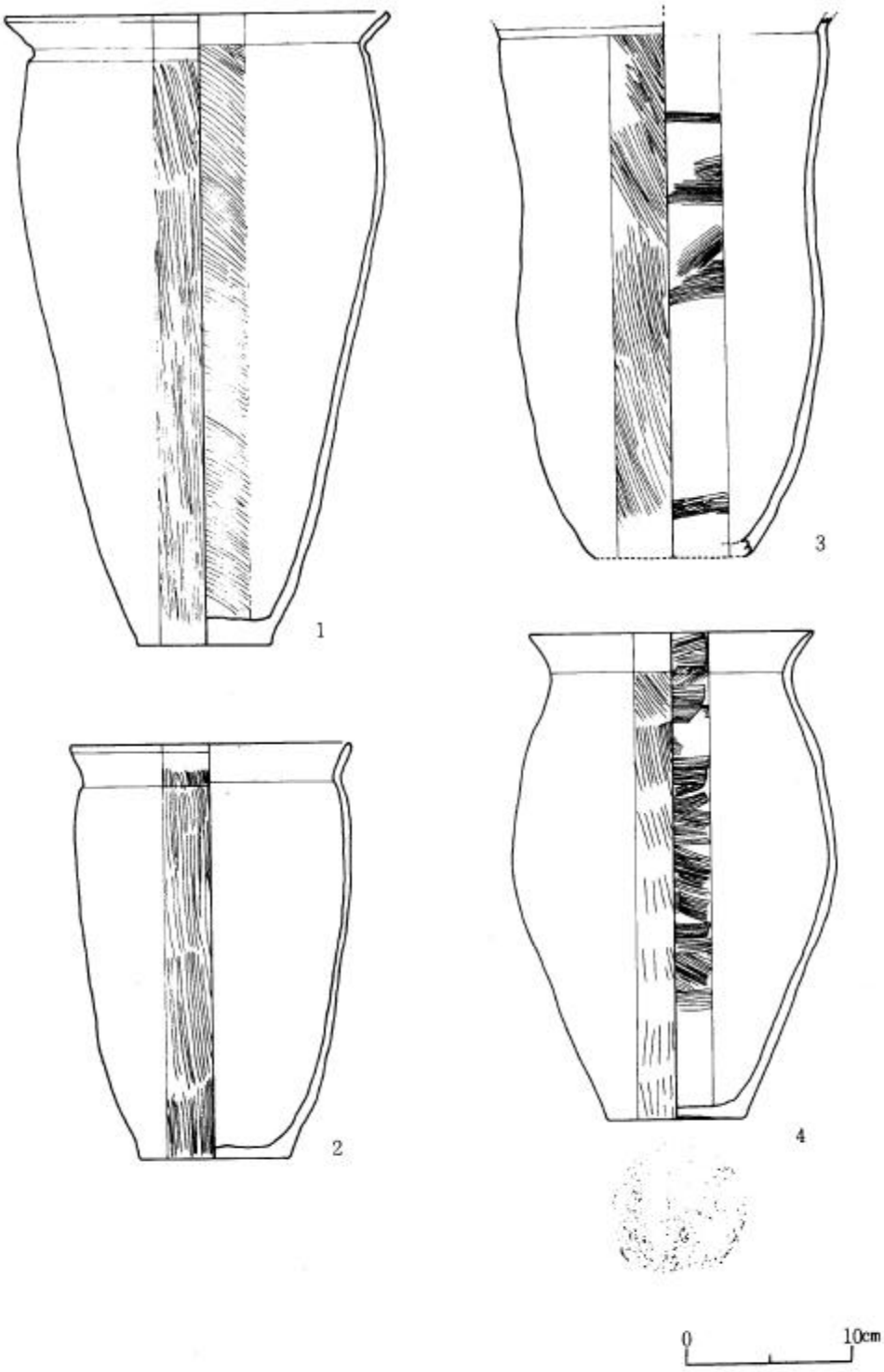
第５次調査で検出した土師器を伴なう竪穴住居跡である。１棟のみＮ－７，Ｎ－８グリッドにかけて検出した。南北4.08m，東西4.03m でほぼ正方形を呈し，住居面積は約16.4㎡である。東壁やや北寄りの個所に長さ 1.7m，平均幅50cm（煙出し部38cm，深さ28cm）の突出した煙道を有するカマドが付設されている。カマド袖部は明らかにできなかったが，焚口部には径約１ｍの円形プランの焼土がみとめられ，厚さ10～15cm，鍋底状の断面を呈している。煙道は焚口より60cm地点で南北にふくらみ，煙出し部に多量の粘土が張りつけられていた。煙道部内の焼土は比較的少なかった。壁は四辺とも比較的良好に遺存しており，東壁が傾斜をもって立ち上る他はほぼ垂直で深さ24cm前後である。床面はほぼ平坦で中央部分は比較的固く，いわゆる踏み固めの状況がみとめられた。柱穴と考えられる円形の小ピットが床面及び，壁外で22個検出しているが，他にカマド袖部及び住居壁を掘り込んでいる時期的に新しいと考えられるピットもあるため，すべてを柱穴と考えることも問題であり，その組み合せ等については不明と言わざるを得ない。周溝はみとめられない。出土遺物は鉄製品（刀子）１点，他は全て土師器である。

住居跡出土遺物

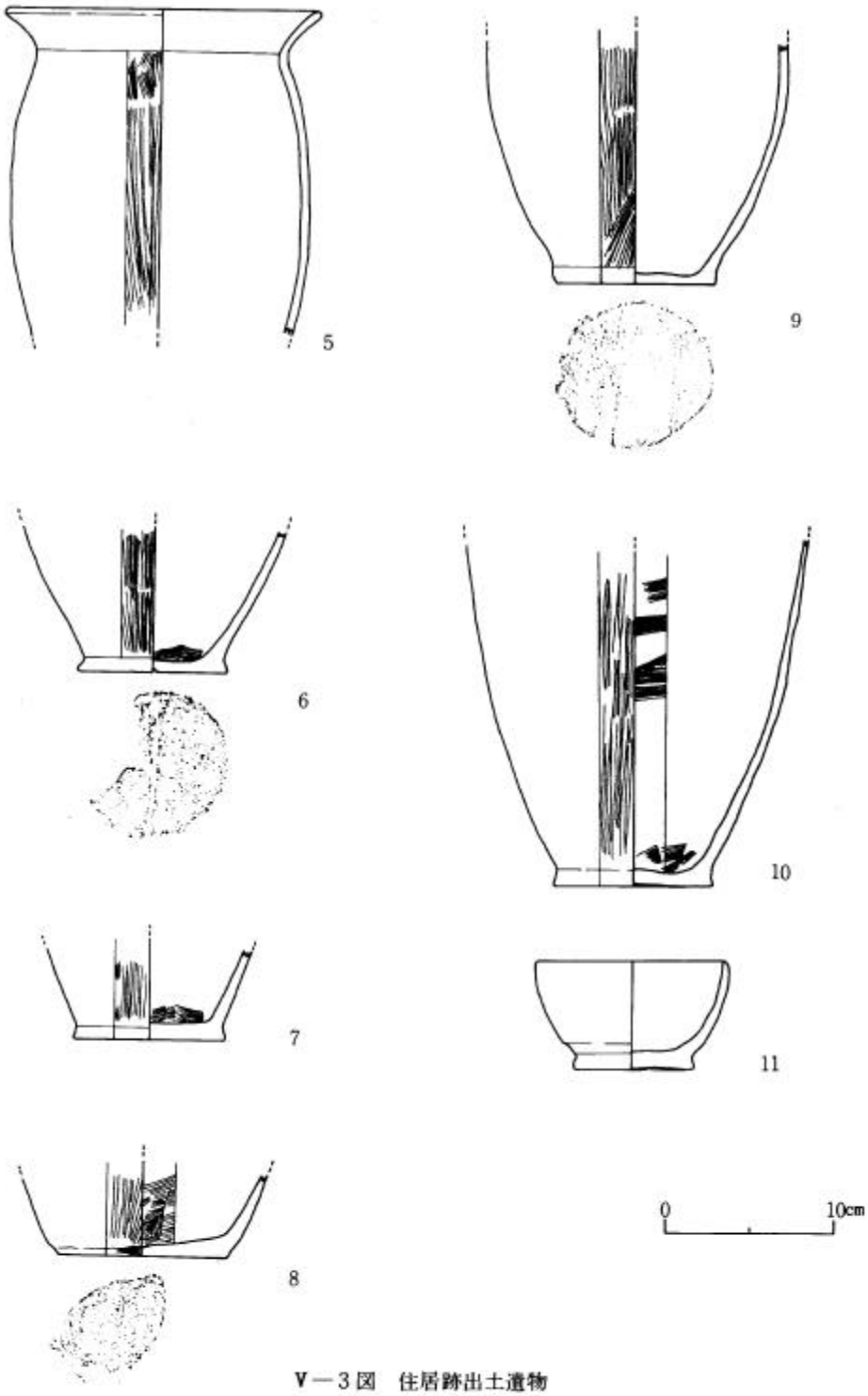
１（Ⅴ－２図）　口縁部が「く」字状に外反する土師器甕である。口縁内外面は横ナデが行なわれており，体部外面は縦位，内面は斜位のカキ目が施されている。全体に凹凸がみとめられ，輪積み（巻き上げ）で成形している。胎土，焼成ともに不良である。



V－1図　下堤遺跡C地区住居跡



V－2図　住居跡出土遺物



V－3図　住居跡出土遺物

2（Ⅴ－2図）　口縁部が「く」字状に外反する土師器甕である。口縁内外面は横ナデが行なわれており，体部外面は縦位（方向は下から上に工具を劫かしている）のカキ目が施され，体部内面は炭化物の付着がみとめられ，ナデが行なわれている。胎土には小礫が混入しており，焼成も不良である。全体に凹凸がみとめられ輪積み（巻き上げ）で成形している。

3（Ⅴ－2図）　体部外面は縦位，内面は横位の細かいカキ目を施した土師器甕である。口縁は内外面とも横ナデを行っており，巾 0.5cm程の沈線が頸部に回わる。胎土には小礫が混入しており，焼成も不良である。体部中央でくびれ，下半でわずかにふくらむ。全体に凹凸がみとめられ，輪積み（巻き上げ）痕跡が顕著である。

4（Ⅴ－2図）　「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁外面は横ナデを行っており，体部外面は縦位，内面は口縁まで横位，斜位のカキ目が施されている。底部外面は木葉痕がみとめられる。全体に輪積み（巻き上げ）痕跡が顕著である。胎土，焼成はやや良好である。

5（Ⅴ－3図）　「く」の字状に外反する口縁を有する土師器甕である。内外面ともに磨滅が著るしいが体部外面は縦位のカキ目，口縁部外面及び内面はナデが行なわれている。胎土，焼成ともに不良である。

6（Ⅴ－3図）　体部外面に縦位のカキ目，内面は底部を除きナデを行なっている土師器である。底部外面には木葉痕がみとめられ，内面にはカキ目を施している。胎土には砂礫が多いが焼成は良好である。

7（Ⅴ－3図）　体部外面に縦位のカキ目，内面は底部のみに横位のカキ目を施している土師甕である。胎土には小礫が多く，焼成も不良である。

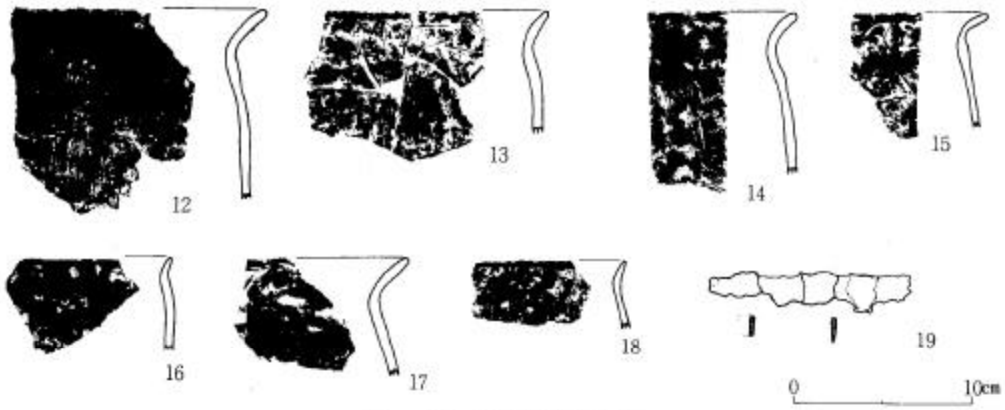
8（Ⅴ－3図）　体部外面は縦位，内面は横，斜位のカキ目が施されている土師器甕である。底部には木葉痕がみとめられる。胎土に砂が混入しているが，焼成はやや良好である。

9（Ⅴ－3図）　体部外面は縦位のカキ目，内面はナデを行っている土師器甕である。底部には木葉痕がみとめられる。胎土，焼成ともに不良である。

10（Ⅴ－3図）　体部外面は縦位，内面は横位のカキ目が施されている土師器甕である。器体全体に凹凸がみとめられ，輪積み（巻き上げ）痕跡が顕著である。焼成は比較的良好であるが，胎土は砂礫が混入している。

11（Ⅴ－3図）　内黒の土師器杯である。ロクロは使用しておらず甕を作る方法と同様で，輪積み（巻き上げ）で成形している。底部は一見台付杯のようであるが，甕にみられる円盤状底部であり，非常に厚く，体部の立ち上り付近にはカキ目がみとめられる。胎土には多量の砂が混入しており，焼成も不良である。

12（Ⅴ－4図）　「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。体部外面は縦位のカキ目が施され，内面及び口縁部にはナデが行なわれている。胎土に小礫が混入している。



V－4図　住居跡出土遺物

13（V－4図）　「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁は横ナデが行なわれている。体部外面は縦位，内面は粗い横位のカキ目が施されている。胎土，焼成は良好である。

14（V－4図）　「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁は横ナデが行なわれ，体部外面は縦位，内面は横位のカキ目が施されている。胎土，焼成ともに良好である。

15（V－4図）　強く「く」字状に外反する口縁の土師器甕である。体部外面は斜位，内面は横位のカキ目が施されている。

16（V－4図）　口縁の外反の小さい土師器小形甕である。口縁は横ナデが行なわれ，体部内外面は斜位のカキ目が施されている。

17（V－4図）　強く「く」字状に外反する口縁の土師器甕である。体部外面には斜位のカキ目が施されている。

18（V－4図）　わずかに「く」字状に外反する口縁の土師器小形甕である。体部外面は口縁から縦位のカキ目が施されている。

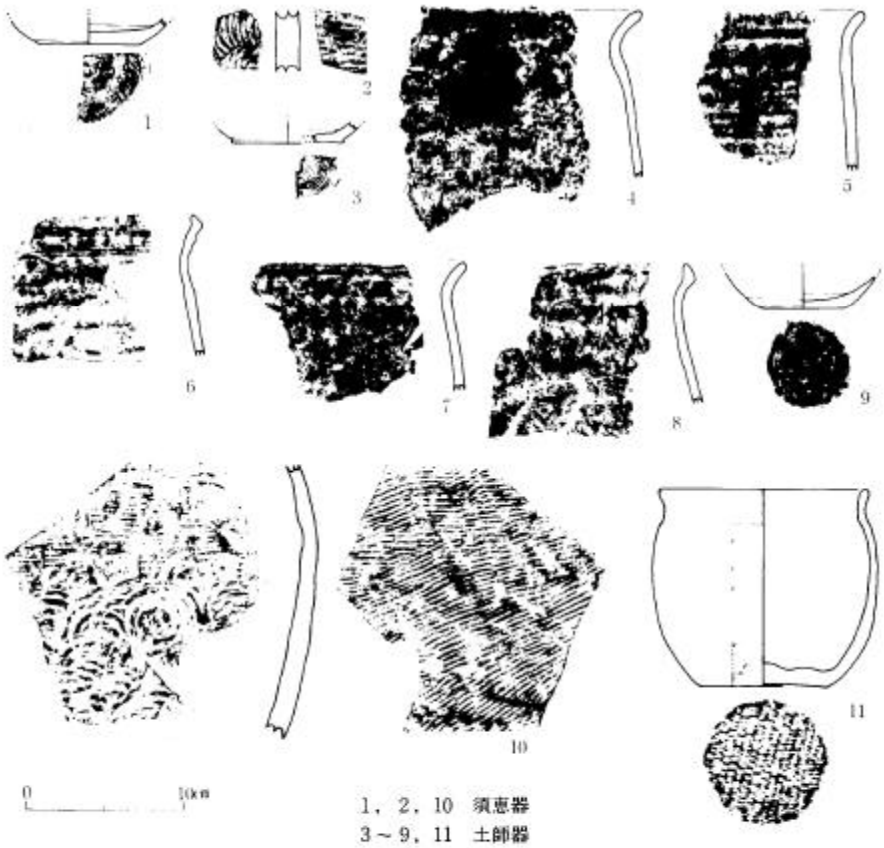
19（V－4図）　住居跡東壁北側で，床面に突きささる状態で床面上3cm浮いた個所で出土した鉄製の刀子である。全長11.1cm，巾 2.8cm，厚さ 0.8cmを測り，腐蝕が著るしい。全体に僅かなソリがみとめられる。

第3節　その他の出土遺物（V－5図）

1～3はC地区住居跡外の出土であり，4～11は第3次調査(昭和45年)，第4次調査(昭和46年)において，A地区より出土したものである。

1　N6J1グリッド出土の須恵器杯である。回転ヘラ切りで再調整はない。胎土には砂が混入しているが，焼成は良好である。

2　N13E1グリッド出土の須恵器甕胴部破片である。外面にタタキ板痕，内面にアテ板痕がみとめられる。外面には薄く自然釉がかかり，胎土には小礫が混入している。



1，2，10　須恵器
3～9，11　土師器

V－5図　その他の出土遺物

3　N15Jグリッド出土の非内黒土師器杯底部である。回転糸切りで再調整はない。この種の遺物は他に3点出土しているがいずれも小片である。

4　「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。輪積み(巻き上げ)で成形し，外面に縦方向のカキ目を施している。胎土には小礫が混入し，焼成は良くない。

5　「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。口縁部には横ナデがみとめられ体部外面は縦，内面は横位のカキ目が施されている。胎土には小礫が混入し，焼成は不良である。

6　口縁が外反し，更に垂直に立ち上る土師器甕である。内外面ともロクロ痕跡がみとめられる。胎土には小礫が混入しているが，焼成は良好である。

7　「く」字状に外反する口縁を有する土師器甕である。体部外面には斜位，内面には横位のカキ目が施されている。

8　口縁が外反し，更に垂直に立ち上る土師器甕である。体部外面にはロクロ痕跡がみとめられるが，内面は磨滅しており鮮明でない。

9　回転糸切り，再調整のない非内黒の土師器杯である。体部外面は磨滅が著るしい。

10　外面は葉脈状のタタキ板痕，内面は同心円状と葉脈状のアテ板痕のある須恵器甕胴部破片である。胎土，焼成とも良好である。

11　6Fグリッド出土の小型土師器甕である。口縁はゆるく外反し内外面とも横ナデが行なわれて内面には煤状炭化物が付着している。体部外面は下半にヘラケズリを行った後全体に縦位のカキ目が施され，内面は底部を除き，ナデが行なわれている。底部外面には網代痕がみとめられ，内面は粗くヘラで胎土をケズり取っている。胎土，焼成ともに良好である。

第4節　結　　び

以上で述べた住居跡内出土遺物，その他のC地区，A地区出土遺物について土器を中心に概観してみる。住居跡内出土土器はすべて土師器であり，ロクロ使用のものはみとめられず，ほとんどが口縁が「く」の字状に外反するカキ目の施された甕である。胎土，焼成ともに不良であり，全体に粗雑な造りである。その他のC地区，A地区出土土器も同様な土師器甕が主体であるが，ロクロ使用の土師器甕，回転糸切りの土師器杯，若干の須恵器の出土があり，住居跡内出土土器とわずかその様相が異なる。

これらの土器の年代については出土層位，出土地点も各々異なり，一概には述べられないが，住居跡出土の甕は秋田城跡築地崩壊土出土[1]のものと形態的にも技法的にも類似しており，9世紀後半頃と考えられる。又，回転糸切り再調整のない非内黒の土師器は，多賀城跡[2]，秋田城跡出土[3]の須恵系土器[4]と類似するものであり，11世紀頃と考えられる。

以上の点からC地区，A地区検出の遺物，住居跡は平安時代後半と考えるのが妥当であろう。

1）「秋田城跡発掘調査概報」　昭和49年

2）「宮城県多賀城跡調査研究所年報」　昭和46年

3）「秋田城跡発掘調査概報」　昭和48年

4）桑原滋郎「歴史」　―ロクロ土師杯について―　39号　昭和44年
工藤雅樹，桑原滋郎「考古学雑誌」　―東北地方における古代土器生産の展開―　57巻3号　昭和47年

遺構・遺物確認グリッド一覧表

N 地 区	遺 構			遺 物	
グリッド名	住	ピット	溝	縄文	土師
N2J1	—	—	—	—	○
N2E10	○	—	—	—	○
N4J1	—	○	—	—	○
N5J5	—	—	—	—	○
N5J1	—	—	—	○	○
N6J1	—	—	—	—	○
N8J1	—	—	—	○	—
N12E1	○	—	—	—	須恵
N13E1	○	—	—	○	—
N13J1	—	○	—	—	—
N13J5	—	—	—	○	—
N14E1	—	○	—	—	—
N14J1	—	—	○	—	—
N15J1	—	—	—	—	○
N16E1	—	—	—	—	○
N17E1	○	—	—	—	○
N18E1	○	—	—	—	○
N19E1	—	—	—	—	○
N19J1	—	—	—	—	○
N20J1	—	—	—	○	—
N21J1	—	—	—	○	—
N23J1	土壙	—	—	○	—
N24J1	—	—	—	○	○
N32J1	—	○	—	○	○
N33J1	—	—	—	—	○
N34J5	—	—	—	—	○
N39E1	—	○	—	—	○
N39J1	○	—	—	—	○
N41J1	—	○	—	—	—
N42E1	—	—	—	○	—
N45J1	—	—	—	—	須恵

S 地 区	遺 構			遺 物	
グリッド名	住	ピット	溝	縄文	土師
S 1J5	—	—	—	○	—
S 2J10	—	○	—	○	—
S 6J10	—	—	—	○	—
S12J5	—	—	—	○	—
S15J10	—	—	—	○	—
S16J10	○	—	○	○	—
S25E10	○	—	—	○	—
S25J10	—	—	—	○	—
S26E10	○	—	—	○	—
S26J10	—	—	—	○	—
S29J10	—	○	—	○	—
S30E10	—	○	—	—	—
S31J10	—	○	—	—	—
S33J10	○	—	—	○	—
S34J10	○	—	—	○	—
S36J10	—	—	—	○	—
S44J5	—	—	—	○	—
S45J1	—	—	—	○	—

小阿地

坂ノ上遺跡

坂ノ上遺跡発掘調査報告

第Ⅰ章　調　査　の　概　況

第1節　調査に至るまでの経過

秋田市四ツ小屋小阿地字坂ノ上は，下堤遺跡と同様，古くから縄文土器片，石器，剥片等の散布している所として地元の人を始め，考古学愛好者に知られ，そして，古くから畑作がなされているため遺物の収集地域としても知られていた。この遺跡は，昭和43年，下堤遺跡の周辺遺跡として，小阿地・御所野・末戸松本の地区を踏査した際に確認していた。

第6次下堤遺跡発掘調査期間中，地元協力者の話によると，最近，坂ノ上の畑耕作の際，トラクターに石がひっかかり耕作に支障をきたしているとの事であった。早速，現地へ行ってみると畑地内外に，土器片，石(小～大)等が多量に散布し，縄文時代中期末～後期にかけての配石を伴なう遺構の存在が考えられ，畑耕作による遺跡破壊の危険があり，緊急を要していると判断した。下堤遺跡は第6次までの調査により遺跡の範囲，分布等がほとんど確認できたので，昭和49年度は坂ノ上遺跡の調査を実施することにした。

第2節　第1次調査～第2次調査

第1次調査　　昭和49年7月1日～8月6日

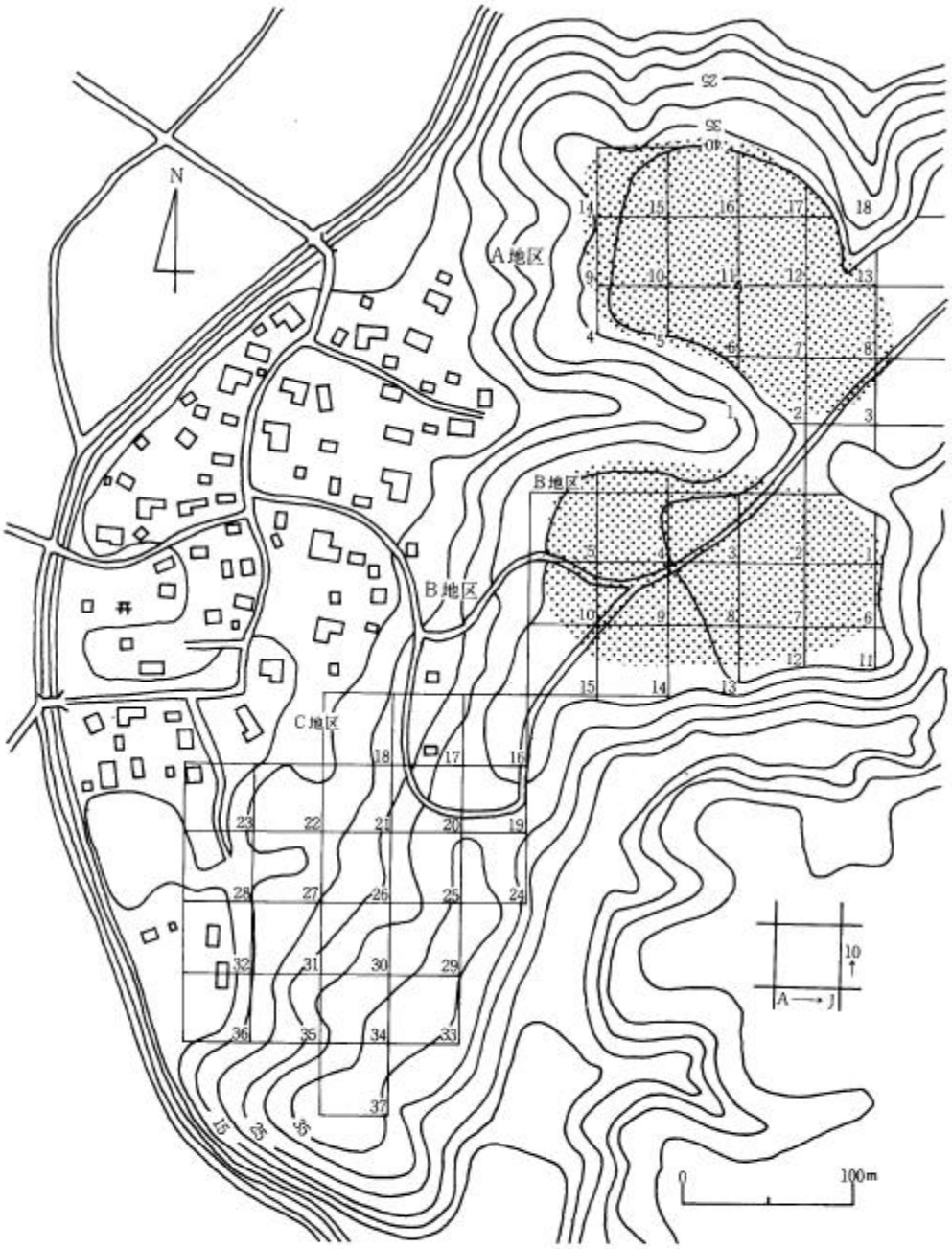
第2次調査　　昭和50年5月12日～31日

坂ノ上遺跡の分布調査は，遺跡の所在する台地約75,000m²を昭和49年から3年計画の予定で調査し，北から順序にA，B，C地区に分け進める計画であったが，昭和50年の第2次調査でB，C地区を合せて調査し，一応この発掘で下堤，坂ノ上両遺跡の分布調査を終了することになった。小阿地地区遺跡と言うのはこの両遺跡を総称して呼ぶものである。

第1次調査は，A地区約30,000m²に対処し，調査は遺跡の範囲確認を主体に行なった。調査方法は，A地区の三角点(標高41m)を中心に下堤遺跡同様，4m×4mの小グリッドが100入るように40m×40mの大グリッドを18設定し(Ⅰ－1図)，その中の23カ所について，2m×2mグリッドを決めて完全に発掘し，遺構の確認を行ない，特に三角点周辺は遺物の散布が多いため4m×4mの小グリッドを11カ所，発掘調査し，遺構の確認と性格等を把握することにした。その結果，A地区では畑作でかなり遺物包含層が掘りかえされていたが配石遺構，土壙等を確認することができた。

第2次調査は前述したようにB，C地区(約45,000m²)に37の大グリッドを設定し，分布調査を実施した。B地区は地元で古畑と呼ばれ，かなり古くから畑耕作の行なわれている所で，土地所有者等の話によると大根，長芋等を栽培しているとのことであった。発掘の結果はやはり，ほとんどのグリッドで長芋による攪乱で遺構は検出できずに終った。遺物についてもA地区ほど量はなく，台

地の北西端に石棒が立った状態で出土したのが注目された。なお，B，C地区を合わせてB地区と呼んでいる。



Ⅰ—1図　小阿地坂ノ上遺跡A・B地区グリッド設定および遺構分布地形図

第II章　遺跡の立地と環境

第1節　遺跡の位置

下堤遺跡と沢一つ隔てた南側の台地が，小阿地坂ノ上遺跡である。遺跡は秋田市から直線距離にして東南へ約7km，奥羽本線四ツ小屋駅より東へ約 0.5kmの所に位置する。

調査区には標高41mの三角点があり，舌状台地を形成し，この調査区を東西に国道13号線に通ずる農道が走っている。三角点を中心とする約 1,500m²は戦後，開墾された所で，一段高くなっている。

第2節　自然的環境

第3節　周辺遺跡

第2節～第3節は基本的に下堤遺跡と同じである。下堤遺跡・第II章を参照されたい。

第Ⅲ章　坂ノ上遺跡Ａ地区

第１節　Ａ地区の概観

下堤遺跡と隣接する南側の台地が坂ノ上遺跡であり，下堤遺跡Ｂ地区（縄文時代中期末葉～）に最も近い所に位置するのがこのＡ地区である。北西にのびた約20,000m²の舌状台地で，見晴らしが非常によく，ほぼ中央部に標高41ｍの三角点が設置されている。

このＡ地区は戦後，開墾された所で遺構そのものの破壊はそれ程進んではいない。遺跡の性格を確かめるため発掘調査した三角点周辺約 1,500m²は一段高く盛り上っている。調査はあくまでも，遺跡の分布，範囲確認が主体で全体的調査は行なっていないが，縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての時期で，配石を伴ない，住居跡，土壙群等が発見され，特に遺物（土器片）の量が夥しく，この遺跡の特性を考えさせられる地区である。

第２節　住居跡と出土遺物　　（　）内グリッド

Ａ地区貼床住居跡（11Ａ１）

三角点の北東方向に位置し，表土より30～40cmの深さで確認された貼床の住居跡で，貼床の厚さは約５cm，床面の状態は良好であった。この住居跡は北側の配石遺構，土壙によりこわされている。住居跡全体の規模は径にして約４～５ｍ程と考えられるがプランは不明である。柱穴も含めピットは八つ確認できた。深さ28cmのピットの貼床下より骨片が検出された。炉は未確認である。

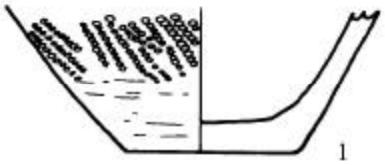
Ａ地区住居跡（11Ａ１）

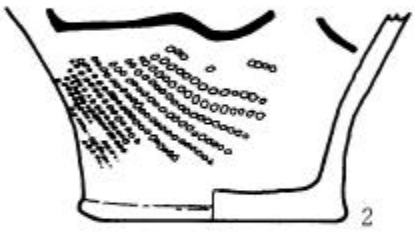
前述の貼床住居跡下に確認された住居跡でローム面に造られている。プランは，はっきりしないが比較的浅い溝が東側にみられ，この住居跡の周溝かも知れない。炉は西側に傾斜している埋甕炉（埋甕土器，大木10式）をもつ。

※　調査期間中，大木10式の埋甕が抜き取り盗難に遭い，Ｅ～Ｅの断面図には炉の掘り込みを記載してある。

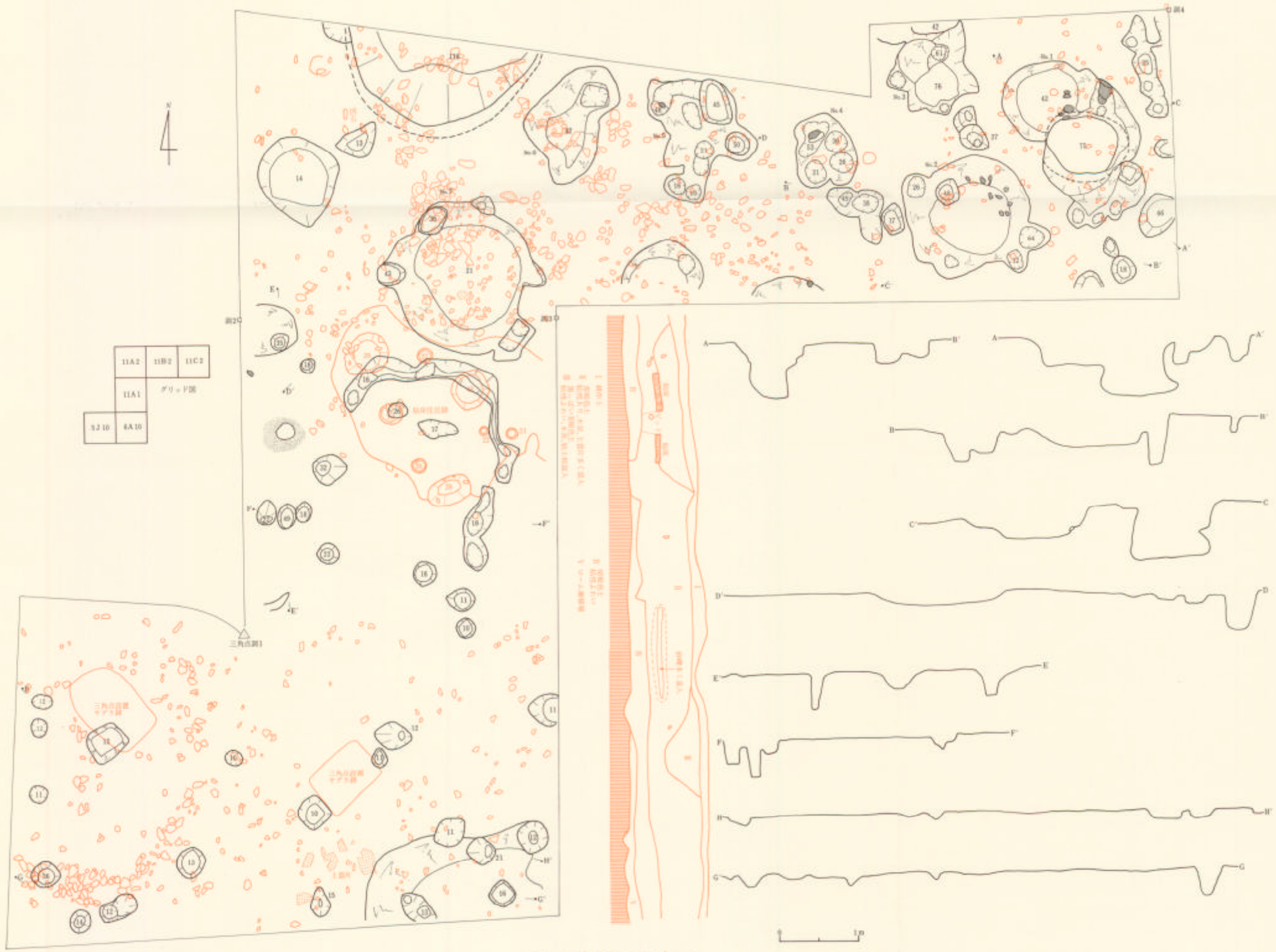
Ａ地区住居跡（12Ｂ１・７Ｂ１）（Ⅲ－３図）

住居跡南壁部分の掘り込みは約60cmでほぼ垂直である。床面の状態は極めて良好で，巾10～20cm，深さ５cmの周溝がめぐり，その周溝の内側には壁に接して巾10cm，深さ25～30cmの掘り込みがある。調査区の東端に床を10cm前後掘り下げた部分があり，焼土も厚く堆積していたことから，炉跡と考えられる。

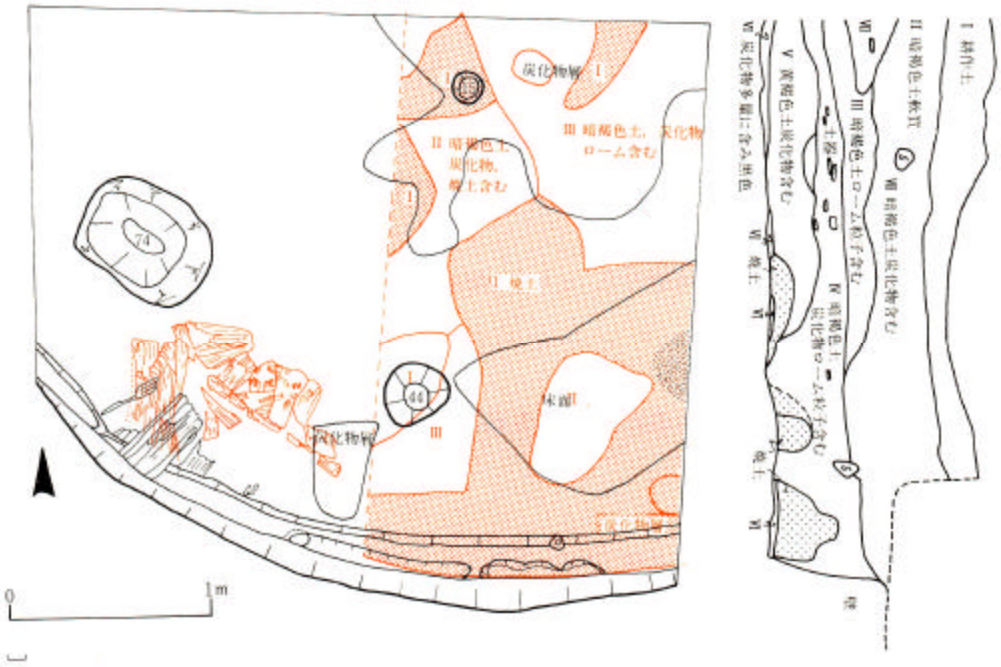




Ⅲ－１図　坂ノ上遺跡Ａ地区住居跡(11Ａ１)出土遺物



Ⅲ—2図　三角点周辺遺構平面図　住居跡・小竪穴・土壙　配石遺構平面図



III－3図　坂ノ上遺跡A地区住居跡(12B1・7B1)

住居跡内，覆土の堆積状態は軟質の暗褐色土層が上面を覆い，遺物を包含した暗褐色土層の下に粘性の強い黄褐色土層，そして炭化物を密に含んだ層が床全面に5～8cmの厚さで堆積している。住居跡内の各所に焼土がみられ，特に壁際に厚く堆積しており，南西周壁部に床面より30cm上面に炭化材が検出され，ピットの周りもかなり焼けていること等から火災にあった住居と考えられる。住居跡掘り込み面より33cm離れた覆土上面に土器を伴なう炉が検出された。炉は粘土で作られた面をもち，北側にやや傾斜して土器に接しており，火熱を受けて炉面下および土器のまわりにも焼土がみられた。この炉は住居廃棄後に作られたものと思われる。この住居跡は$\frac{1}{4}$程しか調査していないので規模，プラン等は不明である。

III－4図　坂ノ上遺跡A地区住居跡(12B1，7B1)出土遺物

出　土　遺　物

土器（III－4図1～2）

1は小形の壺形土器で，口縁部は二単位の長方形で粘土紐の隆帯で区画し，磨かれている。胴部も粘土紐で波頭状に施文し，頸部に続く部分は磨消して，その他は底部近くまでL

Rの単節斜縄文が残っている。

小竪穴遺構・土坑（11A２・11B２・11C２）

No.1（11C２）

北西方向に長い（長軸 225cm，短軸 120cm）楕円形で，中央部に径90cm程の掘り込みがあり，袋状を呈している。この小竪穴の２カ所から骨片が出土している。

No.2（11C２）

径 150～ 160cmのほぼ円形の小竪穴で，ピットの部分が張り出している。深さは40cm前後で，骨片が出土している。

No.3（11C２）

全面調査はしていない。No.2小竪穴の北側に位置し，不整形のようであるが全体的に深い遺構である。

No.4（11B２）

ほぼ楕円形（リンゴの断面形，長軸 100cm，短軸75cm）で最も深い部分に石がある。

No.5（11B２）

不整形（長軸 150cm，短軸 100cm）で西側の深さ48cmの所から石と土器片が出土している。

No.6（11B２）

不整形で深さ40cm前後である。

No.7（11A２）

円形（径 180cm）でピットの部分が張り出している。浅い鍋底状の小竪穴で，骨片が出土している。No.2の小竪穴と類似している。

No.1～No.7小竪穴遺構の覆土については判別できる層序はなく，配石面から底部まで暗褐色土で，焼土，炭化物，土器片，ローム混りで石を含むものである。

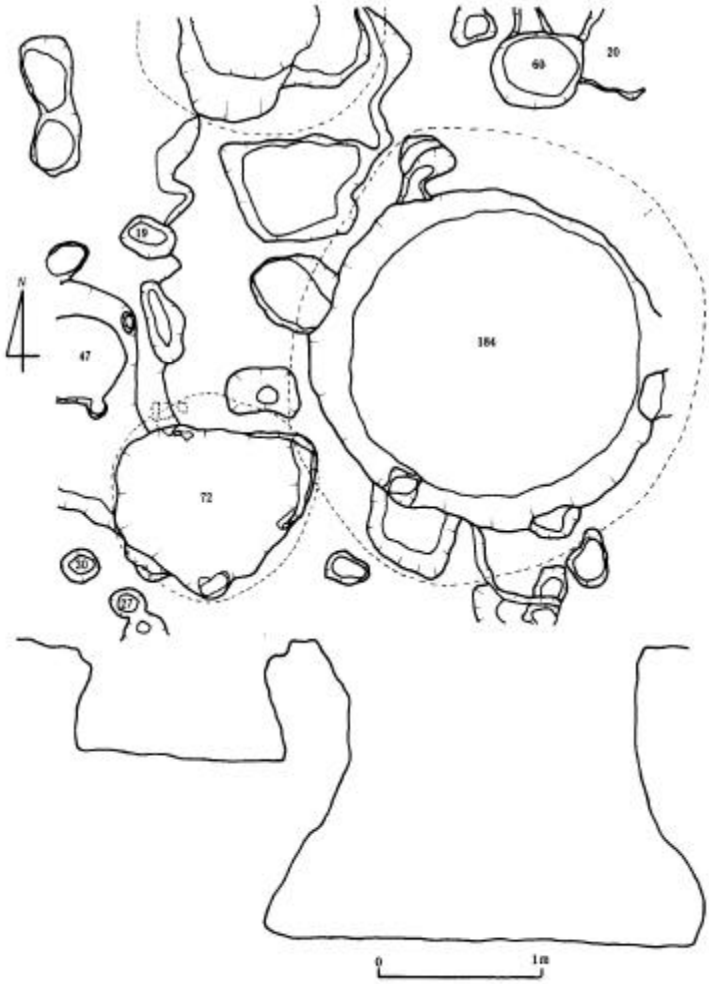
土坑（11A２）

グリッドの北側にある土壙で$\frac{1}{2}$程しか調査はしていないが，口径 240cm，底径 250cm，深さ 120cmの袋状を呈するものである。

土坑群（11A10)(Ⅲ－５図)

表土より約20cm程掘り下げた黒色土層面の特に東側に多量の礫による配石が認められ，また土器も多量に出土している。遺構はこの黒色土層をさらに掘り下げたローム面に３基程確認されており，１基は配石を取り除いて確認され，東西 220cmを測り，深さ約 180cmの円形を呈するものである。配石は本ピットの上部に円を描く形であったが，この面でプランは確認できず，断面においても掘り込みの層は不明だったために本ピットとの関係はわからない。ピット内には，褐色土，黄白色砂層，礫が堆積しており底部はローム層を掘り込み，砂礫層まで達している。１基はこのピットの北西方向に位置し，北壁にかかって全面調査はできなかったが確認できた範囲で径約 120cm，底径約

150cmを測る袋状ピットが検出された。ピット内埋土は褐色土のボソボソした土で，多量の土器が出土している。また上記した遺構の南西部に隣接して，もう1基の袋状ピットが検出された。前述の2基のピットより浅いものである。径 120cm，底径 130cmを測り，深さは約72cmである。埋土は粘性のある黒褐色土で，底部の壁ぎわや壁に貼りついた状態で拳大の礫や土器片が出土した。その他のピットについてはどのような性格をもつものかは不規則であり，また，各ピットの関係は不明である。これらのピットは深さ5～30cm位のもので，円形あるいは楕円形を呈し，東側に確認された袋状ピットより切られているものもある。これらのピット中より遺物は出土してない。



Ⅲ－5図　坂ノ上遺跡A地区土壙群

出　土　遺　物

土器（Ⅲ－6～11図）

坂ノ上遺跡A地区出土の遺物は縄文時代中期末葉から後期前葉の頃のものが殆んどであり，遺物の量も非常に多い。

第1類土器（Ⅲ－8図1～4）

地文に縄文があり，その上に太い沈線で弧状，渦巻文(1，4)など施されたもの，3のように隆帯で文様を構成するものがある。この仲間は2のように口縁部あるいは頸部に無文帯があり，胴部に少しふくらみのある器形をなすものが多い。

第２類土器（Ⅲ－８図５）

口縁部に弁状の把手があり，それに粘土紐の貼付けと，沈線によって構成される文様が施されたものである。１の沈線はこの仲間に近い。器形は深鉢で，四つの弁状把手がつくものである。

第３類土器（Ⅲ－８図６～16，６図１）

口縁部に無文帯があり，胴部の文様は磨消縄文と，刺突文が施されたものである。磨消縄文の方法は沈線で区画したあとに施文されるものと，最初に縄文が施文されず，沈線で区画された後に縄文の施されたものとがある。また区画が沈線だけのもの(11)と，少し段がついたり，隆帯をなすものとがある。口縁は外反するものが多く，２～４つの把手がつくのが多い。又把手の下に円形に区画され，刺突のあるもの，10のように穴があけられてその周囲を刺突するもの，Ⅲ－６図１のように無文帯の部分に刺突されるものなどがある。

第４類土器（Ⅲ－８図17～22）

文様構成は第３類と同様であるが，地文に縄文がなく，区画された中に葉脈状文と刺突文が施されたものである。葉脈状文の沈線が19のように直線をなすものもある。又22のように小形の土器もある。

第５類土器（Ⅲ－９図１～４）

特徴的な文様として，大形で深く施された刺突文（工具を少し斜にして刺しこむ）が施されているものである。頸部に沈線で長方形に区画され，その中に縄文が施されているもの(１)で，胴部上半に刺突文が施されるものであろう。２は口縁部破片で，１，３，４とは違った刺突文が施されている。

第６類土器（Ⅲ－９図５～16，10図９，10）

いわゆる磨消縄文の土器である。区画は沈線と隆帯でおこなわれているもので，第３類と近似するが，刺突のないところが異なる。器形は頸部で少しくびれ，胴部が張るもので一部キャリパー状のくずれた形(10，11)のものなどがある。口縁は平縁か，山形状をなし，その頂部内側に小突出部をつくり出されるのも特徴的である。区画の中には縄文が施されるのが一般的だが，中には羽状をなすものもある(11)。11，12にはススが付着している。

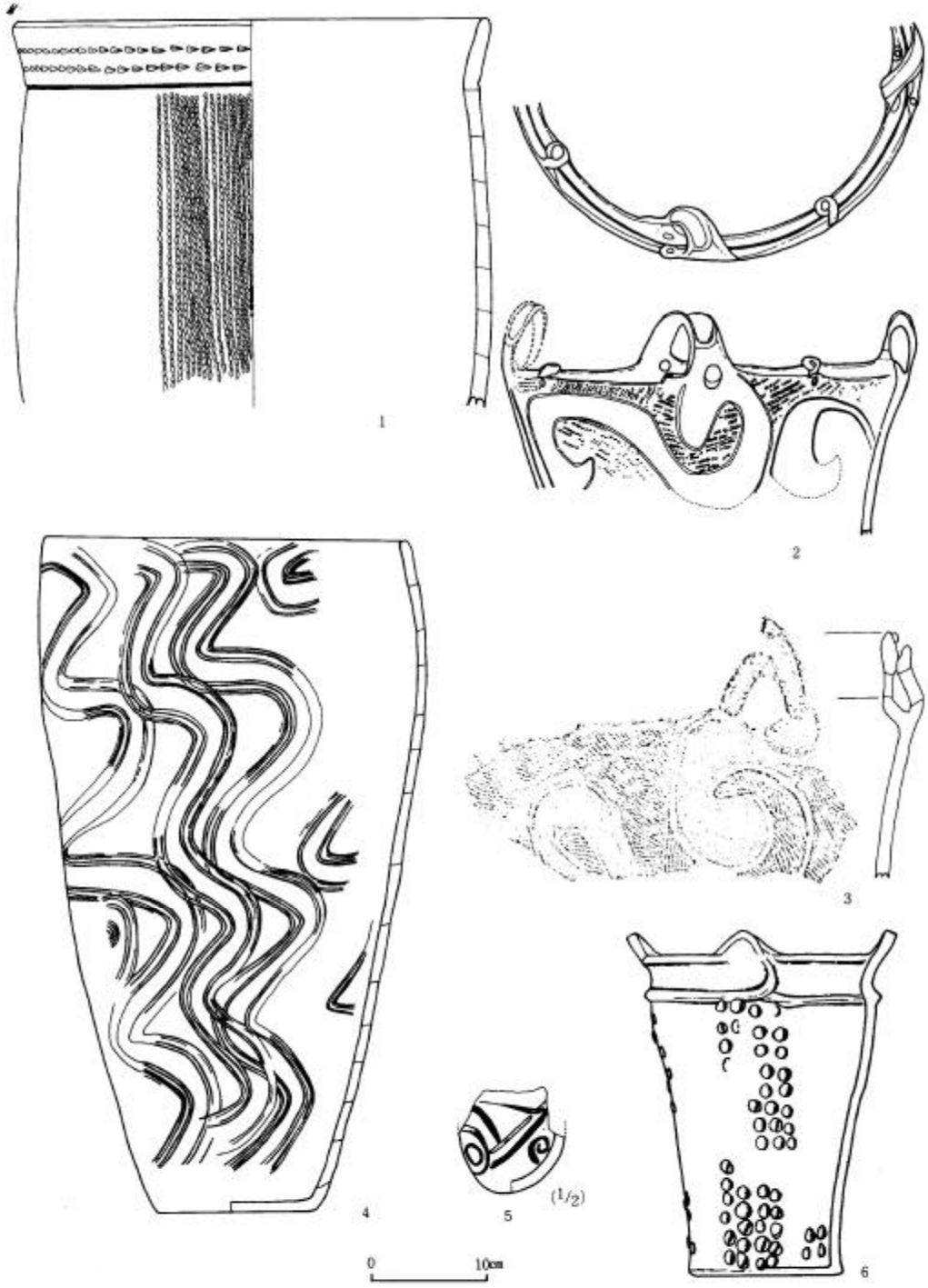
第７類土器（Ⅲ－６図２－３）

口縁部に無文帯がなく，口縁から縄文が施され，磨消された部分はＳ字を横にしたようになっている。口縁に深い溝が走り，それを渡る橋状把手が４個付く，２は把手と把手の間に小さい突起があり，その下に穴があけられ，一見８の字状に見える。３の把手には刺突文が施されている。

第８類土器（Ⅲ－９図17，18）

口縁部に無文帯があり，頸部に粘土紐を貼付けた隆帯が走り，胴部は縄文及び沈線が施されているものである。口縁の器形に特徴がある。17の胴部の文様は沈線で三画形に区画されるようである。

第９類土器（Ⅲ－10図１～３）



Ⅲ－6図　坂ノ上遺跡A地区出土遺物

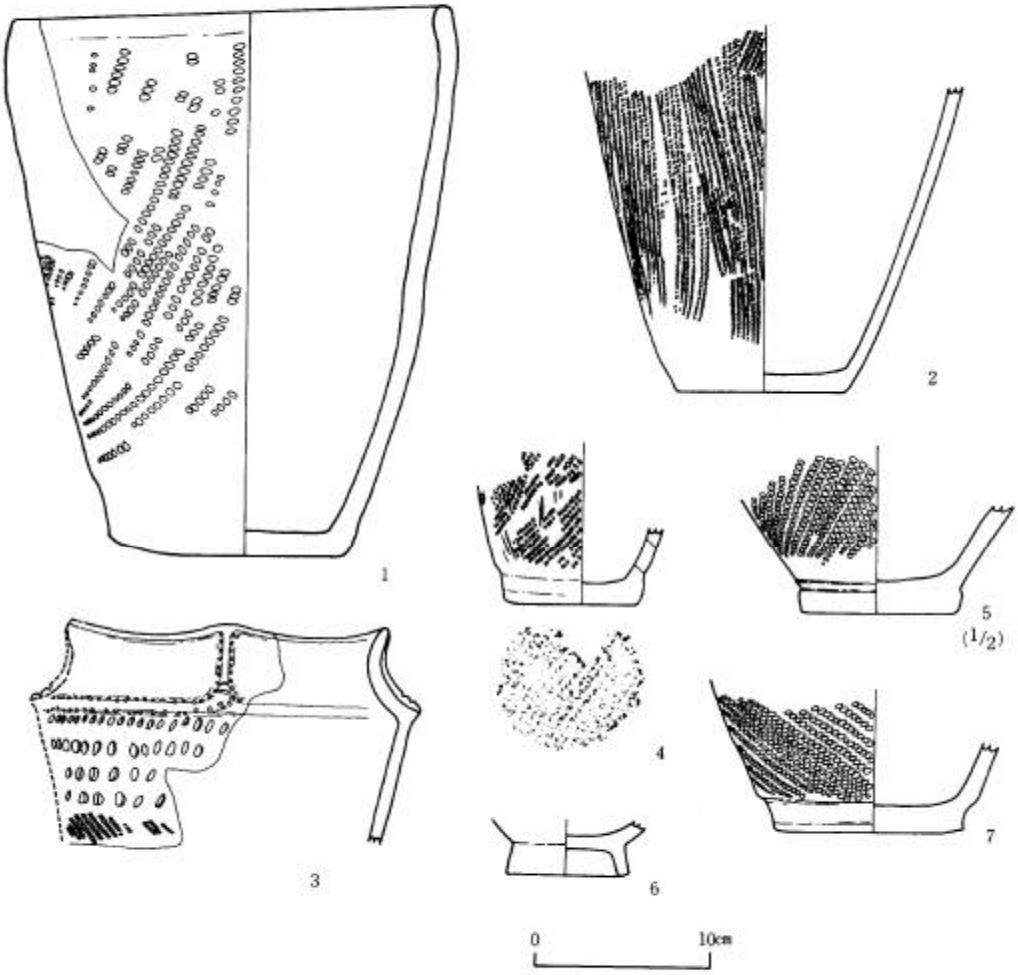
いわゆる十腰内Ⅰ式土器の仲間である。壺形土器の胴部の破片で，色調は黄褐色，褐色をなす土器である。

第10類土器（Ⅲ—10図４～８）

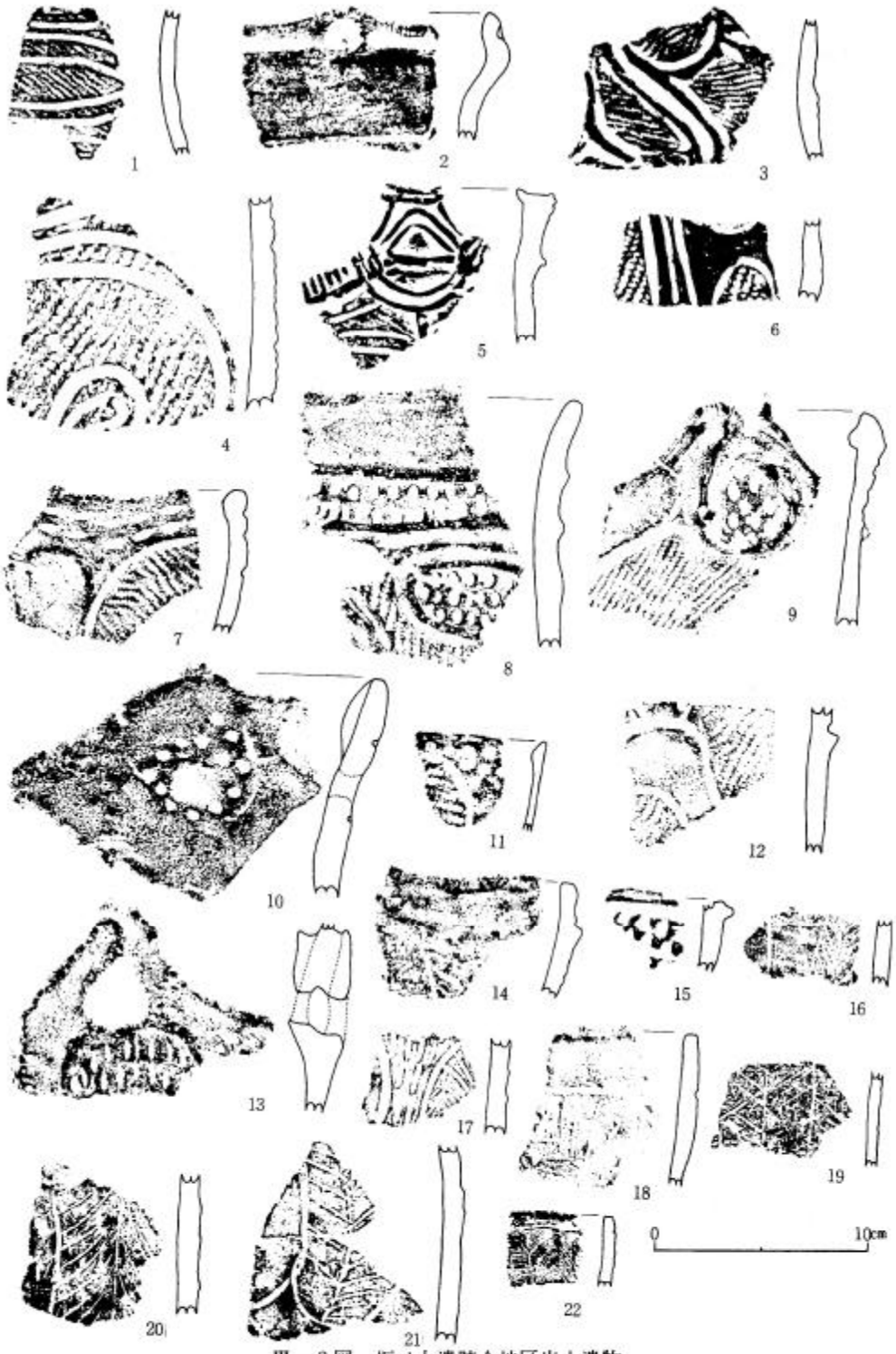
口縁部に無文帯があり，頸部から胴部にかけて幾何学的な文様が施されているものである。口縁部が２～４つの山形口縁をなし，その下に６，８のように８の字様の文様が沈線で施されるのが特徴的である。

第11類土器（Ⅲ—10図11～15，６図４）

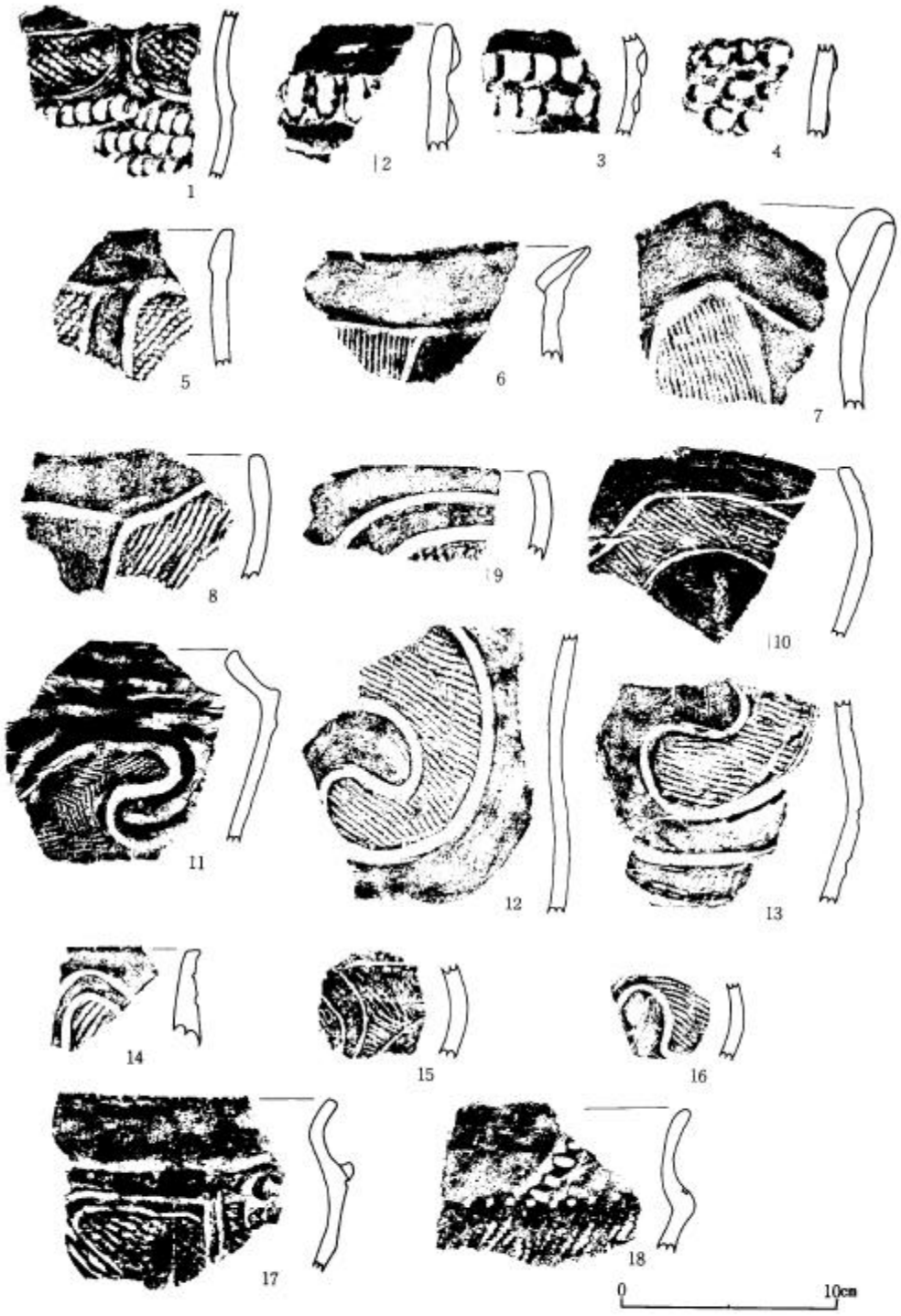
平行沈線によって幾何学的な文様が施されているもので，沈線の中に縄文が施されている(15)。区画された中に施されるもの(13)などがある。12は粗製土器と考えられ，Ⅲ—６図４と同じ仲間であろう。



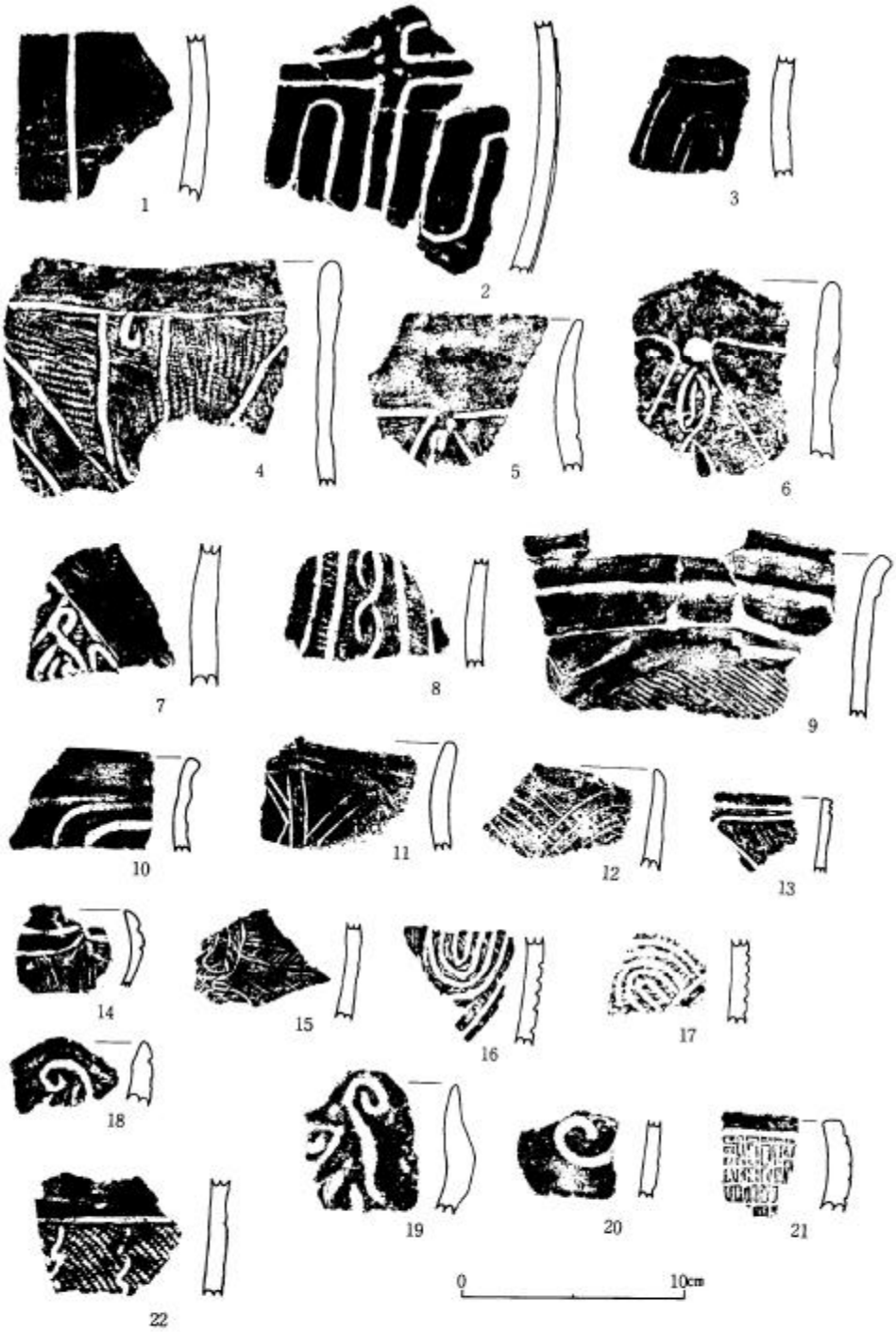
Ⅲ—７図　坂ノ上遺跡Ａ地区出土遺物



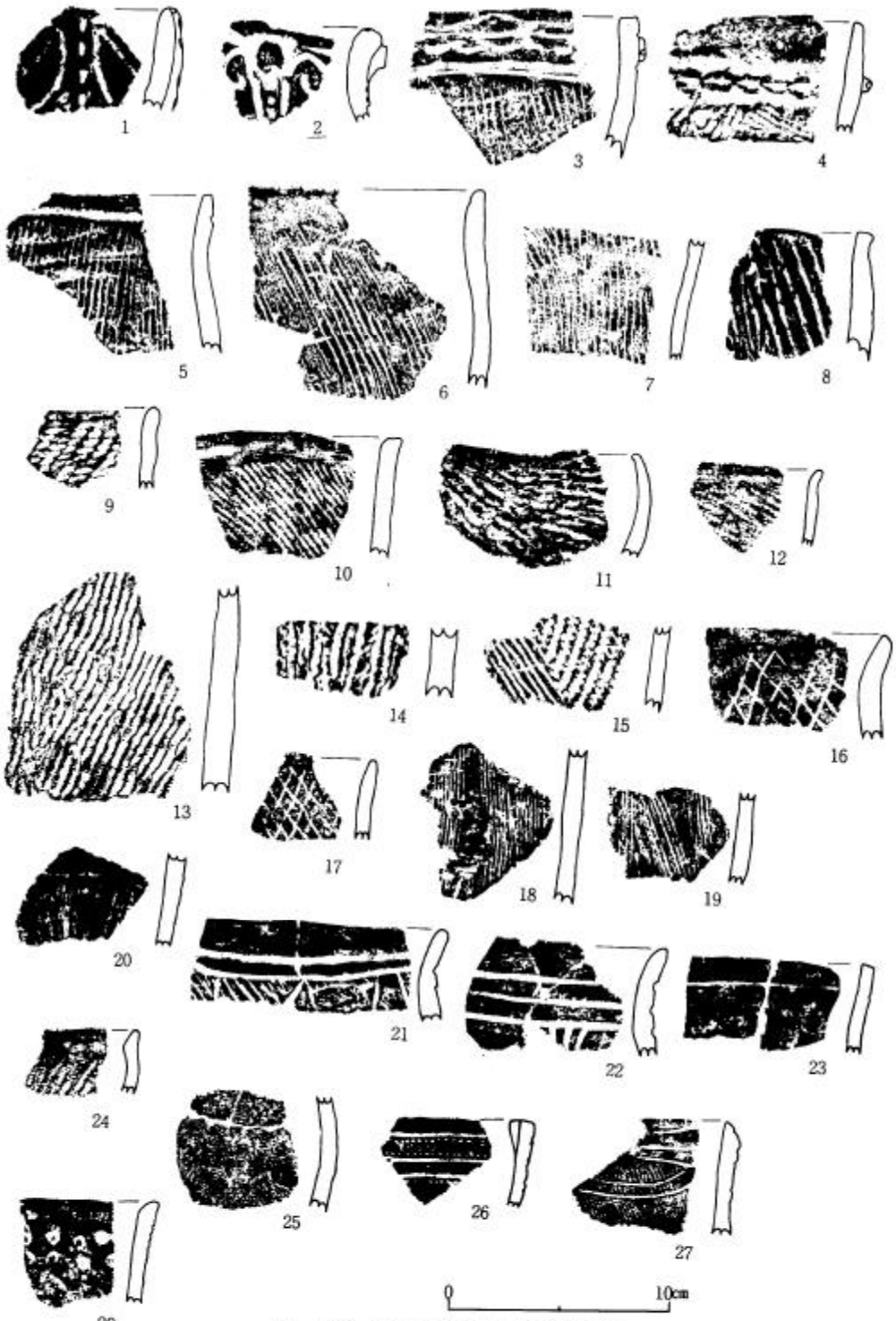
Ⅲ－８図　坂ノ上遺跡Ａ地区出土遺物



Ⅲ－９図　坂ノ上遺跡Ａ地区出土遺物



III—10図　坂ノ上遺跡A地区出土遺物



Ⅲ—11図　坂ノ上遺跡A地区出土遺物

第12類土器（Ⅲ—10図16・17）

地文に条痕文が施され，その上に太い沈線で幾何学的な文様が施されているものである。16，17はいずれも胴部上半の破片である。

第13類土器（Ⅲ—10図18～20，11図1，2）

山形口縁をなし，そこに太い沈線で鉤形の文様が施されるもの(18，9)，又頂部から隆帯が垂下され，その上に刺突文が施されるもの（11図1，2）などがある。

第14類土器（Ⅲ—6図4，7図3）

口縁部はゆるやかな波状口縁をなし，頸部で逆「く」の字に内屈し，口縁で外反する。この部分は隆帯で四つに区画され，その中は無文である。胴部は上半が大形の刺突文（第5類と同様な）が施され，下半には斜縄文が施されているものである。6図6は口縁の突起のある下の胴部に同様な刺突文が縦に4列施されており，他は無文である。

第15類土器（Ⅲ—10図21，22）

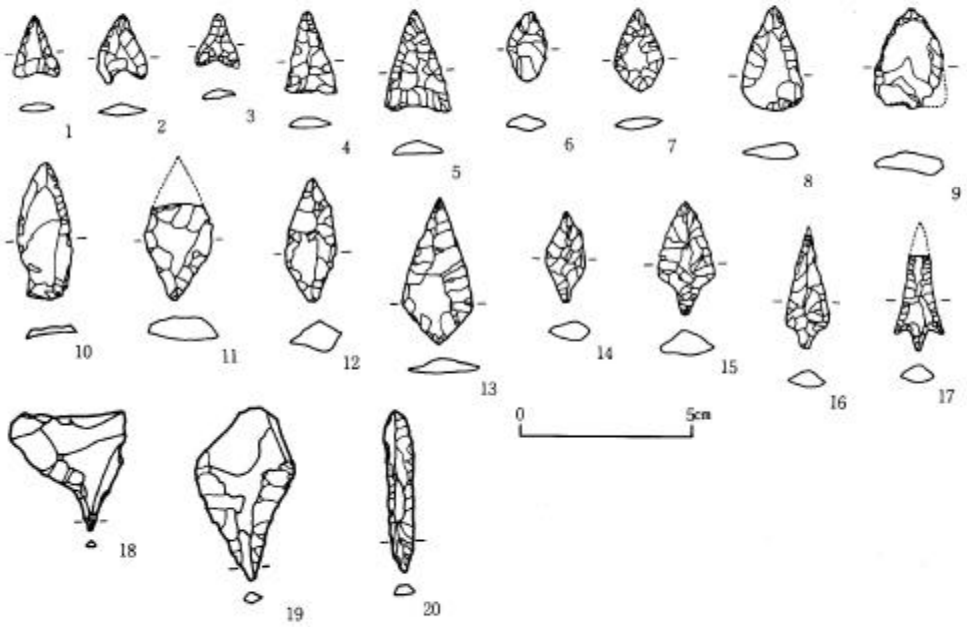
21は口縁部破片でキャリパーをなす。沈線によって格子目文が施されている。

第16類土器（Ⅲ—11図3～20，24）

口縁部に無文帯があり胴部には縄文(13，14，15)，撚糸文(3，5，6，7，8，18，19)，網目文(16，17)，沈線(20)，綾絡文(10図22)などが施されたいわゆる粗製土器である。

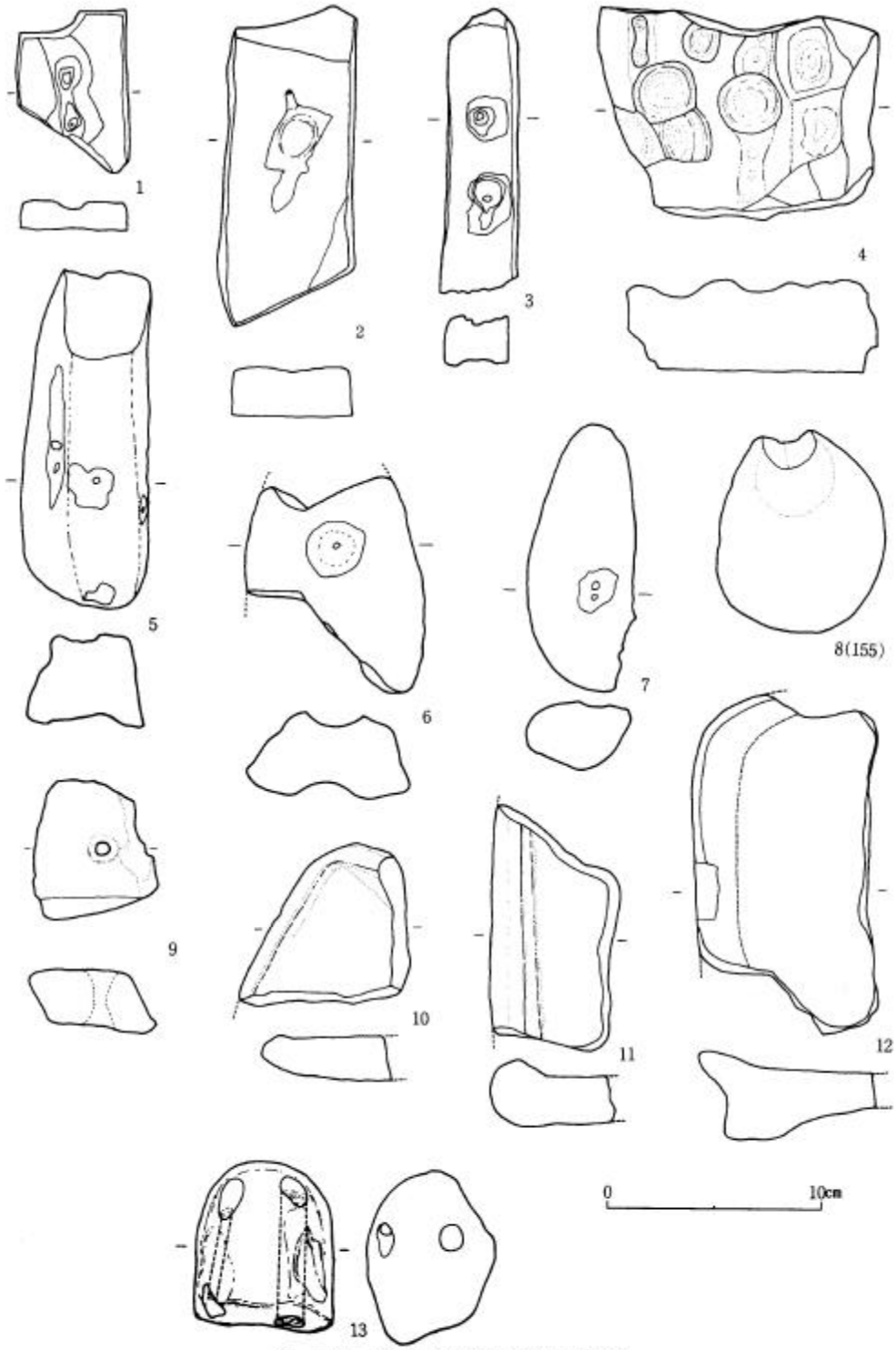
第17類土器（Ⅲ—11図21～22）

口縁部に無文帯があり太い沈線で文様が施され，全体的に肉彫的な感じのする土器である。文様



Ⅲ—12図　坂ノ上遺跡A地区出土石器

Ⅲ—13図　坂ノ上遺跡A地区出土石器



Ⅲ—14図　坂ノ上遺跡A地区出土石器

構成は10類土器と似るものであろう。

第18類土器（Ⅲ—11図23，24）

口縁部から胴部まで非常に細かい縄文が施されたものである。平口縁をなし胴部が少し張る器形をなすものと思われる。

第19類（Ⅲ—11図26，27）

18類同様細かい縄文(26)，撚糸文(27)が施され，沈線によって区画されて磨消されている26と，沈線だけの27がある。地文は11類と似ている。

第20類土器（Ⅲ—11図28）

前期の土器で口縁に円形竹管文が施され，胴部は斜縄文が施されている。

底部（Ⅲ—７図１，２，４～７）

底部は１，２のようにストレートに立上るものと，４，５，７のように低い台を付けたように少し上でくびれるもの，６のように高台のつくものなどがある。

坂ノ上遺跡Ａ地区出土石器・石製品・土製品

石器

石鏃（Ⅲ—12図１～17）

有茎の石鏃が若干多い。ほとんど石質は硬質頁岩である。

石錐（Ⅲ—12図18～20）

石匙（Ⅲ—13図１～９）

縦形の石匙で硬質頁岩である。

掻器（Ⅲ—13図10～12）

エンドスクレイパーと呼ばれるもので片面から加工している。

石ベラ（Ⅲ—13図13～17）

硬質頁岩で，両面加工をして刃部をつくっている。

石錘（Ⅲ—14図８）

Ａ地区出土は１点のみで，河原石を素材とし，一端を打ちかいてある。

凹石（Ⅲ—13図19～23，Ⅲ—14図１～７）

両面にくぼみをもつもの片面だけのものがある。１，３は泥岩でやわらかい。４は破損しているが，全面にくぼみをもつ。

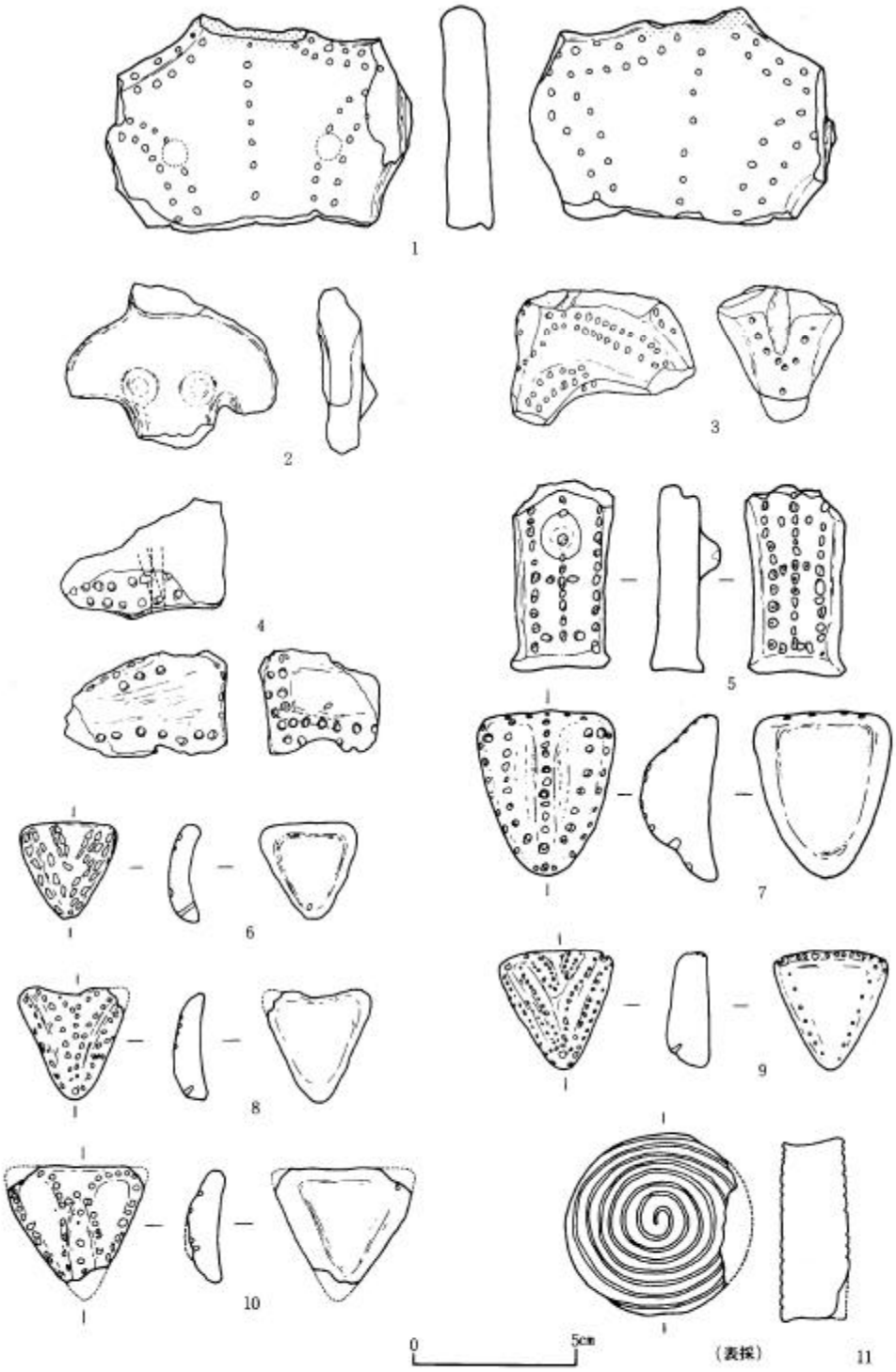
磨製石斧（Ⅲ—13図18，24～26）

石質は片岩，泥岩，安山岩で，25は器面に擦痕が著しく残っている。

石皿（Ⅲ—14図10～12）

３点とも欠損している。12は脚をもつ石皿で石質はいずれも凝灰岩である。

石製品



III—15図　坂ノ上遺跡A地区出土土偶・土製品

有孔石製品（Ⅲ—13図９）

一部欠損している石製品で中央に穴が両面から穿れている。石質は凝灰岩である。

自然遺物（Ⅲ—13図13）

配石面で出土した遺物で，河原石を利用したものと思われ，二つの穴が貫通している。用途は不明であるが，笛のように吹いてみると非常に良い音を出して鳴る。石質は硅質泥岩で，重さは 370 g である。

土製品

土偶（Ⅲ—15図１）

板状の土偶で，頭部，両腕部，下半分は欠損している。正面と背面に刺突文が施され，首部にアスファルトが付着している。これは一度とれた頭部を接着したものであろう。乳部はなくなっているが，その痕跡が認められる。両肩部に貫通の穴が認められる。

土偶（Ⅲ—15図２）

Ａ地区住居跡（12Ｂ１，７Ｂ１）内から出土したもので，板状土偶である。頭部，両腕部，下半分が欠損しており，乳部は残って胴部は次第に細くなるスマートな土偶である。

土偶（Ⅲ—15図５）

板状の小形の土偶で正面，背面に直線的に区画された刺突文を施こし，性器と思われる盛り上りを中央部に貼りつけ中に刺突がある。上半分は欠損のため不明である。

立体土製品（Ⅲ—15図４）

欠損しているため３面より確認できないが，おそらく５面をもつ三角体の土製品と思われる。刺突が施文され，互いに反対側から穴が二つ穿たれている。

三角形土製品（Ⅲ—15図６～10）

坂ノ上遺跡では三角形土製品は５点出土している。大きさは３cm～５cm前後のもので，６は多截竹管状の工具で正面，側面に斜め方向からの刺突があり，三角形の下の頂点に貫通する穴が一つある。背面はくぼんで色調は褐色である。７は一辺４cm，他の二辺５cmで正面中央部が盛り上り，突出し，竹管状の工具による刺突が側面と中央に一列施され，三角形の各頂点に他の刺突より深い刺突がある。背面はくぼんで色調は黄灰色である。８は各辺が若干，内湾するもので正面，側面に竹管状の工具による刺突があり，Ｖ字状に盛り上りがみられる。三角形の下の頂点に斜めに他より大きい刺突が施されている。背面はややくぼんで色調は黄灰色である。９は正面，側面に竹管状の工具による刺突が施され，背面縁辺にも刺突がある。８と同じように正面にＶ状の盛り上りがみられ三角形の各頂点に斜めから他より大きい刺突がなされている。背面は平らで色調は黄灰色である。10は各頂点が欠損している。正面に７と同じように突出する盛り上りがありハート形に竹管状の工具による刺突が施されている。背面はくぼんで色調は黄灰色である。

滑車形耳飾（Ⅲ—15図11）

表採資料である。一部欠損し，両面に沈線による渦巻文が施されている。色調は褐色である。

その他の土製品（Ⅲ—15図３）

土偶の脚部とも考えられるが，大部分が欠損しているため不明である。欠損部に各方向から竹管状の工具で穴を穿った痕がみられる。

第３節　結　　び

坂ノ上遺跡の土器については第Ⅳ章第４節で触れてあるので，ここでは遺構を中心に簡単に述べてみたい。台地全体23カ所のグリッドを調査した結果，配石面は表土から約40cmの深さで確認され，その分布は三角点を含む台地の微高地がその主な範囲と考えられる。配石遺構および配石下遺構の時期は縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての時期である。No.１～No.７まで検出した小竪穴からは焼土，炭化物，骨片等が出土している。はっきりした性格，広がりについては今後の調査によらねばならないが，埋葬施設としての可能性も考えられる。Ⅲ—２図のように配石そのものに規則性はみられない。すなわち，配石下の住居跡，土壙，小竪穴遺構との各々の関連は把握できないが，遺構全体と配石の関連を考えるのが妥当かも知れない。住居跡として確認されたのは３軒であるが，特に，12Ｂ１，７Ｂ１グリッド内の住居跡は火災を受けた住居のようで，$\frac{1}{4}$程度の調査をしただけであるが，壁際に炭化材が検出されている点などから，今後の調査によっては家屋構造の解明に役立つものと思われる。配石を伴なうグリッド内に住居跡と思われる壁，ピット等がみられる所が３カ所あった。それに11Ａ10グリッド内に確認された大小の土壙群は袋状ピット，フラスコ状ピットに分けることができ，この土壙群はまだ広がる可能性がある。

この遺跡は全体に土壌を層位的に分けることが困難で，耕作土，暗褐色土（遺物包含層）に大別され，遺物(土器片)の量が非常に多く，下堤遺跡の６次にわたる調査の遺物に匹敵するほどの量であった。これは遺跡の性格を知る上で注意されなければならない。特に遺物の中に土器片を利用した，円板状の土製品(図版35～37)がかなり出土している。遺跡の北側に隣接する下堤遺跡Ｂ地区との関連が時期的に場所的に強く，「居住の動き」などが考えられる。

11Ｃ２グリッド，No.２小竪穴遺構出土炭化物

C_{14}年代

測定値　：4370±260 B.P.

測定番号：G_ak—5370

測定者　：木越邦彦

第Ⅳ章　坂ノ上遺跡Ｂ地区

第１節　Ｂ地区の概観

Ｂ地区は，Ａ地区の南側に位置し，最初Ｃ地区と呼んだ所も含めている地区で，Ａ地区に最も近い所は昔からの古い畑地でその意味では，Ａ地区より遺構の破壊状況はひどい所である。やはり，Ａ地区同様，台地西端からの見晴らしは良好で，標高は下堤遺跡，坂ノ上Ａ地区とほぼ同じである。ただ最も南端に位置する台地(Ｃ地区)は平坦な場所は少なく，雑林，竹やぶで西方向に傾斜している地区で，遺構，遺物はほとんど無かった所でもある。Ｂ地区の時期は縄文時代前期後葉が主体のようで，晩期の遺物もみられ，この坂ノ上台地における土地利用または居住変遷のあり方等も課題として示されている地区である。

第２節　遺構と出土遺物

遺構について

前述したようにＢ地区は畑作物による長年の攪乱のため，今回，分布調査した限りでは，ほとんどのグリッド内で遺構破壊が認められ，良好な状態ではないことがわかった。が６Ａ10，７Ｆ10グリッド内に10個程度のピットが検出され，13Ａ７グリッド内には土壙らしき遺構も認められている。層位は全体的に第１層黒色土(耕作土)，第２層暗褐色土(粘性あり，遺物包含層)，第３層ロームに分かれる。特に，北西端の５Ｆ８グリッド内で地表から約22cmの深さで，石棒が立ったままの状態で発見された。他に遺構は認められず，この石棒の周りに四つのピットがあり，石棒との関連が提示された。

Ｂ地区の最南端の区域は全く遺構は認められず，僅かに遺物が出土した程度で，これはこの地域の地形的な理由によるものであろう。

出　土　遺　物

土器（Ⅳ－１図１～34）

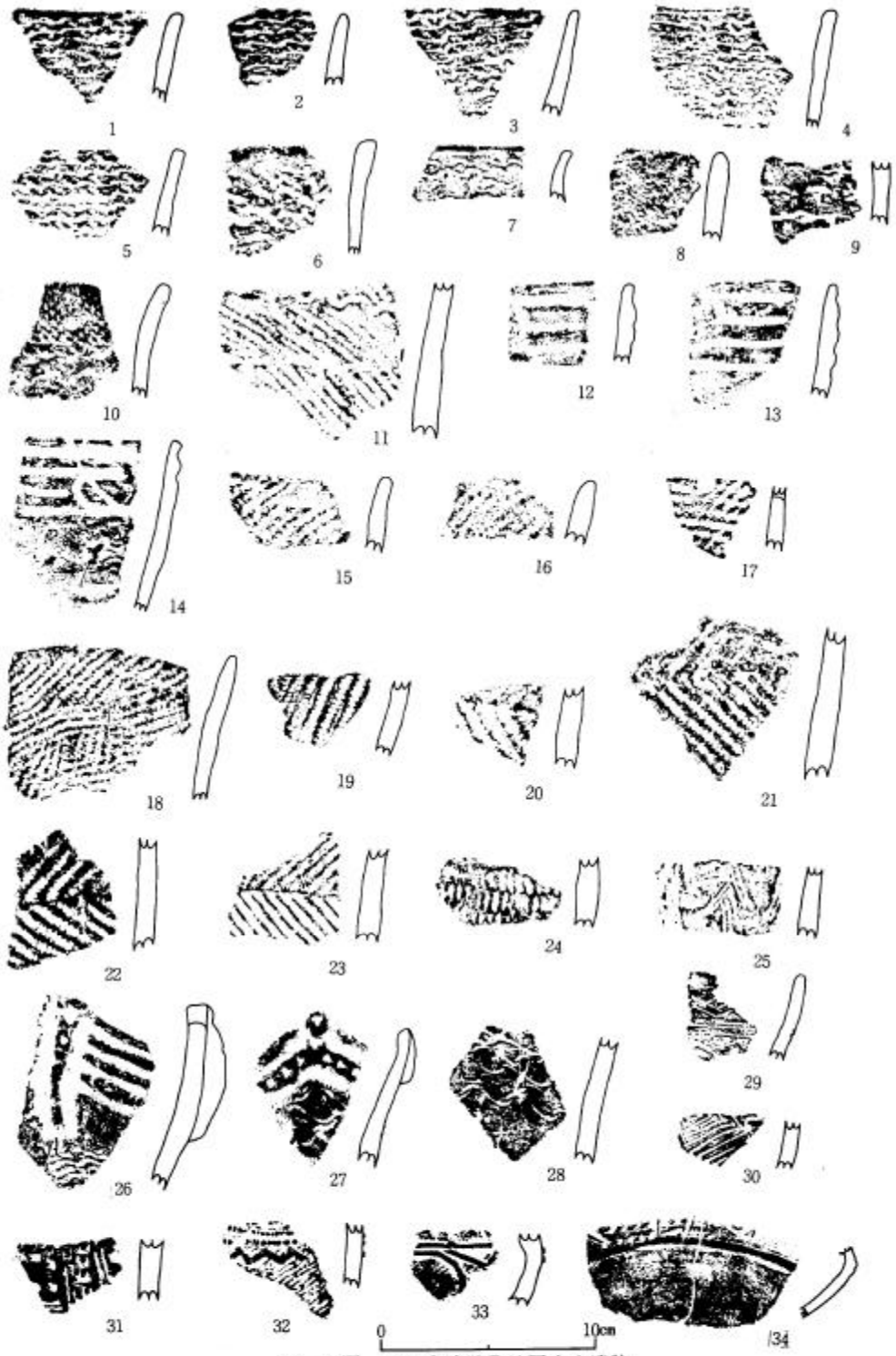
Ｂ地区から出土した遺物は縄文時代前期の土器が主体をなし，晩期のものが少しある。

第１類土器（Ⅳ－１図１～11）

口縁部及び胴部に綾絡文のある土器である。胎土に繊維を多く含む。器形は深鉢か円筒形をなすものと思われる。10のように口縁部に斜縄文の文様帯があり，その下胴部に間隔のある綾絡文が施されているものである。土器の色調は黒灰色のものが多く，黒褐色をなすものもあり，焼成は普通。

第２類土器（Ⅳ－１図12～14，26）

口縁部に太い沈線が４本，口縁と平行に施され，胎土には少し繊維を少し含むものである。26も同一個体と考えられる。山形の突起があって，その頂部から口縁部まで粘土紐を貼りつけ，その上に刺突がある。胴部には綾絡文が施されている。色調は黒褐色をなし，焼成は良好。



Ⅳ－1図　坂ノ上遺跡B地区出土遺物

第３類土器（Ⅳ－１図15～19）

縄文を主体とするものである。胎土には繊維を含み(18は含まず)，15，16は口縁部まで縄文が施され，原体はＬＲの単節縄文が多い。18は底部の径に比較して，口縁径が広くなる鉢形を呈すものと思われる。色調は暗褐色で，焼成普通。

第４類土器（Ⅳ－１図20～23）

羽状縄文の施された土器である。胴部だけの破片である。胎土に繊維を含む。20，21は結束した原体を回転して羽状縄文を施している。22，23はＬＲ－ＲＬの順に回転して羽状縄文をつくっている。23の上の原体はＬ$\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$$\left\{\begin{matrix}\ell\\\ell\\\ell\end{matrix}\right.$と思われる。色調は暗褐色で，焼成普通。

第５類土器（Ⅳ－１図24，25）

文様は異なるが原体が絡条体であることでこの仲間とした。胎土に繊維を含む。24は多軸の絡条で，平織状をなし，25は単軸で，いわゆる木目状撚糸文で，原体はＲである。色調は24は褐色，25は暗灰色で焼成普通。

第６類土器（Ⅳ－１図27，28）

口縁に平行に太い粘土紐を貼付け，その上に刺突が施され，胴部にはＳ字状連鎖沈文が施されている。胎土に繊維を少し含む。口縁は大きな波状口縁をなし外反する。色調は暗褐色で，焼成は良好である。

第７類土器（Ⅳ－１図29～32）

竹管文によって文様が施されたものである。胎土に繊維は含まない。29は口縁部の破片で，半截竹管で口縁に平行に沈線文が横位及び連続山形文が交互に施されている。32は地文に縄文が施され，その上に粘土紐を貼付けて，さらにその上に細かく半截竹管文が施されたもので，いわゆる吹浦式土器である。

第８類（Ⅳ－１図33）

地文は無文で，粘土紐を貼付けた土器で，胎土に繊維を含まない。色調は黄褐色で，焼成は普通。

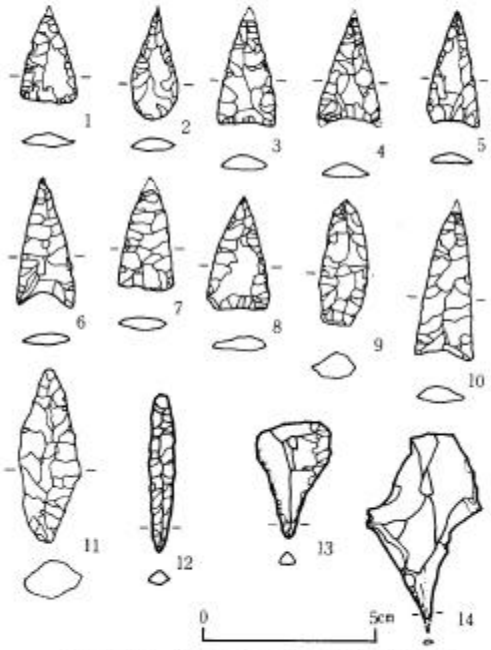
第９類土器（Ⅳ－１図34）

縄文晩期の土器である。注口土器の腰部から底部にかけての土器片で，腰部にシダ状文が施されている。

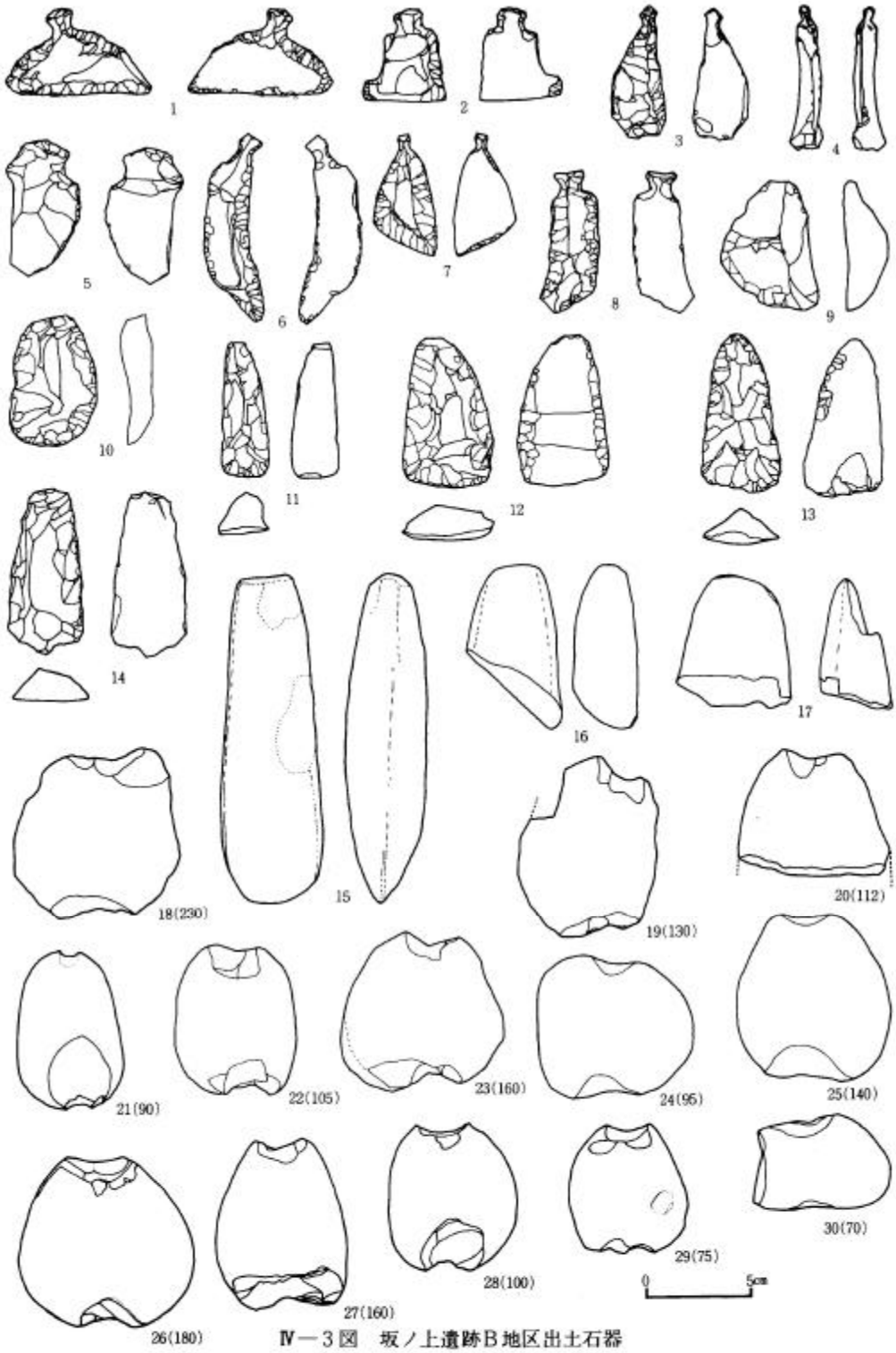
坂ノ上遺跡Ｂ地区出土石器・土製品

石器

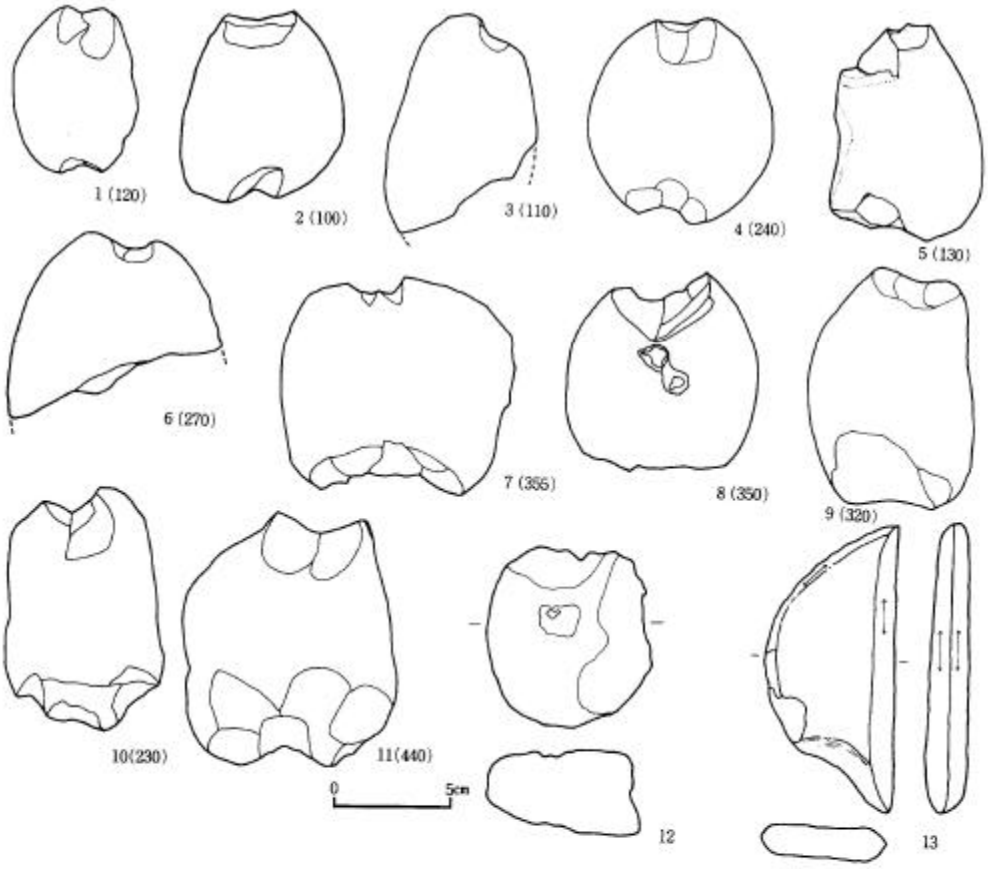
石鏃（Ⅳ－２図１～11）



Ⅳ－２図　坂ノ上遺跡Ｂ地区出土石器



Ⅳ－3図　坂ノ上遺跡B地区出土石器



Ⅳ－4図　坂ノ上遺跡B地区出土石器

無茎のものが多い。石質は硬質頁岩である。

石錐（Ⅳ－2図12～14）

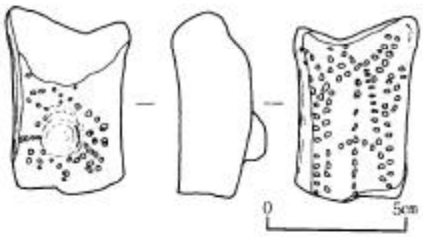
硬質頁岩。

石匙（Ⅳ－3図1～8）

縦形のものが多い。石質は硬質頁岩である。

掻器（Ⅳ－3図9～10）

エンドスクレイパーと呼ばれるもので，片面から加工している。硬質頁岩。



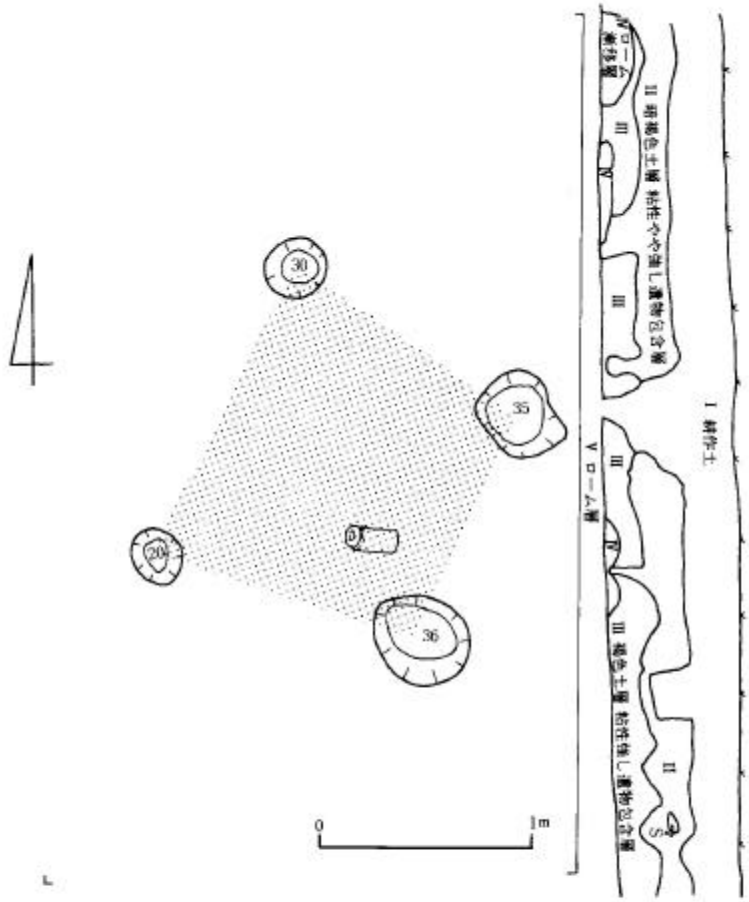
Ⅳ－5図　坂ノ上遺跡B地区出土土偶（表採）

石ベラ（Ⅳ－3図11～14）

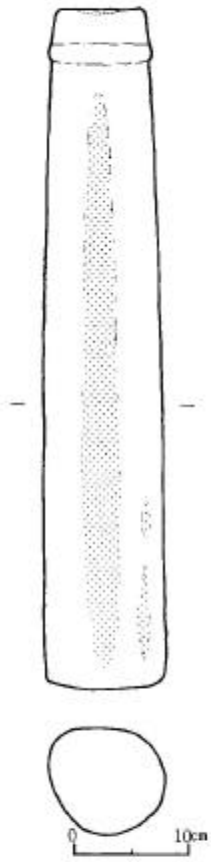
硬質頁岩。

石錘（Ⅳ－3図18～30，Ⅳ－4図1～11）

坂ノ上遺跡では最も多く出土している石器で，河原石を素材にし，両端を打ちかいてある。8は



Ⅳ－6図　坂ノ上遺跡Ｂ地区，５Ｆ８グリッド内遺構図



Ⅳ－7図　坂ノ上遺跡Ｂ地区出土石棒

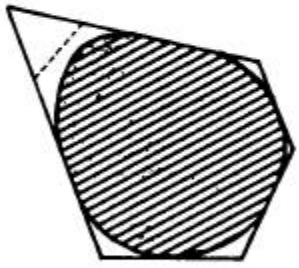
凹石としても使用されている。

凹石（Ⅳ－4図12）

両面にくぼみをもつが，片面のくぼみは浅いものである。

半月形石器（Ⅳ－4図13）

いわゆる半月形の石器で側縁は磨ってあり刃部はＶ字状になっている。青竜刀形石器に類似した石器で石質は凝灰岩である。



Ⅳ－8図　石棒原石想定図

土製品

土偶（Ⅳ－5図）

表採の土偶である。板状の小形土偶で，Ⅲ－15図5の土偶と同形態で正面に性器と思われる盛り上りがあり，その周りに渦巻状に刺突を施している。背面にも刺突があり，胴上部は次第に広がるようだが欠損のため不明である。

第3節　石棒について

前述したように，この石棒はB地区5F8グリッド内から発見されたもので，北西方向にゆるやかに傾斜している台地の西端部である。石棒は地表から僅かに約22cmの深さで出土したため発掘時，頭部に多少，スコップ等による損傷があるが完全な形のものである。

石棒は土圧等により西へ73°傾斜して出土した(本来は真直，立っていたと考えられる）形状は単頭で，頭頂部から約3.5cmの所で段状の鍔をもち，頭頂部は平らで丸い凹部がある。下部になるにしたがい太く，長さは58cm，最大径10.5cm，重さ9.8kgを測る。(Ⅳ－7図)石質は流紋岩(石英粗面岩)である。この石棒は約10cm埋った状態で確認され，石棒のまわりに四つのピットを検出した他は遺構は確認されなかった。(Ⅳ－8図）石棒から北西方向1mの位置に磨製石斧1個と頁岩の砕片が少量出土(5cm～10cm浮いた状態)している。

この石棒は，不正五角形または六角形を呈する柱状節理の流紋岩を利用して作られており五(六)つの角部は，面取りを行ない，丸く磨って作っている。(Ⅳ－8図）磨っていない部分(平らな部分)は褐色の光沢のある自然面が残されている。

流紋岩の原産地としては，秋田県河辺郡河辺町三内に所在する筑紫森が考えられる。筑紫森は遺跡から最短距離(岩見川沿い)にして約52kmであり，他に遺跡付近に流紋岩(柱状節理)の産する場所はない。この筑紫森は海抜 391mで山全体が流紋岩で形成され，国指定天然記念物となっている。この岩脈の特徴は柱を積み重ねたような横臥柱状節理を示し，その最も顕著な場所は千本極(たぼ)と呼ばれている。

以下この石棒に対する考察を述べると，

イ　全面的な発掘調査ではない恨みは残るが炉，周壁等がみられず，住居跡内（他遺跡でみられる石棒に関連すると思われる石壇や埋甕，伏甕等の遺構，遺物はない）に存在した石棒とは考え難い。

ロ　むしろ，石棒を覆う構造の施設があり（石棒は埋められている）単独の施設で，周りの四つのピットはそのための柱穴と考えられる。

ハ　この遺構のある場所は全く台地の突端部である。(住居跡群のあり方はこの分布調査では明確にできなかった)

ニ　石棒は，建物(施設)の中央には位置していない。(Ⅳ－6図）これは何らかの，石棒に対する信仰儀式等の行為のためのスペースであるかも知れない。

ホ　石棒そのものは，形状等からして，今まで男根を象徴し，性器崇拝の対象物とされてきた（異説もあるようだが)が，以上のような点からも，その可能性が強いと解釈していいと考える。

第4節　結　　び

坂ノ上遺跡A地区，B地区から出土した遺物を簡単に紹介したが，A地区からは中期末から後期初めにかけての土器が，B地区からは縄文時代前期の土器が発見されている。調査は分布調査を目的としたために，遺構からまとまって出土したものではなく，また層位的にも確認したものでもない。したがって編年的な考察には情報不足である。しかしA地区出土の遺物の時期は秋田県に於いて不明確な時期であるので，ここでは情報不足を承知で若干の考察を試みたい。

A地区

A地区から出土した土器はそのほとんどが中期末から後期初めのものであることは再三記述したとおりである。これらの土器群から特徴的，主体をなすものとして大きく4群に把握することが可能であろう。

坂ノ上A1群土器としては第6類土器に代表される土器群である。磨消縄文が主体をなし，器形は平口縁か，波状口縁をなして外反し，胴部が少しくびれた深鉢形をなすもの，口縁がキャリパー状をなすものとがある。

坂ノ上AII群土器としては第3類土器に代表される土器群である。磨消縄文と，刺突文が主体をなし，器形は口縁に2～4つの把手がついて外反し，腰部から底部にかけて急に細くなるものであろう。第4類土器もこの仲間としてよいものであろう。

坂ノ上AIII群土器としては第7類土器に代表される土器群である。これには口形，口縁などの特徴から第8類土器，第14類土器この仲間としてよいであろう。口縁部に無文帯がなく，縄文と磨消縄文（S字を横にしたような磨消し）が主体をなし，器形は口縁に深い溝が走り，それを渡る橋状把手が4個付き垂上に立上り，口縁部が一番広く，底部に行くにしたがって狭まり，腰部から底部にかけては筒形に近い形となるものである。

坂ノ上AIV群土器は第10類土器に代表され土器群である。口縁部に無文帯があり，頸部から胴部にかけて幾何学的な文様が施されるもので，器形は平口縁をなし深鉢を呈すものが多い。

以上の四つの土器群は型式として把握することが可能のように思えるが，このような土器群が，当地域に於いて発見された例が少ないので，資料の増加をまって改めて型式についてまとめたいと考えている。

これらの土器群を他地方の型式に比定すると次のようになるものと考える。

坂ノ上AI群土器は大木10式土器の古い時期。

坂ノ上AII群土器は大木10式土器の新らしい時期。

坂ノ上AIII群土器は門前式の時期。[1)]

坂ノ上AIV群土器は西ノ浜貝塚第3層出土の土器。[2)]

これらの土器群前二群の土器は中期末のもので，後の二群の土器は後期初頭のものである。坂ノ上AIII群の仲間とした第14類の大きな刺突のある土器は新潟県の三十稲場式にある刺突文と非常に

よく似ている。[3] これら北陸の土器との関連，又，第９類とした十腰内Ⅰ式土器が，どの土器群に伴なうものであるのか，など多くの問題が残っている。

Ｂ地区

Ｂ地区出土の土器は前述したとおり前期の土器が主体をなす。これらの土器を所謂大木式土器の型式に対比すると第１類土器は大木２ａ式に，第２類，第６類土器は大木２ｂ式に，第７類土器は大木６式土器になるであろう。他の３，４，５類土器は大木２ａ，２ｂ式期にある縄文及び羽状縄文土器である。

この時期の遺跡としては秋田市の児桜貝塚がある。

1)　吉田義昭　「門前貝塚」　1960

2)　後藤勝彦　「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」　1967

3)　中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」

底部の文様（Ⅳ－９図）

下堤遺跡，坂ノ上遺跡，Ａ，Ｂ地区から発見された土器の底部には網代などの文様のあるものがある。それらの主なものを紹介したい。

1　簀子状の編物痕のあるもの。（１～５，７）経の条と緯の条が間隔が違っていて，緯の材のくくりが二本の材で撚り合わされているものである。１～５は下堤遺跡，７は坂ノ上遺跡Ａ地区出土である。

2　「二本超え，一本潜り，一本送り」に編まれたもの（８，９，13，20）。８，９，13は坂ノ上遺跡Ａ地区，20はＢ地区出土。

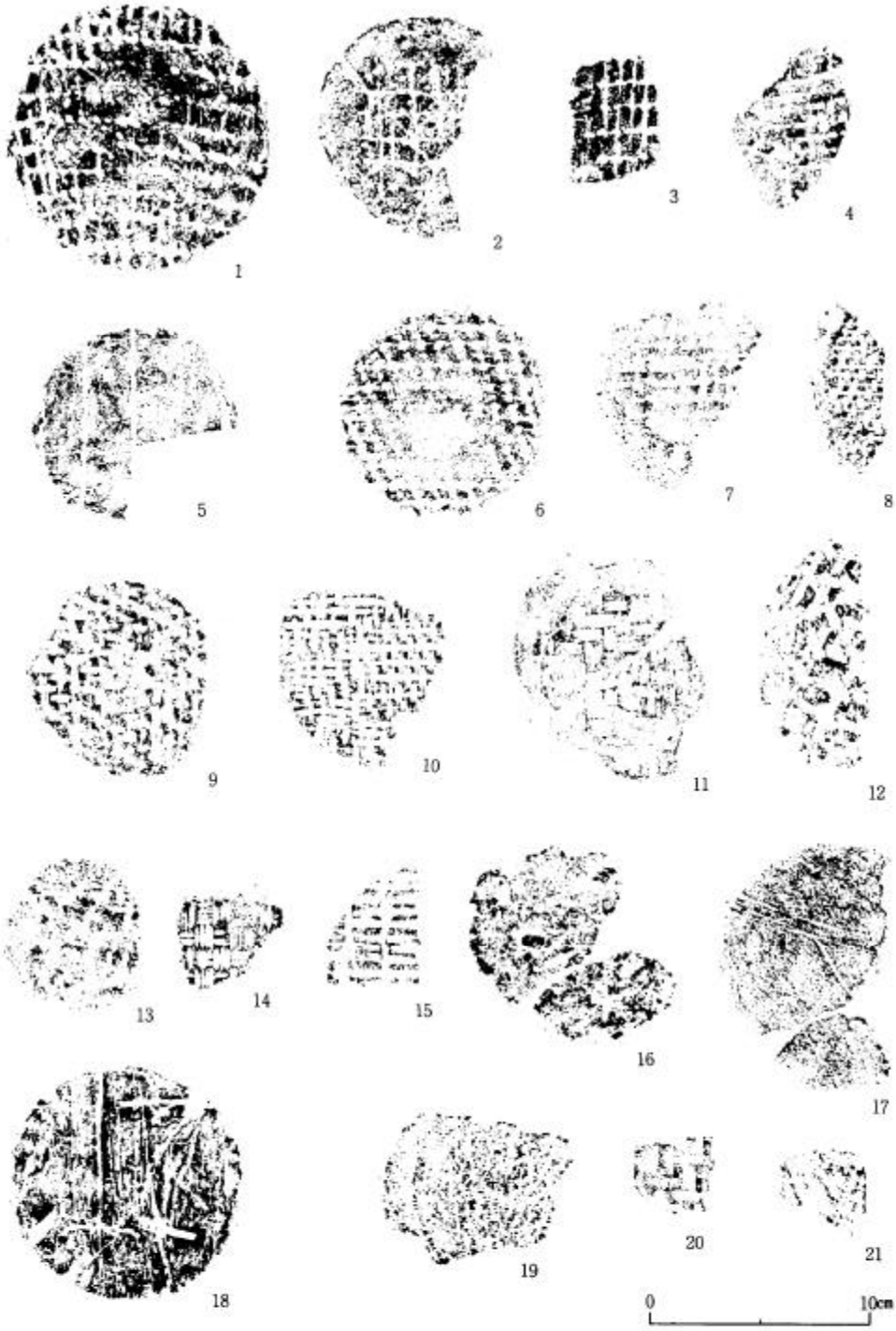
3　「二本超え，二本潜り，一本送り」に編まれたもの(11)。坂ノ上遺跡Ａ地区出土。

4　「三本超え，三本潜り，一本送り」に編まれたもの(10)。坂ノ上遺跡Ａ地区出土。

5　三方編みのもので，「一本超え，一本潜り，一本送り」の編みでできたものに，さらに一本送りで交叉したところを超潜して作ったもの(12)。坂ノ上遺跡Ａ地区出土。

6　その他14のように送りの本数を三本，四本五本と変えたもの，15のように簀子状の編みであるが，三本超え，二本潜りとして編んだものがある。いずれも坂ノ上遺跡Ａ地区出土。

7　他に縄文の施されたもの(19，21)，木の葉，笹の葉様の文様があるもの(17，18)がある。19，21は坂ノ上遺跡Ｂ地区，17，18はＡ地区出土である。



1～5　下堤遺跡　　6～18　坂ノ上遺跡A地区　　19～21　坂ノ上遺跡B地区

Ⅳ－9図　下堤・坂ノ上遺跡出土，土器底部痕

結　　語

下堤遺跡及び坂ノ上遺跡の調査については前各章で報告したとおりである。これらの大きな遺跡を含めて，この四ツ小屋の東側にある台地には各時代にわたって，多くの遺跡がある。それを年表にすると次の表のようになる。

年代	縄文時代					弥生時代	古代
	早期	前期	中期	後期	晩期		
遺跡名	?	坂ノ上遺跡B ……	下堤遺跡A 下堤遺跡B	坂ノ上遺跡A 小阿地23遺跡	地方遺跡 末戸台	末戸台⑤ （地蔵台遺跡）	小阿地古墳 下堤遺跡C

（注　秋田市教育委員会「第３次下堤遺跡調査概報」　1971年３月）

これを見ると早期の遺跡がないだけで，縄文時代から，弥生時代，古代にわたってこの台地に，あるいは周辺に人が住み生活していたことになる。

早期の土器は昭和30年代にこの台地から採集されており[1]，われわれの調査で発見できなかっただけで，今後発見される可能性は充分にある。

各遺跡はこの広い台地のそれぞれよい場所を選定して利用し生活している。後期後半の遺跡だけが南西の一段低い台地を利用している他はほとんど台地上を利用している。後期のコブ付土器の時期になると一般的に低い台地や沖積地の自然堤防などが生活の場所として利用されるようになる。八郎潟の南岸の砂丘地に人が住むようになるのもこの時期以降であり[2]，生活する場所の変化がこの時期頃にあったことが考えられる。

小林達雄氏が多摩ニュータウンの遺跡調査の結果から遺跡に六つのパターンのあることを確認した。その内容は次のとおりである。[3]

Aパターン

非常に広い平坦な土地に占居していて，住居跡がたくさんかたまってあり，土器型式は三型式以上にわたって継続していて，定住地となっている場合。

Bパターン

平坦部がやや狭いが，中央広場があり，Aパターンと同様住居跡の数も多いが，土器型式は先後のものも認められるが，一型式限りで完結している場合。

Cパターン

家が数軒以下で，広場はなく，遺物量はそれほど多くない。

Dパターン

斜面に立地し，住居跡のないもの。

Eパターン

A～Dから離れて独立的に存在する墓地，デポ，土器製作用粘土の採掘跡，石器原材の採掘跡，石器製造跡など。

Fパターン

その他の遺物，遺構などの実体として，確認しえないが，一晩だけのキャンプ地とか道，狩猟，採集の場などを想定しうる。というものである。

このようなパターンの把握は多摩ニュータウンの詳細な分布調査と精密な発掘調査の結果からおこなわれたものである。このような遺跡の把握の仕方と実例は，実際に発掘調査しない遺跡でも，分布調査なり範囲確認調査あるいは遺跡の所在する地形からある程度の帰納を可能にした。

下堤遺跡，坂ノ上遺跡の場合は下堤遺跡A，坂ノ上遺跡Aは広い平坦地をもち，三～四型式の土器型式が認められる。中期の下堤Aの時期（大木7b～大木8b）竪穴住居跡が建替，増築，新築などが何回か行なわれたと見えて，住居跡が幾重にも重っている。これはこの時期の代表的な遺跡の一つである一丈木遺跡[4]に於いても認められる事実で，Aパターンの代表的な遺跡といえるであろう。

また時代は少し下がるが，晩期前半の地方（ちかた）遺跡は広い面積をもち，土器多数の他，土偶，亀形土製品，石棒，土面，それにヒスイの玉が多く発見されており，玉を製作していた可能性があり，この遺跡もAパターンと認めてよいものであろう。[5]

下堤遺跡Bは竪穴住居跡があり，広場もできる程の面積をもつが，土器型式から見ると一型式であるのでBパターンと認められる。この遺跡の竪穴住居跡は小形化し，重複しない。重複しても二軒ぐらいで終ってしまう。

この時期になると下堤遺跡Bをはじめ，秋田市寺庭遺跡，協和町米ケ森遺跡などのようにBパターンが一般的になるものと思われる。坂ノ上遺跡Bなども土器型式に巾があるがその面積や，地形から見るとBパターンの遺跡であろう。

このように見てくると，この台地にある遺跡は縄文時代を通して，この地域の中心的な役割をはたしていたと考えてよいであろう。

○住居跡の変遷

下堤遺跡の調査が行なわれた頃から，秋田県内で多くの住居跡が発見され調査されてきた。それらは遺跡全域を調査せず，保護の立場から下堤遺跡のような範囲確認調査のみに終った所がいくつかある。そのため集落全体の詳細な検討は不可能であるが，中期の住居の変遷など，ある程度推測できるまでに至った。それを最後に述べて終りとしたい。

前期の時代の住居跡は秋田市柳沢遺跡，[6]鹿角市清水向遺跡[7]がある。いずれも前期後半のものである。柳沢遺跡の住居跡は8軒発見され，一般的な形は楕円形か，隅丸長方形をなし，長方形の形のものには周溝があり柱穴は周溝もある。炉は焼土だけの炉である。中には長さ15m，巾5mの長方

形をなす大型の住居跡もある。

中期前葉の遺跡としては八郎潟の東北岸にある八竜町萱刈沢貝塚遺跡[8]，上小阿仁村不動羅遺跡[9]がある。二つの遺跡とも大形住居跡が各々一軒発見されている。萱刈沢貝塚のものは長方形で周溝はなく，柱穴は壁からはなれて内側にあり，東側に特殊なピットがある。炉は焼土だけである。又普通の大きさの住居跡は円形のもの，隅丸長方形のものなどがあり，円形のものには周溝がある。不動羅の場合の大形住居跡は隅丸長方形に近い形をなし，柱穴は萱刈沢の場合と同様である。北端が一部高くなり，その部分に特殊なピットがある。炉は掘込んだだけである。普通の大きさの住居跡は円形，隅丸方形などがあり周溝のあるものもある。炉は石囲い炉が一部にある。

中期中葉の遺跡は下堤A，一大木遺跡[10]などがある。大きい住居跡は未発見である。両遺跡とも隅丸方形，円形，小判形などがあり，円形のものに周溝がある。炉は石囲い炉が一般化し，その中に埋甕のあるもの，ただ焼土と埋甕のものなどがある。炉の位置は中央にあるのが普通である。

中期後葉の遺跡は下堤B，米ケ森遺跡[11]などがある。一般に住居跡が小さくなり，径3m前後の，円形か，楕円形をなす。周溝はない。炉は石囲い炉の外に埋甕するいわゆる複式炉をなす。炉の位置は壁によった所に作られる。

以上の変遷をまとめると次の表のようになると考える。

事項 ＼ 時代		前期後葉	中期前葉	中期中葉	中期後葉
平面形	隅丸方形	━━	━━	━━	
	楕円形・円形	━━	━━	━━	━━（小形化）
	長方形	━━	━━		
炉跡	焼土炉（地床炉）	━━	━━		
	石囲い炉		━━	━━	━━
	石囲い炉の中に埋甕			━━	━━
	石囲い炉の外に埋甕（複式炉）				━━

1) 富樫泰時「雄勝町院内岩井堂第二洞穴下層の土器について」秋田考古学10周年記念特集号 1964年7月

2) 草薙祥子「秋田砂丘の砂丘地形と遺跡について」秋田考古学32 1975年3月

3) 小林達雄「多摩ニュータウンの先住者——主として縄文時代のセトルメント・システムについて」月刊文化財 1973年1月

4) 千畑村教育委員会「一丈木遺跡第3次発掘調査概報」 1974年3月

5) 鍵野目久米蔵氏のコレクションによる。同氏が長年この遺跡を踏査し，多くの遺物を採集している。その中にあるものである。尚，氏のコレクションは県立博物館に寄贈された。

6) 富樫泰時「秋田市柳沢遺跡発見の住居跡」考古学ジャーナル No99 1974年9月

7) 大和久震平「秋田県史考古編」

8) 八竜町教育委員会「萱刈沢貝塚第2次概報」 1973年3月

9)　上小阿仁村教育委員会「不動羅遺跡概報」　1971年３月

10)　注４に同じ

11)　協和町教育委員会が昭和50年発掘調査を実施した結果，この時期の住居跡が７軒発見された。

発掘調査の組織

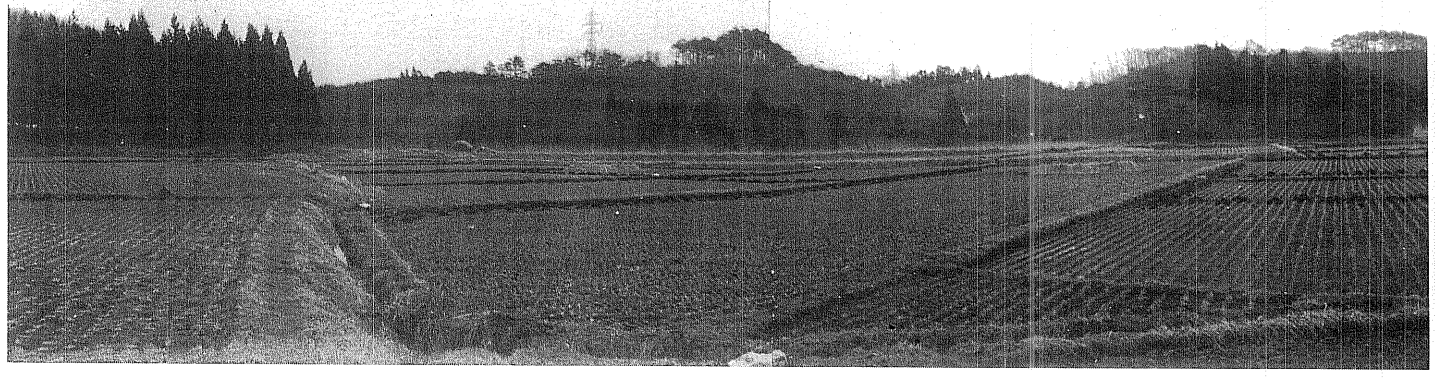
発掘調査主体　秋田市教育委員会，秋田考古学協会

調　査　員　奈良修介，富樫泰時，鍋倉勝夫

参　加　者　五十嵐芳郎，岩見誠夫，船木義勝，杉渕　馨，武石　孝，中屋一生，畠山憲司，高橋忠彦，手塚　均，庄内昭男，庄内公子，大友俊和，黒崎俊美，本間光昭，安田敏昭，梅川光隆，伊藤順子，鈴鹿八重子，佐藤喜博，刈田夫貴子，森山上一，安藤麻須子，畠山貞子，佐藤まつみ，野上剛志，村岡百合子，阿部千鶴子，小玉　準，斎藤　隆，佐々木博史，菅野博仁，伊里道彦，藤原昌史，佐々木昌喜，細谷昇寿，小林朋子，目黒直子，三上礼子，長谷山とし子，尾張谷信子，田口　都，佐藤美智子，近江谷幹子，石川達夫，嵯峨修平，目黒明彦，谷口重光，安田忠市，鈴木忠司(平安博物館)，大塚真弘(横須賀市教育委員会)，県立金足農業高校社会科クラブ，県立北高校日本史クラブ，秋田市立高校社会科クラブ，敬愛学園高校社会科クラブ，聖霊女子短大付属中・高校社会科クラブ，秋田和洋女子高校社会科クラブ

事　務　局　佐々木栄孝，小松正夫，菅原俊行，石郷岡誠一，日野　久

図　　版



地蔵台遺跡遠景

宝竜崎付近の露頭

末戸松本付近の露頭

御所野(標高35m)付近の露頭

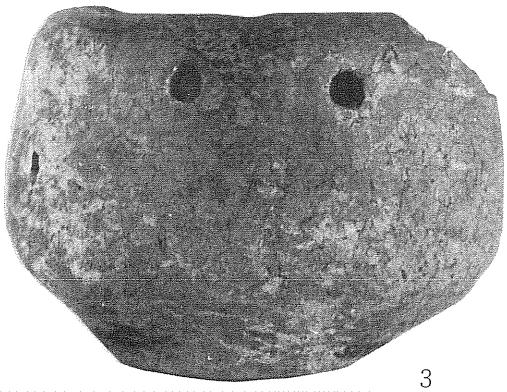
図版2

小阿地23遺跡

1

2

4



3

1—小阿地23遺跡，2—地蔵台遺跡，3—第1号住居跡，4—第3号住居跡

図版3

第1号住居跡

第4号住居跡

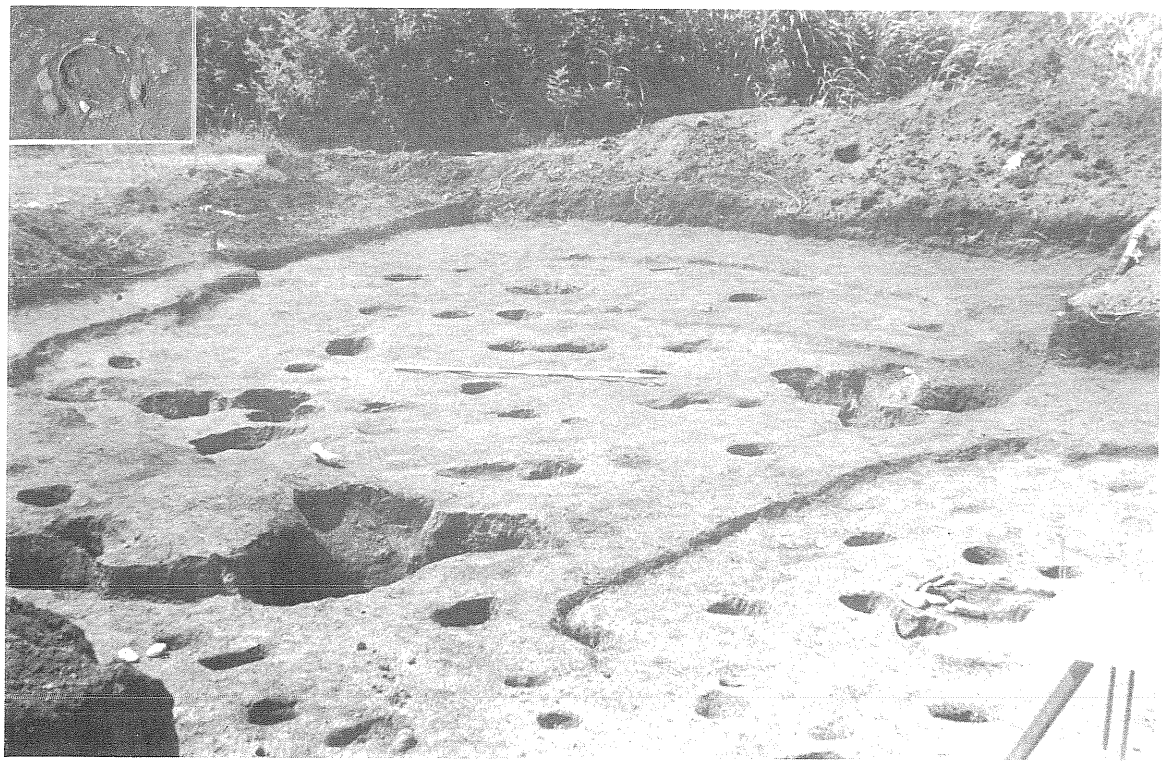
図版4

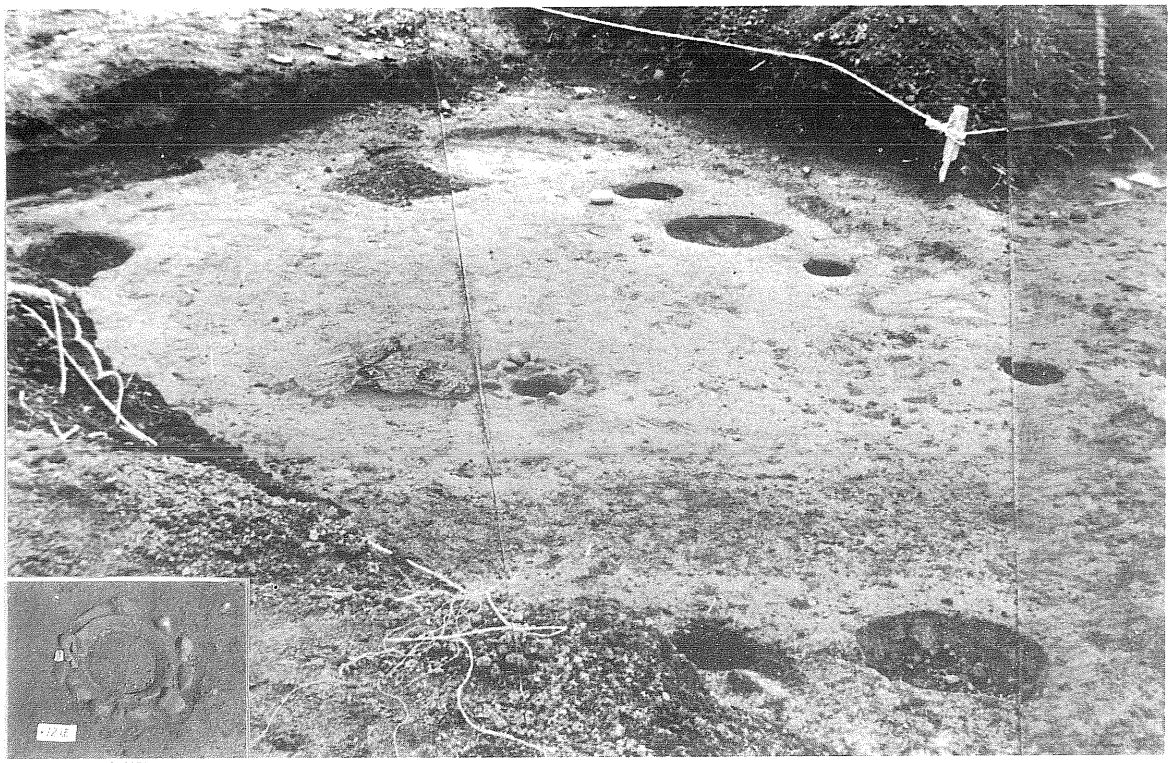
第6号住居跡

上から第6・第2・第7号住居跡

第５・第８・第９号住居跡

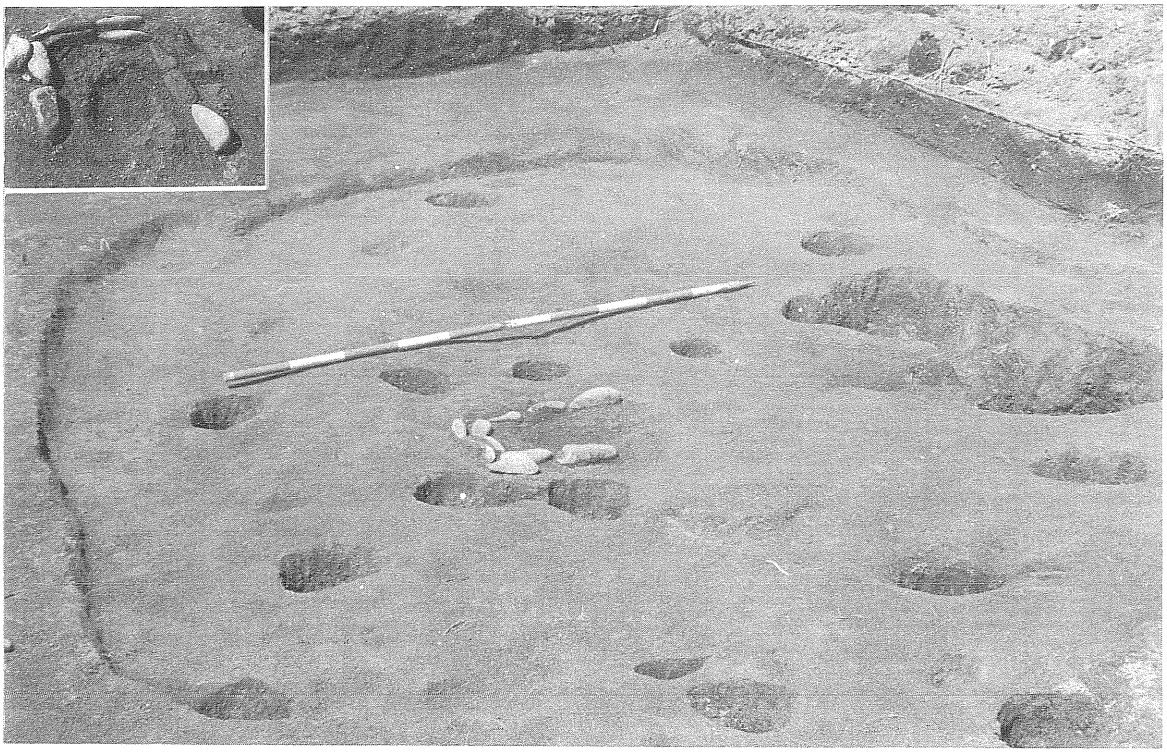
第11・第14・第17号住居跡





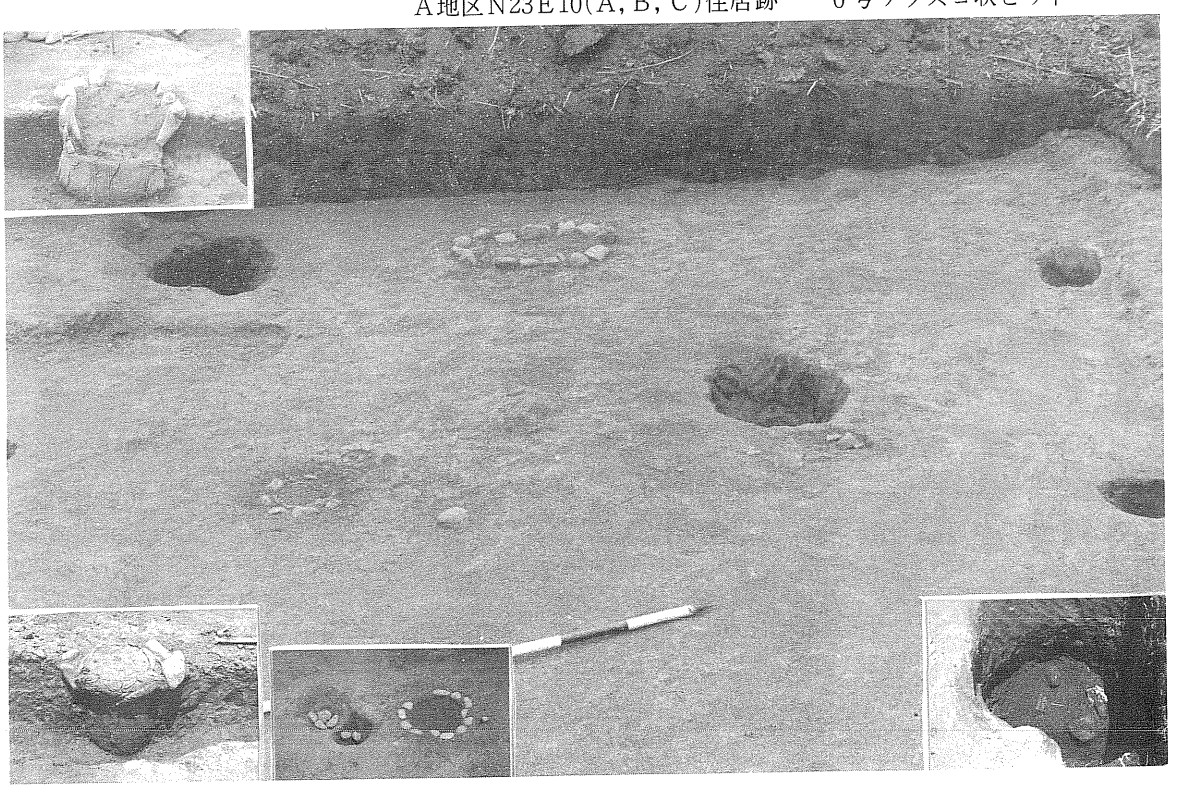
第12号住居跡

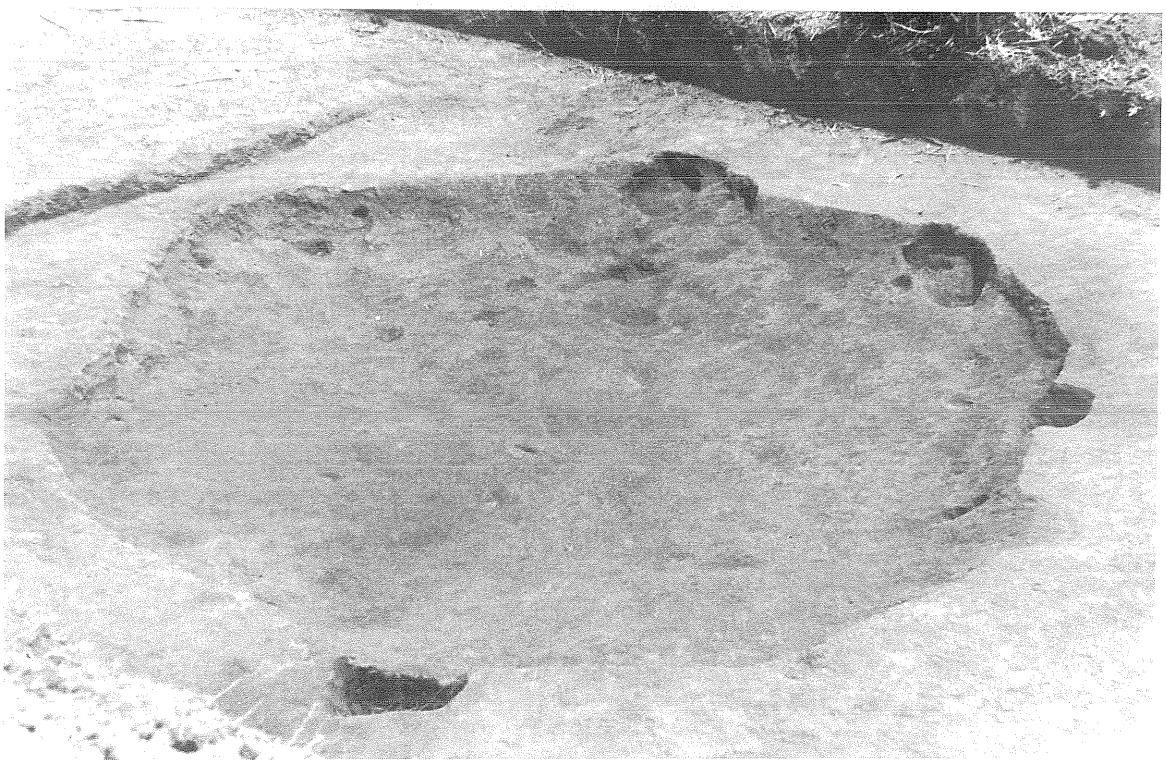
第13号住居跡



第15・第16号住居跡

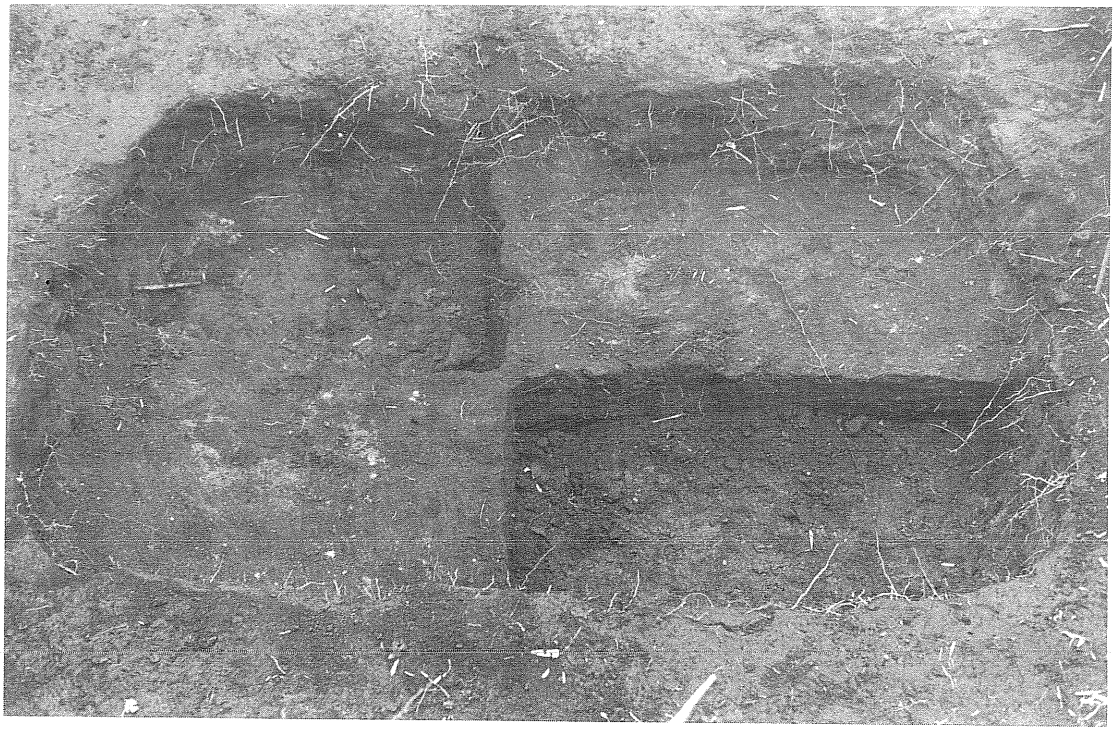
A地区N23E10(A, B, C)住居跡　　6号フラスコ状ピット





A地区N６E10住居跡

A地区N23Ｊ１土壙



A地区N13E 1住居跡

B地区S34 J 10住居跡

B地区S42J5住居跡

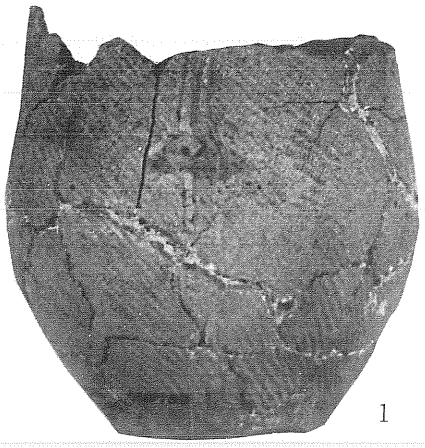
B地区S33J10住居跡

図版11

B地区S26E10住居跡

C地区住居跡

図版12

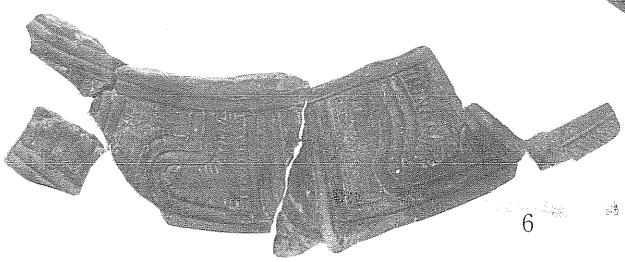

1

2

3

4

5


6

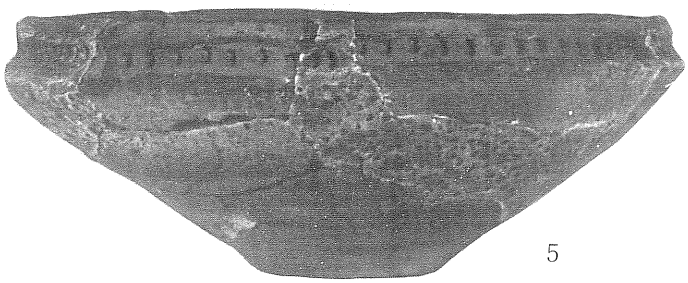
1，2—第7号住居跡，3—第8号住居跡，4—3号フラスコ状ピット，
5—第9号住居跡　6—第11号住居跡

1

3

2

4



5

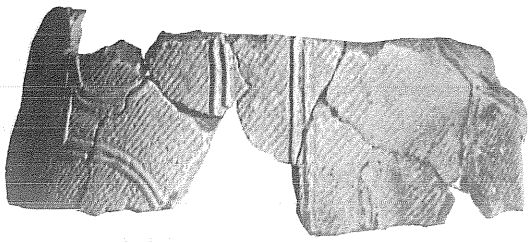
6

7

1—第15号住居跡，2—第16号住居跡，3～7—A地区出土

図版14

1



2

3

4

5

6

1～4—N23E10住居跡,
5—4号フラスコ状ピット,
6—1号フラスコ状ピット

図版15

1

4号フラスコ状ピット遺物出土状態

3

2

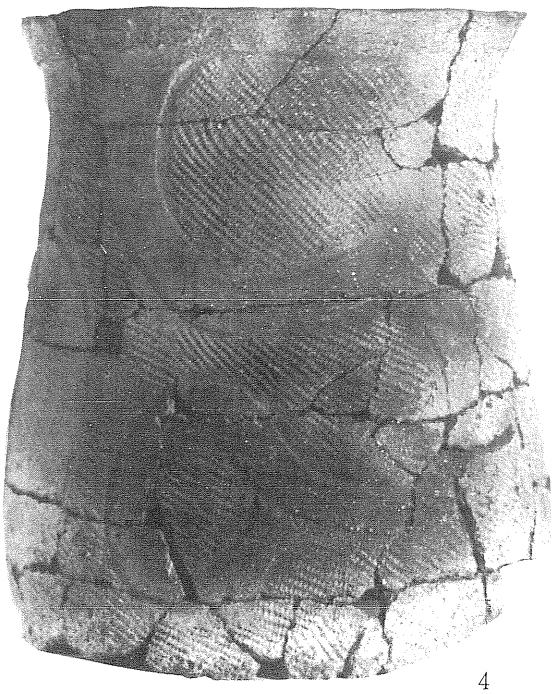
5号フラスコ状ピット遺物出土状態

1～2―4号フラスコ状ピット
3―5号フラスコ状ピット

1

2

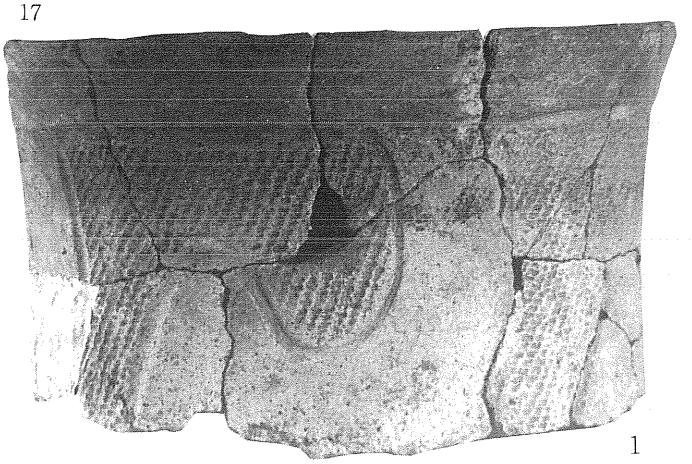
3



4

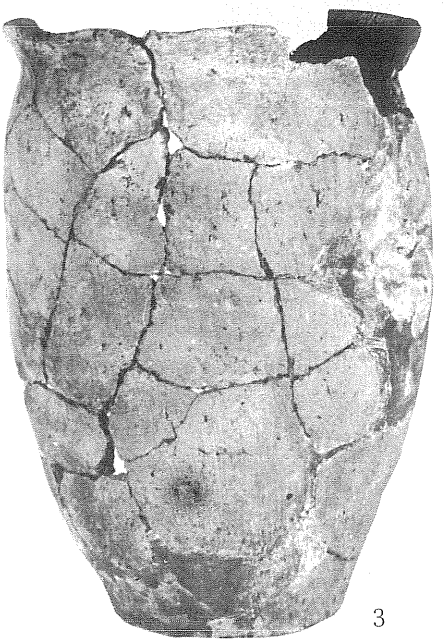
1～2―5号フラスコ状ピット
3―S34 J 10住居跡
4―S42 J 5 住居跡

図版17

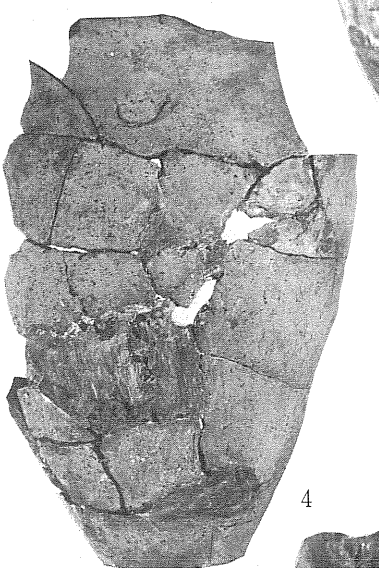


1

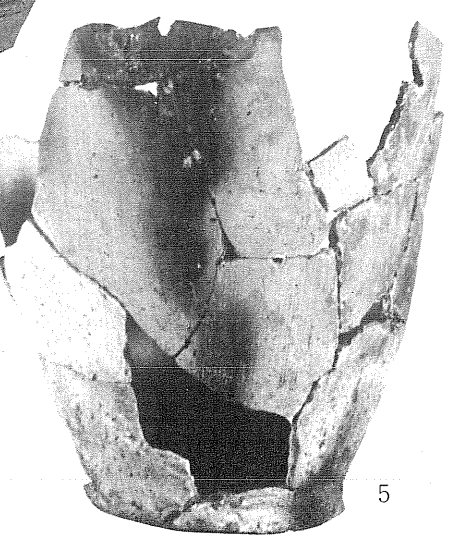
2



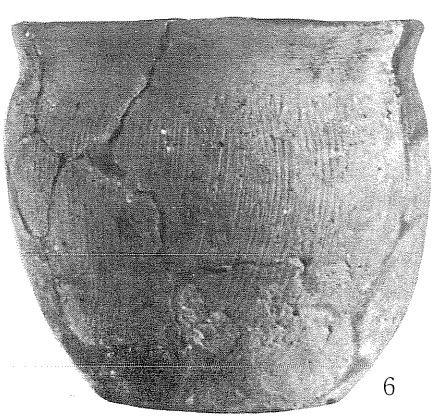
3



4

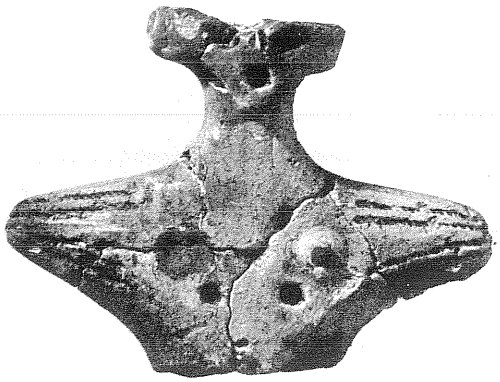


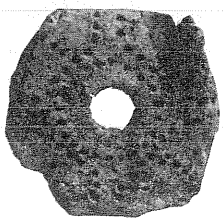
5



6

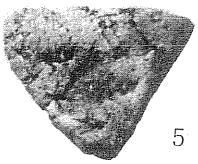
1 ― S 33 J 10住居跡
2 ～ 5 ― C 地区住居跡
6 ― A 地区出土

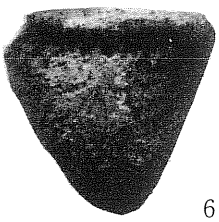

1

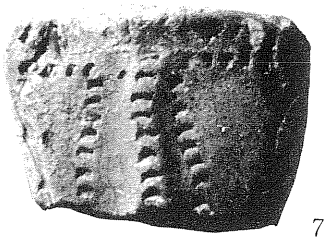

2

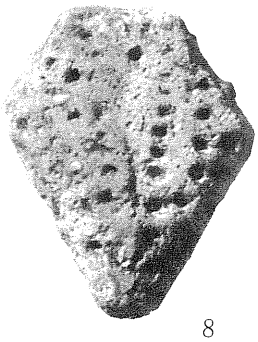
3

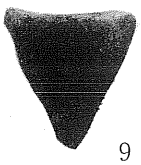
4

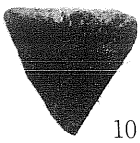

5


6


7


8


9


10

11

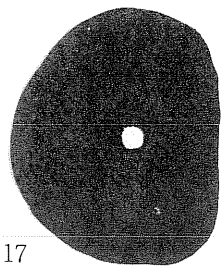
12

13

14

15

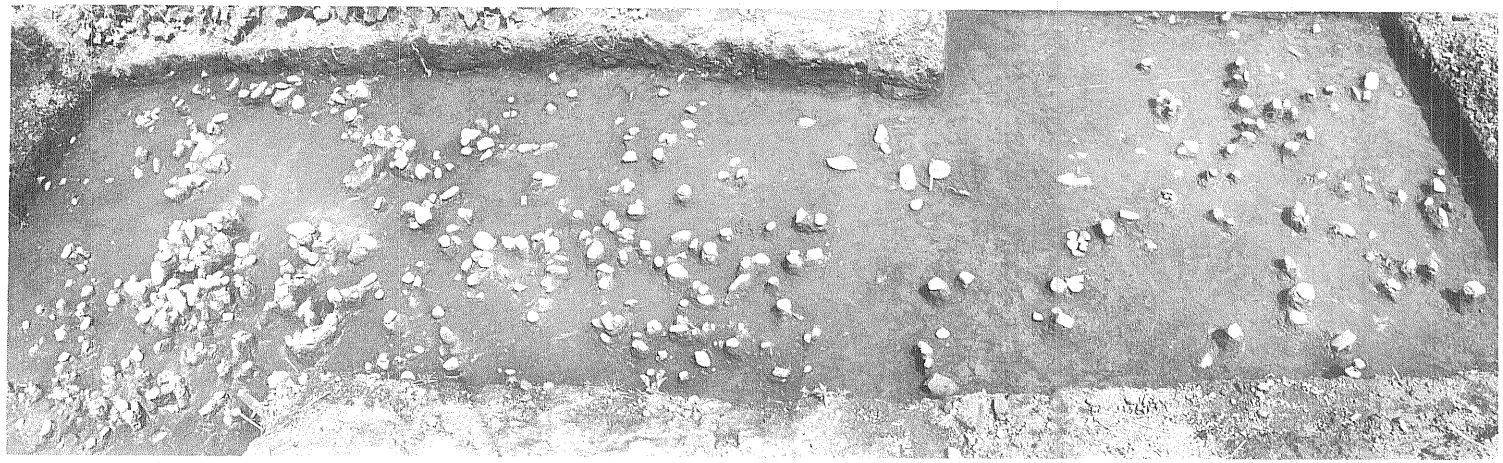
16


17

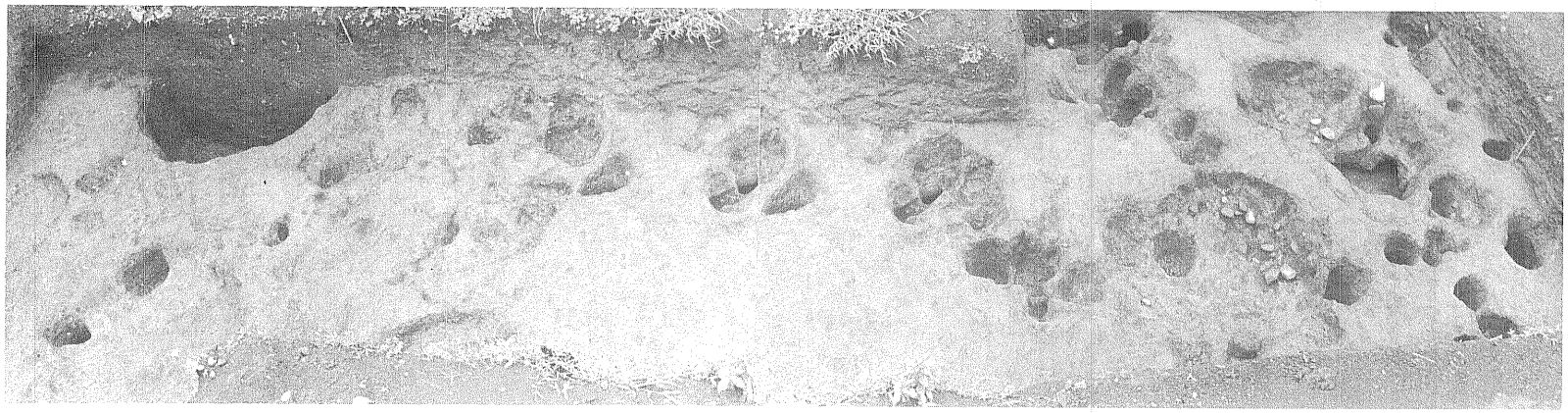
土製品・石製品

坂ノ上遺跡配石遺構・貼床住居跡
（5 J10・6 A10・11A 1・11A 2）

住居跡（11A）



坂ノ上遺跡配石遺構および小竪穴，土壙（11A２・11B２・11C２）



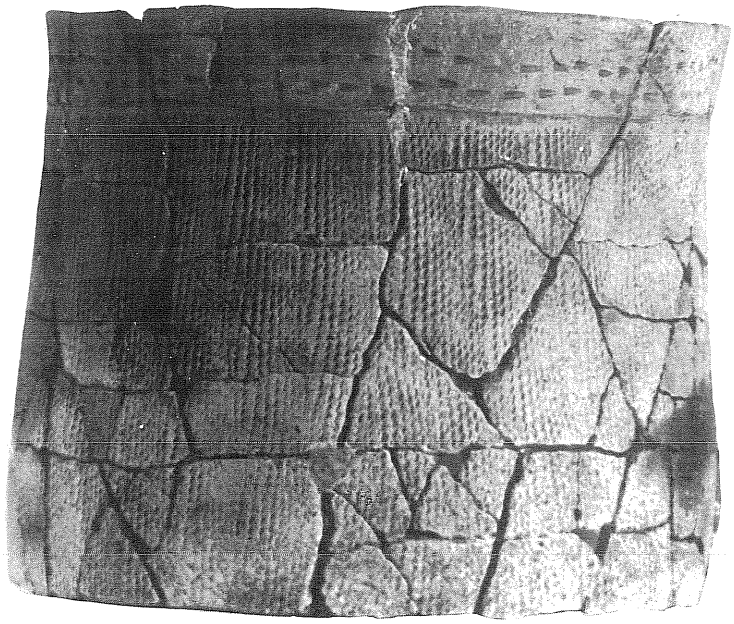
A地区住居跡（12B１・７B１）
土壙群（11A10）

1

3

2

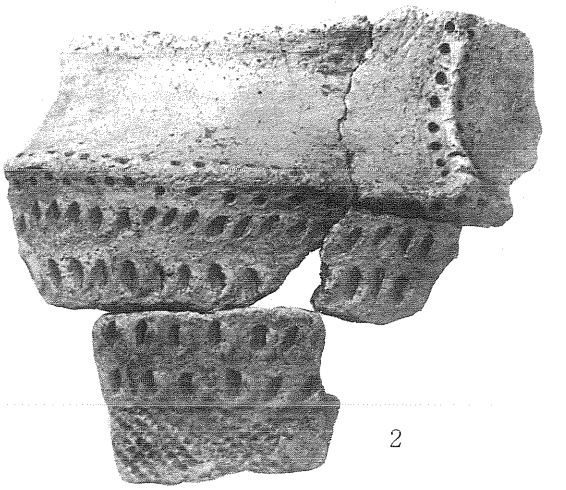
1，2，4—坂ノ上遺跡A地区出土
3—12B1・7B1住居跡



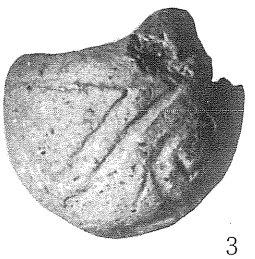
4

図版23

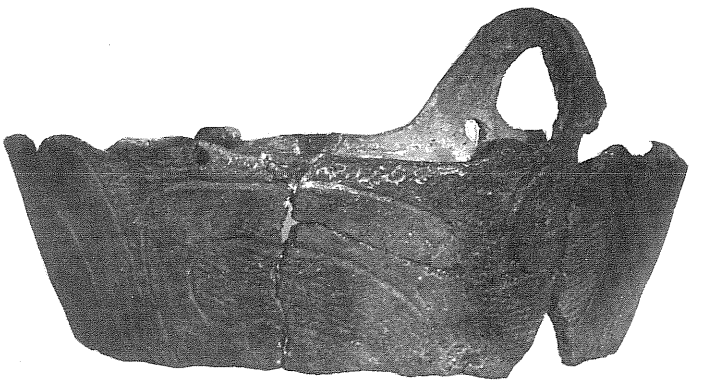
1



2



3



4

5

6

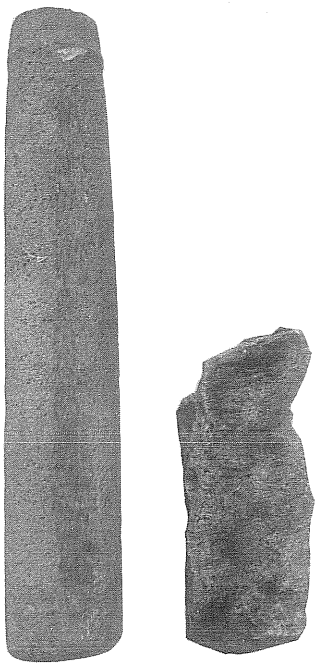
坂ノ上遺跡A地区

土製品・自然遺物

図版25

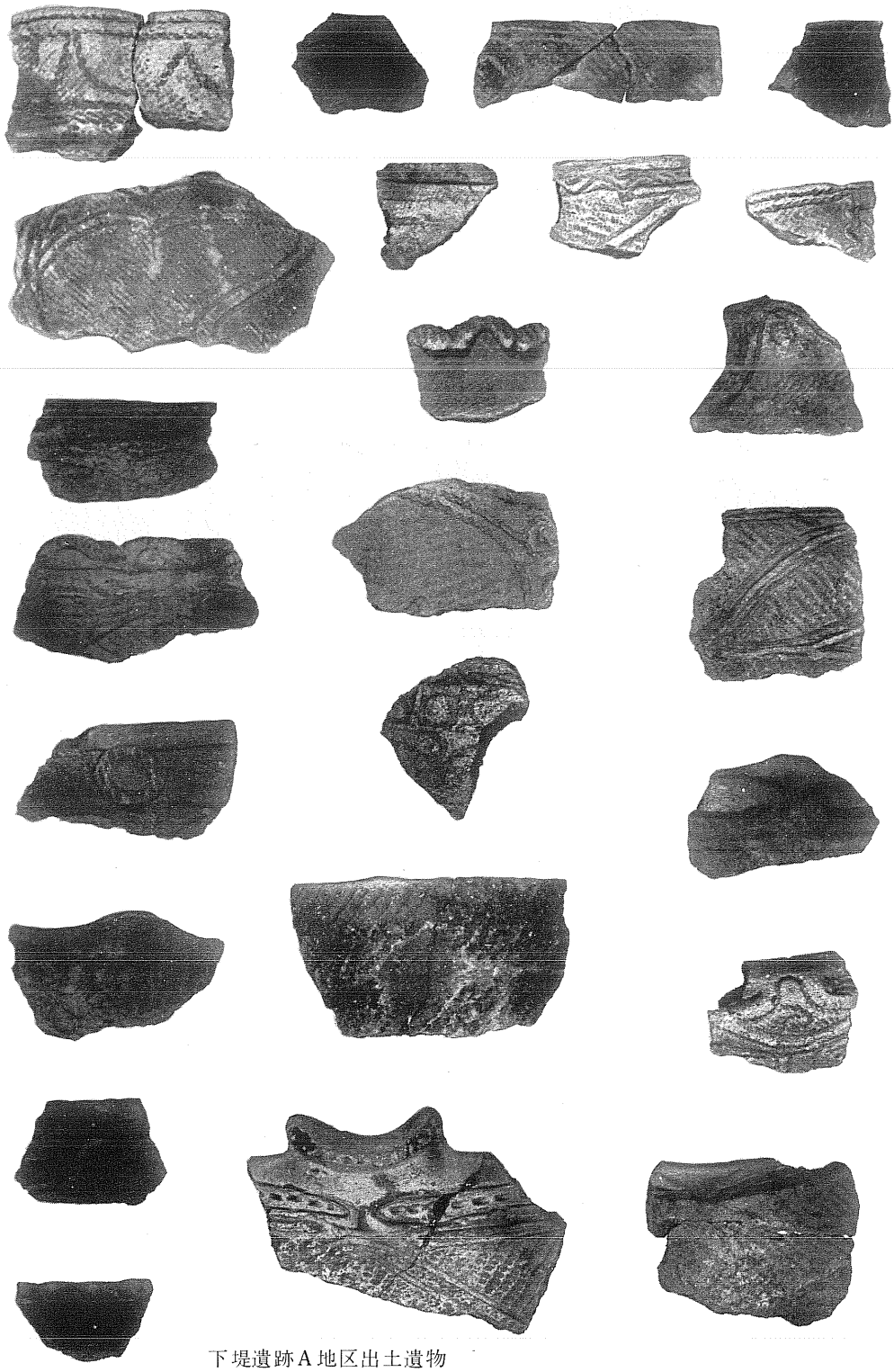
坂ノ上遺跡B地区
石棒出土状態

筑紫森遠景



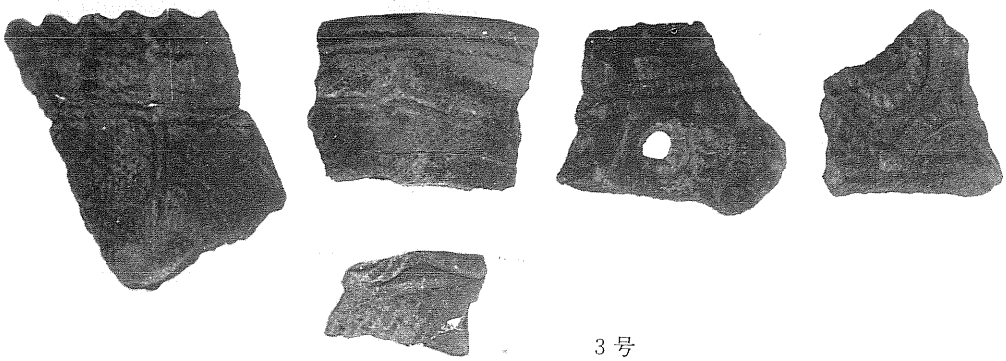
筑紫森千本樋
（流紋岩柱状節理）

下堤遺跡A地区出土遺物



下堤遺跡A地区出土遺物

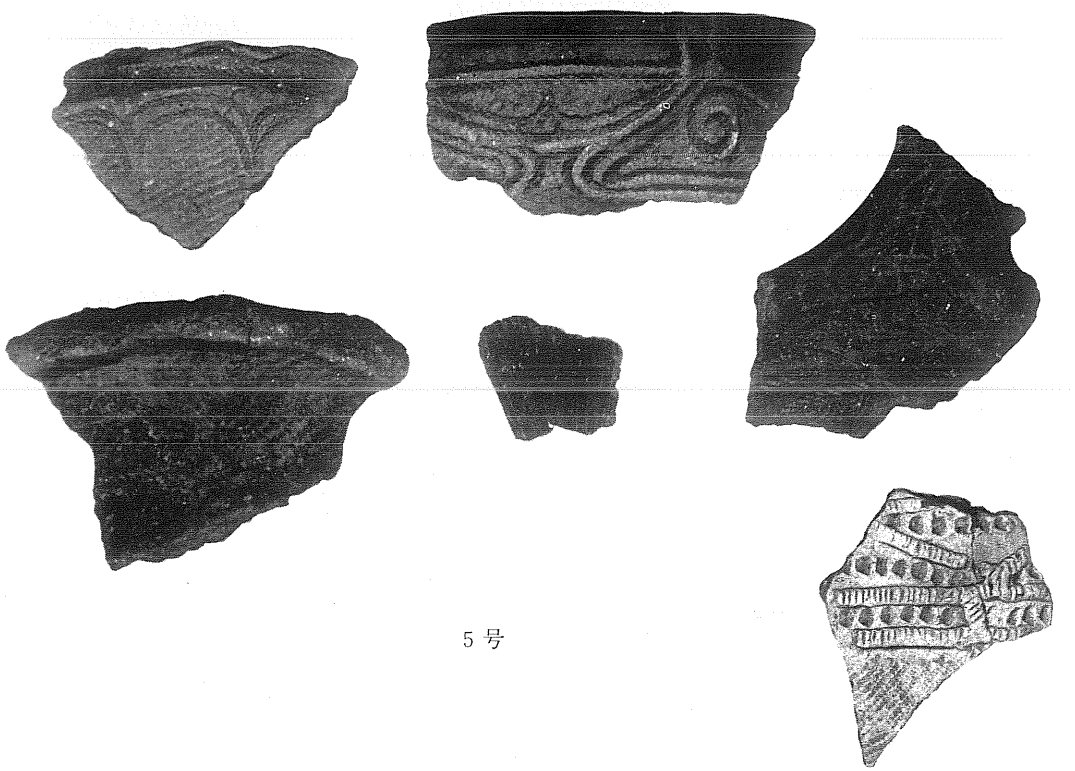
1号



3号

4号

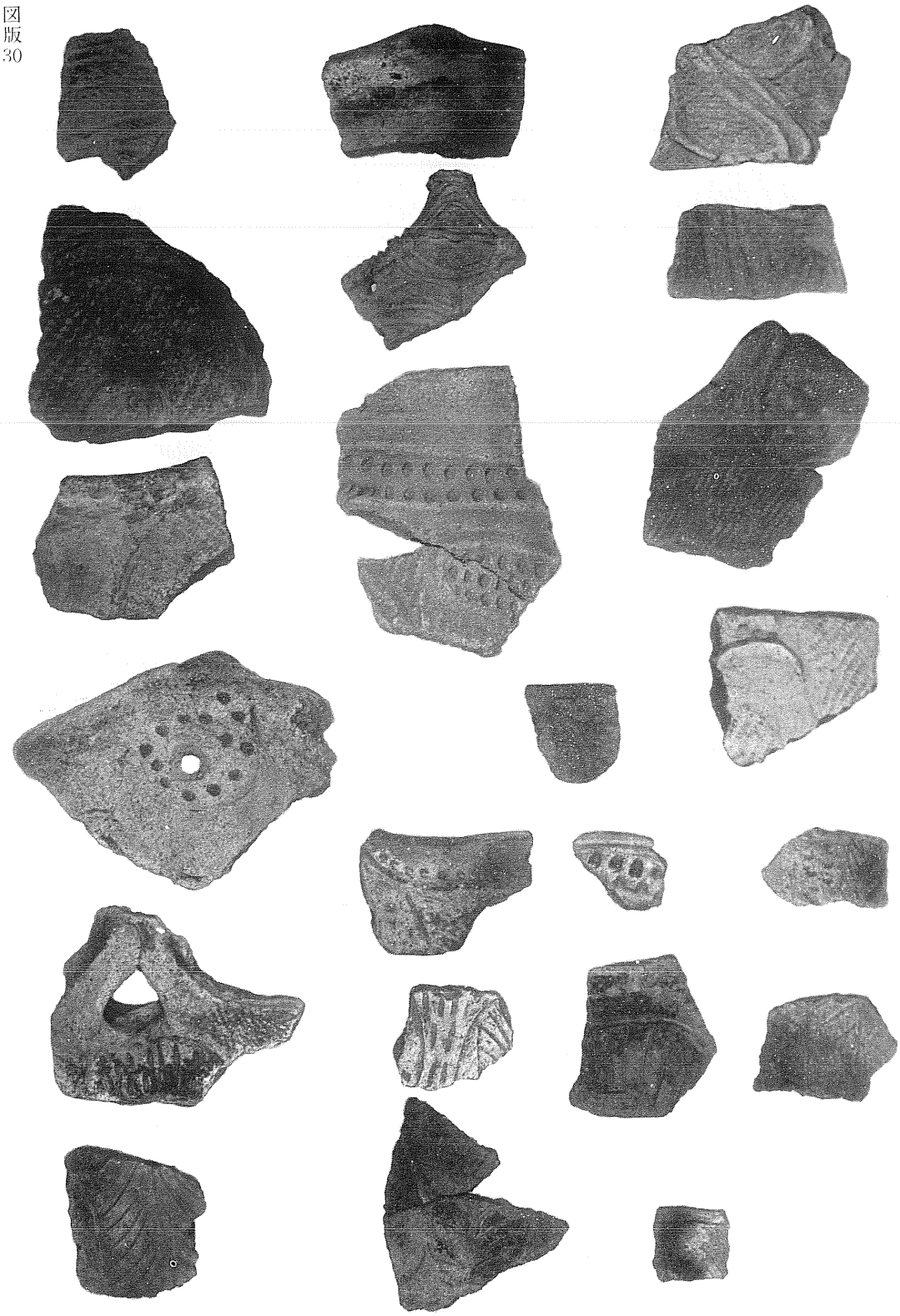
下堤遺跡フラスコ状ピット出土遺物



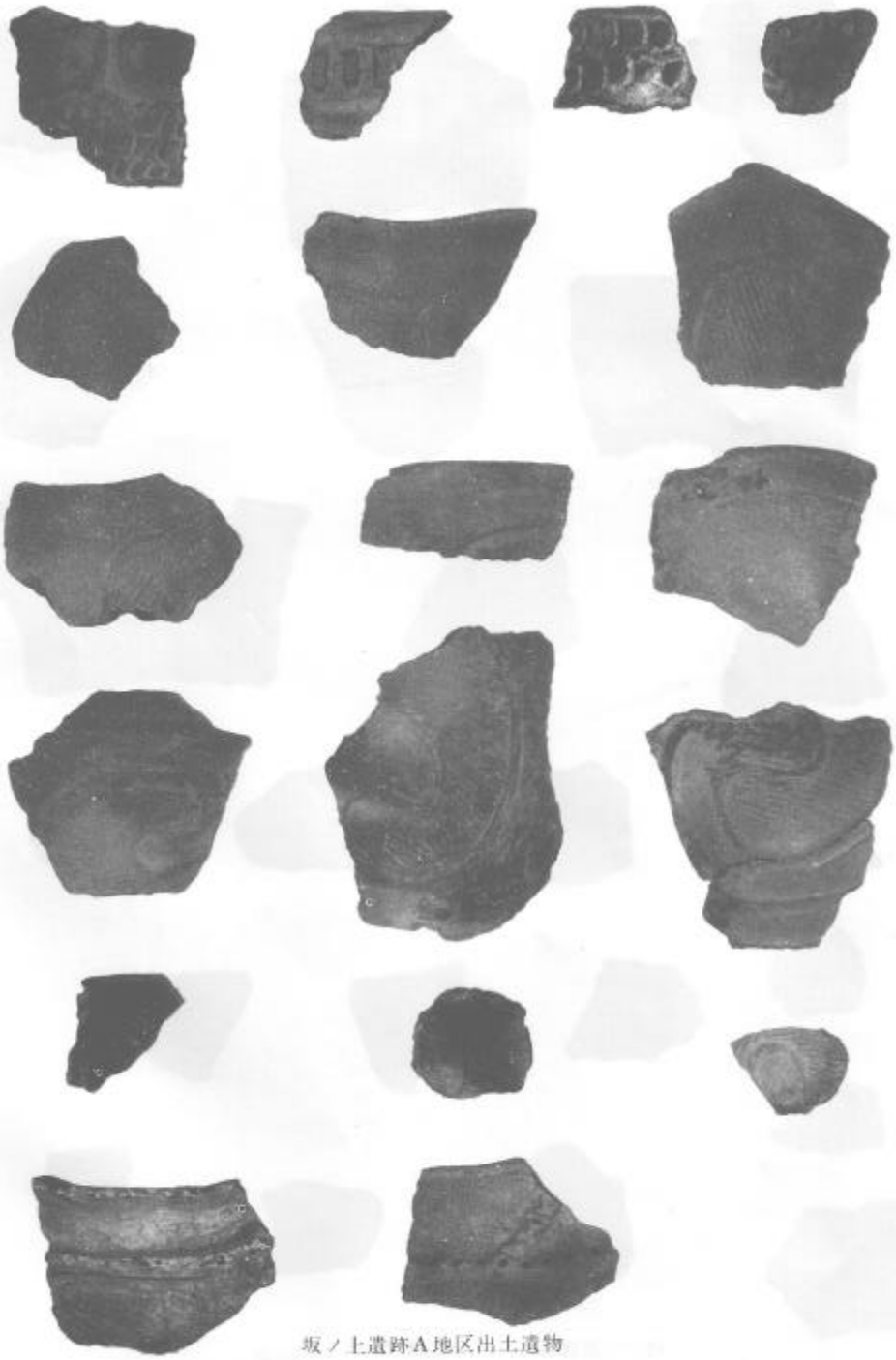
5号

6号

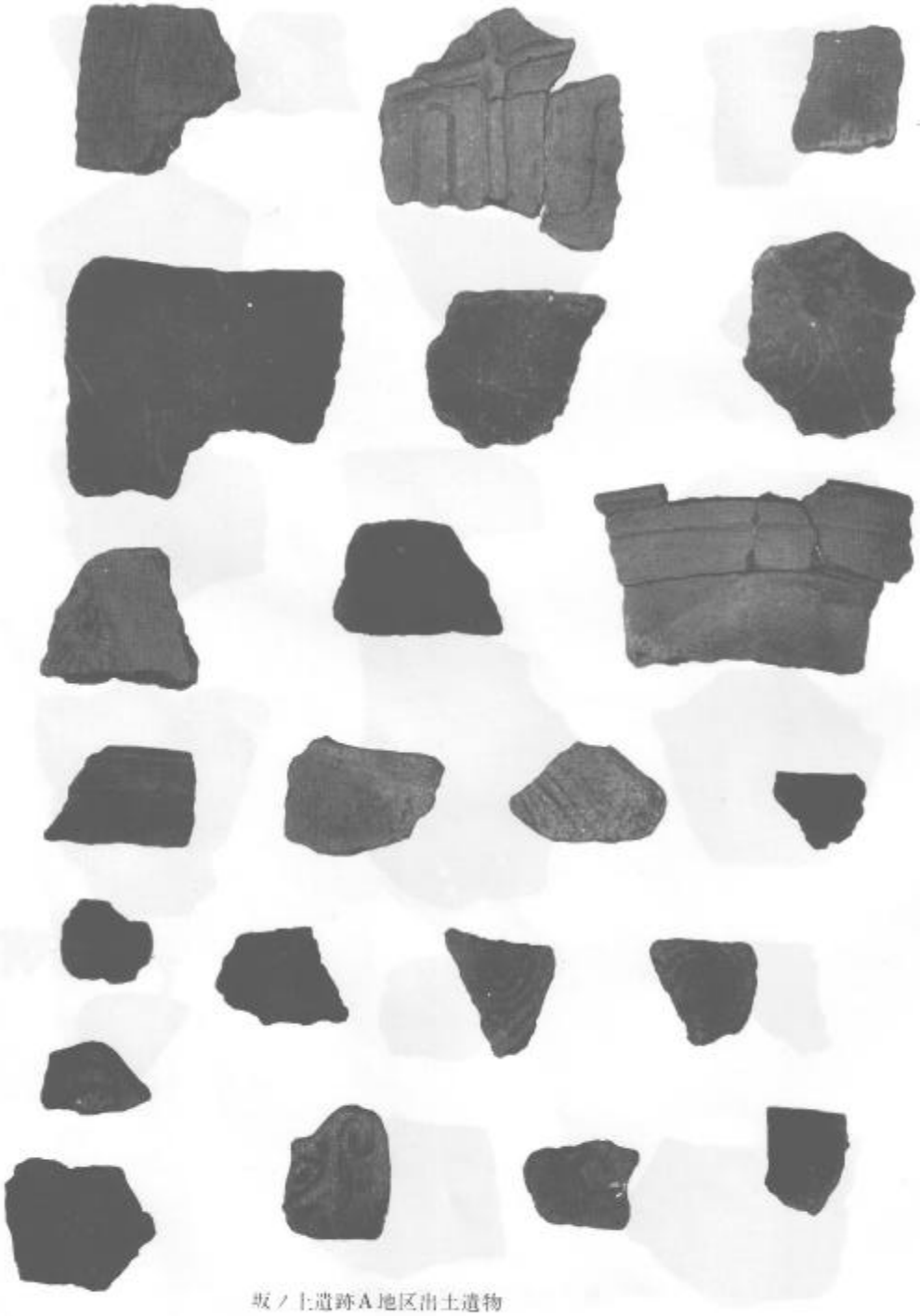
下堤遺跡フラスコ状ピット出土遺物



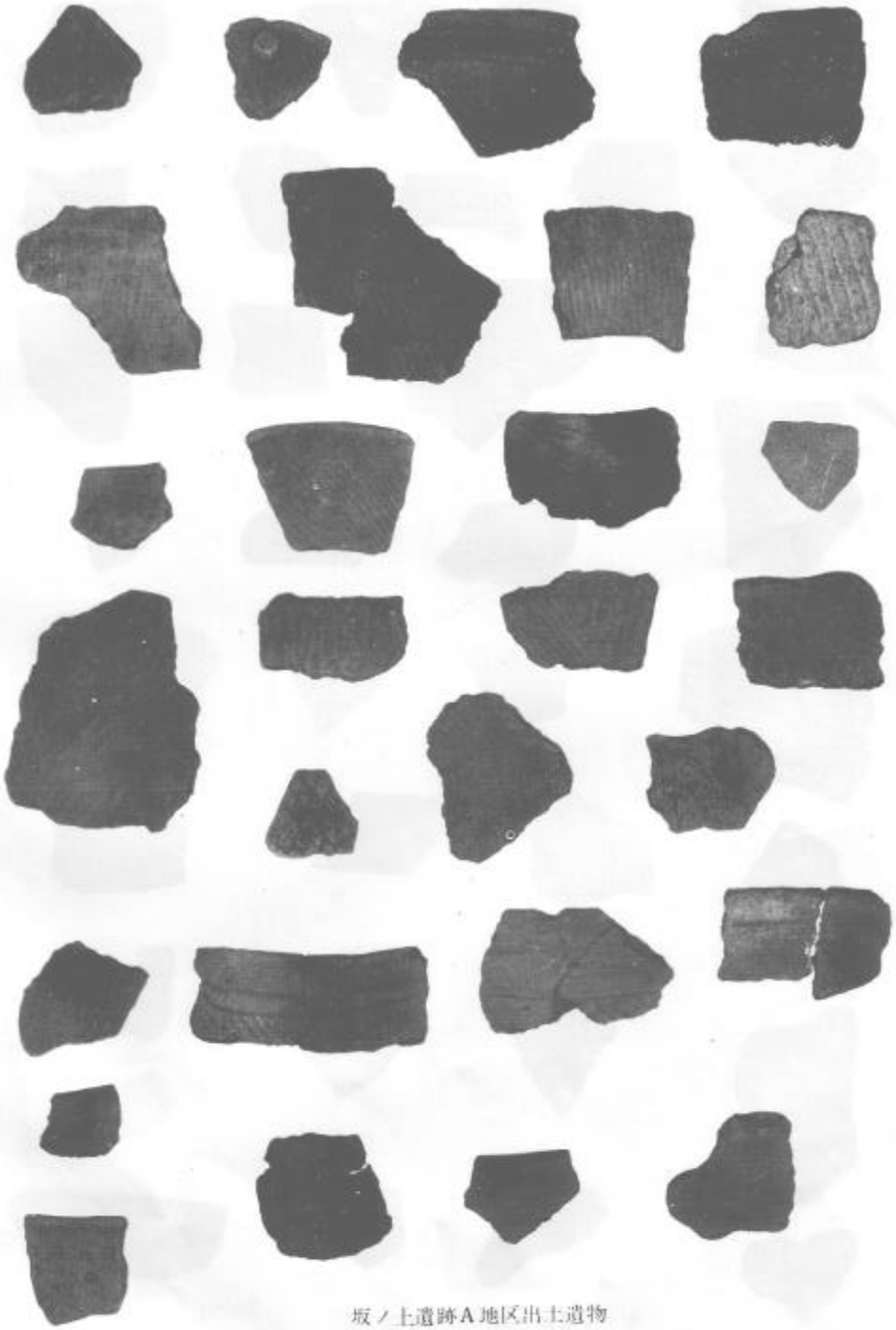
坂ノ上遺跡A地区出土遺物



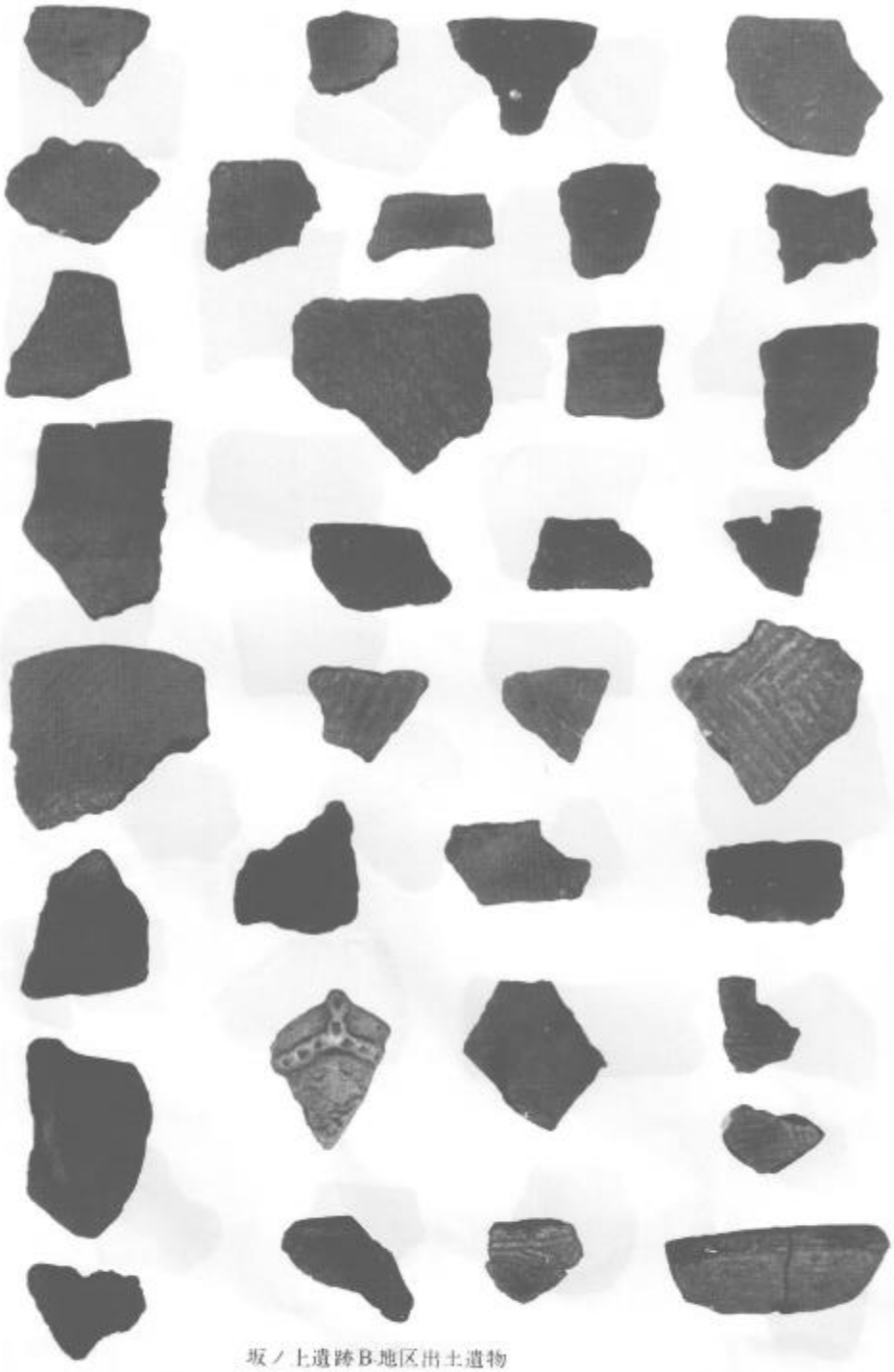
坂ノ上遺跡A地区出土遺物



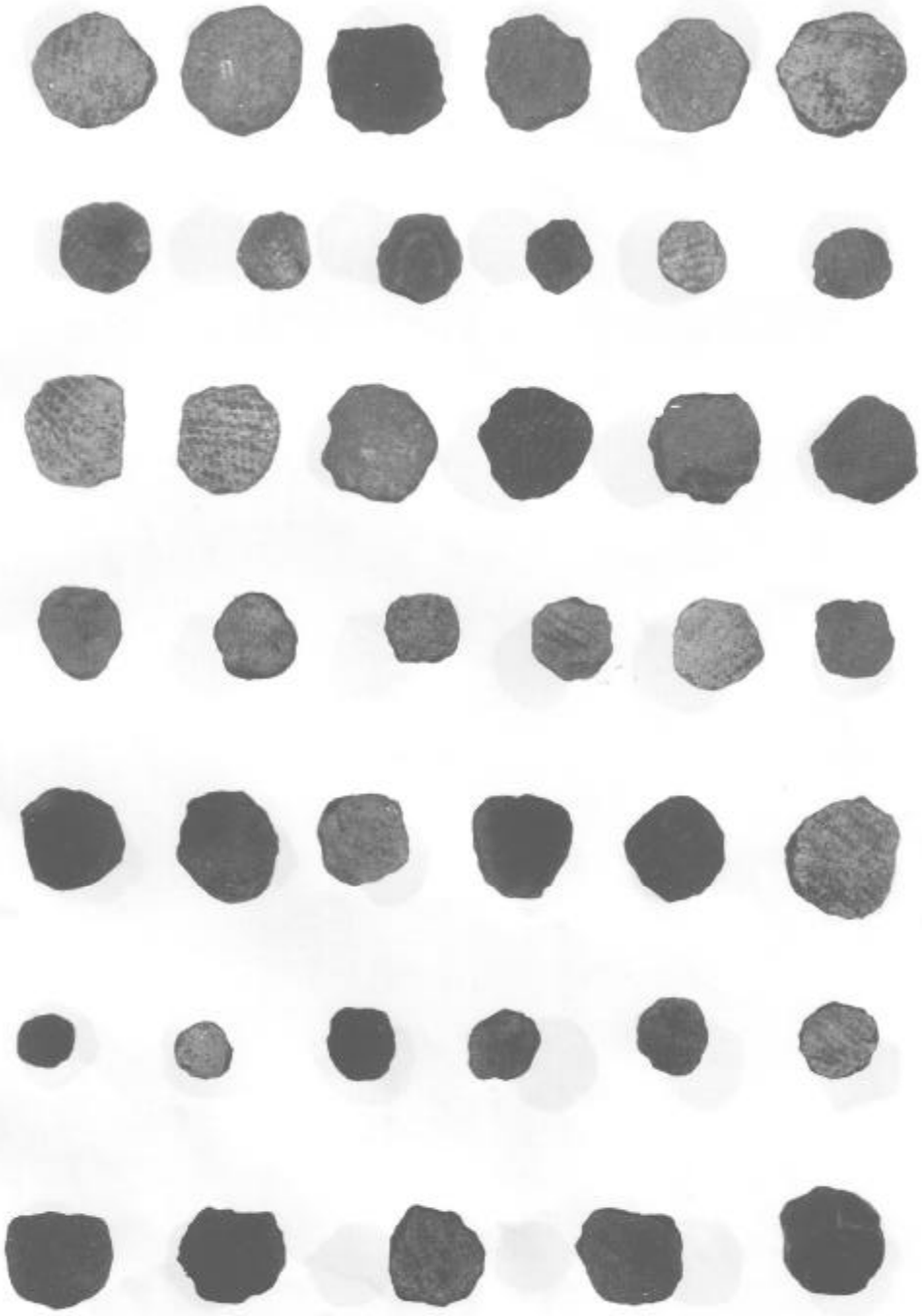
坂ノ上遺跡A地区出土遺物



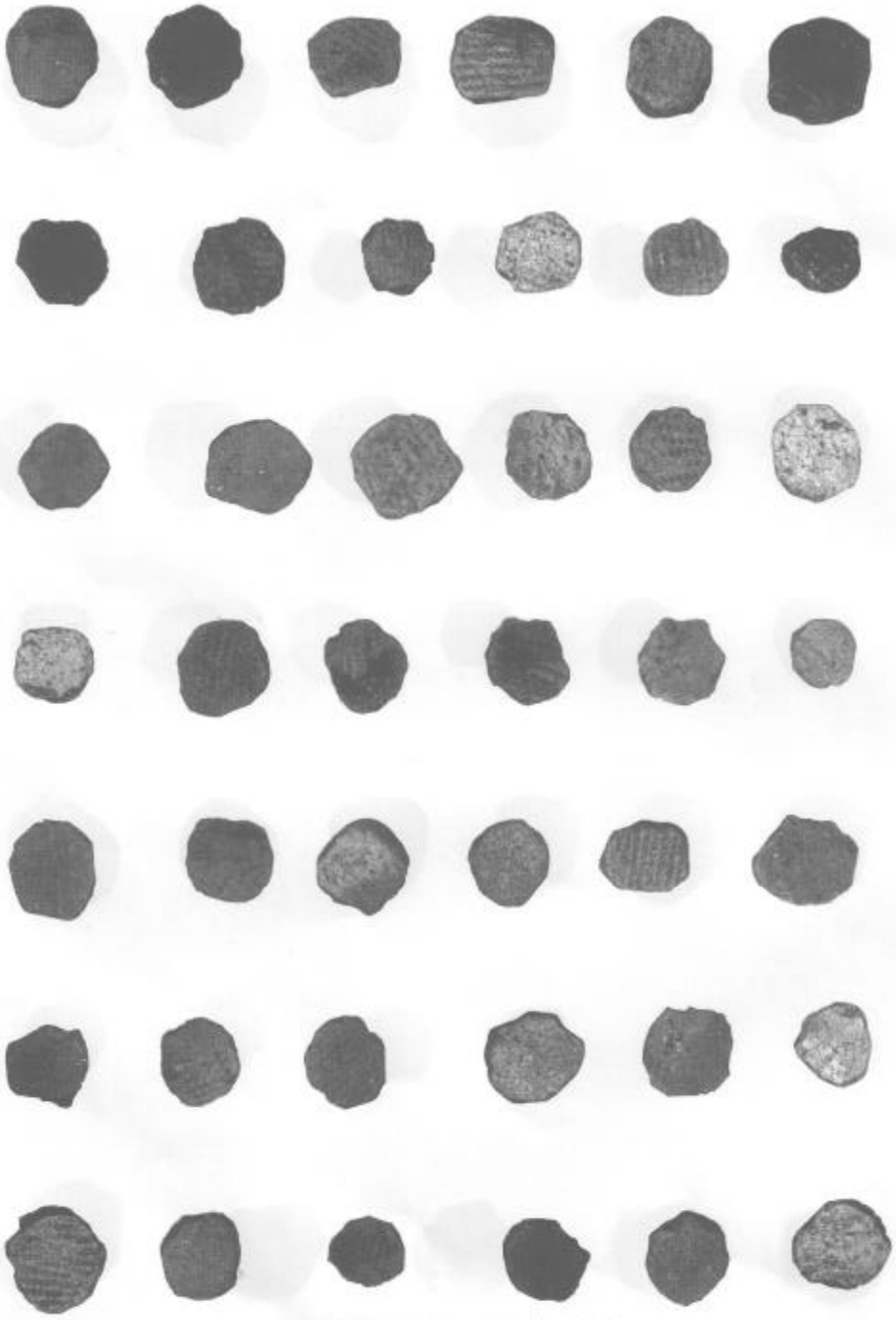
坂ノ上遺跡A地区出土遺物



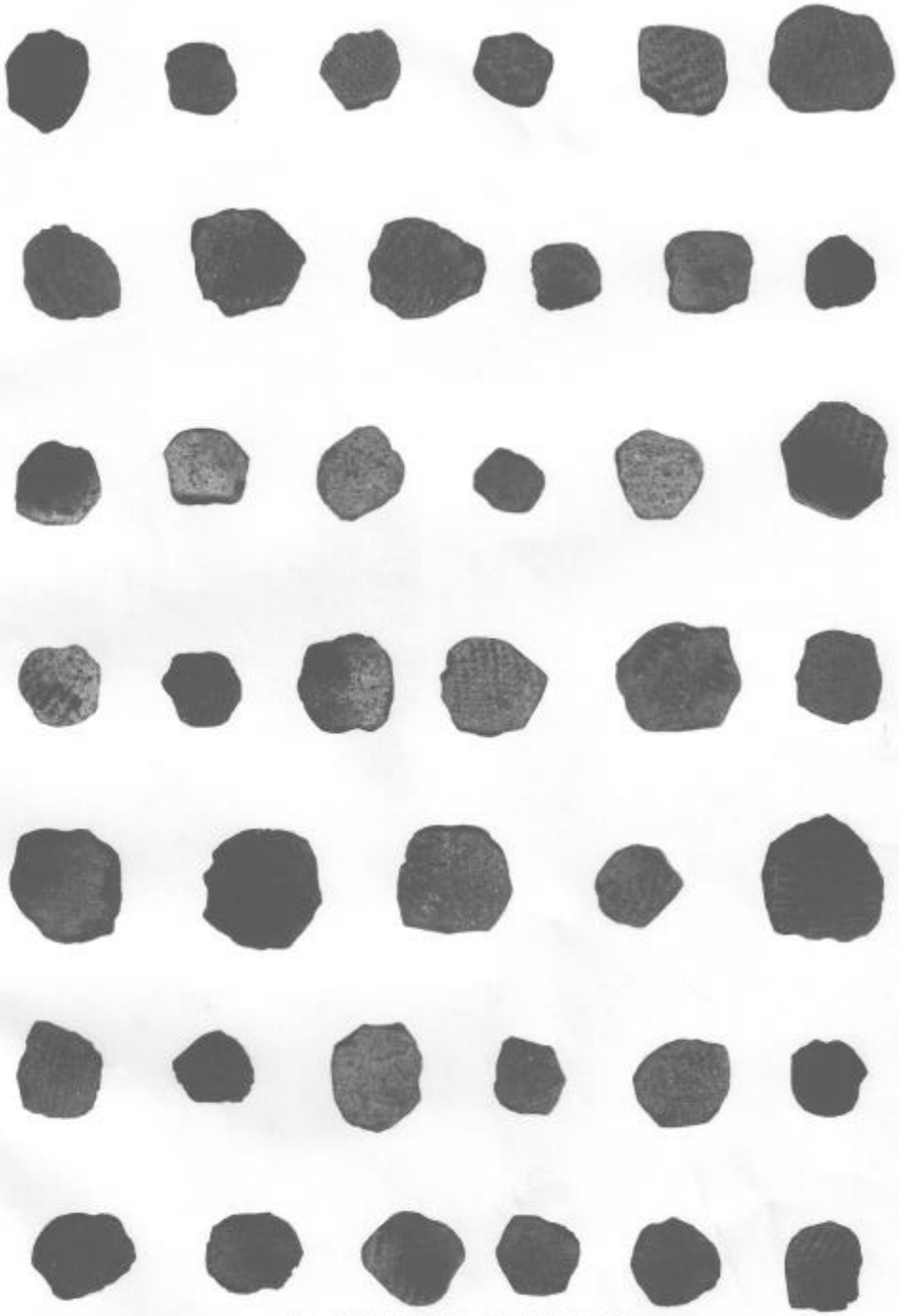
坂ノ上遺跡B地区出土遺物



坂ノ上遺跡A地区出土円板状土製品



坂ノ上遺跡A地区出土円板状土製品



坂ノ上遺跡A地区出土円板状土製品

小阿地下坂堤遺跡ノ上遺跡発掘調査報告書

昭和51年3月

発行　秋田市教育委員会

印刷　秋田マイクロ写真印刷(株)